釋迦

武者小路實篤著

大日本雄辯會講談社版

成道の釋迦

木村武山畫

序

釋迦牟尼、

普通僕達にお釋迦さんと呼ばれてゐる、の傳記は日本にもいくつ出てゐるか知らない。僕が今迄に讀んだもの、一寸見たものでも隨分ある。しかし正直云つて、どれも僕達が讀むには、むづかしすぎた。少くも餘程頭をつかつて讀まないとわからない。又わかりいゝものは簡單すぎたり子供じみたりしてゐる。このことは不思議に思つてゐる。

いゝ本がないと云ふのではない。よすぎる本はあるのだが、親しめる本はないやうに思ふ。少くも僕は佛陀のことを知るのに手頃の本を知らないのだ。

それで僕はさう云ふ本をかいて見ようと思つたのだ。むづかしくなく氣らくに親しみをもつて讀める本をかきたく思つた。

この本が、その僕の目的に何處まで叶つてゐるか知らないが、この本が出ることで多くの人が

佛陀、喬答摩家の悉達多の一生に今迄よりも親しみをもたれるやうになると信じてゐる。

僕はむづかしいことはなるべく書かないことに心がけた。しかし大事なことはなるべく、くはしく書くやうに心がけた。

僕は人の名や土地の名は參考書に全部よつた。或は他の人に教へられた通りに從つて自説は一つも出さなかつた。本によつていろ／＼の讀み方があるので統一したいと思つたが、もしまちがふといけないので、信用のおける本に從つたので少し統一がとれてゐないかと思ふ。

大事な處はそれであまり影響は受けないと思ふ。僕は佛陀と云ふ圓滿な、人類の至寶である人物をかくことに力を盡したので、知識的な方は他の人に任せた。

自分は釋迦、耶蘇、孔子の三人を尊敬してゐる。この三人のことをかきたいと前から思つてゐた。

十五、六年前に福音書を通しての耶蘇をかき、去年論語を通しての孔子をかいた。

今度釋迦のことをやつと書き上げたのをよろこんでゐる。元より完全なものではないが、しかしそれでもこれだけかけたことは嬉しい。

こんなものはかくのはわけない。參考書はいゝのがいくらでもあるのだからと、思ふ人があると思ふが、それは噓ではないが、しかし一つの力でつらぬいて親しみと、熱意とをもつて、書き通すことは存外樂ではないのだ。

僕は正直な處、今度は隨分骨を折つたつもりだ。材料をあつめるのに骨折つたのではない。この世界最大人物を生かしてかくのに骨が折れたのだ。

一言一句に生命を內からふき入れるのに骨を折つたのだ。このことは他の人にはわかつてもらへないかと思ふ。

僕は子供の時からのくせで佛陀を尊敬しすぎてゐるので、一つはかきにくかつたのだ。

幸ひいゝ參考書があつたからかけたが、しかしこの參考書は經文が多いので、その內には、今の僕達には信じられないことが多くかいてある。それ等の名文をくづして、信じられる範圍にか

くのが、中々勇氣がいるのだ。無鐵砲にやれる人ならわけないが、良心と名譽とをかけて書くものには中々骨が折れた。

もう書けないと思つた時さへあつた。

かき上げてしまへば、讀む人はなんでもないと思ふであらうし、他の本からひきうつしの文句なぞがあるのを氣にされるかと思ふが、しかしそれを木に竹をついだやうにせず、全體の調子を強めるのにいゝ處にはさみこむのはさうたやすいことではない。

まだ他に云ひたいこともあるが、理窟ぽくなつて、その爲に讀者のイリユウジョンを害するのを恐れるから、かかない。

ともかく僕がかきたかつたのは、誰も喜んで親しんでよめる、それであまり淺薄でない釋迦傳である。釋迦のことを知りたいと思ふ人に最初に讀むことをすゝめられる本である。

お釋迦さんと云ふ方はどんな方かと云ふことをわりに正確につたへるむづかしくない本をかきたかつたのだ。

読んでゆく内に心が清められる、又いろ／＼のことを教へられる、そして釋迦の大きな心がおかに感じられる本だ。

日本人が常識としても釋迦のことは知つておく必要があると思ふ。それを知らしたかつたのだ。傳說の佛陀ではなく、人間、我等と同じ人間としての佛陀をかきたかつたのだ。

勿論、同じく人間であつても、修行のちがふ、心がけのちがふ、大きな人間であるにはちがひないが、人間以外でないことをかきたかつた。

しかしこの書の價値は、この書を愛讀して下さる人に任せたい。

僕は今年釋迦が生れて二千五百年と云はれてゐることと、今年佛教が盛んになつて來たと云ふ事實から云つても、釋迦のいゝ傳記が出るべきだと思つてゐる。しかしさう云ふ時にこの本が出るだけに、僕としてはなほいゝものが書きたかつた。

僕は流行に乘ることはあまり好かない男なので、之に流行がすぎたあとでも嚴然とした存在價値のあるものをかいておきたかつた。

それが何處までかけたかは『時』の判斷に任せるより仕方がない。新しい事實は一つも發見してない。與へられた材料をなるべく忠實に本當さをもつて書かうとしたに過ぎない。

しかし僕はこの本がかけたことを喜んでゐるのだ。

昭和九年十月十五日

武者小路實篤

目次

装幀・口繪　木村武山

釋迦

武者小路實篤

一　釋迦族の生んだ最大人物

釋迦牟尼は釋迦族の生んだ最大の人物である許りでなく、全人類が生んだ最大の人物の一人である。我等東洋人から見れば最大の人物であると云ひきりたい處だ。しかし耶蘇、孔子等も最大人物の一人にはちがひないから、少し遠慮して釋迦もその一人と云はう。

釋迦は今より二千五百年前に印度のヒマラヤ山麓の迦毘羅城に生れた。

迦毘羅城と云ふのは昔、迦毘羅と云ふ仙人がそのあたりにゐて修行をしてゐたので、その名をとつて名づけたのだと云はれてゐる。

この迦毘羅に都をつくつたのはずつと前のことで釋迦の先祖にあたる人が三人の兄と一緒につくつたのだと云はれてゐる。

先づその先祖の話から始めて見ようと思ふ。

二　釋迦の先祖の話

昔々、大昔のことだつた、印度に甘蔗王と云ふ賢い王様がゐた。福德圓滿な理想的な王として

人々から敬はれた王樣で、印度河の下流補陀落迦城に都をかまへて天下を統一した。

しかしこの王樣に二人の夫人があつた。いくら偉い王樣でも、夫人を心服させるわけにゆかなかつたのか、ある日、第一夫人が來て、さめぐ\と泣いた。

大王はおどろいて、

『なぜ泣くのだ。』と云つた。

それは元より第一夫人――善賢と云ふ名ださうだが――の思ふつぼに落ちた事になるのだが、夫人も餘程大事件なので、すぐには口を切らなかつた。しかし王樣がたつてお聞きになると、始めて答へた。……

それにはかう云ふ事情があつた。

第一夫人は一人の御子さんきり生まなかつた。長壽と云ふ方だつたが、長男で中々立派な方ではあつたが、しかし一般の人氣は、むしろ第二夫人から生れた四人の兄弟にあつた、少くも心配する善賢にはさう思へたのだ。

實際第二夫人に生れた四人の兄弟、炬面、金色、象衆、別成は長壽に優るとも劣らない若者になりつゝある。そして人望があつた。王者の相があると私かに噂するものがあつた。

善賢は『四人』に一人と云ふ考が頭からぬけなかつた。そして大王にもしものことがあつた時、長壽は必ず國から逐ひ出されるだらうとかう思つたのだ。先んずれば人を制すと云ふ言葉があるが、善賢は長壽のことを思ふと、夜も碌に眠れなかつた。親身になつて我が子のことを思つてくれるものはない。弟達は四人だ。
そこで考へに考へた結果、大王に生命をかけてもおすがりする氣になつた。
子故に迷ふ母の心である。
『一寸申し憎いことでございますが。』
『なんだ。』
『長壽のことでございますが。』
『あれがどうしたのだ。』
『あの子の未來が心配になりまして、この頃は夜も碌に眠れないのでございます。』
『心配なことはないではないか。』
『それでもあの子には親身になつてくれるものはございません。』
『そんな事は心配する事はない、あの子が後とりだと云ふ事は誰も知つてゐる。』

『あなたのゐらつしやる間は勿論安心してをります。しかしあなたにもしものことがございましたら、どんなことになりますか、誰も知つてゐるものはございません。陰ではいろ／＼のことが云はれてをるさうでございます。』

『四人の弟は、決して惡い人間ではない。』

『それはよく存じてをります。しかしあとおしがございます。出世をしたい人がございます。油斷は出來ません。』

大王はさう云はれると反對も出來なかつた。正直云ふと大王もいくらか心配になつてゐた。

『それならどうすればいゝのだ。』

『さうおつしやられると、一寸お答へ出來ないのですが、私はいろ／＼考へて見ましたが、二つの方法きりないことがわかりました。一つは私と長壽が國外へ出ることでございます。』

『それはいけない。』

『もう一つは炬面達が國外に退くことです。』

『他に考はないと云ふのか。』

『はい。もしこの國の平和を亂すことをお恐れになるなら、他に方法はないと思ひます。』

『考へておかう。』

『よくお考へになつて戴きます。』

王様は一人になつて考へられた。善賢の云ふことは無理だと云ふことはわかつてゐた。しかしその無理を通さないと、もつと恐しいことが起ることを王様は氣がつかないわけにはゆかなかつた。國内が二つに別れる。そして互に爭ふ。それは罪のない人民にとつて實に迷惑なことである。どつちが負けても困る。戰爭がつゞけばなほ困る。さすがの王様も之には弱つた。

しかし弱つてゐてい〻問題ではない。そこで王様は理性をまだ失はない四人の子供に相談して見る氣になつた。

炬面達四人の兄弟は呼ばれた。四人は何の用かと思つて父の前に出た。

『困つたことが出來たのだ　それでお前達の決心を聞きたいと思つてゐるのだ。』

『なんでございます。』

王様はくはしく自分の心配してゐることを話した。そして、

『お前達はどうすればい〻と思ふ。』と聞かれた。

炬面は他の弟達と小聲で何か話し合つた。話はすぐきまつた。炬面は云つた。

『御話はよくわかりました。お兄様がこの國をおつぎになるのは當然の事でございます。私達は喜んで國を退きます。そして何處か、まだ開けない處を開いて、其處に新しい國を起します。前から私達は、新しい國をつくる事を夢見てをりましたし、お互に話し合つてもをりました。』

『さうか、それを聞いて私も安心した。私も他に方法はないと思つてゐた。さすがにお前達は私の子だ、よく決心をしてくれた。私も新しい國をつくるのを出來るだけ手つだふつもりだ。』

『ありがたうございます。』

四人は少しも悲しみを見せず、愉快さうに頭をさげて父の前をさがつた。

父はけなげな子供等の後姿を見て涙ぐまれた。

三　新しい國の建設

炬面達四人が國を去つて、新しい國をつくると云ふことが世間に知れ渡ると、人々は驚いた。同時に四人に同情し、又感心した。そして四人の王子と進退を共にしたいと云ふ人が澤山出て來た。王様はそれを喜んだ。

四人の王子は一緒にゆきたいと云ふ人の内信用の出來ない人は斷つたが、信用の出來さうな人

はつれてゆくことを承知した。

出發の準備は急速にはかどつた。

一緒に行かうと云ふ連中には婆羅門も、富豪も、力士も、百工に通じた人々もゐた。

いよ〳〵國を退く時も、泣いて別を惜しむものもあつたが、彼等は新しい國に向つての門出として出征しにゆくもののやうに元氣だつた。國民は彼等を送り、國王も送られた。彼等は父なる國王に元氣に挨拶した。送られるものより、送るものの方が慰められた。

王子達は若かつた。希望に燃えてゐた。彼等は國内の平和のために身を退けたのだ。心の内には一種の傲があつた。彼等は感謝され、又讃美されて國境を越えて進んでいつた。

彼等の心にも淋しさはなくはなかつた。だが心の傲はそれをかくした。そして新しい希望は彼等をさし招いた。

前進！

彼等は日の登る東と、ヒマラヤの高山の方へ心をひかれた。人々がまだ入らない所までも入る勢で出かけた。

中々氣に入つた所に出あはなかつた。

だが遂に彼等は自分の求める所に到達した。それは傍耆羅河を渡つてヒマラヤ山脈の麓に出た所だ。第一に其處の景色が氣に入つた。其處は廣々した平原で、水の便がよかつた。甘い果物が林に澤山なつてゐた。彼等はすつかり氣に入つて、

『こゝだ。』と始めて快哉を叫んだ。

土地はきまつたのだ。それから勞苦の生活が始まつた。途中でへたばつた人もあつたが、しかしとう／＼やりぬいた。土地は立派に開け、人々は集つて來、そしてとう／＼迦毘羅の町もひらけるやうになつた。

何年か後のことだ。或る日、甘蔗王は迦毘羅城を訪ねて歸つた臣下のものから嬉しい音信を聞いた。

『炬面、金色、象衆、別成の四王子樣のおつくりになつた國は、すつかり立派に出來上り、町も繁昌してをります。皆樣も御元氣でゐらつしやいます。』

大王はすつかりお喜びになり、いろ／＼お聞きになり、その苦心や、勞苦が、いかにひどかつたかをお知りになり、一層感心しておつしやつた。

『よくやつた。』

との『能く』と云ふ言葉を『釋迦』と云ふのだ。それから炬面達の國の人を釋迦族と云ふやうになつた。

大王のおほめの言葉から釋迦と云ふ名が出たと云ふのだ。

その後、炬面、金色、象衆が、相ついでなくなつた。そして別成がその國を支配するやうになつた。その子孫に、師子頰と云ふ方があり、この方の子として、淨飯王が生れた。

この淨飯王こそ、釋迦牟尼佛の父である。

姓はいつついたのか知らないが、喬答摩と云つた。

四　淨飯王と摩耶夫人

淨飯王は立派な方だつたことは云ふ迄もあるまい。迦毘羅城に住んでゐられた。結婚する齡になられたので、同じ釋迦族の別で、迦毘羅城からさうはなれてゐない、天臂城の主人である善覺長者の娘と結婚された。それを摩耶夫人と云つた。お二人の仲は云ふ迄もなくよかつた。

しかしお二人の間に子供が中々出來なかつた。このことが唯一の惱だつた。

ところが何年かたつて、子供はもう出來ないのかと思つてゐた或る日、摩耶夫人は六つ牙のあ

る、眞白な、輝くやうな象が右の側から胎内に入る夢を見られた。

摩耶夫人はあまりに不思議な夢なので、淨飯王にそのことを話された。王も、その夢がたゞの夢でないのを氣にされて、夢判斷の巧みな婆羅門を早速よばれて占つておもらひになつた。

婆羅門はその夢の話を聞くと、暫らく無心の狀態になつて何か考へてゐるやうだつたが我に歸つて云つた。

『すばらしいゝ夢を御覽になつたものです。それは王子樣のお生れになる前兆で、その上、その王子樣は俗のまゝでゐらつしやれば轉輪王として全世界を支配されることになり、出家なされば、佛陀になられ、人天の師になられるでせう。これ以上の夢はございません。』

王樣も摩耶夫人もすつかりお喜びになつた。

五　誕生

それから十ケ月は無事に過ぎた。

當時の習慣に從つて摩耶夫人はお產をする爲に實家のお城にお歸りにならうとした。

王様始め家來達殘らずそろつて摩耶夫人のお立ちになるのを送つた。摩耶夫人は幸福さうに見えた。王様も摩耶夫人が今度お歸りになる時は、一人ではなく、立派な王子をつれてお歸りになることを信じてゐた。時には女の子ではないかとも、思つても見たが、夢にもちがひがあるとも思はれなかつた。

それで御機嫌よく摩耶夫人と挨拶された。

摩耶夫人は王様にお別をつげて城門を出られたあとも何となく氣持がよかつた。天氣もよく、時候もよく、從ふ人々も愉快さうに談笑しながら歩いてゐた。皆何となく愉快だつた。

だが行列が中途までゆくかゆかない内に不意に産氣づかれた。人々はあわてた。摩耶夫人は反つて落ちつかれて靜かに指圖されて、すぐ近くの、藍毘尼の花園にお寄りになることになつた。そして急に四方に幔幕をめぐらし假の産屋をつくることにした。人々は走り廻つてあわてて用意をした。摩耶夫人は落ちついてそれを見てゐられた。花園には花が時を得顔に咲き亂れ、小鳥は囀り、生れくるものを祝福してゐるやうに見えた。

用意が出來ると摩耶夫人は無憂樹の下に休まれ、花の滿開の無憂樹の枝を折らうとなされた時、王子は生れられた。そして健かな産聲をあげられた。

王樣にはすぐ使が馳せつけ、行列は間もなく、后と王子をのせた駕を守護して歸つて來た。王樣の喜は譬へやうもなかつた。

六　阿斯陀仙人の豫言

王子の生れた喜は宮殿に滿ちた。城下の人々もお祝ひした。人々が喜んでゐる時、阿斯陀仙人が那羅童子をつれて迦毘羅城を訪れて來た。そして太子に一度お目にかゝりたいと云つた。有名な徳望の高い阿斯陀仙人が見えたので王樣は喜んで太子を見せた。

百歳を越えてゐるやうに見える、白髮、白髯の仙人は敬しく太子を抱いて、つら〳〵そのお顏を見た。人々は默つて見てゐた。仙人は默つて見てゐたが、そのうちに涙が目に浮んだと思ふと、仙人は耐へ兼ねるやうに歔り泣いた。

王樣始め、その場にゐる人は驚いた。冷いものが胸を貫いた。王樣はたまりかねて云つた。

『どうしたわけで、お泣きになるのです。』

仙人は謹しんで太子をお返しして云つた。

「御心配には及びません。しかし古い昔の吠陀の書物に書いてある所によりますと、王樣、お子

様は轉輪聖王にはおなりになりません。轉輪聖王でもこのやうに三十二の偉人の相と八十の好き相を具備してはをりません。このお子樣の人相を拜見すれば、佛陀のみの御相です。必ず出家して佛道を成就され佛陀となられるでせう。それなのに私は年老いて、太子の成道して佛陀になられ、法を說かれる日まで生きてゐられないことを、考へましたら、急に悲しくなつて、つい泣いてしまつたのでございます。』

王樣は太子が轉輪聖王にはならないで、佛陀になられると云ふことはいくらか不服に思はれたが、しかし轉輪聖王よりも、もつと優れた相をもつてゐると云ふことは嬉しく思はれたにちがひなかつた。

厚く阿斯陀仙人や那羅童子を饗應され、美しい衣服など施された。歸りに阿斯陀仙人は那羅童子に、

『お前はまだ若いから、太子が成道されたらお弟子にして戴くといゝ。』と云つた。

七　摩耶夫人の死

太子が生れて五日に命名式が嚴かに行はれた。多くの婆羅門は命をうけて、この上なくいゝ名

を選ぶために相談をした。
その相談の結果・
『太子が生れられた時、一切の瑞相が具備されてゐ、すべてが成就されることが意味されてゐるので、悉達多と名づけるとい〻。』と云ふことになつた。
王樣はその名を喜ばれた。
萬事は幸福さうであつた。だが一つ王樣の心にか〻ることがあつた。
それは摩耶夫人のお身體がその後思はしくなかつたことだ。
『だが死にはしまい。』
王樣はさう思はれた。
しかし人生は無常なものである。摩耶夫人は太子が生れて七日目に、幸福だつたこの世を去られなければならなかつた。
王樣はどんなに力をおとされたらう。摩耶夫人が氣の毒で仕方がなかつた。
だが太子は健かに成人した。
摩耶夫人の 妹 の摩訶波闍波提が、姉のあとをつぎ、悉達多の養育をひきうけた。

このことは不幸中の幸であつた。

八　不思議の子

太子は無事に育つた。三つ児の魂百迄と云ふが、赤ん坊の時から、その人の性質はあらはれるものだ。太子も赤ん坊の時から、その無比の性質をあらはした。

人々は太子を愛し、尊敬しないではゐられなかつた。一目見てその圓滿な相に人々は打たれた。そのさめてゐる時も、眠つてゐる時も、何となく神々しかつた。こんな立派な赤ちやんを見たことはないと、人々は云つた。それはお世辭ではなかつた。

だから母親に早く別れられたが、人々に心から愛された。叔母も義理だけではなく太子を見ると可愛く思はれた。そして何となく尊敬の念に打たれた。

不思議な子だつた。

豫言者は故鄕に尊ばれずと云ふ言葉があるが太子は別で誰にも尊敬された。

又それは不思議ではなかつた。子供の時に既にその德が具つてゐたのだから。

摩訶波闍波提はその後、男の子と女の子を生んだ。男の子は難陀と名づけられた。しかし自分

の子が生れても、太子の悉達多を尊敬する念は決して薄らがなかつた。見れば見る程、太子は聰明で思ひやりに富み、圓滿で、健かだつた。愛しないわけにはゆかなかつた。太子の方からあまる愛の光を人々にそゝいだのだ。だから心ある人は太子を愛しないわけにゆかないのは、尤もなことであつた。

九　最も美しい特色

太子は子供の時から何事にも熱心だつた。一を聞けば十を知り、武術なぞもやり出されると徹底してやらないと我慢が出來なかつた。朝は早くから起き、自分のなすべきことをなされた。不思議な子の内には又不思議な力があり、又それを鍛へるのに不思議な熱があつた。

誰が見ても有望な子だつた。むしろ有望すぎて恐しい程だつた。王樣は殊にその賢すぎるのを心配された。しかし同時に御自慢でもあつた。出來るだけいゝ師を見つけて、敎育をなさつたが、出來るだけ立派な王樣にしたいと思はれて、武術の方をなほ熱心にお敎へになつた。

そして武藝も熱心に學ばれるのを喜ばれたが、時々變に淋しさうな顏をされる時のあることに

お氣づきになつた。矢張り本當の母が戀しいのかと、なほ氣の毒に思はれた。

太子はいつのまにか、自分の本當の母が、自分が生れると七日目に亡くなられたことを知つてゐた。しかしそのために叔母上になほ感謝されても、不平を感じられるやうなことはなかつた。

何よりも優しく、人を愛しないではゐられないのが、太子の最も美しい特色であつた。

一〇　虫の死を憐れむ

太子八歳の時、王は國中で最も秀でた學者や、武術家を禮を厚くして呼ばれて、太子をそれにつけた。師は太子の覺えのいゝのと、頭のよく働くのと、熱心なのと、正確なのにおどろいた。そして正直で、何事も本當に會得するまでは中止しないその熱意に感心した。

こんなお子さんを見たことがないと云つた。

十二歳の時だつた、王樣は太子達大勢の子供連をつれて農事の視察をされた。人々は汗水をたらして働いてゐた。太子は初夏の氣持のいゝ風に吹かれて、父のあとに從はれ、心喜に滿ちてゐたが、百姓達の働くのを見ると、人々が自分達のやうに樂をしてゐないで、天日にさらされて勞苦してゐるのを子供心にも同情しないではゐられなかつた。他の子供達は呑氣に見てゐたが、彼は

さぞつらいだらうと思ふと、氣が氣でなかつた。彼の感じやすい心は、人々の肉體の苦しみや、心の不平を直接に感じないわけにはゆかなかつた。殊に犂で掘り起された土の内に、掘り出された虫があわててもぐり込まうとしてゐるところに、鳥が爭つてやつて來て、それをむさぼり食ふのを見ると、彼は何とも云へないあさましい、情ない氣がした。彼は苦痛や死を恐れてゐた。それが現實に目の前で平氣で行はれてゐる。彼にはその虫の恐怖や苦痛が他人事とは思へなかつた。

彼はいつのまにか皆から遠ざかつた。見てゐられなかつたのだ。そして閻浮樹の下の若草の上に坐つて、目を閉ぢ、腕を組んで、いろ〳〵の生物の苦しみに就いて考へた。

彼の閉ぢた目には、汗みどろになり泥だらけになつて働いてゐる人の姿や、鞭打たれ涎をながして苦しさうに歩いてゐる牛の姿や、又集つてくる鳥にくはれる虫の姿がはつきり浮んで來た。彼はそれ等のものが可哀さうで仕方がなかつた。何とかして救ふことは出來ないものかと思つた。しかしどうしていゝかわからなかつた。彼の目には涙がにじみ出て來た。彼は生きてゐるのが不幸なことを骨の髓から感じた。

いくら考へても、哀れなものがこの世からなくならないことを知つた。どうしたらいゝのか、彼はそれを考へてゐる内に時のたつのを忘れた。

王様達は太子がいつのまにか姿をかくされたことに氣がついた。あわてて皆で捜したが中々見つからなかつた。やつと一人の人が見つけた時、太子は依然として閻浮樹の下で默想してゐた。王様はそのありさまを聞かれてからます〳〵太子が出家するのを恐れた。阿斯陀仙人の豫言がなんだか當りさうに思はれたのだつた。

二　耶輸陀羅姫

それから又何年かたつた。太子はます〳〵物思ひにふけられる時が多かつた。出家したい樣子が時々見えた。しかしその時はまだ熟さなかつた。しかしいつも物思ひにふけられてゐるわけではなく、快活な時も多く、一心に本を讀んだり、無邪氣に弟達と遊んでゐる時もあつた。王様は心配されても、又すぐ安心された。しかし太子の性質はあまりに優しく、感じやすく見えた。しかし太子に接する人は誰も太子を敬ひ愛した。太子も亦逢ふ人すべてを憐れみ、又お愛しになつた。太子程、思ひやりの深い方は見たことはないと、皆話しあつた。この方が王様になられたら、どんなに慈悲深い王様になられるだらう。

少しお優しすぎると人々は心配する位だつた。しかし太子の心の内の事は誰にもわからなかつ

た。それは澄み切つてはゐたが、あまりに深い深淵だつた。底にふれることの出來るものはなかつた。快活な時でも、何となく淋しさが底に感じられた。

しかし十九の歳まで太子は無事に育つた。王様は、一日も早くよき妻を迎へたいと思はれた。太子は始め中々承知されなかつた。しかしまだ出家をする決心はなかつた。それで王様が無理にお勸めになると反對する理由も別になかつた。しかしその時分から、出家したい氣は十分にあつた。しかし同時に、愛する女と幸福な結婚をして親の心を喜ばしたいと云ふ氣も十分あつた。女に對する美しい憧を若き太子は十分に持つてゐられたから。

太子が遂に承知された。王様のお喜びは側で見て涙ぐましい程だつた。息子の心の變らない内に理想的な妻を持たし、厭世的な考から離れさしたい、さう思はれた王様は、すべての人に命じてよき娘を捜さした。

そして新しく美しい宮殿をつくられた。

王様は喜ばれたが、太子の心は何となく浮ばなかつた。人生の一番樂しいはずの事が、太子には何となく氣が進まなかつた。太子は何か惡いことをするやうな氣がした。自分の處にくる妻は幸福ではない。もし生れる子供があればそれも幸福ではない。人生はあまりに無常で、人間は誰

も死はまぬかれない。

若き太子は快楽を愛しないのではないが、何となく人生がたよりなかつた。

しかし結婚の話はどん／＼進んでいつた。王様は随分いろ／＼の人に命じてよき娘を捜させ、撰ばしたが、とう／＼理想的な娘を見出された。

それは執杖大臣の耶輸陀羅姫だつた。

三　結婚

結婚は悉達多太子にとつて決して不幸なものではなかつた。太子は始めて人の眞心にふれたと思はれた。本當に自分を愛したよつてくれる若い美しい女を得られたことは、太子にとつても、喜であつた。

二人の並んで庭を散歩される姿なぞ、誠に美しいものであり、又幸福さうであつた。太子の顔にも時々無心な微笑が浮んだ。

王様はそれ等の報告を得てすつかり満足された。

一、二年は無事に過ぎた。その間でも太子は時々物思ひにふけられる時もあつたが、耶輸陀羅

妃はよく太子の心を知つてゐられるので、さう云ふ時に、殊に優しく氣をまぎらはせるやうに心をつかはれた。さうすると太子の心も和らぎ、微笑されるのだつた。

新しい宮殿はいつも春のやうだと人々は話してゐたが、しかし耶輸陀羅妃は最初に、何かこのまゝではすみさうもないことを感じられた。王様はいつも氣にされて、時々耶輸陀羅妃に私かに太子の樣子をお聞きになつたり、いろ〳〵と注意されたりした。

實際幸福であるべきはずの太子は、何が不足なのか、氣むづかしい顏をされてる時が段々多くなつた。

新しい宮殿は益々太子の心を慰めるために、華かな外見を呈した。美しい女中が澤山雇はれ、花の宴、月の宴の催しも行はれ、美しい舞姬達が心をこめて踊つたりした。

殊に雨期の四ケ月の間は、太子は美しい女達にとりまかれて、その日その日をあそんで過されたが、その結果は人々が思ふのとは反對で、太子の心の內には、段々解けないかたまりが出來て來た。

太子は快樂を愛されないのではないが、それで滿足される方ではなかつた。心の表面はそれで喜ぶやうにも見えたが、心の底は、益々孤獨になるのだつた。

人間がいつまでも生きられるものだつたら、そしてすべての人が同じく喜べるものだつたら、そしてあらゆる生物が平和にたのしくくらせるものだつたら、太子も、安らかに樂しまれたかも知れない。だが太子は人生の無常なことを知りすぎてゐた。

母上の死！

その他、讀むものによつても、見聞きするものによつても、太子はこの世が、たのしいものだとは思つてはゐられなかつた。

一三　太子の煩悶

太子の煩悶は段々強くなつた。段々露骨になつて來た。耶輸陀羅妃が泣かれても、そのきゝめは長くはつゞかなかつた。傍にゐるものも太子があまり苦しんでゐられるので、慰めやうがなかつた。太子は自分の苦しみを露骨に見せる方ではなかつたが、それだけ、なほ強く太子の心の内の煩悶を人々は感じるのだつた。あらゆる方法をつくして慰めても、それは遂にきゝめのないものだつた。實際どうにもならないことで太子は獨りで苦しんでゐられるのだつた。

誰も慰めやうがないのである。

年とらない、死なない人間でも出て來ない限り、太子の煩悶はどうすることも出來なかつた。誰でも死ぬのだ。生きてゐる間は短いのだ。死ねばどうなるのだ。

若い、美しい人を見るにつけて、その人の老が太子には頭にはつきり浮んでくるのだつた。救はれない煩悶が、彼の心を占領した。

いくらごまかさうと自分でしても、どうにもならなかつた。何とかして自分でもごまかしたいと思はれても、ごまかしやうがなかつた。夜となく晝となく、不意に生きてゐることが無意味に思はれてくると、どうすることも出來なかつた。

出家することだけが、唯一の希望になつた。人々が恐れてゐることが、いよいよ本當になりさうになつた。

太子は益々優しくなられ、人々を愛されるのだ。それだけ太子の心の中が人々に察しられて、人々も苦しくなるのだつた。どうかして上げたいと思ふのだが、之許りはどうにもならなかつた。

王樣は快樂で悉達多の心が動かせないことを知ると、學者や、婆羅門にたのんで、太子の心を變へようとされたが、誰が行つても、太子の方がよく考へてゐられるので、敎へに行つたものが敎へられて歸つてくるのだつた。

皆、王樣の前に出て、頭をさげて、

『太子樣だけは、私達の手にあひません。私達が云へることは殘らず御存知で、その上にもつとずつと深く考へてゐられるので、どうにもいたし方はございません。もう少し馬鹿に生れついてゐらつしたら、何とかなつたと思ひますが。』

そんな變なお答をした。

王樣は、

『本當にさうだ。私が云つて聞かせることは、皆知つて、その上で考へてゐるのだから、どうにもならない。賢い子が生れて苦しむのは私許りかも知れない。』

實際、悉達多は、他の人にとき伏せられるには賢すぎた。

彼は父上や、義理の母や、妻を苦しめることを恐れて辛抱出來るだけ辛抱してゐられたのだ。

その氣持が皆にわかるので、小言の云ひやうがないのだ。

一四　出家の願

太子の心の内を知るものは一人もなかつた。誰が見ても、太子程仕合せなものはないやうに思へ

た。それなのに一人で苦しんでゐられる。物好きだと思ふものさへある。

だが太子にとつては幸福すぎることが恐しいのだ。何も苦心したり、骨折つたりする必要はないのだ。だがそれだけ反つて氣がまぎれることもなく、本氣になつて苦勞することもない。氣のまぎれやうがないのだ。

不眞面目な人なら問題にはならない。大概の人ならごまかして通れる。しかし眞面目で本氣で、眞理を求め、本當に憐れな人々を救ひたく思ふ、そして自分の一生を何か有意味にしたい太子にとつては、ごまかして日を送るの程、空虚な心細いことはなかつた。眞劍に道を求めたかつた。殊に自分について佛陀になると云ふ豫言があるので、なほその豫言を本當にしたいと思はれた。出家したいと云ふ氣は太子自身、もうどうすることも出來ない内からの要求だつた。たゞ時機が問題だつた。

一五　太子と耶輸陀羅妃の會話

結婚したために十年出家が遲れた、この樣子でいつたら何年おくれるかわからない。その内に死んでしまふかも知れない。

太子はもう之以上辛抱は出來ないと思つた。
その時、耶輸陀羅妃は太子の側に來て嬉しさうに云つた。
『私、もしかしたら姙娠いたしました。』
『さうか。』
太子はさうおつしやつて默つて考へてゐらつした。
『喜んでは下さらないの。』
耶輸陀羅妃は云つた。
『生れるものに聞くといゝ。』
『あなたはお喜びにならないの。』
『生れることが仕合せならば。』
『だから私達で仕合せにしてやらなければ。』
『どんなに仕合せにしてやつた處が、結局人間は死ぬものだ。生きてゐる間は短いのだ。』
『そんな緣起のよくないことをおつしやるものではありませんわ。』
『しかしそれが本當なのだ。』

『だけど兩親に愛される子は仕合せですわ。』
『私達だつていつ死ぬものかわからない。』
『そんなことをおつしやれば、きりがありませんわ。』
『それが本當なのだ。』
『それなら人間に生れることは誰でも不幸なの。』
『さうだ。』
『私は不幸ではありませんわ。』
『そんなことは云はないがいゝ。この世に幸福な人はない。年とらないものはない。病氣にならないものはない。そして死なないものはないのだ。』
『それでも皆幸福さうにしてをりますわ。』
『お前は、古井戸におちた旅人が、一本のつるをつかまへてぶらさがつてゐる話を知らないか。』
『そんな話は知りませんわ。』
『その井戸の底には惡龍がゐるのだ。そして旅人が落ちて來たらのまうと待つてゐるのだ。』
『まあ怖い。』

『それで旅人はびつくりして上を見ると、其處には白と黑の鼠がゐてかはり番につゝの莖をかみ切つてゐるのだ。』

『そんなお話はやめて頂戴。』

『話はやめたところが、事實はそれにかはりはないのだ。』

『生きてゐるのが怖くなりましたわ。どうしても助からないのですか。』

『そんなことはない。佛の道に入れば、助かることが出來るのだ。』

『それにはどうしても出家なさらなければならないのですか。』

『それより他に仕方があるまい。』

『さうなれば私も、生れてくる子も助かるのですか。』

『私が本當に悟れば、お前達も救つてやる。』

『私も、この頃だん／＼あなたの御氣持がわかつて參りました。ですけど子供が生れる迄は家にゐて下さるでせうね。』

『家にゐてもいゝ。』

太子は耶輸陀羅妃の心細さうな顏を見ると、之以上心細い目に逢はしたくなかつた。

一六　太子、老人に出逢ふ

太子は今や二十九歳になられた。

出家する用意が段々心の内に出來て來た。家を出たら先づ何處に行かうか。誰を師にしたらいいか、そんなことも時々お考へになつた。だが家を出たあとのことを思ふと、決心がにぶるのだつた。幸ひに弟がゐる、父上はまだ丈夫でゐられる。しかし自分がゐなくなつたら隨分力を落されるだらう。殊に耶輸陀羅はどんなに力をおとすだらう。幾分覺悟はしてくれてゐるだらうが。

しかし太子の決心のつかない理由は正直に云つて他人のこと許りではなかつた。自分自身も、家を出てからのことを考へると、いく分不安にも感じられるのだつた。世間の苦勞を知らず、大事に育てられて來た太子にとつては、家から出ることは、たしかに大きな冒險だつた。

しかしそんな恐怖も、忍び足に近づく死や、人々の苦しんでゐるありさまを考へると、大したものとは思へなかつた。

太子は苦しみが強ければ強い程、それに打ち克つ力も強かつた。決心は旣にされてゐるのだ。眞理を得ずに生きてゐることは出來ない。

しかし出家する時が、近づくに從つて、何となく決心もにぶるのだつた。だが決心がにぶると又、無限の勇猛心が起るのだつた。

外見の生活は別に變らなかつた。多くの女は太子の寵愛を得ようと苦心をした。華かな饗宴はつゞいて行はれた。王樣はそれより他に太子の出家をとめる方法はないやうに思はれた。そして少しでも太子が喜ばれると、鬼の首でもとつたやうに喜ばれるのだつた。

國民は太子を信賴してゐた。その限りを知らない慈悲心や、優しさは、國民の崇拜の的だつた。太子は弱さうに見えても、武藝も秀で、殊に弓術にかけては、比類ない腕を持つてゐられ、馬は勿論、象も巧みに御され、勇氣に富まれてゐることは、人々は十分に知つてゐた。隣國も太子の評判を聞いて、恐を抱いた。それだけなほ、出家されることは、王樣にも國民にもつらいことだつた。

深夜一人目ざめていろ〳〵のことをお考へになり、一人で惱んでゐる太子のありさまを知るものはなかつたが、しかし耶輸陀羅妃だけは、時々太子が、夜中に起きて坐禪をして、何か考へてゐる姿を見て、神々しく思はれたことがあつた。そして私かに泣かれた。

或る日太子は思ひあまつて、氣持を變へるために、花ざかりの花園をおとづれることを思ひ立

たれた。王様にそのことを話されたら、王様も非常によろこばれた。
王様は家來にすぐ命じて、太子のゆく道に異常なことが起らないやうに注意するやうにと云はれた。家來達はすぐその手はずをした。
城中からあまり出たことのない太子は、白馬犍陟に車をひかせ、供を多勢つれて城の東の門から出かけられた。
しかし花園にゆく前に一人の腰の曲つた、瘠せおとろへた、よぼ〳〵の老人が、杖をついて歩いてゐるのに出くはされた。供の人は驚いたが、しかし太子はそれ以上、驚かれたやうに老人を、馬をとめて見てゐられたが、
『歸らう。』とおつしやつた。
門を出る時の皆の元氣はまるでなくなつて沈默して皆歸り出した。
太子は御者の車匿におつしやつた。
『お前は今の老人を見て、どう思ふ。』
車匿は默つてゐた。お答へする言葉を知らなかつた。
『今に、私もお前もあのやうになるのだ。』

太子はたゞさうおつしやつて、默つてしまはれた。車匿は太子がすゝり泣きでもされてゐるやうな感じを受けた。

太子の不意のお歸りは人々を驚かせ、そしてその理由を聞いた時、人々は困つたことが出來たと思つた。

しかし太子はまもなく元氣になられた。

一七　羅睺羅の誕生

又太子は花園に行きたいとおつしやつたので、人々は喜び、王樣もお喜びになつた。

しかし今度も太子は花園まではゆかれずに、途中で病人にあつて歸つて來られた。その次に又お出かけになつたが、今度は葬式に出逢はれて、その時も途中でひき上げられた。

皆は默つてゐた。太子は默つて、顏色も靑ざめて、お歸りになつた。

太子は決心されたやうだつた。

だがそれからまもなく、耶輸陀羅妃は父の家に歸られて男の子を生まれた。普通なら喜ぶべき知らせなのだが、太子はそれを聞くと、困つたことが出來たと思はれた。そしてその御子に、

『羅睺羅』と云ふ名をおつけになつた。
それは『障碍』と云ふ意味なのだ。
この名を聞いた時、王様は心の中で怒られ、耶輸陀羅妃は悲しく思つた。
しかし太子の決心の強さには、誰も手向へなかつた。反對することを恐れた。そつとしておくより仕方がなかつた。
しかしそれが一番太子にはつらかつた。

一八　太子、出家の意志を父王に語る

太子はとう〳〵辛抱が出來なくなつた。
王様にお逢ひになつて、自分の決心をはつきり云ひ、出家の許をお願ひした。
王様はとう〳〵その時が來たと思はれて、がつかりなさつた。何か云はうとされたが、悲しみが胸にこみあげて來た。王様は一ことも云はれずに、太子の顔を見てゐられたが、大粒の涙が目に浮んだ。それを見ると太子も泣かないわけにはゆかなかつた。
二人は聲をあげてすゝり泣きされた。

やゝあつて王様は云はれた。
『お前がそれ程迄に云ふのには、よく〳〵決心してのことだと云ふことはわかつてゐる。しかし耶輸陀羅のことも、羅睺羅のことも考へてやつてほしい。私も齢をとつて來た。この上に悲しみを辛抱する力がなくなつてゐる。早く私は隱居して安樂にくらしたいと思つてゐる。どうかお前はもう一度考へなほしてはくれないか。他のことならどんな望でも叶へてやる。』
『父上、それならば四つの望を叶へて下さいますか。』
『なんでも望むがいゝ。』
『それでは遠慮なく申しますが、第一は老衰しないことです。第二はいつも若くつてゐられることです。三は無病なことです。四は死なないことです。この四つの望を叶へて戴ければ私は出家はいたしません。』
王様は、怒つたやうな顏をされて太子を見られたが、太子があまりに眞面目で、悲しさうな顏をされてゐるので、王様は怒る氣にはなれなかつた。
『そんな無理を云はないで、このわしをこの上苦しめないでくれ。』
王様はさう云つて逃げ出された。ゆつくりしてゐるとつひに太子に負けさうに思はれたので、

はつきりした返事をなさらない内に引つ込まれた。太子は何か考へてゐられるやうに、暫らく其處にぼんやり立つてゐらつしたが、思ひ直して自分の室に歸られた。

無言の時がつゞいた。

一時は永遠に春のやうな氣持がつゞくやうに見えた太子の宮殿は、今は實に淋しい空氣に滿ちてゐた。耶輸陀羅妃は折角子供が出來たことを喜んだが、その爲に一縷の望を持つことが出來たのも、僅かの間で、心細い涙のこぼれる時が多かつた。しかもその心を誰にも打ちあけることは出來なかつた。無心な子を見ても、涙が出るのだつた。太子はそれを知つてもどうすることも出來なかつた。同情はしても自分の使命をその爲に曲げるわけにはゆかなかつた。

一九　王様の嘆

王様は太子と別れてから自分の室に入つて矢張り默つてゐられた。心配して室に入つて來た摩訶波闍波提にも氣がつかないやうだつた。

『どうでございました。』

摩訶波闍波提は、はれ物にさはるやうに云つた。

『困つたことだ。』
『どうしても出家なさりたいとおつしやるのですか。』
『さうだ。』
『私からもおたのみしてみませうか。』
『だめだ。』
『あんなお優しい方ですから、女の涙に動かされないことはありますまい。』
『今迄、出家しなかつたのは、お前達の涙の力だつたかも知れない。しかしもうそれもきゝめはなくなつた。生別、死別の悲しみは人間のさけられないものと云ふことを、骨の髓から知つてゐる。今日は私に、もし人間をいつまでも老衰しない、そしていつまでも若く、病氣もせず、死にもしないものにして下さつたら、私は出家をいたしませんと云つた。』
『まあ、そんな無理なことを。』
『私もそれを聞いた時、無茶を云ふ奴だと思つて、腹が立つたが、悉達多の顔を見たら、あまりに眞劍な顔をしてゐるので、私の方がぞつとした。あんまり、あれは正直すぎる。眞面目すぎる、ごまかしが出來ないのだ。私達だつて死ぬのはいやだ。死ぬことを考へると何とも云へない心細

い、虚無な感じがするが、しかし私達はそれを本當には感じないで、暢氣にしてゐられるが、あれにはそれが出來ないのだ。あれの云ふ方が本當なのだ。だから私は逃げるより仕方がなかつた。』

『出家なさつても死ぬ時は死にますわ。』

『だが本當の悟を得たものは、死を恐しいとは思はない。あれは悟を得たいのだ。佛陀になりたいのだ。豫言通りに、人天の師になつて、すべての衆生を救ひたいのだ。』

『それなら、おあきらめになつたのですか。』

『だが私はまだあきらめられないのだ。この國の未來のことを思ふと、悉達多のことをあきらめられない。その上に私はこの頃めきめきと齢をとつた。あの子に別れたくないのだ。』

『その御氣持が、おわかりになつたら。』

『わかつてはゐるのだよ。わかりすぎてゐるのだ。だから私はあの子も氣の毒だと思つて、怒るわけにもゆかないのだ。』

王樣はさうおつしやつて、またすゝり泣きされた。摩訶波闍波提も一緒に涙をながし、ため息をつくより仕方がなかつた。

二〇　太子の出家

太子は出家を思ひとゞまりたいと思はれたが、しかし太子の使命は、太子に出家を強ひて許さなかつた。太子は苦しまれるだけ苦しまれた。しかし太子は無意味な生活には辛抱が出來なかつた。そして誰も死んでしまふ世界に安住してはゐられなかつた。

或る夜とう〳〵家を出ることにきめられた。

その前夜太子はいつもより愉快さうにしてをられた。そして女達が集つて、歌つたり踊つたりするのを、耶輸陀羅妃や腰元達と、嬉しさうに見てゐられた。人々は太子のいつもより晴れやかなのを、嬉しく思つた。殊に耶輸陀羅妃は涙が出る程嬉しくて、太子に甘えたいやうな氣持で話しかけられた。太子もいかにも愛してゐるやうにやさしく返辭をされた。

その晩耶輸陀羅妃は久しぶりに安らかに眠れた。だが太子は安らかには眠られなかつた。家出することは眠る前に既にきめられてゐた。最後の一夜だけでも、せめて皆を喜ばしたく思はれたに過ぎなかつた。またその時皆が可哀さうに見えて仕方がなかつたのも事實だつた。太子は心に涙ぐみ、そしてあやまりながら、愉快さうにしてゐられたのだ。太子の心を知るものは一

人もなかつた。
眞夜中に人々の寢靜まつたのを見て、太子は靜かに起きられた。太子は眠れる者を起さないやうに注意されて室を出られた。廣い室にはさつきまで歌つたり、舞つたりした女達が寢てゐた。その姿は彼女達が起きてゐた時とはまるでちがつて、疲れ切つて、何も知らずに寢てゐたが、あるものは齒ぎしりをし、あるものは蒲團を抱き、あるものは枕をはづし、蒲團をはぎ、あらゆる醜體を示してゐた。
太子はそれ等を見て、淺ましい氣はされたが、しかし彼等に同情は惜しまれはしなかつた。ただ人間の露骨な正體を見たやうな氣がされ、見てはならないものを見たやうに思はれた。
太子は人々が目を覺さないやうに、靜かにその室を出た。誰もゐない、廣々した室は、なほうす氣味惡いものだつた。しかし出家の決心をされた太子には、そんなことは大した問題ではなかつた。無事に庭を出ることが出來た時、ほつとされた。
月がよかつた。庭は異樣な世界を見せてゐた。晝間生きてゐるものは眠り、晝間眠つてゐるものが目覺めてゐるやうだ。まるで晝とちがつた世界が、其處にひらけてゐた。太子は御者の車匿のゐる家に近づかれた。そして戸をたゝかれた。

そして小聲に呼ばれた。

『車匿、車匿。』

車匿は夢現に太子の聲を聞いておどろいて目を覺した。夢かと思つたが、たしかに太子の聲だつた。あわてて起きて着物を着換へて戸をあけた。

『犍陟をつれて來い。』

『今時分どちらにお出かけになるのです。』

『月がいゝので、不意に城の外に出たくなつた。』

車匿は本當のことを察した。

『こんな眞夜中にお出かけになると御身體にさはります。明日の朝になさいませ。』

『車匿、犍陟をつれてこい。』

低いが權威のある聲に、車匿は思はず

『はい。』と云つた。そしてあわてて出かけようとして、思ひかへして、心配さうに太子を見かへり、恐る〳〵云つた。

『出家なさるのではございませんね。』

『そんなことを聞く必要はない。犍陟をつれてくればいゝのだ。』

車匿は泣き出した。

『それならいゝ。自分でつれてくる。』

『いえ、私がつれて參ります。』

泣く〳〵車匿は自分が尊敬しきつてゐる、身命も喜んでなげ出したく思つてゐる主人の云ふことを聞いた。

『出來るだけ早く、靜かにつれて來い。』

『はい。』

車匿は思ひあきらめたやうに犍陟をつれて來た。

犍陟は太子を見ると喜んで嘶いた。

太子は犍陟に跨りながら云つた。

『別離は人間のさけられないものだ。世俗のことはとげやすいが、出家する事はなか〳〵むづかしい。私はやつと今日、そのむづかしいことを成就しかけたのだ。私の長い間の苦心は無にしないでくれ。これも私の生れた時から定められた運命で、さけるわけにはゆかない。』

車匿はたゞ畏つて頭をさげた。

城門は車匿の手で開けられた。誰も氣がつくものはなかつた。主從は默つてゐた。馬だけは喜んでゐるやうだつた。

少し行つて、太子は獨語された。

『ありがたい。』

車匿は涙が出て困つた。泣きながらついて行つた。太子は馬を急がれた。馬の蹄の音のみ、虛空に響いた。

萬物は死んでゐるやうに眠つてゐた。たゞ遠くから夜の鳥の鳴聲らしいものが、とき〴〵ひゞいて來た。主從はなほも默つてゐた。

阿奴比耶邑のわきの阿奴摩河を渡つた頃、空が白みかけた、涼しい川岸の朝風は氣持のいゝものだつた。太子は馬から降りて顏をあらつた。太子は其處で刀をぬいて髻をほどき髮を切つた。

車匿は默つて見てゐるより仕方がなかつた。涙がしきりと出た。太子は着物をぬぎ、車匿をよんでおつしやつた。

『この着物を乞食沙門に與へて來い。そして沙門の着物を一つもらつて來てくれ。』

車匿は何か云ひたかつたが、何も云へなかつた。涙でぬれた顔をあげて太子の顔を見ながら、

『はい。』と云つて頭をさげた。

車匿は太子の着物を押し戴き、川岸にゐた乞食沙門の處へ行つて、何か云つた。そしてその着物を渡して、かはりに粗末な沙門の衣をもらつて來て、太子に捧げた。

太子は、

『御苦勞だつた。』と靜かにおつしやつて、その着物をおとりになつて、すぐ着られた。

車匿は泣きながらそれを手つだつた。車匿は何か云ひたかつた。しかし太子の御心がわかるので何も云へなかつた。

太子には車匿の心がよくわかつた。しかしそれに氣がつかない風をした。太子は涙を一滴もお見せにならなかつた。

『それでは之でわかれることにしよう。』

太子はさう云つた。

車匿は兩手を地面の上について泣き伏しながら嘆願した。

『どうぞ何處までも御供さして下さい。』

『そんなことは出來ない。』

『私もおめ〳〵とお城には歸れません。』

『この刀とこの髮とを父上にとゞけてくれ。そして悉達多は死んだものとお思ひ下さいと、傳へてくれ、私は本願を遂したら歸ることもあるかと思ふが、それ迄は死んでも歸らない。どうか私のことはあきらめて戴きたいと、さう申し上げてくれ。』

『それでも道中は大へんでございます。之からどうして生活していらつしやるのですか。』

『乞食してゆくだけのことだ。私のことは心配しないがいゝ。人間は一人で生れ、一人で死んでゆくのが運なのだ。私の決心はきまつてゐる。おとなしく歸るがいゝ。』

『猛獸や、害虫もをります。どんな人間が出て來ないとも限りません。』

『そんなことはわかつてゐる。』

『おそばで働かして戴きたうございます。』

『まだ私の心がわからないのか。』

『どうしても許しては戴けないのですか。』

『之以上、私を苦しめないでくれ。そして私の云ふ通りおとなしく歸つてくれ。』

『はい。』車匿は頭をさげた。

太子は、

『それではきりがないから、之で別れることにする。死別、生別は人間の運命なのだ。人間はそれを甘んじるより仕方がない。それでは之で別れるとしよう。』

『御身體、お大事に。』

『お前も。』

太子はさうおつしやつて、一人で歩いてゆかれた。そのすつかり變つた姿を見送つて、車匿は、つひに聲をあげて泣きたふれた。

氣のせゐか犍陟も元氣がなかつた。太子の後姿はつひに見えなくなつた。

車匿もつひにあきらめて立ち上つて、泣く〳〵お城に歸つていつた。馬も首をたれてゐた。その姿はいかにも哀れなものであつた。

二　七日間の森林中の靜坐と始めての乞食

だが大決心をして家を出られた太子は内に燃えるやうな希望を持ち、近くの森林に入つて行つ

た。そして適當な所をさがして、其處に坐禪をくまれた。太子は死すとも退かずと云ふ決心で、最初の戰にのぞんだ。

日は高く登り、腹はへつて來たが、決心した太子はそんなことに驚かず、坐禪をつゞけられた。鳥は囀り、わからない草の動くやうな音や、異様の聲が時々ひゞいて來たが、太子の顏色はかはらなかつた。夕が來ても動かれなかつた。夜になつても其處を去らうとはしなかつた。無心の狀態に入られることもあつたが、萬感がやゝもすると胸に浮び、いろ〳〵の考が腦中を往來した。夜はふけるに從つて氣味のわるい程、あたりは靜まりかへつた。異様な野獸の聲が遠くから聞えた。恐怖が一瞬、太子の心を通りすぎたが、太子は動かなかつた。

始めて自分の心のまゝに修行が出來るやうに思はれた。だが心の内の動搖は靜まらなかつた。翌日も、その翌日も同じやうな狀態がつゞいた。水は時々近所の淸水をのんだが、何も食物はとらなかつた。太子はどうしても悟らなければおかないと決心された。

その夜、雨がふつて身體中ずぶぬれになつた。太子は少し氣になつたが、しかし決心はまげられなかつた。七日の間、同じ狀態がつゞいたが、とう〳〵悟の道は得られなかつた。容易なことでは得られないことを知つた太子は、一人で考へるよりは、いろ〳〵の人に敎を乞ふ方がいゝこ

とに氣がつかれた。せいてはいけない。ゆつくり根本的に生死を超越し、本當の安心を得たい。
こんなことをしてゐては、いつになつてもものにならない。
太子はさう思はれて八日目に町に出られた。そして生れて始めての乞食をされた。
太子は今や立派に一個の乞食坊主になられた。衣は益々ひどく、顏もすつかり瘠せられ、歩く力さへ、以前よりはずつと力がないやうに見えた。そのかはり顏は益々、深味と强味をまし、益々精神的な力が感じられた。道で出逢ふ人々は、この乞食坊主はたゞものではないと思つた。
以前の太子を知つてゐるものが今の姿を見たら、あまりに痛ましい姿なので、涙をながすであらうが、太子自身は、今迄よりもいく分元氣であつた。肉體や神經は苦しめられたが、心の內は今迄よりはずつと落ちつき、何か希望が持てた。今迄は生活が、皆不正であり、まちがつてゐるやうに思はれ、段々道から遠ざかつてゆくやうに思はれたが、今はいく分かでも向上してゐることが感じられた。苦しみにも意味があるやうに思はれた。
決心の弱いものだつたら、とつくに參つてゐたであらう。だが眞劍に道を求めてゐる太子には、そんなことは大したことではなかつた。之からこそ本當の苦しみが待つてゐるのだ。どんな苦しみにも打ち克つ勇猛心をもつて、前進する決心は益々固るばかりだつた。

太子は仲間の乞食坊主から跋伽婆仙人の名を聞き、話を聞いて、之こそ師にするに足る人らしいと思つた。それですぐ跋伽婆仙人のゐる阿毱耶林に行つた。その苦行林は人里離れた靜かな景色のいゝ處にあつた。何となく清淨な氣がし、畏敬の念に打たれた。

太子は始めて自分の師と思ふ人をたづねるのだ。いろ〳〵と空想が浮ぶのを禁じるわけにはゆかなかつた。

三　跋伽婆仙人を訪ふ

だが太子は跋伽婆仙人の仲間を見るにいたつて、最初に受けた印象は失望に近いものだつた。彼等はたしかに眞似が出來ないやうな苦行をしてゐる。或る者は荊棘の上に臥して、棘が身にささり生血が流れ出、それが既に黑ずんでゐる所さへあつた。しかもそれを耐へて、ねてゐる。身體の重さで棘は十分に肉體に喰ひ込んでゐる。

また塵芥の中にねてゐる、不潔なことに無關心なやうな男もゐれば、火のそばにねて、半身眞赤にしてゐるものがある。片足だけで立つてゐるものがあり、水のなかに半身つけてゐるものもある。

そして或る者は草を着物にしたり、木の皮を着物のかはりにしたり、そして一日一食のものもあれば、二日一食、三日一食の人もある。
ひどい苦行をするもの程人々に尊敬されてゐるらしく、人間はかくまで苦痛に耐へられるものだと云ふことを示してゐた。
太子はその忍耐に感心されたが、しかし、その人達の顔が光明に輝いてゐないで、何となく暗く、みじめで、不健全な感じのするのを心よく思はれなかつた。
跋伽婆仙人にお聞きになつた。
『何のためにこんなに苦行するのですか。』
跋伽婆仙人はあたりまへの顔して云つた。
『天に生れる爲です。』
之を聞いて太子はなほがつかりされた。
『樂をしたいので苦しんでゐるのか、しかし天で樂をしたら、又人界で苦しまなければなるまい。それに第一、天に生れるのだらうか。生れるとどうなるのだ。』
太子はそんなことを考へると、なほ馬鹿々々しくなるのだつた。

太子が默つて物思ひにふけつてゐるのを見て、跋伽婆仙人は云つた。
『苦行は始めて見るとつらいものだが、修行がつめば、傍で見るよりは辛抱の出來るものです。』
太子が默つてゐるのを、苦行におどろいてゐるのだと跋伽婆仙人は思つた。
太子は靜かに云つた。
『苦行には十分尊敬は拂ひますが、その報を求めて苦行するのでは、つひに苦ははなれないでせう。苦と樂は永遠にくり返されるでせう。』
跋伽婆仙人は何とも答へなかつた。
太子は意氣ぐんで來たのだが、失望しないわけにはゆかなかつた。一晩其處にとゞまつて、翌日、彼は旅をつゞけるのだつた。
彼は跋伽婆仙人の弟子達から、南の方に阿羅邏迦羅摩と云ふ、偉い仙人がゐることを聞いた。
彼は失望した跋伽婆仙人から去つて、阿羅邏迦羅摩を訪ねる氣になつた。
しかしこゝに來たのも無駄ではなかつた。人間はこんな苦行にまで耐へられるものだと云ふことを知つたから。しかしその求めるものが、求めるに足りないものなのが、もの足りなかつたのだ。

太子は決心を新にして、勝利の道を目指して勇敢に歩いて行つた。
阿羅邏迦羅摩の噂は前から聞いてゐた。それだけたのしみにしてゐた。
しかし阿羅邏迦羅摩の處までは遠かつた。途中恒河を渡つて王舍城に入つた。

二三 王舍城にて頻毘娑羅に逢ふ

王舍城は大きな都だつた。家も多く、人も多く、其處には頻毘娑羅王がゐて、國を支配してゐた。
王は既に悉達多が出家したことを知つてゐた。悉達多の噂をいろ〳〵聞いてゐた王は、一度悉達多に逢つて見たいと思はれた。
今太子は王舍城にあらはれて乞食されてゐる。人々は太子の姿を見、その容貌を見て、それの前身が、太子であることを知つた。誰云ふとなく悉達多太子が來たと云ふ評判がたつた。太子はそんなことを知らなかつた。たゞ多くの人が自分が行く處に集り、何か囁くのを聞いた。
太子は盤茶婆山の東側に出家の人達が集る處があるのを聞き其處に出かけ、其處で適當な處を見つけ、靜坐して冥想にふけつた。

このことが頻毘娑羅王の耳に入ると、王は自分で悉達多に逢ふために城を出られ、ごく僅かの從者を從へて、悉達多を訪ねられた。
太子はそれが王だと云ふことを知り、丁寧にお迎へした。
王は云つた。
『あなたが出家なさつたことを聞いて私は驚きました。あなたのお父樣はさぞお嘆きになつてゐらつしやると思ひますが、なぜ出家なさつたのです。何か御氣に入らないことでもあつたのですか。もし私達の處にゐらつしてもいゝのでしたら、御氣に入つた土地をさしあげ、ごく氣樂におくらしになれるやうにしますが、私達の所におとゞまりになる氣はありませんか。』
『御親切に云つていたゞくのは感謝の辭がございませんが、私はこの世に望がなくつて、出家いたしましたので、どんなことがありましても、俗に戻らうとは思ひません。』
『それでは何の目的で出家なさつたのですか。』
『老、病、死の苦を斷ち切るためです。』
『そんな事が出來るのですか。』
『出來るか、出來ないか、やつて見なければわかりませんが、私はそれを得るまでは死んでも退

かない覺悟でをります。』
『その御決心はよくわかりました。それ程強い御決心だつたら、目的にきつとお達しになるでせう。もし老、病、死の苦に、打ち克つことがお出來になつたら、どうか私にも教へて下さい。』
王は御機嫌がよかつた。王は噂の太子を内心恐れてゐた。轉輪王にでもなられら大變だと思つてゐた。今、出家をされ、俗に歸る氣持をまるで持たないことを知ると、安心すると同時に、尊敬した。
殊に悉達多に逢つてその人の心にふれて見ると、忘れることの出來ない、いゝ印象をうけた。信賴するに足る人間だと思つた。
王は機嫌よく歸つていつた。

二四　阿羅邏迦羅摩の弟子になる

太子に逢つた人は誰も太子の眞心にふれ、その端正な容貌の内に輝く貴い精神力に打たれた。そして太子を愛しないわけにはゆかなかつた。だから太子は不思議に皆から尊敬された。
太子は王舍城を去つて、阿羅邏迦羅摩の處に行つた。阿羅邏迦羅摩は、非常に齡をとつてゐた

が、まだ元氣だつた。太子が來たのを見て喜んで迎へた。
百歳位に見える白髪、白髯の老人と二十九歳の太子との對坐して話してゐる光景は一幅の名畫を見るやうであつた。
老人は靜かに若者に語つた。若者は老人の云ふことを一々吟味して聞いてゐた。大木になる木は中々頭をさげることを喜ばない。
もう生長のとまつた老人は若々しい男の征服力を寛大な心に見守つてゐた。
太子はこの老いたる仙人にも、あきたらないものをぼんやり感じた。しかしこの仙人から取るべきものの多いことを先づ喜ばれた。
始めて太子は自分の師にするに足る人に逢つたと思はれた。其處に暫らくとゞまることにきめられ、師の云ふ通りに修行をした。
それは坐禪をして無念無想になる修行だつた。
仙人は太子に云つた。
『生命はもとは混沌としたもので、わけのわからないものだ。其處から我が生じてくるのだ、我から愚かな心が起り、それが愛執になるのだ。愛執から肉體が生じ、貪欲、瞋恚なその諸々の煩

惱が生じ、それが流轉し、くりかへり、生、老、病、死の悲しみや苦しみが起るのだ。』

太子は喜んで聞いた。

『それなら、生、老、病、死の本を斷ち切るにはどうすればいゝのですか。』

『それは出家し、戒を守り、修行をし、謙遜に、忍辱して、靜かな所に住み、禪を學び、欲望や惡から遠ざかり、不善の法を行はずに、定に入り、喜心に入る、更に喜心を捨て正念に入り、樂しみを受ける本をつくり、更に進んで苦樂を除き、すべて外界から受けるものを捨て、無想の報を受けるのだ。之が解脫だと云はれてゐる。しかし私の考は、少しちがふ。私の考は禪定からさめたあと、無量の想をなくなし、種々の想からはなれ、非想、非々想に入る、之を解脫とするのだ。もしあなたが生老病死の本を斷たうとするなら、かくの如く行ふべきだ。』

太子は其處で仙人の云はれる通り行はうと苦心した。

二五　父淨飯王よりの使

或る日太子は逢ひたいと云ふ人があるので逢ふと、父淨飯王からの使だつた。

太子が逢ふと、使の者は、太子が去つたあとの迦毘羅城がいかに悲しみに滿ちたものだかを話

した。殊に王樣の御力おとしは、想像以上だつたと話した。

そして太子に歸つて戴きたいと云つた。

太子は、

『どんなことがあつても歸れない。本願を達する迄は死ぬとも歸らない。人間は生別、死別はさけられないものだ。生死を恐れてゐる間は、人間は不幸からはなれることは出來ない。私の修行も、父上や義母や、妻の生命も救ひたいと思ふからだ。今のまゝでは人間は救はれない。私の修行の邪魔をせずに、早く歸るがいゝ。』

しかし使のものは中々歸らうとしなかつた。

『人間は死はさけられないものです。それでも皆たのしく生きてゐるのでございます。太子も心をとりなほされ、さけられないことはあきらめて歸つて戴きたく思ひます。仙人の云ふことも、人々によつてちがひます。そんなものは信じられません。人間が生死の本を斷つことなぞ出來るものではないと思ひます。』

『お前の云ふことなぞ、私が知らないと思つてゐるのか　私は考へに考へたあげくに、決心したことだ。何と云はれても、人間が死なないものだと云ふことを示すまでは、歸りはしない。餘計

なことは云はずに歸るがいゝ。』
太子はさうおつしやつて、使の顏を見られた。使は、
『はい。』と云ふより仕方がなかつた。
がつかりして歸つていつた。

二六　阿羅邏迦羅摩の下を去る

太子はなほ暫らく阿羅邏迦羅摩の處で修行されたが、太子は其處にゐる弟子達も、仙人自身も、太子がのぞむ程、悟つてゐるとは思へなかつた。太子は非想、非々想の修行をされてゐる內に、疑問が浮んで來た。
『想はない、想はないことも想はない。だがそれをつとめるものは矢張り我ではないか　其處に何かこだはりがある。大きな煩惱の根はとりのぞけるが、小さい無數の根は、さうつとめることで反つて勢を得て來、遂には、どうにもならなくなる。もつと根本な所まで立ち入らなければ、つまり執着が起り、煩惱が起つてくる。』
そこで仙人の處へ行つて、その疑をたゞした。仙人の答は太子を滿足させなかつた。太子は

とう〳〵其處も立ち去ることにした。

求めてゐるものがはつきりしてゐる太子には、ごまかしは駄目である。中途半端ではをさまらない。やぶれた袋の中におちついてはゐられない。折角おちつきかけた生活も、自らやぶつて外にとび出したのだつた。

二七　尼連禪河の邊での修行

太子はその後鬱陀伽羅摩の子の所へ出かけて、その父の教を聞きに行つた。

しかしこゝでも太子は滿足することは出來なかつた。阿羅邏迦羅摩と五十歩百歩だつた。

それで其處にもおちつかなかつた太子は、もう全印度に師とすべきものがないことを感じた。自分で悟らう、それより他仕方がなかつた太子は、まづ自分のおちつくべき處をさがした。

太子は失望することを知らないものだつた。益々自分が立ち上るより仕方がないことを感じ、自分の使命の大きなことを知つた。

だがそれだけ自分の仕事の容易でないことを知つた。

他の人で出來ることなら他の人に任せてもいゝ。他に誰も出來る人がなければ、益々眞劍に自

分の求めるものを自分で得るより仕方がない。
少しのごまかしも許せない太子の、その後の修行は大したものだつたにちがひない。
彼は摩竭陀國の伽耶といふ町に近い、優留毘羅西那尼村の森が氣に入つた。
その森のわきを尼連禪河の清流が流れてゐ、その川岸の白沙が美しかつた。北に象頭山が聳えてゐた。
太子はこゝを自分の道場にきめた。そして大願成就するまでこゝを去らない決心をされた。
以前太子の家來だつた、憍陳如等五人の者が來て、同じく苦行をし、太子の御用をつとめることになつた。太子は其處におちついた。そしていろ〳〵苦行をされたが、中々悟を得るわけにはゆかなかつた。

二八　苦行

その苦行は一通りのものではなかつた。
太子は見るかげもなく痩せた。目はくぼみ鼻が骨ばつて高くなり、頬はこけた、肋骨は顯れ、骨と皮だけになつたと云つて誇張ではない位だつた。何しろ或る時期には豆や、豌豆の汁を一口

と、米や隱元や胡麻を一日に一粒づつきりとらなかつたと云はれてゐる程だ。生きてゐるのが不思議な位だ。しかも太子は妄想に打ち克つことは出來ず、死苦を超越することは出來なかつた。
又無息の行もした。それは口と鼻をふさいで出る息をとめるのだ。之も修行によつて段々深刻になるのだつた。だん／＼苦しくなると、耳の内で轟々と音をたて、額は鋭い劍の先で突かれるやうになり、又革の鞭で頭を強くひつぱたかれるやうに感じるさうだ。
それから又いろ／＼無理な苦行をされて肉體を征服しようとした。齒を喰ひしばつたり舌を上顎につけて力んだりした。
その效はいくらかあつたが、しかし根本的に太子の望んでゐるやうな悟は得られなかつた。煩惱はなくならなかつた。情欲も、生死も、斷滅することは出來ず、苦しみだけが骨をさし、それをやめると、ほつとする位だつた。しかしそれはまだ修行が足りないのだと思はれた太子は、あらゆる方法をとつて、煩惱に克ち、解脱の境に入らうとされたが、時に成功しかけても、すぐ又元に戻つた。
太子のわきにゐた五人は、太子の道を求めることの熱心なのにおどろき、感心した。しかし太子自身は、自分のしてゐることに不滿であつた。

浄飯王はその後も太子のことを氣にされ、時々、樣子を見に人をつかはした。そして太子が骨と皮になつて修行されてゐる話を聞くと涙をながされた。

そして車匿に澤山の食料を持たして太子のもとにつかはされた。車匿は耶輸陀羅妃からも、摩訶波闍波提からも心をつくした送り物をことづかつた。

耶輸陀羅妃は今はすつかりあきらめて、羅睺羅に若き母の愛を注いで淋しく生活してゐた。時時太子のことを思つたり、昔のことを思ふと涙が流れるのだつた。どんなにか幸福でゐられるはずの自分が、こんな淋しい生活をしなければならない運命は、あきらめようと思つても、あきらめられないものがあつた。しかし表面は靜かに生活してゐた。そして時々は夫の苦しんでゐることを考へ、自分の樂をしてゐるのを、すまないやうな氣もされるのだつた。

逢ひたい、車匿と一緒にゆきたい、

さう思はれると又泣きたくなるのだつた。

車匿は宮殿を出るまでは何となく心苦しかつた、しかし宮殿を出るとまもなく、太子にお逢ひ出來るのが嬉しかつた。

だが尼連禪河わきに太子を見出した時、あまりのお變りやうなのに、すつかりおどろいた。

太子の靜坐してゐる前に平伏した。

『おなつかしうございました。』

『よく來た。何か用か。』

『王樣の御命令で食料をもつて參りました。』

『そんなものはいらない。早速持つて歸つてもらはう。』

『そんなことをおつしやらずに、折角もつて參りましたのですから。』

『食料の必要はないのだ。修行のさまたげになるから持つて歸つてくれ、何度も同じことを言はさないやうにしてくれ。』

車匿は何か太子のゐなくなつたあとの話をしようとしたが、太子はそれをとゞめて、車匿に早く歸るやうにお命じになつた。

車匿はとりつく島がなく歸つていつた。

太子はそれからも、同じやうな生活がつゞいた。一年たち、二年たつた。

しかし太子はまだ解脱は出來なかつた。

三年、四年たつた、太子は一歩も退かずに、難行、苦行をつゞけられた。しかし得る處は別に

ないやうに見えた。

しかしその間、無意味に時間を過したわけではなかつた。靜かに、遲くではあつたが、解脱の時は少しづつ近づいてゐた。

二九　苦行をやめる

第五年もすぎた。

太子はその時分からやつといろ〳〵のことがはつきりして來たやうに思つた。

この太子の氣持は、筆でかくことは出來ない。しかし太子はあらゆる苦勞をし、いろ〳〵考へた結果、肉體を苦しめることは肉體に反つて執着するにすぎないことを知つた。

大事なのは肉體を苦しめることでなく、肉體をすつかり忘れることだつた。肉體を忘れることではなく、心を淸淨にすることだ。心が自づと淸淨になることだ。そして他の垢からすつかりぬけ出ることだつた。

彼はこの時、昔まだ宮殿にゐた時、時々靜思した時の事を思ひ出した。そしてその時の方が自分の心は淸まつてゐた事に氣がついた。今の方が反つて煩惱や執着の多い事に氣がついた。

修行の仕方がだん／＼形式的になり、心の清さにいく分無關心になつてゐたのに氣がついた。太子は最後の決心で、心を清くし、無心にし、あらゆることに超越して無の世界に入るやうに努力された。その結果、苦行や、斷食が根本的な望を達するに害があることに氣がついた。しかしさう思ふのは何かの誘惑のやうにも思はれ、まだ何となく不安だつた。

我が身を苦しめることが、善で、我が身を喜ばすことは惡のやうに何となく考へる習慣がついてゐたので、苦行や、斷食そのものを恐れるために、樂をしたいために、苦行や、斷食に捕はれて身を苦しめるのが、よくないと思ふのではないかと反省した。しかしそんなことはなかつた。

そこで或る朝太子は決心をされて靜坐から立ち上つて河に入つて身體を清め、そして牛乳をしぼる娘から、牛乳を一杯求め、それをのんだ。そのうまさはたとへるにものがなかつた。太子は五體にそれがしみ通るやうに思つた。

憍陳如達の五人は之を見てすつかりおどろいてしまつた。

とう／＼太子は墮落した。何と云つても身分が身分で意志が弱く、いざと云ふ所で腰をぬかした。見てゐられないと思つた。

そして太子が元氣に嬉しさうに五人の方へやつてくるのを見ると、五人は穢れたものが近づい

でくるやうに逃げていつた。

三十　佛陀となる

太子は五人のことなぞは眼中になかつた。一人森のなかにゆき、菩提樹の下に坐した。天氣もよく、清淨なそよ風がふいてゐた。太子は生れて始めてのやうに心が歡喜した。

何を見ても淸く美しく見えた。

『正覺を得なければこの座を起たない。』

太子はさう心に誓つた。

何ものも恐れなかつた。はつきり目が見えて來た。ものの姿が正しく見えて來、考へること、思ふことが正しく歪にはならなかつた。太子は何もがわかつて來た。生死の姿も、不二のものとして、はつきり感じた。こだはりがなにもなくなり、障になるものは何もなかつた。宇宙と同化し、心も生命も宇宙に擴大された。

反つて今までの煩惱の方が不思議に思はれて來た、この時、その原因がはつきり姿を見せて來た。

太子は歡喜した。

しかし太子はすぐ有頂天にはならなかつた。自分の得たものを實によく吟味し、まちがつた所が、爪の垢程でもありはしないかと反省した。しかし自分の得たものが、まちがひでないことをはつきりされた。

とう／＼得るものを得られた。

時のたつのを忘れ、場所を忘れ、何もかも忘れた。だがそれは眠つたのではない。覺めたのだ。解脱されたのだ。

すべてはぬぎ去てられた。

生きたまゝ、生身のまゝ涅槃に入られたのだ。

三一　佛陀の自覺

太子は今や自分が佛陀になつたことを自覺された。しかしこの自覺が一時の興奮であつてはならない。以前にも一時的に佛陀になつたと思つたことは實は一度や二度ではなかつた。しかしそれはごく一時的で、興奮が過ぎ、疲れてくると、又元の姿に歸り、煩惱が頭をもたげてくるのだ

つた。

だから今度は大事に大事をふまれた。居處を三度かへて、二十一日間、自分が本當に佛陀になり切つてゐるかどうか吟味し、自分の考のあやまりでないことを研究した。その間には隨分ひどい荒にも出逢ひ、妄念も、幻影も浮んだが、しかしそれは太陽をかくす雲に過ぎなかつた。

どう考へても自分は佛陀になつた、覺者になつた、それを疑ふわけにはゆかなかつた。だがその時に、死は恐るべきものではなく、生と死の境がなくなつたやうに見えた。死はわるいものではない。天に歸り、大地に歸ることだ。涅槃そのものだ。太子はこのまゝ死ぬのが一番すなほな氣になつた。何もさへぎるものはない。それは大河が海に入るやうなものだ。そこに喜があつた。

生に執着も、偏愛もないのだ。歸る處に早く歸る、摩耶夫人も其處にゐるのだ。

太子は死を怖れることの空なことを全心全身で感じてしまつた今、人生は幻にすぎないことを知つた今、死は何ものでもない。

このまゝ死ぬ程、やすらかなことはないやうな氣になつた。

だがこの時、生死を解脱された太子の心のうちに、見る〳〵わいて來たものがあつた。それは衆生の難である。歸るべき處に歸ることを忘れて、なやみ、苦しんでゐる人々である。それ等の

人にたいする愛だ。眞理をもつものだけが知つてゐる愛だ。それは執着のない、青空のやうに淡々とした愛である。解脫の彼岸に渡せるものだけ渡してやらう。太子はさう思はれた。そして佛陀として立ち上つたのだ。

我等も、もう太子とは呼ばずに佛陀と呼ばう。

三　五人の弟子

佛陀は人を救ふためにはどう說教されたらいゝか、既に考はきまつてゐた。彼は先づ第一に彼の憍陳如達の五人に眞理を說かうと思つた。そして五人の鹿野苑にゐることを知り、其處を訪ねた。

佛陀は途中で輕い食物をとり、腹をあまりへらすことをしなかつたので、身體もいく分太り、血色もよくなつてゐた。

鹿野苑では五人は相變らず今迄通りの生活をし、相變らず骨と皮でゐた。一ケ月たつても彼等の物質生活も、精神生活も少しも變らなかつた。又變らないのを寧ろ得意

にしてゐた。そして悉達多の話が出ると、皆輕蔑した調子で、その墮落を誹つた。
或る日彼等はいつものやうに集つて坐禪をしてゐた。すると向ふの方から誰か來るのが見えた。
『あれは喬答摩だ。』
と一人が云つた。
『そんなことはあるまい。』
『いや、喬答摩だ。』
『何しに來たのだ。』
『後悔したのだらう。』
『あてにはならない。』
『さもなければ、わざ／＼くるのは圖々しい。』
『一人で淋しくなつたので來たのだらう。』
『きてもこつちから挨拶するのはよさう。』
『墮落したものに、こつちから頭をさげる理由はない。』
五人は自分達の方から頭をさげたり、話をかけたりはしないことにきめた。

佛陀はそんなことに氣がついてゐるのか、ゐないのか、平氣な顏して五人の處にやつて來た。五人は氣がつかない顏をしながら注意してゐた。だが少しも太子には後悔してゐるやうな處が見えない。嚴かな、圓滿な落ちついた顏してやつてくる。少しあてがちがつた。

そして五人のそばに來た時、五人は思はず立ち上つて頭をさげた。

佛陀はそれを見て云つた。

『お前達は私が來ても立つて迎へない約束をしたのに、なぜ立つて私に挨拶したのだ。』

五人の心は鏡にうつるやうに佛陀にはわかつてゐた。

五人は、びつくりして云つた。

『喬答摩よ。おつかれにはなりませんか。』

『喬答摩と私の姓を呼ぶのは之から止めるがいゝ。私は佛陀になり一切衆生の父母になつたのだ』

憍陳如はおどろいて云つた。

『あなたはいつ佛陀になつたのです。苦行をしてさへ佛陀になれなかつたのに、苦行をやめて正覺を得られたとは考へられません。』

『憍陳如、お前の小ざかしい心で私が正覺を得たかどうかを、量つてはいけない。肉體が苦しめ

ば反つて心は惱亂する。身が樂になると、情に愛着する。苦樂とも道を成就する本ではない。苦樂をすて、中道を得、正しく見、正しく思ひ、正しく語る、正しく仕事をし、正しく生き、正しく精進し、正しく念じ、正しく定に入る。之を八正道と云ふが、それを行つてよく修行すれば、心は靜かに定まり、生老病死の患からはなれることが出來るのだ。私は旣に中道を行つて、正覺を得たのだ。』

五人は佛陀のその言葉を聞くとうれしくなり、ありがたい氣がして來た。五人の顏に誠があらはれた。

そこで佛陀も五人が眞理を受け入れる力が出來てゐることを知り、つゞけて云つた。

『お前達もよく知つてゐるやうに、人の世は四苦八苦の世だ。生の苦しみあり、老の苦しみあり、病の苦しみあり、死の苦しみあり、愛するものと別れる苦しみあり、憎むもの一緒に住む苦しみがある。望むものが得られない苦がある。榮樂を失ふ苦がある。その他あげてはきりがない。形のあるものも、ないものも、足のないものも、一足、二足、四足、又多くの足あるものも、一切衆生にはすべてこれ等の苦のないものはない。この苦をよく知るがいゝ。』

五人は佛陀の云ふことが本當だと思つた。そして佛陀はつゞけてどんなことを云はれるだらう

と耳に注意をあつめた。
佛陀はつゞけて云つた。
『これ等の「苦」は、皆「我」が本だ。自分が本だ。衆生がもし我と云ふ考を起したら、これ等の苦を受けるだらう。貪欲や瞋恚や、愚癡の三毒も皆、我を本とする。そしてこの三毒がいろいろの苦の原因になるのだ。生きてゐるものには、この三毒があつて苦しみがくりかへされるのだ。これを「集」と云ふのだ。これはとりさらなければならない。もし「我」の想や、貪、瞋、癡を滅することが出來たら、諸苦はなくなるのだ。之を「滅」と云ふ。この滅を行ふためには八正道を行ふより他に道はない。之を「道」と云ふのだ。この道を修行しないといけない。』
五人はそれを聞いて、何か會得することが出來た。佛陀の云ふことは別に珍しくも、變つてもゐなかつた。しかしその事を本當に知り、又感じて云ふ處に權威があつた。
佛陀はなほ云つた。
『憍陳如達。よく知るがいゝ。苦を先づ知ることが必要だ。集は斷ち切らなければいけない。そしてそれ等を滅することが出來ることを證しなければいけない。そして道は修行しなければならない。私は旣に苦を知り、集を斷じ、滅を證し、道を修したから無上道を得たのだ。この苦、集、

滅、道を四つの聖諦と云ふのだ。この四つのことを知らないで解脱することは出來ない。このことを本當に知ることで諸〻の苦を解脱出來るのだ。憍陳如、私の云ふことがよくわかつたか。』

『はい。』

憍陳如は、畏んで答へた。

他の四人も佛陀の云ふことの本當なことを知つた。そこで五人は佛陀の弟子になつた。

佛陀は自分一人ではなく、自分の得た眞理が他の生命にも美しく働きかけたことを知つて喜んだ。そして本當に知つたかどうかをためすために、なんでも到れり盡せりでないと安心出來ない佛陀は五人の弟子に聞いた。

『お前達、比丘よ、色、受、想、行、識の五つのものは常のものか、無常なものか、苦とするか、苦としないか、空とするか、空でないとするか。我ありとするか、なしとするか。』

五人は謹しんで答へた。

『世尊よ。色、受、想、行、識は實に無常であり、苦であり、空であり、無我です。』

佛陀は喜んで云つた。

『お前達は、すでに解脱し、いろ〳〵の苦を生むもとを斷じることが出來た。苦はくりかへされ

ないであらう。私とお前達六人は、世間の第一の福田となつた。佛と僧と四諦の法が具つた。それで三寶の名が名實共に具つた。』

『三寶とは何を云ふのですか。』

誰かが聞いた。

『つまり、三寶と云ふのは如來を佛寶とし、四諦を法寶とし、お前達五阿羅漢を僧寶とするのだ。つまり佛寶、法寶、僧寶を三寶と云ふのだ。この三つの寶がすでに具つた。これがたすけあふので、わが教は天下に廣まり、人々を無上道に導き、解脱を得させることが出來るのだ。』

五人はよろこんで、改めて佛陀の前に頭をさげて、

『よくわかりました。』とさう云つた。

五人の僧は、憍陳如、摩訶那摩、跋波、阿捨婆闍、跋陀羅の五人である。

三三　耶舍及び六十一人の弟子

その後佛陀は五人をつれて縛囉迦河の岸にゆき、其處が氣に入つたので、暫らく其處におちつくことにした。

或る朝早く佛陀は川岸に出て顔をあらひ、散歩をした。
その時川の向ふ岸を、氣でも狂つたと思へるやうな若者が、何か叫んで馳けてくるのに佛陀は氣がついた。
その聲は、
『われ苦し、われ苦し。』と云つてゐることがわかつた。佛陀は立ちどまつて默つてその男を見た。
若者はこの人が噂の佛陀と自稱する男だと云ふことに氣がついた。そして改めて佛陀を見た。
その男も佛陀に氣がついたらしく、佛陀の方を見た。
そしてひきつけられるやうに履物をぬいで川を渡つて佛陀の前に跪いて云つた。
『お助け下さい。私は苦しいのです。』
『善男若者よ。こゝは安穩無事だ。』
この若者は波羅奈國の倶梨迦長者の子で耶舍と云つた。その家は非常に富み、多くの奴婢を使つてゐた。
前夜、多くの舞姫や、歌うたひをよんで親類中が集り、大さわぎし、夜なかまでつゞいた。宴會が終つて、人々が寢靜まつた。寢苦しい夢を見た耶舍はふと目がさめ、そして眠れぬまゝに起

きた。そしてはゞかりに出かけた、その途中彼は見てはならないものを見た。彼が私かに愛してゐた舞姫が一人の樂人とたはむれてゐたのだ。

彼はそれを見ると發狂するやうになり、履をはいて家をとび出したのだつた。

そして、

『我は苦し、我は苦し。』と云つて、家をとび出し、空が白み出した時城門をとび出して、縛囉迦河の岸にまでやつて來たのだ。

しかし今太子と話をしてゐる內、彼の心はすつかりおちついた。そして我に執着するの愚を知つた。今迄知らない世界が急に開けたやうに思ひ、本當に解放された氣になつた。

今迄の世界があまりに穢れてゐることに氣がついた。

それ以上、佛陀の大きな心にふれて、その心に抱かれたい氣がし、とめどもなく泣くのだつた。

佛陀は若者に、人生の苦を語り、その苦からのがれる道を教へた。若者は仰ぎ見て、すつかり氣持がおちついた。

佛陀は、若者がすつかりおちついたのを見て云つた。

『さあ、家に歸つたらいゝだらう。御兩親も心配してゐられるだらうから、家にゐて、美しい着

物をまとつても、五欲からはなれゝば本當の出家だ。いくら家から出て山にすんでも五欲にひかれゝば出家ではない。大事なのは心だ。歸るがいゝだらう。』
耶舍はそれを聞くと、自分の着物がいかにも長者の子らしいので、佛陀にさう云はれたのだと氣がついた。そこに耶舍は眞心をこめて云つた。
『どうか私をお弟子にして下さい。』
佛陀はそれをお許しになつた。
そして五人の弟子の處へつれてゆかれた。耶舍は其處で寶石でかざられた着物をぬいで、黄色の衣をつけた。
かくて佛陀の弟子は六人出來たわけだ。
耶舍の父は翌日目がさめて、耶舍のゐないことに氣がついた、皆大さわぎした。そして父は大勢を方々へさがしに出し、自分も捜しに出かけた。そして縛囉迦河の岸まで捜しに來て其處で息子の履を見つけた。川は淺いので死んだとは思はなかつた。
そして自分達も川を渡り、佛陀の處に來た。佛陀はそれに氣がつくと先づ耶舍にかくれてゐることを命じられ、そして倶梨迦長者を迎へた。

倶梨迦長者は佛陀を見かけると云つた。
『沙門、私の子を御覽にはなりませんか。』
『まあこゝにゐらつしやい、こゝにゐらつしやれば、その內、こゝに來られるでせう。』
倶梨迦は云つた。
『あなたは沙門だから嘘はおつきにならないでせう。』
そして禮をして、佛陀のわきに坐つた。
佛陀はいろ〳〵の話をした、布施や持戒が如何に大事であるかを說いた。長者はその話を聞いてすつかり感心した。人生がいかに空であり、富がたのむに足りないことを知つた。佛陀はそこで安心して沙門の風をした息子に逢はした。
自殺でもしはしないかと心配してゐた息子が、元氣にしてゐるのを見て父は喜んだ。そして出家したことに贊成した。そして佛陀に明日耶舍をつれて自分の處に飯を食ひに來ていたゞきたいと云つた。
佛陀は承知された。
長者はその場で佛陀に歸依した。出家はしないが俗のまゝの弟子になつた。之が最初の優婆塞

だつた。
翌日、佛陀は約束通り倶梨迦長者の處に出かけ、御馳走になり、人々のために法をといた。その時耶舍の母が、佛に歸依した。之が最初の優婆夷で、優婆夷と云ふのは在家の女の信者だ。
佛陀のまいた種は思はぬ所に芽を出した。
耶舍の友人達、五十人が出家したのは、それからまもなくであつた。
佛陀は其處で弟子達に教ふべきものを教へた。そして弟子達が會得すべきものを會得した時、六十一人の弟子をよんで云つた。
『比丘達よ。君達は既に正法を聞き、解脱を得、いろ／＼の苦からのがれることが出來た。しかし衆生はまだ苦しんでゐる。君達はそれ等の人を救はなければならない。それで之から、皆、わかれ／＼に諸國をへめぐり、まだ救はれない人々を濟度するがいゝ。私はこれから伽耶山にゆき、人々の尊敬を集めてゐる迦葉を救ひにゆかうと思ふ。』
弟子達は畏つて承諾して、思ひ／＼の土地に說敎に出かけた。

三四　三十人の男

佛陀は久しぶりで一人になつた。そこで彼は苦行林に入つて、自分の好きな樹下で靜坐をつゞけた。彼はすべてから解脱して無心に入つてゐた。
その時、一人の女が何か大きな包をもつて逃げて來た。そして佛陀に氣がつかずに通りすぎた。それから暫らくたつて、大勢の男の聲が聞えた。五六人の人がやつて來て、佛陀を見つけて云つた。
『こゝに一人の女が逃げて來はしなかつたか。』
佛陀は云つた。
『氣がつかなかつたが、なぜさがしてゐるのです。』
そこで男は云つた。
『私達三十人この森の中に住んでゐるのですが、二十九人は妻があるのですが、一人だけ妻がゐないのです。それで私達が同情して、妻のない男に昨日一人の女をつれて來たのです。ところがその女は普通の女ではなく、したゝかものの淫賣婦だつたのです。恥しい話ですが、その女一人の爲に、私達三十人は皆、一夜の内に誘惑されてしまつたのです。そして今日目がさめたら、その女に道具一切をもつて逃げられてしまつたのです。それでおひかけてゐるのです。』

そんな話をしてゐる内に、他をさがしてゐた連中も、
『ゐたか、ゐたか。』
と云つて集つて來た。
佛陀は話を聞くと皆の顔を見渡して、靜かに云つた。
『さうですか。それなら聞きますが、君達は女をさがしてゐるが、自分の身體の方が大事ぢやないのか。自分と女とどつちが大事なのだ。自分と品物とどつちが大事なのだ。』
他の人に云はれたのなら別に感動もしなかつたのかも知れないが、不思議に權威をもつ、精神界の王である、佛陀にさう云はれると、人々の胸に實につよくこたへた。
『自分の身の方が大事でございます。』
主な人がさう答へた。
『それなら女をさがさずに、自分の心をさがしたらいゝであらう。』
人々は目がさめた氣がした。
『心をさがすのにはどうしたらいゝのですか。』
『私の云ふことをきくがいゝ。』

佛陀はさう云つて、人生の苦について話し、それを滅する道について話した。皆、心を入れかへ、佛陀の弟子になつた。

三五　迦葉の三人兄弟の改宗

佛陀はそれから一人で勝利の道を歩いてゆく。

彼は當時最も多くの人から尊敬されてゐる、五百の弟子をもち、國王や大臣にも尊敬されてゐた、拜火教の優樓頻螺迦葉を訪ねに、尼連禪河の邊に行つた。ついた時は夕方だつた。

優樓頻螺迦葉は、佛陀を見て、その氣高いのに感心し、丁寧に迎へた。

佛陀も丁寧に挨拶して云つた。

『私は波羅奈國から來ました、之から摩竭陀國にゆきたいと思ふのですが、日がくれて一晩とめていたゞけたらと思つて來たのです。』

『さうですか。ないこともないのですが、其處には恐しい大蛇がゐるので、皆怖がつてゐます。』

『蛇がゐても結構です。』

『其處は火に仕へる道具を入れておく石室なのですが、他は今弟子達が一杯でもう他の人を入れ

ることが出來ないのでお斷りしてゐるやうなありさまなのです。』
『それではその石室をかして戴けますか。』
『しかしそれはおよしになつた方がいゝと思ひます。私の方はかまはないのですが。』
『それなら是非其處にとめて下さい。』
佛陀は強ひてその石室をかりて其處に入つた。
皆、おどろいた。ものずきな奴だと思つた。馬鹿な男だと思つた。強がつて死ぬのは可哀さうだとも云ひ、いゝ氣味だとも云ふ人もあつた。皆佛陀が逃げてくることを信じてゐた。
しかし佛陀はそんな人間とはわけが違つてゐた。彼は石室に入ると珍しく大きな錦蛇が室の内に氣味のわるい胴體や鎌首を見せて道具類の間に横たはつてゐるのを見た。しかし佛陀は恐れなかつた。自分の生死を解脫してゐる佛陀は、其處でもおちついて、靜坐をし、涅槃の境に入つた。
錦蛇の方も、自分に害意のない人間を恐れなかつた。時々はひ廻つたが別に害は加へなかつた。
翌日、佛陀はごくやすらかに休んだもののやうに、つやのいゝ顏して石室から出て來た。人々はおどろいた。
『どうでした。』

『心さへ淸淨なれば害はうけずにすむわけです。』
無比の精神力をもつ、解脫者は答へた。
聞くものは後光でもさしたやうに感じた。
迦葉はこの男はたゞものではない。もしかしたら自分を征服するために來たのかも知れないと思つた。
さう思ふとさすがの迦葉も心が亂れかけた。
佛陀はこゝでもう暫らく修行をさしてもらひたいと云つた。迦葉はさう云はれるといやな氣はしなかつた。佛陀が自分を尊敬してゐると思つたからだ。
その時其處にお祭があつた。その日は方々からいろ〳〵の人が集つて來た。迦葉は人々が佛陀を見るのを恐れた。佛陀の人をひきつける力の大きなことを知つてゐたから。
しかしその日佛陀は何處かに引つ込んで姿を見せなかつた。その翌日迦葉が佛陀に聞いた、
『昨日は何處にいらつしたのです。』
佛陀は迦葉の顏を見て云つた。
『あなたは私が昨日ゐないことを望んではゐませんでしたか。』

迦葉ははつと思つたが、しかし佛陀の云ふ意味がはつきりとはのみこめなかつた。なぜそんなことを云ふか。

『そんなことはありません。』

『あなたはまだ悟つてゐない。あなたの內には嫉妬心がある。あなたは私が皆に逢ふのを恐れてゐた。私にはそれがわかつてゐた。それで私は昨日はさけたのです。あなたのやうな立派な人にもまだ嫉妬が殘つてゐる。火を拜する前に、あなたはそれを斷じなければ、あなたは救はれない。』

迦葉は反對出來なかつた。

『あなたの云ふことは本當です。私は若いあなたが私より優つてゐると云ふことを知りながら、どうしても、それを知るのがいやでした。私は眞理に不忠實な男になりました。どうか私をあなたの弟子にして、私の最後の垢をなくさして下さい。』

『さすがはあなただ、迦葉、しかしあなたには弟子が多い、あなたを信仰してゐるものは澤山ゐる。よく考へ、又弟子達と相談しておきめなさい。』

迦葉は弟子を集めて云つた。

『私は、今になつて、始めて本當に目が覺めた。私は始めて佛陀に逢へた、私は之から佛陀の弟子

になつて、最後の垢からのがれ、本當の涅槃に入れる身になりたい。實際佛陀の云はれるやうに、我を滅しなければ、我等は苦からはなれられない。火を祭つても心が垢れては何にもならないことを知つた。私と同じ考の人は私と一緒に佛陀の弟子になることを望む。』

弟子達は前から、佛陀の教に動かされてゐた。今老いたる師がさう云ふので、皆、自分達も佛陀の弟子になることを誓つた。

迦葉は喜んだ。そこで佛陀は改めて自分の教をといた。五百人の弟子達は感動して、火に事へる具を全部尼連禪河になげすてて佛陀の弟子になつた。

河になげすてられた道具は河しもの方に流れた。そして下流にゐる迦葉の二人の弟の處に流れついた。

二人の弟は、那提迦葉、伽耶迦葉と云つた。二人とも二百五十人許りの弟子をもつてゐた。今、彼等は兄の火に事へる神聖な道具がすべて流れてくるのを見た。

『何か起つたにちがひない。』

二人は弟子をつれて兄の所へ行つた。ところが兄の處には誰もゐず、今迄嚴かに飾つてあつた道具がすつかりなくなり、見る影もなくなつてゐる。二人は茫然として涙も出なかつた。

『どうしたのだらう。』
『異常なことが起つたのだらう。』
『もしかしたら、山賊の類に皆殺されたのかもしれない。』
『殺されたのなら血が流れてゐるはずだ。人質につれてゆかれたのだらう。』
『それにしても、神聖な仙人を知らないそんな無禮な山賊がゐることは想像が出來ない。』
『いくら考へても見當がつかない。』
二人は不思議に思ひ、驚いた。そして近所の人に聞いて、やつと兄達のゐる所がわかり出かけて見た。
彼等は更に驚いた。開いた口がふさがらなかつた。
尊敬する兄を始め、五百の兄の弟子達が皆沙門になつて頭をすり、黄色の衣を着て、坐つたり歩いたりしてゐる。とてもその樣は見てゐられないものだつた。
弟は自分の目を疑つた。情ない氣がして、腹が立つて來た。
『兄さん、なんて云ふざまなのです。』
『よく來た。お前達を訪ねたいと思つてゐたところだ。』

『之は又どうしたのです。』
『改宗したのだ。』
『お兄さんが、あの天下の尊敬を一身に集めてゐた、お兄さんが。』
『さうだ。私もこんなことになるとは思はなかつた。お前達が不思議に思ふのは無理もない。だがお前達も一度佛陀にお逢ひして、話をうかゞふがいゝ。この齡まで生きてゐてよかつたと思つてゐる。私は今迄正覺を得てゐたつもりだつたが、佛陀にお逢ひしてから、自分の內の垢がはつきりした。私はやつと生死を解脫することが出來た。今迄にこんなに心がやすらかなことはない。』
弟達はおどろいて、佛陀に兄につれられて逢つた。一目見て、弟達は佛陀の心の無限の深さと、その落ちつきさを知つた。兄が改宗するのも無理はないと思つた。
そして佛陀の話を聞いて益々感心した。彼等も喜んで改宗した。
そこで佛陀は迦葉の三人兄弟の弟子を集めて說教された。千人の迦葉の弟子達は謹しんで、自分の師を仰ぎ見た。
佛陀は火の譬をとつて說教された。
『いろ／＼の妄想が火打石をこすつて愚癡の黑煙が起り、貪欲と瞋恚の火が燃え上るのだ。その

火は益々強くなり、劇しくなつて、衆生を燒き、生死の苦の火の內に人々をたゝきこむのだ。世人は皆貪欲、瞋恚、愚癡の三毒の猛火に燒かれて、老病死の苦惱の內を輪廻するのだ。諸々の比丘よ、三つの火の盛んなのは我を本とするからだ。三つの火を滅しようとするなら、我の本を斷たなければならない。この我の本を斷つことが出來たら、三つの火はおのづから消え、三界を輪廻する一切の苦は自づとなくなるであらう。君達は今迄三つの火に仕へたが、今は之をすてた。外の迷信は除いたが、三毒の火はまだ內に燃えてゐる。それをはやく滅することが大事である。よく注意するがいゝ。』

弟子達は心の底をゆり動かされた氣がし、自分の內の三毒の火を滅しなければならないことを知つた。

三六　再び頻毘娑羅王に逢ふ

佛陀は尼連禪河の迦葉達のゐた所を去り、伽耶山頂に行き、其處に暫らくゐた。迦葉達が歸依してからの佛陀の評判は大したもので、摩竭陀國の頻毘娑羅王の耳にも達した。

王は六、七年前に悉達多太子が、出家してまもなく太子に逢つたことがあり、太子が佛陀にな

つたら、自分の處に來てくれと、おつしやつたことがあつたが、その王の豫言は美しく當つて、太子がとう〳〵佛陀になつたことを知ると、早速、太子に逢ひたいと思ひ、使を伽耶山頂に出すことになつた。そして禮をあつくして自分の宮殿に來て戴きたいと云はした。

佛陀は、王より迎をうけると、昔の約束を思ひ、弟子達をつれて山を降り、王舍城の近くの林に一先づ休んだ。

王は大臣や婆羅門や、その他の人々をつれて佛陀を迎へるためにその林まで駕にのつて來られ、佛陀を見ると駕から降りて謹しんで挨拶された。

王に從つて來た人々も佛陀を拜し、皆適當な場所に安坐した。

そこで佛陀は王に云つた。

『大王よ。いつも御身體はおよろしいか、民を治めるにおつかれにはなりませんか。』

『世尊、おかげで安穩にしてをります。』

王について來た人々の内には、優樓頻螺迦葉が佛陀のわきにゐるのを見て、迦葉の方が佛陀の師ではないかと思つたものもあつた。迦葉の方が有名であり、齡もとつてゐた。

王はそれに氣がついて、迦葉に云はれた。

『優樓頻螺迦葉、久しぶりで、お目にかゝるが、相變らず丈夫でお目出たい。近頃佛陀の弟子になられたと聞きましたが、なぜ弟子になられたのです。』

迦葉は謹しんでお答へした。

『世尊は實に天人の師でいられる。私などその及ぶ處ではなく、この齢で世尊にお目にかゝれ、弟子の内に加へていたゞけたことを無上の喜としてをります。』

王は今更に佛陀に感心されると共に聞いた。

『あなたがなぜ火に事ふる具を棄てて出家したか、話して戴けますか。』

『元より喜んで申します。私も大王にお話し申したいと思つてをりました。今迄、私の火に事へてゐたことで私を信じていろ／＼御厚意を示して下さつた方々に、私はお話しいたしたいと思つてをりました。火に事へることは天人のなかに生れる功徳はございますが、五欲の樂を受けるために、又生死の苦におちる恐があります。そして貪欲、瞋恚、愚癡をはなれないことを知りました。火に仕へるのは將來の生を求める爲ですが、生あれば必ず老病死はあるのです。それで私は火に事へることをやめました。佛陀の法を見ますと、生にはなれ、老病死にはなれ、涅槃に入ることが出來、本當の解脫の域に達します。この本當の佛陀の大慈悲にふれた私は、もう火に事へ

るやうな愚かなことは出來ないのです。佛陀を知る前は火に事へることを最上と思ひましたが、佛陀の教を知ると、火に事へることは、迷の種を增すことにすぎないことを知りました。だから火に事へることをやめました。弟達も同じ心であり、私達の千人の弟子も同じ思であります。そして私達は本當の心の落ちつきを得られたのです。』

王樣はそこで佛陀に云つた。

『世尊。どうか、私達下根のものに、わかるやうに說教していたゞけませんか。』

佛陀はうなづかれて、道をとかれた。

『大王よ。我等の肉體は、意識が生れるので存在がはつきりするのです。意識がなければ何のやうなもので煩悶もあるわけはないのです。この意識があるので、いろ〳〵の思が生じ、いろ〳〵の欲望も生れるのです。そして我等の肉體も、心も、欲望も生じたり、滅したりして、一處にじつとしてゐません。大王よ、私達のこの身が無常であることがおわかりになるでせう。この身が無常で、定まるものがなく、皆空であると見、肉體も元來空のものと云ふことが、本當にわかれば、自分とか、自分のものとか云ふ考からはなれることが出來るでせう。元來、我は空なもの、無常なもの、無にひとしきものと云ふことを悟れば、苦の生じやうはないのです。之を第一の諦

きるなき淸凉の處と云ふのです。この觀方を本當につかんだものを解放されたと云ふのです。そしてこの觀方の出來ないものを縛られたものと云ふのです。萬物は實がないのです。無常なもの、空なもの、あると云つて無きがもの、この無常さを本當に知ることで、我からはなれ、我に執着しなくなるのです。たゞまちがつた考から、我ありと見るのです。そして自分のものと云ふ考を起すのです。其處に執着が起り、生死が生じるのです。このまちがつた考を斷じて、なくなすことを解脫と云ふのです。』

王はこの時ふと思つた。

『我と云ふものがないなら、一體誰が果報をうけるのか。』

佛陀にその王の心がつたはつた。そこでおつしやつた。

『大王よ。あなたは今、我と云ふものがないのなら、誰が果報を受けるのかとお考へになりましたでせう。果報は衆生がうけるのです。幻が受けるのです。大王よ、あなたは自分の幸福をお考へになりますか、人民の幸福をお考へになりますか。自分の不幸をお考へになりますか、人民の不幸をお考へになりますか。どちらが王樣としてふさはしいことなのですか。我と云ふ考は我と境遇がぶつかつた時、その時の具合で空中に浮ぶ思なのです。それは石と石とぶつかつて火花が

出るやうなものです。大王よ。火花は石のものですか、誰のものですか。人間は生れる前に我はありますか。死んだのちに我はありますか。よく眠つた時に我はありますか。夜半に目がさめた時、心に何にも氣にかゝることがなく、身體に少しの故障もなく、心がゆつたりしてゐる時に、我がありますか。無心の時に我がありますか。我想が起る時は、人間が何かによつて、せまくされ、小さくされた時に、起る火花のやうな瞬間の思にすぎません。それは水中にうくあぶくのやうなものです。水はあぶくではありません。大王よ。あぶくは水でございますか。人が我と云ふ思にとらはれるのは、心と、境遇と、が出あつて、意識が生れた、その意識がとくべつな形であらはれた時にだけ起るものでございます。そしてそれから、いろ／＼の不幸や、苦しみが生れるのです。老病死も、我ある故に起るのです。怒、恨、愚癡、我ありと思ふ故に起るのです。それは石と石とぶつかつて火が出ない時もあり、出る時もあるやうなものです。ぶつからなければ火は出ませんが、だから石に火があるとは云へないのです。大王よ。この僅かなことを本當に知る爲に、私は六年の修行がいりました。我をはなれることは、大王よ。樂なことではないのです。しかしそれはまちがつた、顚倒した思なのです。我を忘れて人民のことを考へ、己を忘れて衆生のことを想ふ。己のことも衆生のことも忘れて無心になつて、心が宇宙に擴大された時、我等は涅

槃に入れた時なのです。大王よ。それこそ人間本來の姿なのです。其處に生死はありません。生れる前も、死んだあともないのでございます。心の内が淸く、塵も、垢もとゞめない時、大王よ。我が思がございますか。其處には我が思は姿は見せないのでございます。』

佛陀は云ひ終つた。聞いてゐた人々は、心が淸まり、法悅にひたされ、法眼淨を得た。王は深く喜ばれた。涙ぐむ人々もゐた。

三七　王、竹林精舍を造立す

この時頻毘沙羅王は、この深い心の喜を與へられたことに、何をもつて報いたらいゝかとお考へになつた。

そして頭に浮んだのは王舍城内の迦蘭陀竹林のことだつた。その園は淸淨で靜かだつた。佛陀にその園に精舍をつくつて寄附したら、さぞ喜ばれるだらうと思つた。

そして自分も時々、佛陀に逢ふことが出來、いゝ話を聞くことが出來るだらうと思つた。

それで王は云つた。

『世尊、あなたのお話は實に結構でした。おかげで私達の心も淸まり、淨い喜にひたることが出

來ました。六年前に世尊にお逢ひした時、今日の日をこんな風にお迎へ出來るとは思ひませんでした。誠に限りない喜でございます。六年前に正覺を得られたら、必ず來て說教して戴きたいと申しましたが、今日その宿願を滿していたゞくことが出來、こんなに嬉しいことはございません。それでもしおよろしかつたら、私の持つてゐる園の迦蘭陀竹林に精舍をたて、寄附いたしたく思ひますが、私の志を受けとつて戴けますか。』

佛陀は、『よろこんで戴きませう。』と答へた。

王は早速王舍城に歸り、いそいで竹林に精舍をつくることを御命じになつた。

精舍はまもなく出來上つた。王は早速佛陀とその弟子をおよびになり、御自身で精舍を案內された。

佛陀はよろこんでおつしやつた。

『布施はこれ貪欲を去り、忍辱は怒を去り、造善は愚癡に遠ざかる。この三つは、涅槃に入る門です。』

かく云つたあと、佛陀は佛陀らしくかうつけ加へておつしやつた。

『布施すべき財寶をもたないものが、布施する人を見て、心から隨喜するときは、その報は布施

したものと同じです。』

彼は布施出來る人だけを救ふのでは足りないことを知つてゐた。布施出來ないものがこの世には多いことを知つてゐた。だから彼は布施しないでも、布施した人を見て心からよろこぶ人を同じく祝福した。之なら誰でも出來るのだ。佛陀を愛することは誰でも出來るやうに。眞の宗教家は誰でも救ひたいのだ。金のある人だけを愛するのではない。眞の宗教家の佛陀が、他人の布施を喜ぶ人を讃美したのは、思ひやりの深い、佛陀らしい言葉だと思ふ。

佛陀は弟子達をつれて、この竹林精舍に住むことになつた。今まで住むべき家がなかつた千人あまりの人々は、こゝに佛陀を中心にして共同生活を營むことになつた。

僧院らしい生活は、かくて段々形をとるやうになつた。方々に道を說きに行つた弟子達も次第にこゝに歸つて來た。彼等は暫らくわかれてゐる内に、偉大な弟子達が出來、大勢の兄弟弟子が出來てゐるのに、驚き、喜んだ。

佛陀も彼等の歸つて來たのを喜ばれ、いろ〳〵別れてゐた間の旅の話をされた。

三八　舍利弗と目犍連の二大弟子加はる

王舍城に竹林の精舍を得たことは佛陀の評判を益々大きくした。それだけに嫉妬するものや、反感を持つものや、輕蔑を示すものが出來るのは自然なことである。しかし同時に、佛陀の弟子にしてくれと云ふ人も續出して來た。心の大きな佛陀はそれ等の人を、受け入れた。しかし佛陀の王舍城で得たもので、一番大きなものは、二人の弟子を得たことだ。それは舍利弗と、目犍連だつた。

舍利弗は本名は優波室沙と云ひ、目犍連は拘律陀と云つた。二人とも珍しく聰明な學問のある婆羅門で共に删闍耶の弟子であり話がよくあふので仲がよかつた。二人とも百人程の自分の弟子をもつてゐた。そして私かに師にあきたらなく自分達より賢いものはないやうに思つてゐた。それで佛陀の噂を聞いても大したものではないのだらうと思つてゐた。しかし内心は、何となく氣になつてはゐた。

或る日舍利弗が町を歩いてゐると、其處に一人の沙門がやつて來た。衣をつけ、鉢をもち食を乞うてゐた。

その沙門は五比丘の一人の阿捨婆闍だつた。舍利弗はその沙門を見ると、すぐその沙門の心が自分の心にふれるのを感じた。すると今迄になく心の内があかるくなつた。舍利弗はおどろいて

その比丘に問いた。
『あなたは誰のお弟子です。』
阿捨婆闍は正直に答へた。
『釋迦族から出られた佛陀の弟子です。』
『竹林精舍にゐられる？』
『さうです。』
『あなたの教はつた教を聞かして戴けますか。』
『喜んで。佛陀はすべてのものは因緣に依つて生じ、又因緣に依つて滅ぶとかれます……』
そこで二人は百年の知己のやうに氣らくになり、歩きながらいろ〳〵話をした。阿捨婆闍は、自分の知つてゐる佛陀のことを興奮しながら讃美した。二人は時間も所も忘れた。
殊に舍利弗は愉快になり、ありがたくなつた。そんな方が地上にいらつしたのか。
二人がわかれる時分には舍利弗は佛陀の教を殆んど全部心にとり入れた。今迄とけなかつた胸のむすぼれが、春の日を受けた氷のやうにとけた。
舍利弗は阿捨婆闍と別れると、いそいで目犍連の所に行つた。

目犍連は一目見て舍利弗の歡喜してゐることを知つた。
『何かそんなに嬉しいのだ。』
『大した人を知つた。我等の先生にするに足る人を知つた。』
『そんな人が地上にゐるのか。』
『佛陀だ。本當の佛陀だ。』
舍利弗を信じ切つてゐた目犍連はおどろいて云つた。
『それは本當か。』
『本當だ。』
語る舍利弗も、きく目犍連も目に淚をためて歡喜した。
『とう〳〵求める人に逢へるわけだね。』
『さうだ。』
その翌日、舍利弗と目犍連とは各〻自分の弟子百人をつれて竹林精舍に來、佛陀にお逢ひした。
佛陀も一目見て、お喜びになつた。
二人はいろ〳〵話をした。佛陀は自分の感じてゐることを、こんなに深く迄すなほに受け入れ

てくれる人間に始めて逢つた。

舍利弗、目犍連の喜は云ふ迄もなかつた。

三九　人々、佛陀の爲に出家する者多きを非難す

佛陀の感化は強く、竹林精舍に弟子にしてくれと云つてくるものは、相次いだ。人々は佛陀のために自分の子弟が出家するのを恐れた。又あまりに佛弟子がふえるのを恐れた。だから人々は佛陀をその點で非難し出した。

『沙門喬答摩は何の恨があつて、我等の家庭を亂し、我等の子孫を斷絶させようとするのか、喬答摩はこゝに來てまだまもないのに千人の人を出家させ、ついで刪闍耶の弟子五百人を奪つた。一體何處まで、親から子を奪ひ、妻から夫を奪へば滿足するのか。』

そして佛陀の弟子が通ると云つた。

『沙門の先生は何ものだ。南山をこえてこゝに何しに來た。すでに刪闍耶の諸々の弟子を奪つたが今度は誰を奪ふつもりだ。』

弟子達はそれを聞いて驚いて佛陀の前に來てそのことを報告し、人々が怒つてゐることを知ら

せた。
佛陀はそれを聞いても別に驚かなかつた。
『さう云ふ非難はながつゞきはしない。七日はつゞくだらうが、その後はそんなことを云ふ人はなくなるだらう。氣にしないがいゝ。しかし今度さう云ふ人があつたら、かう云つて答へるがいい。眞人の佛陀は、法の通りに人々を導く、法のまゝを行ふ佛陀に誰か從はないことが出來よう。』
比丘達は朝早く町で食を乞ひに行くと、相變らず人々は非難した。そこで弟子達は佛陀から云はれた通り、
『眞人の佛陀は、法の通りに人々を導く、法のまゝを行ふ佛陀に、誰か從はないことが出來よう。』
人々はその言葉を聞いて反省したのか、七日もたつと、誰も同じやうな非難をするものはゐなくなつた。人々は今更に佛陀の先見に感心した。

四〇　長爪梵志との問答

或る日佛陀は竹林精舍を出て靈鷲山に登り、豚幅洞に住んでゐた時、舍利弗の叔父の長爪梵志がやつて來た。彼は勝れた異教の仙人の一人だつたが、甥の舍利弗が感心して改宗したのを知つ

て、ためして見ようと思つたのだつた。
そして佛陀に逢ふと、『私は一切を認めません。』と云つた。
佛陀は微笑して云つた。
『あなたは認めないと云ふことを認めてゐるのではないか。』
さう云はれて長爪梵志は何にも云へなくなつた。その時、佛陀はつゞけて云はれた。
『一切を肯定する人と、一切を否定する人と、一部を肯定し、一部を否定するものとあるが、一切を肯定するものは、貪欲や執着にとらはれやすい。一切を否定するものは、貪欲や執着から遠ざかることが出來るが、それも程度で、あまりに否定に固執すると、それがこだはりになり、人生を輕んじ、他人の生命を輕んじるやうになり、他人の神經を無視したり、他人の執着を輕蔑したりして、一人自分を高くする恐があり、敵をつくりやすい。だから一切肯定も一切否定も捨てなければいけない。』
長爪梵志は佛陀の云ふ方が本當だと思つた。自分の考へ不足を耻ぢ自分も佛陀の弟子になつた。

四一　大迦葉來たる

王舍城から遠くない摩訶沙羅陀と云ふ村に一人の長者が住んでゐた。その子を迦葉と云つたが、この男も舍利弗、目犍連（普通目連と云はれ同じ名の弟子が多かつたので、舍利弗の友達の目連を佛陀は大目連と呼ばれた。迦葉もあとで同じ理由で大迦葉と呼ばれるやうになつた）にも負けない位の立派な男だつた。

佛陀が竹林精舍にゐることを聞いてから、佛陀の樣子を注意してゐた。そしていろ〳〵佛陀の話をきくに從つて迦葉も、段々心が動いた。そしてこの人こそ自分の求める佛陀だと思ふやうになつた。それで佛陀にどうしても逢つてお弟子になりたいと思つて家を出た。そして王舍城の近くの多子塔までゆくと、大樹が枝を交してゐる、晝なほ暗い處に一人の沙門が靜坐してゐるのに氣がついた。

大迦葉は一見してその人の普通の人間ではないことを知つた。この人が佛陀だと云ふことを直感した。佛陀以外にこんな圓滿な、おちついた、神々しい人間はあり得ないと思つた。見れば見る程、大迦葉は崇拜しないわけにはゆかなかつた。そして思はず合掌し、禮拜して云つた。

『世尊。わが大師、私はあなたの弟子です。』

佛陀は大迦葉の心を見通した。

『お前は眞に我が弟子である。私はお前の師だ。もし本當の正覺を得てないものがお前を弟子にしたら、その人の頭は破裂して七分されるだらう。お前は、人間の肉體がどんなに無常なものであるかを知つてゐるであらう。』

『はい。世尊知つてゐるつもりです。』

『それなら、私についてくるがいゝ。』

佛陀は靜かに立ち上つて、歸路につかれた。大迦葉は敬虔の念に打たれ涙ぐんであとに從つて歩いた。

佛陀は大迦葉を顧みて云つた。

『今日、お前がくるのを、私は知つてゐた。お前の心は私を求めてゐたから。』

大迦葉は、佛陀の前に跪きたかつたが、たゞ云つた。

『はい。』

その眞心は又佛陀の眞心に通じるのだつた。

四二　名醫耆婆の願

幾多の小川や、相當に大きな川は、佛陀と云ふ大河に流れ込んだ。大河はその爲に水量を增したが、少しもあふれさゝず、靜かにとり入れて流れてゆく、この河はどの位大きいかわからない。
しかし佛陀の肉體も不死身ではなかつた。或る日、病氣にかゝられた。しかし佛陀のことだから靜かに靜養されて別に醫者を呼ばうとはされなかつたが、王樣はそれをお知りになると侍醫の耆婆を遣はして病氣を見舞はれた。耆婆も佛陀を心から愛し尊敬してゐた。それで喜んで病氣の見舞にゆき、身體をよくみ、藥を與へてなほした。しかしその時から耆婆は氣になつてゐることがあつた。それは佛陀を始め、佛弟子が不衞生な着物を着たり、食事をしたりすることだ。しかし彼はそれを注意する勇氣はなかつた。
實際佛陀や、その弟子達は着物は墓地や、糞塚にすててある襤褸をまとつてゐた。風雨や日光にさらされて幾分消毒はされてゐるだらうが、しかし中にはまだ捨てられてまもないものを平氣で着てゐるものがあり、どんな病人が着てゐたかわからないのをすまして着てゐるものもあつた。その爲に病人になつた者も、少くはなかつた。何しろ千何百人の人が一緒に住んでゐるのだから病人は絕えなかつた。殊に傳染性のものは危險だつた。醫者の立場から見て耆婆の心配するのは無理がなかつた。

或る時耆婆は隣國の王の病氣を、たのまれて見にゆき、それをなほして御禮として、すばらしく立派な上等な着物をもらつた。

耆婆はそれを見ると思つた『こんな着物を着るのに適してゐる人は佛陀か、王樣位のものだ。王樣はいくらでも持つてゐらつしやる。一つ佛陀に捧げよう。』

そこで耆婆は佛陀に逢ひに來て云つた。

『世尊よ。私は一つお願がございます。』

『なんだ。』

『私に一つ恩典をお與へ下さい。』

『耆婆よ。如來はその理由を知らない内は、恩典は與へ得ない。なんだ。』

『たうてい御聞き入れ下さらないとは思ひますが、是非おたのみしたいのです。』

『なんだ。云ふだけ云つて見るがいゝ。』

『世尊、この地上で最も尊い身であられる世尊、私は前から一つのことが氣になつて仕方がありませんでした。それは世尊始め皆樣が埃溜や、墓地から着物をひろつて來て着られることです。醫者の立場から云ふと之は衞生のために甚だよくないのです。いろ／＼の病氣の原因になるので

す。そこでお願ひしたいのは、この着物ですが、之は私が隣國の王より戴いたもので、比類のない程上等な着物なのですが、私が着るのは勿體ないので、よかつたら世尊に着ていたゞきたいと思ふのです。そして比丘達にも普通の新しい穢のない着物を着るのを許して戴きたいのです。』

ものごとにこだはらない佛陀は、耆婆の厚意を嬉しく思はれ、その申し出を受けられ、そして比丘達にかう云ふことを傳へさした。

『襤褸を好むものは、今迄通りでもいゝが、日光でよく消毒をすること、それから普通の着物を着ることを好むものは普通の着物を着てもよろしい。』

それを聞いて王舍城の人達は着物を比丘達に送つた。その數は數千と云ふ數だつた。

四三　夜中須達長者、佛陀に逢ふ

弟子は益々增した。それと同時に、佛陀達を供養しようと思ふ者も、あらはれて來た。

王舍城のある長者が佛陀達を請じて、明日供養しようと思つてその用意にいそがしがつてゐる時、舍衞國の須達長者が偶然その家の客になつた。家のなかがいそがしいので、驚いて聞いた。

『王樣でもいらつしやるのですか。それともどなたか結婚でもなさるのですか。』

『いゝえ。』主人は云つた。『實は明日、佛陀と、そのお弟子さん達をお招きしたのです。今佛陀は竹林精舍を出られてこのそばの寒林に來てゐられるので、それをお迎へしようと思つてゐるのです。』

須達長者は、始めて佛陀のことを聞いた。そしてその夜、いくら眠らうと思つても眠れなかつた。佛陀のことが頭について離れないのだ。そこでとう〳〵起きて寒林へ佛陀にお逢ひしに出かけることにした。

自分でも不思議な位に落ちつかないのだ。

逢ひたいと思ふと一圖に逢ひたいのだ。それでそつと誰にも氣がつかれないやうに外に出た。月のいゝ夜だつた。一人寒林に歩いてゆく、萬物は眠つてゐるやうだつた。須達はあんまり夜道を一人で歩いたことがないので、何だか怖くなつたが、しかし途中で引きかへす氣もしないので、怖々歩いて行つた。佛陀も眠つてゐられるだらうと思つたが、それでも皆の樣子だけでも見たいと思つた。しかし寒林の近くにゆくと、一人の比丘が寒林の外を歩いて何か考へてゐるやうだつた。須達は近づいて一目見るとそれが佛陀だと云ふことを直覺した。そこで合掌して聞いた。

『あなたは世尊でいらつしやいますか。』

『さうです。』

須達はすつかり嬉しくなつた。第一思はない處で佛陀に逢へたから、そして思つたよりもなほ美しい佛陀の人格にふれることが出來たから。

しかし佛陀も須達長者の純粹な心を愛した。

『こつちへ來るがいゝ。』佛陀はさきに立つて、須達を寒林の內につれて行つた。千人あまりの弟子達は旣に寢てゐた。木のかげに地面の上に何か敷いて寢てゐる者もあつた。須達はそれ等の人を見て、強い感じを受けたが、佛陀のあとに從つた。

須達は云つた。

『よく皆さんは眠つてゐらつしやいますね。』

『つかれてゐるから、そして心に愛着がなく、煩悶がないから、心意を調伏することが出來れば心は靜寂になり、安眠したい時安眠出來るものです。』

須達はそれからいろ〳〵のことを佛陀から聞くことを得て、彼はすつかり喜んだ。

佛陀も須達の求める心に逢ふと、よろこんで何でも饒舌りたくなつた。

須達は云つた。

『世尊よ。私は今から三寶に歸依し、五戒を守り、殺生をしないつもりです。』
『それは結構です。あなたの名は何と云ふのですか。』
『私は少し許りの資産をもつてゐます。貧しいものや孤獨の方達にいくらか食物や、品物の施をするので國の人は私のことを給孤獨と申してゐます。』
『國はどちらです。』
『北方の舍衞です。もし佛陀や僧侶の方が私の國にいらつしやれば、衣服や、飮食、臥具その他、藥等、一切を施さして戴きます。』
『北方へも行きたいと思つてゐるのですが、人數が多いので精舍がないと安住出來ないのです。』
『それでは私にその精舍をつくらして下さい。そのかはり必ず來て戴きたいのです。』
『それは必ずゆきます。ゆきたいと前から思つてゐたのです。』
須達長者は喜んだ。
『今夜ほど、嬉しい時はございませんでした。』
長者はさう云つて一人で歸つていつた。

四四　須達長者、祇園精舍を建立

須達長者はその後、國に還る前にもう一度寒林に詣で、そして家に歸つた。家に歸るとすぐ精舍を何處に建てたらいゝか、それ許りが氣になり舍衞城の內外をのこりなく調べた。その結果、須達は一處、實にいゝ處を見つけた。しかしそれは祇陀太子の園林だつた。

それでも長者は思ひ切らなかつた。

其處は美しく樹々が茂り澄みきつた池があり、淸い水が流れ、毒虫の心配もないと云ふ理想的な處だつた。祇陀太子自慢の園林だつた。とてもおたのみしても讓つてもらへまいと云ふことだつた。

事實須達長者が、それを讓つてもらはうとした時、そこ許りは讓ることは出來ないと云ふ返辭だつた。しかし須達長者は思ひ切れなかつた。

あまりに熱心に求めるので、太子も、つひに斷り切れないので、法外の値段を云つたら逃げ出すと思つて、法外の値を要求した。しかし須達は驚かなかつた。そしてとう／＼その園林を買つてしまつた。祇陀太子はそれが佛陀を招く精舍になることを知つて、門を自分で寄附された。

須達は喜んで工事を急ぎ、佛陀の處に誰かお弟子を送つて、工事の相談にのつてほしいと使を出した。それで舍利弗がやつて來た。

須達があまりに佛陀のことで夢中になり、金のことを顧みずに、出鱈目に寄附するので、外道の人々は喜ばなかつた。そして須達に、そんな似非者に金を出す馬鹿があるかと云つた。しかし須達は聞き入れなかつた。

それでとう〳〵佛徒と論爭をして、須達に、佛陀の敎の下らないことを示して、目をさましてやりたいと思つた。

そして須達に、佛徒と議論したいことを申し出た。須達は驚いて舍利弗に相談した。舍利弗はそれはいゝ機會だから、議論を戰はしませうと云つた。

そこで所と時間がきめられて舍利弗とその外道の一人と議論することになつた。

一たい舍利弗と云ふ男は、佛徒の内で最大の智慧者であつた許りでなく、學問では佛陀にも優つてゐた男で、その兩親とも、學問もあり辯論にも優れてゐた。父も祖父もその方では有名で、一、二を爭ふ學者であり、論客であつた。その血をうけ、學問をし、外道の方にも精通し、そして最後に佛陀によつて正覺を得た男なのだ。

外道と議論するのにこの位適當な男はない。

外道はものの美事にやられた。しかしこの外道もわかつた男と見えて、すぐ佛陀の弟子になつた。須達は自分の鼻が高くなつたやうな氣がして、よろこんだ。

もう誰も反對するものはなかつた。須達と舍利弗は相談をし、十六の殿堂と、六十の小堂が建てられた。

之は祇園精舍と名づけられた。

佛陀はその精舍が出來た知らせを聞くと、機が熟したことを知り、王舍城をたち、途々教化すべきものを敎化して舍衛國に向つた。

とう〳〵祇園精舍に入られた。

須達も喜び、入つた人達も喜んだ。

佛陀の名は舍衛國のすみ〴〵まで轟いた。

四五　波斯匿王、佛陀を訪ふ

舍衛國の王樣、波斯匿王も佛陀の噂を聞かれ、一日臣下をつれてわざ〳〵祇園精舍に見えた。

王は佛陀に逢つてから聞かれた。
『齢とる迄修行してゐてさへ中々悟を得られないものなのに、年若くつて、しかも婆羅門でもない、あなたがどうして悟ることが出來たのです。』
そこで佛陀は答へた。
『大王よ。多くの人は小さいもの、若いものを馬鹿にするくせがありますが、馬鹿に出來ないものが四つあります。一には王子、二には小龍、三には小さい火、四には小さい僧侶、この四つです。王子は小さくとも生長したあと國の大王になります。又小さくも國王になられることもあります。小龍はいつか大龍になりますし、又大龍が小龍に隱れてゐることもあります。火は小さいからと云つて馬鹿には出來ません。どんな小さい火でも山林も、都市も燒きつくす力をもつてをります。僧は心淸淨でよく道を守りさへすれば、貴賤老若の別なく誰でも無上の悟を得ることが出來ます。もし悟をひらき、眞理を得て、人々を導くに足るものを毀り惡口をすれば、その罪は重く、あとで謝つても消すことは出來ません。』
王はそれを聞くと、何となく恐しくなつた。誰も、自分を恐れて直言するものがないのを常に經驗してゐた王には、この佛陀の言葉は强く響いた。殊に佛陀の精神力は相手を壓倒する力を持

つてゐる。

王は、そこで今度は丁寧に王として、どうふるまつたらいゝのか、教へられたら教へてほしいと云つた。

眞理より他に恐を知らぬものは、靜かに波斯匿王をつかまへて說き出した。

『たゞ一人の子のやうに人民をお愛しなさい。壓制してはいけないのは云ふ迄もありません。どんな小さい生命も大事にしなければなりません。自制して自分の悪徳に克ち、不正な教はすてて直しい道をお歩きなさい。他人の不幸の上に自分の幸福を築いてはいけません。苦しむものは助け、惱めるものは慰め、病めるものは救ふやうになさい。王の位置を特別なものと思はず、阿諛者の言に動かされてはだめです。わざ／＼苦行する必要はありませんが、心を樂さしたり、あまえさしたりせず、正覺を得るやう、靜かな心が必要です。

樹が烈しく燃えてゐる處に鳥は集ることも巣をつくることも出來ません。情欲の燃ゆる處に眞理は住むことは出來ないものです。

ですからいくら賢いものでも情欲に燃える時は、冷靜な判斷は出來ず、一國の利害を考へることは出來ず、自分の生命をまちがひなく生かすことは出來ません。

悟に入らうと思ふものは、正しく見、正しく思ひ、正しく語り、正しく行ひ、正しく生き、正しく進み、正しく念じ、正しく落ちつくことが必要なのはその爲です。

世には光より暗にいたる道と、暗より光にゆく道があります。大王よ、賢きものは暗より光にゆき、遂に燦爛たる光明の世界に入り、自分の生命を救ひ、人々の生命を救ふのです。人生は無常で、苦に富むものです。幸福を外部に求めず、何ものにも動かされない心の靜寂、涅槃に入ることを本願にし、人民の幸福をさまたげず、それを動かないたしかな基礎に築いておやりなさい。』

王は心の內の淨まることを覺え、心歡喜した。

四六　淨飯王、佛陀に使を送る

佛陀か舍衛國に來、祇園精舍に弟子達と住んでゐることは迦毘羅城にも傳はつて來てゐる。淨飯王もそれを知られたが、しかし我が子に逢ふ決心はまだ持たれなかつた。うつかり使を出して、反つて斷られては面白くない。我が子ではあるが、自分の考を持つてゐて、他の人の云ふことなぞは聞く人間ではない。歸るべき時が來れば歸つてくるだらう。王は逢ひたく思はれれば思はれる程、反つて辛抱された。その辛抱の修行はつまれてゐるわけだ。

ところがある日、波斯匿王から御使があつて、手紙をもつて來た。淨飯王はその手紙を御覽になると、自分の子が立派に佛陀になつてゐて、波斯匿王からも信賴をうけ、舍衞國での佛陀の感化のすばらしいことがわかつた。さうなると、ます〳〵逢ひたくなつた。殊に最後に佛陀もその内故鄕に歸るつもりでゐるらしいことが書かれてゐた時、とう〳〵辛抱が出來なくなつた。

その時大臣の優陀夷が王の處に何か用があつてやつて來た、そして王樣が何か考へ事をしてゐられるのを見て云つた。

『王樣、何か御心配なことがおありなのですか。』

『心配なことではない。反つて大いに目出たいことなのだが、少し困つてゐる。』

『何を困つてゐられるのです。』

『今、波斯匿大王から御使があつて、手紙を持つて來た。それを見ると、近日悉達多が歸つて來るさうなのだ。』

『それはお目出たい事ではありませんか。何を困つてゐらつしやるのです。』

『迎へにやるものがゐないで困つてゐる。うつかりした者をやると、すぐ息子に感化されて、坊主にされてしまふから。』

『その御心配なら、御無用に願ひます。私でよろしうございますなら、私が參つてもよろしうございます。』
『お前でもあてにならない。』
『大丈夫でございます。』
『お前なら大丈夫とは思ふが、不思議な力をもつてゐるから。』
『私が坊主になるやうなことがございましたら天地がひつくりかへります。』
『それなら行つてもらはう。』
王様はよろこんで手紙をかいた。
優陀夷は、王様の手紙をもつて出かけた。王様はあとで摩訶波闍波提に云つた。
『見てろ、優陀夷も、今に坊主になつて歸つてくるから。』
『まさか。』
王様は笑つた。

四七　優陀夷、佛陀に逢ふ

優陀夷は佛陀に逢つて驚いた。十年あまり逢はない内に、佛陀の相好はすつかりかはつてゐた。身には昔とはまるでちがつた簡單な衣をつけてゐた。そのくせ何となく圓滿になり、落ちつき、昔のやうに神經質ではなくなつてゐた。一段も、二段も威嚴が增してゐた。優陀夷は思はず印度のその時分の最敬禮をした。

佛陀は靜かに手紙を見て、云つた。

『父上は御丈夫か。』

『はい。御丈夫でゐられます。そして世尊に一日も早く御逢ひになりたがつてゐられます。』

『さうか。いづれお目にかゝりたいと思つてゐた。近い内にお目にかゝりにゆくことにしよう。』

『ありがたうございます。』

『つかれたらうから、ゆつくり休むがいゝ。』

佛陀はさう云つて優陀夷を自分で案内され方々をお見せになつた。

優陀夷は弟子達が皆、平等に、落ちついた生活をしてゐるのに感心し、こんな生活が出來たら、そして佛陀のおそばにゐられたらさぞいゝだらうといつのまにか、思ふやうになつた。佛陀は、それを知つて云つた。

『お前も、この生活を樂しく思ふか。』
『思ひます。』
『出家する氣はないか。』
『お許しさへ願へれば、沙門になりたうございます。』
優陀夷は王樣との話なぞはまるで忘れてゐるやうだつた。
そこで佛陀は、一人の弟子を呼んで、優陀夷が出家したがつてゐることを話した。
優陀夷は夢を見てゐるやうな氣で、その男に從ひ、そして頭をすり落し、衣を着せられた。そしてすつかり沙門の姿になつて佛陀の前に歸つて來た。
『よく似あふ。』と佛陀に云はれた時、優陀夷は思はず笑つたが、その時、『しまつた。』と思つた。自分もとう〱捕虜になつてしまつた、もう歸れない。
しかし佛陀は云つた。
『歸りたければ休んだ上歸るがいゝ。そして父上に七日後にはお目にかゝれるでせうと申し上げてくれ。』
『はい。』

優陀夷は助かつたと思つたが、しかしいくらか氣まりはわるかつた。だが佛陀の弟子になれたことは得意でもあり、嬉しくもあつた。

彼は歸つて王様にあつた時、王様は一目見て笑はれておつしやつた。

『矢張りやられたな。』

『はい。あの方に逢ふ者は、氣違か、馬鹿でない限り坊主にされます。』

『使ひの返事はどうだつた。』

『七日たつ内にこちらにいらつしやると、昨日おつしやいました。』

『それなら六日目に逢へるわけだな。』

『さやうでございます。しかし御用心なさらないと、迦毘羅城にも、澤山の坊主が出來ますことでせう。』

王様はそれにはお答へにならず、すぐ城中に、太子だつた佛陀があと六日目に歸つてくると云ふことを、喜んで御知らせになつた。

佛陀が來たら迦毘羅城内にどんなことが起るか、それは王様にはわからなかつた。たゞ久しぶりに我が子に逢へることは嬉しくつて仕方がなかつたのだ。

優陀夷はそれを見ると涙が出た。
王樣はあとで、優陀夷にいろ〳〵と佛陀や、佛陀の弟子のことを聞かれた。

四八　佛陀、迦毘羅城に歸る

豫言者は故鄕に貴ばれずと云ふ言葉があるが、佛陀の場合は正反對と云ふべきだつた。
彼は錦を着て故鄕に歸つたのではなかつた、襤褸を着て故鄕に歸つて來た。しかしそれは云ふ迄もなく見かけだけの話だ。
彼は煩悶の結果家をとび出し、太子の位を捨てた。死に勝る苦しみを心に抱いて出た。しかし今は佛陀として、本願を達した男、正覺を得た男として歸つて來た。
乞食坊主を大勢つれて歸つて來た。見かけは美しくなかつた。見る人々の內には顏を背け、眉に八の字をよせた人もあつた。
だが心ある人は有難がり、涙をながして、一行を迎へた。殊に太子の姿を見たものは思はず合掌した。
佛陀はすぐには宮殿に歸らずに、迦毘羅城外の尼拘陀樹林に入つて、其處に一先づ落ちつき、

それから迦毘羅城に入つて戸毎に托鉢をされた。人々はその乞食坊主の親王が佛陀であることを知るとおどろいた。そして敬虔な念をもち、或る者は最敬禮をし、供養し奉つた。佛陀はどんな貧しい家の前でも、金のある家の前でも、ひとしく立つた。そして供養するものも、しないものにも、敎を求めるものがあれば敎へ、だまつてゐる者があれば、丁寧に禮拜して其處を去つた。

その態度の立派さには、さすがに心ない人も感心した。この噂はつたはらないわけはない。

そしてそのことが淨飯王の耳に入つた。

淨飯王はおどろいて家來をつれてわが子のゐる處をさがして、逢ひに行かれた。

道で二つの行列は出逢つた。

一つは王樣の行列だ。華美を極め、威嚴に滿ちてゐた。

他は乞食坊主の行列だ。いろ〳〵の襤褸着物を着た、人相も日にやけ、あまり上品ではない。靜かではあるが、見たところ甚だよくない。

二つの行列がぶつかると、淨飯王はあわてて駕からおりて、喜んでわが子、佛陀をお迎へになつた。だが王は失望されないわけにはゆかなかつた。廣げた兩手の間にわが子は飛び込んで來てくれると思つたのに、飛び込んでは來なかつた。動かざること山の如く、じつと立つてゐられた。

『わが子よ。なんと云つて呼んでいゝか知らないが、なぜ私の處にすぐ歸つて來てはくれないのか。私はどんなに待つてゐたか。それに皆の食事位は私の處で出來ないわけはないぢやないか。何か不平でもあつて、こんなあてつけなことをしたのか。』

『父上よ。私はもう昔の悉達多ではございません。私達は私達の先祖のしきたりにならふより他はないのです。』

『お前の先祖に乞食はなかつたはずだ。』

『私の申してゐるのは出家したものの、先祖についてで、在家の時の先祖のことを申してゐるのではありません。』

『しかし、そんなことを云はずに、私の處に來ておくれ。』

『はい。お招き下されば參ります。』

佛陀は淨飯王と並んで話をしながら歩かれた。王の駕は主なくあとに從つた。宮廷の人と、沙門とは、まじりながら珍妙な行列をして從つていつた。

王樣の心は段々明るくなり、嬉しくなつた。わが子の顏を時々のぞきこまれた。そして、『わが子よ。』と呼びたい誘惑を時々感じた。

だがわが子と呼ぶにはあまりに、佛陀の顔は嚴肅で近づきがたく見えた。
佛陀も十年ぶりに父に逢つて嬉しくないわけはない。しかしそれ以上、自分の仕事の大きさを知り、甘い、甘つたれるやうな氣には、とてもなれなかつた。
老いたる王樣は、それがもの足りなかつた。だが逢へた喜、佛陀になつてとう／＼歸つて來られた喜はかくすことは出來なかつた。
『隨分苦しんだらうね。』
『正覺を得ますまでは。しかし宮殿にをりました時よりは、樂でした。心がいく分落ちつきましたから。毒蛇のやうな煩悶と同居しないでもすみましたから。』
『あとでくはしくいろ／＼の話をしておくれ。』
『畏りました。』
宮殿では大さわぎした。いよ／＼佛陀が歸つて來られる、お目にかゝれる。
耶輸陀羅妃の心の内はどんなだつたらう。

四九　耶輸陀羅妃

佛陀がお歸りになると云ふので宮殿の內では人々が興奮し切つてゐた。そして今更に家出された時のことが思ひ出された。

しかし佛陀自身は別に興奮してゐなかつた。いろ〳〵の人に逢ふことも、耶輸陀羅妃や羅睺羅に逢ふことも、別に心を動かす程のこととは思はなかつた。心は落ちつき切つてゐた。

しかし宮殿ではまるで樣子がちがつた、一人々々いろ〳〵の考が浮んだ。

摩訶波闍波提はわりに落ちついてゐた。しかし好奇心は隨分強かつた。どんなに變られたらう。お逢ひした時どんな態度をとつたらいゝだらう、そんなことが頭に浮んでゐた。なつかしい氣もしてはゐたが。

義母弟で今は太子になり、近頃美しい妃をお迎へになつた難陀は、畏敬する兄に逢ふのが、樂しみでもあり、怖くもあつた。若い純な心から佛陀を尊敬し、いろ〳〵お話を聞きたいとは思つてゐたが、自分の生活が、生活で非難されさうな氣はしてゐた。それに佛陀がゐなくなつてから、羅睺羅ではなく自分が太子になつてすましてゐるのも、何となく氣がとがめてゐた。逢ひたい氣と、何となく逢ふのを避けたい氣がしてゐた。

しかし何と云つても、一番無關心でゐられないのは耶輸陀羅妃だつた。今はすつかりあきらめ、

羅睺羅の生長を樂しみにしてゐた耶輸陀羅妃も今日は萬感交ゝ起つた。なつかしさがこみ上げてくると共に、腹立たしい氣もしないことはなかつた。逢ひたい氣と、すねて見たい氣があつた。逢ふ迄はなんだか落ちつかなかつた。どうせあつても親しく聲もかけて戴けないことは百も承知でも、もしかしたら愛の囁も出來るかも知れないと云ふやうな空想も頭に浮んでは消えた。あきらめて遠くからでも一目見るやうな心がまへをしてゐた。

羅睺羅は母から何にも聞かされてはゐなかつた。『お父さん。』とお呼びしていゝのか、どうかわからないので、はつきりしたことは知らなかつた。しかし何かことがあることは知つてゐた。そして子供の敏感さで、母には内證だが、父が來るのではないかと思つたりしてゐた。誰かが饒舌つたのかも知れない。しかしそのことを母に聞いても、母は默つて不機嫌な顏をするので、はつきりとは聞くことが出來なかつた。

他の家來や、侍女達は佛陀にお目にかゝれるのが、たゞ嬉しく、見たい氣一杯だつた。その暢氣な態度を、耶輸陀羅妃は羨ましかつた。やゝもすると淚が出てくるのだつた。之がたゞの長い御旅行から無事にお歸りになつたのだつたら、自分が眞つ先に喜べるのになんだか、日陰のもののやうに皆に同情され、威張つて喜んでいゝのかどうかわからないのが、淋しく、やゝもすると

涙ぐんだ。

『いよ〳〵いらつしやいました。』

侍女は知らせに來た。人々はお迎へに走つていつた。耶輸陀羅妃はどうしていゝかわからずに一度立ち上つて行かうとしたが、立ちどまつて柱によつて泣き出してしまつた。

羅睺羅の、

『お母さま、お母さま。』

と云ふ聲が聞えると、涙をそつとふいた。羅睺羅は元氣に入つて來て云つた。

『いらつしてよ。お祖母さんがお母さんにいらつしやいて。』

何も知らない羅睺羅は耶輸陀羅妃の手をぐん〳〵引いた。

五〇　佛陀と耶輸陀羅妃の對面

佛陀は父や義母や弟達と靜かに廣間に入られた。そして人々に挨拶された。その時耶輸陀羅妃が羅睺羅に手をひかれて入つて來た。

そして佛陀と別れてから始めて顏をあはせた。その間に十一、二年の年はたつてゐた。佛陀は

六年で正覺を得たが、すぐには歸つて來なかつた。十年あまりは夢のやうにすぎた。

その夢は耶輸陀羅妃にとつてはつらい夢だつたが、しかし今からやつて顔をあはせるとその夢はすぎたやうだ。目がさめたやうだ。

人々は二人の對面の劇的の場面に、身がひきしまるやうに見えた。

莊嚴な落ちついた佛陀の顔にも、瞬間、あはれみの情がすぎた。美しく淋しい耶輸陀羅妃の愛と恨をこめた瞬間の表情は凄い程、美しかつたが、その表情も瞬間にすぎた。

二人は話さない内に、心と心と融合した。耶輸陀羅妃は不思議に心の重荷がおりたと同時に心の張もなくなりかけた。そして思はず羅睺羅の手を固く握つた。その手はふるへた。羅睺羅は驚いて母の顔を見た。

だがこの時、耶輸陀羅妃は、佛陀の顔をまた見た。そして其處に落ちつき切つた大きな心にふれた。やつと耶輸陀羅妃は氣をとりなほして、落ちつくことが出來た。

この時佛陀はつか〳〵と二人の處に來た。耶輸陀羅妃は思はず跪いた。

『苦勞をかけたが、よろこんでくれ。私は本願を達することが出來た。』

そして羅睺羅を見て、

『大きくなつたね。』

とおつしやつた。しかしそこに少しも感情的なものは見られなかつた。落ちついて、又元の處に戻られた。

『何か皆に爲になる話をしてやつてくれ。』

淨飯王はさうおつしやつた。

五一　佛陀、父王に說法す

佛陀は云つた。

『人生は無常なものだ。人間はいつ死ぬものかわからない。人間には老病死はさけられないもので、その他にどんな恐しいことが起るか知れない。私はさう思ふとどうにもならなかつた。じつとしてゐられなかつた。それで私はとう〳〵出家した。そして皆樣に隨分迷惑を與へたかと思ふが、しかし死なない人は別だ。死ぬ人は、私が出家したことを喜んでくれるであらう。私は遂に死を恐れない道を見出した。私はこの上なく平和な、この上なく落ちついた、喜に滿ちた世界を知つた。すべての苦を斷滅することを知つた。私は今襤褸を着、時に木の下で、家根のない所

に寢、とても君達の食へないものを食ふが、しかし私はそれで心に落ちつきを得てゐる。こゝにゐた時は、私は贅澤な生活をし、皆に大事にされたが、私の心はいつも苦しみ、煩悶は私を死以上に苦しめた。その時のことを思ふと、今はまるでちがつた世界に入ることが出來た。私は涅槃の内に生きることを知つた。人生は無常であり、迷であり、苦である。だがそれは斷滅することが出來る。正道を行くことで彼岸に達することが出來る。

恐るべきは我の世界に執着し、貪慾、瞋恚、愚癡の泥土にはまり込んで、正しい道を知らないことだ。……』

佛陀は說いた、人々は靜かに聞いてゐた。淨飯王は何かを恐れられたやうに、佛陀に云つた。

『食事の用意が出來た。話は又の時にしてもらはう。』

佛陀の二の舞が出來るのを王樣は恐れられたのだつた。

五二　王の心配と諸王子の出家

實際、王樣の恐れた事は無理ではなかつた。佛陀のまいた種は人々の心の内に芽を出しすぎた。王樣の近所の人迄、ついで出家をするやうになつた。王樣は喜んでいゝのか、悲しんでいゝの

かわからなかつた。しかも王樣は佛陀に反對することは出來なかつた。わが子ながら、矢張り本當の佛陀として信仰したい氣になられ、悲しみながらも自慢したいやうな、嬉しいやうな氣もなされるのだつた。

佛陀が歸つて來たので第一に動搖したのは、佛陀の從弟達だつた。淨飯王には三人の弟があつた。その弟達に二、三人づつ男の子があつた。その內でも七人仲のいゝ連中がゐた。それが第一に動いたのだ。

この七人組はよく逢つて、心もよく一致してゐた。その七人は、阿那律、跋提、阿難、難提、提婆、婆娑、金毘羅、と云つた。

阿那律が第一に佛陀の敎に感心した。そして跋提にその話をした。跋提はそれにすぐ共鳴した。ついで他の人々も贊成し、佛陀熱は益々高まる一方だつた。

その結果、遂に七人はそろつて出家しようと云ふことになつた。

そして七人は約束して、家をうまくごまかして、床屋の優婆離をよび出し、人に知れない所で髮を剃らした。

優婆離は跋提にひいきにされてゐた。それで跋提の髮を剃る時、つい淚をこぼした。

目の早い阿那律はそれをすぐ見つけて云つた。

『なぜなくのだ。』

『私は跋提王樣にいつもごひいきになつてゐましたが、御出家遊ばすと之からもう、ごひいきにして戴くことが出來ないことを考へたら、つい情ない氣がいたしました。』

『お前は心配することはない。安心して生きてゆけるやうにしてやる。』

跋提はさう云つて、頭を剃つてもらふと、一枚の毛氈を敷かして皆に云つた。

『優婆離は小さい時から私に仕へてくれてゐた、私がゐなくなると困ると思ふから、君達の上着と裝飾具とをとつてこの上においてほしい。私達は出家する身だ。そんなものはもう持つてゐても仕方がないのだから。』

皆、贊成して上衣をとり、裝飾品をとつてその上にのせ、前から用意してあつた僧衣と着かへた。皆坊主になり僧衣をつけた姿を見て笑ひあつた。

『よく似合ふ。』

なぞとからかつた。

七人はいくらか哀愁を感じはしたが、元氣だつた。そして優婆離にわかれをつげて出かけてい

つた。

五三　優婆離の出家と諸王子

あとに殘つた優婆離はなんだか悲しかつた。そして一寸の間泣いてゐた。しかしその時、彼はふと考へた。

『あんな立派な御身分の方達が、出家なさるのだ。』

私も出來たら出家したいものだ。

彼はさう思つて七人から戴いたものをもつて外へ出た、その時、彼は一人の立派な顏をしてゐる佛陀の弟子に逢つた。それは舍利弗だつた。

思はず、彼は手にしたものを舍利弗に捧げて云つた。

『私のやうな身分のわるいものでも佛陀のお弟子になれるでせうか。』

舍利弗は云つた。

『佛陀の法では身分のよしあしや智慧の有る無しは問題ではないのです。たゞ佛陀の教に從つて戒を守り、正覺を得ることが第一です。もし弟子になりたいなら之から私と一緒に世尊の所にい

らつしやい。世尊はきつと喜んでお許しになるでせう。』
優婆離は夢中で舍利弗のあとに從つた。
佛陀は優婆離をよろこんで迎へ、そしてお弟子にした。
かの七人の王子達も、弟子になることを許されたが、しかしそれまでに七日の修行が必要だつた。七日修行してから、自分達の兄弟子に紹介された。王子達は昔の身分を忘れたやうに弟弟子の禮をとつて挨拶をしてゐた。
處が最後に彼等は兄弟子として意外な人に出逢つた。それは優婆離だつた。優婆離のことは彼等にかくすやうに佛陀から注意されてゐた。
彼等はどう挨拶していゝかわからなかつた。それで暫らく躊躇するやうに見えた。
佛陀はそれを見ると云つた。
『なぜ躊躇してゐるのか。出家の法は我慢の心を降伏することだ。私が優婆離に先に出家するのを許したのはそのためだ。お前達は優婆離を頂禮しなければいけない。』
王子達は佛陀にさう云はれると優婆離の前に頭をさげた。
王子達はそれで決心が強まるのを覺えた。優婆離は反つて氣まりわるさうだつたが、佛陀に云

はれてゐるので、兄弟子の顔をしてゐた。その禮拜がすむと佛陀は云つた。

『佛法は海のやうなもので、百川を入れても、つまり四つの階級が入つても、皆同じく一味になるのだ。又戒の前後で貴賤があるわけではない。四大（風、火、地、水）があつまつて人間は出來たので、中身は空寂なもので、元來我と云ふものはないのだ。だから聖の法を思つて、驕慢な心を起してはいけない。又ひがみを起してもいけない。皆つまり一味に歸するのだ。』

王子達は改めて佛陀を禮拜した。

五四　殘れる人達

七人の王子達が出家して、佛陀の弟子になつたと云ふ噂はさすがに人々を驚かした。淨飯王も驚かれた。

ところがもつと恐しいことが出來た。それは太子の難陀までが、兄の佛陀の弟子になつたことだ。しかしそれ許りではない羅睺羅まで、いつのまにか佛陀の處に引き入れられた。

老いたる父は、もうどうすることも出來なかつた。自分まで、出家したいやうな氣になつた。しかしそれだけの決心はつかなかつた。急に年をとられた。摩訶波闍波提もすつかり年をとられ、

元氣がなくなつた。

しかしそれで佛陀を恨む氣にはなれなかつた。摩訶波闍波提は耶輸陀羅妃と逢ふと、二人が男でないことを恨んだ。もし男だつたら自分達も喜んで出家するのだがと話しあつた。

五五　跋提の樂しみ

七人の王子の一人の跋提は、七人の王子の内でも、特に尊敬される位置にゐた。そしてゆくゆくは王位につくべき人だつた。そして出家する前に、阿那律に、もう少しこの世で樂しんでから出家しようと云つたと云ふ噂まで傳はつてゐた。

ところがその跋提が、靜かな林や、誰もゐない室に一人で坐禪をくむのを好み、そして、時々いかにも心から出るやうに、

『嗚呼たのしい。』と獨言を云つた。

佛陀はその話を聞いて、跋提に聞いた。

『どうして樂しいのだ。』

跋提は云つた。

『世尊よ。私は以前、高い牆壁の城のなかにゐましたが、そしていつも武器をもつた男に護衞されてゐました。それでもいつも怨をもつた賊がやつて來て、自分の生命をとりに來はしないかと恐れてゐました。ところが今は一人で誰も私を守るものはありませんが、一人で暢氣にしてゐられて、いかにもいゝ氣持で一人で坐つてをりますと、何となく心がうれしくなるのです。前は生活こそ贅澤で美味にあき、美しいかるい着物を着てゐましたが、それで心は少しもおちつきませんでした。今は破れた衣を着ても、自分の思ふまゝに坐りもし、寢も出來て、少しも不安を感じません。煩悶も去り、苦の本を拔いたためか、なんとなくうれしくなつて、ついあゝ樂しいと云つてしまふのです。』

佛陀はそれを聞いてすつかりよろこばれ、

『その氣持はよくわかる。私もさうだつた。』とおつしやつた。

五六　淨飯王の死

それからまもなくのことだつた。佛陀が一人で坐禪をくんでゐられると、珍しく淋しい氣持がし、父王のことが考へられて來た。父、淨飯王が御病氣にでもなられたのではないか。そんな氣

がした。ところがそれは事實だつた。淨飯王のお使が見えて、お身體がすぐれないので、佛陀や、難陀や、羅睺羅に一度逢ひたいと云はれてゐることが報告された。

佛陀はすぐ立ち上つて、難陀や、羅睺羅や、阿難等をつれて迦毘羅城に出かけ、宮殿に行つた。淨飯王はまだ生きてゐられたが、危篤狀態だつた。だが氣はしつかりしてゐられた。

佛陀達が來たのに氣がつかれると、淋しく笑はれて、手をさしのばされた。佛陀は默つてその手をとつた。

さすがの佛陀の目にも涙が浮んだやうに見えた。

難陀はとう／＼泣き出し、羅睺羅もむせび泣いた。女連は聲を出して泣きじやくりした。

「泣くものではない。』

淨飯王ははつきりさうおつしやつた。

『私は今になつて幸福だと思つてゐる。自分の子が佛陀になり、生きてゐる内にこゝに來て、私を見まもつてくれるのだから、私程仕合せなものはない。思ひのこすことはない。』

さうおつしやつた。

佛陀は、心やすく涅槃に入られるやう心に念じた。淨飯王は合掌されたまゝ、とう／＼息を

ひきとられた。

摩訶波闍波提や、耶輸陀羅妃は泣きくづれた。難陀も羅睺羅も恥を忘れて泣きじやくりした。佛陀だけは默然として父王の死を見舞はれた。そして父王が完全に涅槃の狀態に入られたことを嚴肅な氣持で見まもり、よかつたと思つた。

王の御身體は香油で洗はれ、高貴な布や切で御身體をまかれ、棺に斂められ、寶石でそれを飾つた。そして師子座の上に安置され、眞珠の幔幕を張り廻し、いろ／＼の花をその上に散らした。佛陀と難陀は棺の前に、阿難と羅睺羅は棺の後に坐つて守護し奉つた。こんな立派なお通夜はないわけである。

難陀は佛陀に嘆願するやうに云つた。

『どうぞ私に王樣の棺をかつがして下さい。』

すると羅睺羅、阿難も同じことを嘆願した。

佛陀は答へた。

『それがいゝであらう。私も一方をかつぐことにしよう。』

淨飯王の葬式の立派さは云ふ迄もなかつた。布施も十分に行はれた。

人々は佛陀達が棺を擔ふのを見て、ありがたい氣がした。涙をながして、棺が通ると皆跪いて禮拜した。

五七　摩訶波闍波提等五百人の女の出家

淨飯王がなくなられて、幾日かすぎた時、さすがの佛陀も閉口した事件が起つた。そして佛陀も三十六計逃げるに如かずに思はれ、急に迦毘羅城外の尼拘陀林から舍衛城の祇園精舍まで逃げ出された。

何がそんなに佛陀を閉口さしたか。

或る日尼拘陀林に摩訶波闍波提が五百の釋種の女にとりかこまれ、二つの新しい衣をもつて佛陀を訪ねてこられた。

そして、

『私がこの衣を二つ織りましたから、奉納いたします。どうかお受けとり下さい。』

と云つた。

『ありがたう。僧に施しませう。大果報があるでせう。』

と佛陀はよろこんで答へた。
『いえ、この衣は世尊御自身にさし上げたいのです。御自身に着て戴きたいのです。』
摩訶波闍波提はさう云つた。佛陀も相手がともかく自分の義理の母だつた人であるから、他の人に對するやうに無下に斷るわけにはゆかない。しかし云つた。
『僧に施しなさるがいゝと思ひます。私も僧ですから。』
『この衣は世尊の爲につくつたものです。どうかおうけとり下さい。』
『それなら一つだけ私が戴きますからあとは僧に施して下さい。』
摩訶波闍波提はやつと承諾し、佛陀と僧に施し奉つて、そして云はれた。
『お願がございます。どうか我々女人も正法によつて出家が出來、具足戒をうけられるやうにして戴きたいのです。』
『それはいけません。そんなことを云ふのはおやめ下さい。古から諸佛が女人の出家を許されたことはございません。女の人は家にゐて頭を剃り袈裟を着、勤行精進して、正覺を得たものです。未來の佛陀もそのやうにするでせう。ですからあなた方も、その法に從つて家にゐて正覺を得るやうになさるといゝと思ひます。』

しかし摩訶波闍波提はそれでは滿足しなかつた。そして三度、出家を許して戴きたいとおつしやつた。そして佛陀が承知をなさらなかつた時、とう／＼泣かれた。摩訶波闍波提が泣かれると、あと五百人の女人達も泣き出した。

そこでさすがの佛陀も閉口し、やつと女の人達が引きあげると、又來ると大變と云ふので逃げだしたのだ。

しかし女の一念はそんなことでは拒むことば出來なかつた。佛陀達が祇園精舍に逃げたと云ふ報告がつたはると、摩訶波闍波提は、他の女人達の主な人と相談されて最後の決心をされた。

そして五百人の女人と共に髮を切り、袈裟を着け、佛陀の後を逐はれて祇園精舍まで出かけた。

そして入口に來てへたばり切つて一休みした。其處に阿難が何にも知らずに出かけて來た。

阿難はびつくりして髮を切つた女人達を見た。

摩訶波闍波提は阿難を見つけると疲れ切つた身體を起して云つた。

『阿難尊者、丁度いゝところに出て來られた。どうか世尊の處に行つて、私達が來たことをお知らせ下さい。そしてどうか世尊が私達を、御弟子にして下さるやうに骨折つて下さい。私達は死んでも歸らない決心で來たのですから。』

さう云つて、摩訶波闍波提はしく／＼泣かれた。阿難も泣きたくなつた。
『出來るだけ骨折ります。』
『ありがたう。どうぞよろしく。』
阿難はすつかり同情し、義俠心を起してやつて來た。佛陀の心は阿難にはわからなかつた。しかし女人達の心の方はわかりすぎた。
阿難は佛陀の前に行つて云ひにくさうに云つた。
『世尊、お願があつて參りました。』
『なんだ。』
『摩訶波闍波提樣が大勢の女人をつれていらつしやいました。』
『來た。お斷りしてくれ。』
『髮を切り、すつかり比丘尼の姿で來られました。そして斷られても歸るわけにはゆかないとおつしやつてゐらつしやいます。すつかり疲れて、見るのもお氣の毒な程です。』
『しかしどんなことがあつても、お斷りするより仕方がない。』
「他の方ならお斷り出來ますが、相手が世尊のかりにも御母樣であり、いろ／＼世尊をお育てに

なるのに苦心された方なので、私にはお斷りは出來ません。又お斷りしたら、きつと、とんだことになります。』

『私だつて御恩を忘れたわけではない。だが私は女人を敎團に入れることは承知は出來ない。』

『なぜでございます。敎に男女の區別がございますのですか。』

『敎に男女の區別はないが、敎團に女を入れるのは、良田に惡草が生じるやうなもので、收穫を傷めるにちがひない。そのことを思ふと女人の出家を許すわけにはゆかない。』

『それならば世尊は摩訶波闍波提樣を見殺しになさるのでございますか。』

阿難は泣き出した。

さすがの佛陀も、それには弱つた。女の一念がどんなものか佛陀は知つてゐた。

『それではやむを得ない。お連れしたらいゝだらう。』

阿難は喜んで皆の方に喜報を知らせに急いでいつた。

佛陀は沈默してそのあとを見てゐたが、いつもの佛陀とまるでちがつて、何となく氣にかゝるやうで、決心のつかない形だつた。

そこに五百人許りの女人が、摩訶波闍波提を先頭にして、喜び勇んでやつて來た。小聲で話し

あつてゐるのだが、その聲は喜に滿ち傍若無人の面影があつた。佛陀は佛陀に似合はない後悔の念を何年ぶりかで味はれた。

しかしその氣持を知るものは、舍利弗達數人切りだつた。それ等の連中は苦虫連中だつたが、あとは何となく喜んでゐた。

摩訶波闍波提は佛陀の前に跪いた。

『ありがたうございました。こんな嬉しいことはございません。』と云つた。

『もしあなた達が出家して教團に入らうと云ふなら、八つのことを守つて戴きたい。』

『どんなことでもお守りいたします。』

佛陀は嚴かに云つた。

『第一に、比丘尼は半月ごとに比丘衆から教誡の人を乞はなければいけない。

第二に、比丘尼は比丘のゐない處で夏の安居を行つてはいけない。

第三に、比丘尼は安居を終つてから、比丘尼は比丘と比丘尼のゐる處で自分の罪を發き責めることを請はなければならない。

第四、正學女として二年修行をし、戒を守つてから、比丘と比丘尼の二部の僧の中で具足戒を受

けること。
第五、比丘尼は比丘を罵ることは出來ない。在家の人の前で比丘の破戒や、まちがつた事を說いてはいけない。
第六、比丘尼は比丘の罪をあげてはいけない。これに反して比丘は比丘尼の罪を叱ることは出來る。
第七、比丘尼の誹謗罪を犯した時は、二部の僧の中で半月の間、治罪を行はなければならない。そしてそれを行つたあとで、二部の僧の中で罪の許を求めなければならない。
第八、比丘尼は受戒をうけて百年たつても、新に受戒をうけた比丘を禮拜し、立つて迎へなければならない。』
今の女なら怒るであらうが、當時の女はかう云はれても怒らなかつた。謹しんで聞いてゐた。
摩訶波闍波提は謹しんでお答へした。
『美しい華鬘を戴いた若い女が歡喜して兩手をもつて捧げとつて頭上におくやうに、私達は今の世尊の教をありがたく戴きました。』
そして佛陀の足を禮した。

佛陀はそれを聞いても、心の内はいつものやうに明るくはならなかつた。

五八　若き僧の質問

ある時ある若き僧が、佛陀に、

『出家したものは、婦人にたいしてどうふるまつたらいゝのですか。』

と聞いたことがあつた。その時、佛陀はかう答へた。

『女を見ることはさけるのがいゝ。

もしさけられない時は、見なかつたやうにし、話はしないがいゝ。

もし話をしなければならない時は、純潔な心で話さなければならない。そしてから思ふがいゝ。

「私は出家だ、泥中の蓮がそれに穢されずに清淨無垢であるやうに私も罪深い俗世に清淨無垢に生きよう。」

もし女が老いてゐたら、母と見るがいゝ。

若かつたらお前の本當の妹と思ひ、もつと小さかつたら子供と見做すがいゝ。

女を女と見做し、女として女に接する出家は誓を破つたもので、佛陀の弟子ではない。

煩惱の力は人間にとつて强大なものだ。恐るべきものだ。だから誠實な忍耐の弓と、智慧の鋭い矢をとる必要がある。
正思の兜を頭に戴き、五欲にたいしては固き決心で戰へ。
女の美に迷はされる時、淫欲は人の心を閉ぢ、心は眩まされるものである。
この世の女は歩いてゐる時でも、立つてゐる時でも、坐つてゐる時でも、眠つてゐる時でも、自分の容姿を見せたいと希つてゐる。繪としてかかれる時も、自分の魅力で相手を囚にしたいと希ふものである。不動心の僧侶にたいしてもそのやうなことをするものだ。
さればお前達はどうして身を守つたらいゝか。
女の涙、女の微笑を敵と見做し、又女の俯く姿、女の垂れた腕、女の縺れた髪を、すべて男の心を陷れる係蹄と見做して用心し、心を制し、放肆な心になるのを許してはいけない。』
から云ふ佛陀だから、比丘尼の出來たことが、どんな結果を生むかを知つてゐた。しかしそれもどうすることも出來ない事實だと思つた。
どつちがいゝか、彼にはわからなかつた。
まもなく、耶輸陀羅妃も出家し、摩訶波闍波提の仲間に加はつた。

このことは佛陀にとつては喜でなくもなかつた。心の一つの重荷がとれたやうな氣もしたから。佛陀は人情を知らない男ではない。知りすぎた男である。

五九　婆羅門種の二人の弟子

或る時佛陀は自分の弟子の婆悉吒、婆羅墮と云ふ二人をつれて乞食をした。二人は婆羅門の出だつた。佛陀は二人に云つた。

『お前達二人は婆羅門種の出なのに、熱心堅固の信心で出家修道してゐるが、婆羅門の人達に譴責されるやうなことはないか。』

『えゝ、隨分譴責されてをります。』

『どう云ふ點で譴責されるのだ。』

『彼等は云ふのです。婆羅門種は第一で他の種の人は下劣だ、自分達は淸白だが他のものは黑くつて濁つてゐる。婆羅門種は梵の口から生れたものだ。それなのに君達は淸淨種をすてて、喬答摩の異法の中に入るのはどう云ふわけだ。と云つて責めるのです。』

『婆悉吒、世には四つの種の姓がある。刹利種と、婆羅門種と、居士、首陀羅種、それで政治や

宗教や實業や、奴隷の仕事をそれぐ\受けもつてゐるが、しかしどの種にだつて善と惡が交つてゐる。刹利種の中にも殺生するものもあり、盜むものもあり、婬亂のものも、詐僞するものも、嘘つくものも、惡口するものも、不正なことを云ふものも、貪欲のものも、嫉妬するものも、邪見なものもあり、是を十惡業と云ふが、婆羅門種の內にも、居士種、首陀羅種の內にも同じく十惡業をなすものがゐる。不善の行に、不善の報があり、闇黑な行には闇黑な報がある。婆羅門種と云つても之をさけることは出來ない。もしそんなことを行ふものが婆羅門種にだけはゐないと云ふのなら、婆羅門種は第一であとは下劣だとも云へるだらう。しかし事實はさうでないから、我が種だけ淸淨だとは云へない。他の種だつて殺さないものもあれば、盜まないものもある。その他の惡行もしないものがゐる。それを十善を修すると云ふが、善を行へば善の報があり、淸白の行があれば淸白の報がある。ひとり婆羅門種に限つてあるのではない。だから婆羅門種のみ淸淨なり、第一なりとは云へない。(何處の國の人間についても同じことが云へる)
婆羅門種を見るがいゝ、昔とはちがつて今は婆羅門種も妻をめとり、子を生んでゐる。他の人と異なることはない。それなのに梵種であり、梵の口から生れて、淸淨だと云ふのは妄語だ。
婆悉吒よ。刹利種の中でも、鬚髮を剃りおとし、法服を着け、道を修めれば久しからずして正

道を成就する。正道が成就したものを阿羅漢と云ふ。婆羅門種、居士種、首陀羅種でも皆正道成就の阿羅漢になれる。阿羅漢種こそ五種の内の第一であり、淸白な種である。』

佛陀はさうおつしやつた。婆悉吒、婆羅陀はそれを聞いて歡喜し、ます／＼正道をつとめ勵んだ。

眞理を愛し行ふもののみ、人天に愛されるのである。

六〇　佛弟子同志の爭

佛陀の弟子になれば、誰でも淸淨になり、理想的な人物になれると思へばまちがひである。佛弟子にもいろ／＼ある。それこそ十惡を行ふ佛弟子もないとは云へない。それは本當の佛弟子ではなく、見かけだけの佛弟子ではあるが、彼等も人間である。時々は墮落して、それからまたはひ上つて、正覺を得たものも少くないし、墮落したまゝの人も少くはない。殊に大勢一緒に住むやうになつてから、時々、もてあますやうな爭も、仲間の内に起つた。佛陀もそれには閉口された。勿論閉口したと云つても落ちつきは失はれはしないが。

或る時佛陀が倶睒彌と云ふ處にゐた時、隨分しつこい爭があつた。

そこで佛陀はかう說教をされた。
『お前達は爭つてはならない。爭で爭を無くさうとしても、遂にやむ時はない。たゞ忍だけが爭をやめる。それ故に忍を尊重しなければいけない。
昔、拘薩羅國に王があり、名を長壽と云ひ、又迦尸國に王があり、名を梵豫と云つた。或る時、梵豫王が大軍を起して拘薩羅國に攻め込んだ。そこで長壽王もまた大軍を興してむかへ討ち、それを打ち破つて梵豫王を生擒にした。しかし長壽王は梵豫王を許してやつて云つた。
「お前の生死はわが手にあるが、赦してやるから、今後戰なぞは起すやうなことをしてはいけない。」
梵豫王は喜んで謝して逃げていつたが、その後まもなく大軍を興して攻めて來た。
長壽王は云つた。
「私は既に彼に勝つたことがある。また勝つのはさうむづかしいことではないが、しかし爭は惡になる。私が彼に勝てば、彼も私に勝たうとし、私が彼に害を加へると、彼も亦私に害を加へようとする。彼の欲するところは國土だ。國土の爲に彼我の民衆を害するのはよくないことだ。私は寧ろ妻をつれて車にのり、走つて彼の王城に行つて、かくれて一生を終らう。」

長壽王はその國を梵豫王の爲すに任せ、后と一緒に梵豫の王城に行き、着物を換へ、名を改め、學問をし、見聞を博め、歡喜の顏色をして町々をへめぐり、妙なる音樂や舞踊で城中の民衆をたのしませた。その后は子を生んだ。その子は長生童子と名づけた。人にあづけて私かに育てた。その童子は生れつき聰明で、若くして百藝に通じてゐた。

梵豫王は長壽が名をかへて城中に潜んでゐるのを知つて、家來に命じてそれをつかまへさした。民衆は長壽王がつかまつたのを見て、皆泣き悲しんだ。長生童子は樵夫に化けて、父の前にいつた。

父はわが子を見ると天を仰いで云つた。

「忍ぶべし、忍ぶべし、之孝と云ふべし。怨の因果を結んではいけない。たゞ慈悲を行へ。凶を含み、毒を懷いて、怨を重ねて、禍を萬載に傳はらすのは孝子のすることではない。諸佛の慈悲は天地をつゝんでゐる。私はその道を尋ね、身を殺して衆を救うても、なほ孝道を獲ないのを恐れてゐる。まして怨を抱き、讎を報ずるのは私が固く禁ずるところだ。私の云ふことを捨てなければ、孝といふべきだ。」

童子は父の心を知つて泣いた。そして父の死を見るのに忍びないで深林に逃げ込んだ。

城中の豪族が長壽王に同情し、罪を許されることを願つたが、梵豫王は長壽王の人望があることを知るにつけ、なほ畏れて、禍根を除かうと思つて、とう〳〵長壽王を切らした。

長壽王は切られる時も、實に落ちつきはらつてゐた。見たものは皆感心した。

長生童子は夜になつて窃かに父の屍を收め、香木でそれを茶毘にし、その冥福を祈つて、また身を潜めた。

梵豫王は童子が復讐するのを思ふと、畏怖心に滿ちて安眠も出來ないので、童子を嚴重に探さしたが見つけることは出來なかつた。

童子はその後また城に入り、伎樂に妙手だつたので、貴族や豪族の氣に入り、とう〳〵王様の目にとまり、すつかり御氣に入つて王樣の左右に侍するやうになつた。王はすつかり信用して護身の刀を持たした。

或る時王は獵に出かけ、途を失ひ、他の人とはなれてしまつた。從つてゐたのは童子だけだつた。王はすつかり疲れて童子の膝を枕にして眠つた。

童子はその時思つた。「この王は無道で、罪のない父を殺し、又父の國土を奪つた、今わが手中に在る、之は天の與へ給ふところだ。怨を報ゆるのはこの時である。」

そして童子は刀をぬいて王を殺さうとした。しかしその時父の遺訓を思ひ出し、刀を鞘にもどした。

その時王は夢に驚いて目をさました。そして云つた。

「あゝ驚いた。今長生童子が來て讎を報いようとして刀で私の首を切らうとした。」

童子はそれを聞いて云つた。

「大王よ。恐れることはありません。驚かれることはありません。私がその長生です。實は私は今讎を報いようと思つたのですが、父の遺訓を憶つて刀を鞘の中に收めたのです。」

「お前の父はどう遺訓されたのだ。」

「忍ぶべし、忍ぶべし、之孝と云ふべし。怨の因果を結んではいけない、毒を懐かば禍は萬載に及ぶだらうと申しました。」

すると王は云つた。

「忍ぶべし、忍ぶべしは私にもわかるが、毒を懐かば禍を萬載に及ぼすと云ふのはどう云ふ意味なのか。」

「もし我が大王を殺せば大王の臣は必ず私を殺すでせう。さうなれば私の臣が又大王の臣を

殺すことになりませう。しかし大王が私を許し、私が大王を許せば、忍はよく禍の源を去ることが出來ます。それを云ふのです。」

梵豫王はすつかり感心して云つた。

「私は聖者を殺した、罪まさに死に價する。」

そして國全體を童子に與へようとした。しかし長生童子は、

「大王の本國は元來大王に屬してゐるものですから、私の父の本國だけ還して戴く方がいゝと思ひます。」と云つた。

王は童子と一緒に歸られた。

そして臣下の人達に云つた。

「もしお前達が長生童子に逢つたらどうする。」

「その手を截ります。」

「その足を截ります。」

「その命を斷ちます。」

と臣下達は云つた。そこで王は云つた。

「長生童子はこの方だ。」

そこで人々がさわぎ出しかけた時に、王は「まて。」と云つて、くはしくさつきのことを話した。そして童子が自分の命を惠んでくれたことを話した。皆感動した。

王は「今後惡意をもつて長生童子に向つてはいけない。」と云つた。

諸ゝの臣下は悦服した。そこで王は王の湯殿で童子に湯をつかはし、王の香をぬり、王の衣を着せ、金床の上に坐らせ、自分の娘を妻はした。そして本國に還し、その國を返した。

諸ゝの比丘よ。彼の國王はこのやうに、自ら忍辱を行ひ、自ら慈悲心を行ひ、恩惠を施された。お前達も、亦、そのやうにしなければならない。眞心をもつて信じて家を捨て、家なくして道を學ぶものは、當に忍辱を行ふべきだ。また忍を稱歎し、又慈悲心を行ひ、慈を稱歎し恩惠を行ひ、また恩惠を稱歎すべし。』

かう佛陀は云はれた。

しかし世尊がかう迄云はれても何か心にこだはりがあつて、とけないやうだつた。

そして云つた。

『世尊、それでも、他の人が何か云ふのに、私は何にも云はないと云ふことは出來ません。』

世尊はそこで座から立つて云はれた。

『象、馬、牛をうばひ、　身を碎き命をも斷ち、
國を破り亡ぼせるだに、　かの王は能く和解せるを、
口のみの諍なるに、　汝等はいかで和合せざるぞ。
諍をもて諍を止めんとすれば、諍の止む時はあらず。
たゞ忍ぶ者のみよく止むべしと、　いへる教ぞげにも貴き。
若し眞實にこの義を知らば、　怨心はいかで結ばん。
我と等しき友を得ず、共に學ばん人しなければ、
獨り野にある象の如く、　意を堅くして獨り住み、
善を作すこそ賢けれ、　惡と共になる事なかれ。』

佛陀はさう云はれて一人其處を去つて、遠くにゆかれた。佛陀にかくまで云はれても、改心出來ないものは出來なかつた。佛陀でも緣なき衆生はどうすることも出來ない。しかし心ある人は、この佛陀の話に感動して心を改めた。

六一　三人の出家王子の美しき生活

さすがの佛陀も一人になつても心がたのしまなかつた。しかし佛陀のことであるから、云ふだけのことを云つた以上、それにこだはりはしなかつた。だが人間の諍の結ぼれの解きにくいこと、それから恐しいことが生れることを知りながら、どうすることも出來ない、はがゆさを感じた。しかし一人で歩いてゐる内に氣持はすつかりなほつた。

佛陀はそれから暫らくして波利耶沙羅林に行かれた。其處には阿那律や難提や金毘羅がゐた。仲のいゝ三人は出家しても益々仲がよかつた。三人は規律をつくつて道を修めてゐた。乞食して最初に歸つたものは、先づ床を敷き、水を汲み、洗足器を出しておき、脚を拭ふ巾と、水瓶を置き、もらつて來たものは食べられれば皆食べ、のこれば、涼しい處か、虫のゐない水中に置き、あとかたづけをして、又手足を洗ひ、尼師壇を肩にかけて室に入り、その上に坐禪をする。次に歸るものも足をあらひ、水が足りなければあとをおぎなひ、布を綺麗に洗つておき、あとの人の爲に用意しておいて、食をとり、不足の時は、前の人がのこしたものをたべ、あとかたづけをして、手足を洗つて尼師壇を肩にかけて室に入り坐禪をする。最後に歸つたものは足をあらひ自

分のもらつて來たもので食し足りない時は前の食をとり、あまれば、涼しい淨地か、虫のゐない水においておき、そしてあと始末をちやんとして、手足を洗ひ坐禪をする。そして夕方が來、禪定から最初に立つものは、水を汲みにゆき、力が足りない時は手をあげて仲間をよび、無言でそれをはこび、默つて自分の室に入り、五日に一度集つて、互に靜かに話しあふ。

さう云ふ平和な美しい生活をたのしんでゐた。

佛陀は三人の處へゆくのは喜びだつた。それでやつて來た。林を守る人は、佛陀と云ふことを知らないので、いつも佛陀は大勢をつれてゐるのに今日は一人だつたから、氣がつかなかつたのであらう。佛陀が林の内に入らうとすると、『こゝには三人の聖者がゐらつしやるから入つてはいけない。』と云つた。

佛陀は靜かに、

『三人は私に逢ふことを喜ぶだらう。』と云つて中に入つた。

三人は佛陀が來たことを知ると元より喜んだ。阿那律は來て佛陀の着物や鉢を受けとり、難陀は床席を敷き、金毘羅は水を汲んで來た。

佛陀は仲のいゝ三人を見ると、嬉しくなつた。

『お前達は平和に道を修め、安樂にしてゐて諍ふことがない、心を一つにし、師を一つにして、水と乳とが和合するやうに和合してゐる。實に美しいことだ。』

佛陀は其處でいろ〳〵道のことをお話しになつた、聞くものも、語るものも心は一つになり、ます〳〵美しくなつた。

天上の喜も之には優らないやうに思へた。

その後、かの諍つてやまない連中は、佛陀に愛想をつかされたと云ふ噂がたつたためにすつかり世間の信用を落し、誰も供養するものがなくなつた。

さすがにそれには閉口した。

とう〳〵其處にゐられなくなつて、その時舍衛國にゐらつした佛陀の處へ皆引きあげて來た。

長老の舍利弗がそれを知つて佛陀にそのことを云つて、どういたしませうと云つた。

佛陀は舍利弗にはつきりかうおつしやつた。

『その中には非法をとくものがある。尊重してはいけない。しかし正しく法をとくものもゐる、それは尊重しなければならない。』

非法をとくものは反省するか大勢に抑れて非法をとく力はなくなつた。

そこで彼等は大きな海にそゝぎこんだ川のやうに、色彩をはつきりさせて諍ふわけにはゆかなくなつた。

しかしすべての人が佛陀のわきにゐれば聖者になれるはずと思ふ者があれば馬鹿である。

六二　須提那の破戒

佛陀の弟子にもいろ〳〵の人があつた。

佛陀が毘舍離國の獼猴河の邊の重閣講堂で說法をされた時、迦蘭陀村の長者が用事があつて息子の須提那と云ふ者をつれてその近所に來、來たついでに說法を聞きに來た。

息子の須提那は佛陀の話に感動した。そして佛陀の云ふやうに恩愛の束縛を脫し、一生淸い生涯を送ることが出來たら、煩悶も、執着もない、大空の樣な自由を得るだらうと思つた。さう思ふと、出家しないではゐられなくなつて、說法がすんで、皆歸つたあと、自分だけ殘つて佛陀の前に出て出家したいと云つた。

『それはいゝ心がけだが、兩親の許を得ないといけない。』と佛陀は云はれた。

それで須提那は家に歸つて兩親に出家することを許してくれるやうにたのんだが、一人子なの

で兩親は中々許さなかつた。それに妻もゐて、思ひ止るやうに嘆願した。

しかし出家することに夢中になつてゐた、須提那はそんなことで思ひとゞまらなかつた。

『出家出來ない位なら、餓死しよう。』さう思つて斷食をした。

六日間飲まず食はずに坐つてゐた。家のものは勿論、親類や友達が來て何とか思ひ留るやうに骨折つたが、聞かなかつた。

そこで今度は、このまゝおいておいては死んでしまふだらう、それよりはそんなにまで思つてゐるなら出家さした方がいゝだらうと、友達たちが親を說いた。そしてとう〳〵親も承知した。須提那は大よろこびで出家して佛の弟子になつた。

そして人々も感心する位一心に修行をした。しかしそれからまもなく、全國に渡つて飢饉があつた。比丘達は乞食して歩いても食にありつけなかつた。

そこで須提那は自分の故鄉はいつも穀物が豐富なことを思ひ出して、自分の村に皆をつれて行つて、比丘達を供養しようと思つた。

そこで多くの比丘をつれて自分の故鄉の迦蘭陀村に歸つた。

兩親はそれを聞くと大喜びで、須提那の處に一度歸つてくれるやうにと云つた。

須提那は躊躇したが、佛陀も親を訪問なさつたことを知つてゐるので、つい親を訪ねる氣になつた。又さうすれば多くの食料の寄附をもらへることはわかつてゐた。

彼が歸つてくると云ふことがわかつた時、家中は大さわぎだつた。殊に兩親は、妻を出來るだけ美しくして須提那を誘惑させようと計畫をした。まだ孫がないので、あとつぎがないと家が斷絕するのが、規則だつたので、なほ眞劍になつてゐた。

須提那はそんなことは考へてゐなかつた。しかし久しぶりに家に歸ると、皆が下にもおかないやうに大事にしてくれ、妻も出て來てしきりと世話をやいてくれるのを、いやな氣持には思はなかつた。

それ所ではなく、佛陀とはまるで修行のちがふ彼は、段々いゝ氣持にさへなつて來、長い間の禁欲生活が、急に妻のなまめかしい香をかいだりすると、ぐらつき出した。

父は息子に、あとつぎがないと財產を沒收されることなぞを話して、心細い話なぞした。そして一家總がかりで息子の心を動かさうとした。息子ももう半分心が動いてゐたのだ。

その結果、息子はとう／＼淫欲の奴隷になつた。そして罪を犯してしまつた。

彼は後悔したが、もうどうすることも出來なかつた。そしてすつかり元氣を失ひ、青ざめて皆

の所に歸つた。
皆は彼の元氣のないのを不審に思つた。そして彼が誘惑にまけたことを知つた。
皆は、それを非難し、責め、そして佛陀にこのことをつげた。
佛陀は皆集つてゐる所で須提那に聞いた。
『それは本當か。』
『誠にすみません。本當でございます。』
『お前は愚かな人である。そのした事はよくなかつた。清淨な行とは云へない。沙門の法ではない。道に從つてゐるとは云へない。さう云ふ行は未信者をして信じることを得なくする。信者を退かせる。お前は私がいろ〳〵と欲望をいましめ、欲の想、欲の覺、欲の熱をいましめ、欲を斷じ、欲の想を離れ、欲の覺を除き、欲の熱を滅することを讃嘆してゐることを聞かなかつたか。』
から須提那を叱つてから、皆に云つた。
『戒を守ることに十の利益がある。それ故に戒を守らなければならない。
一、僧の和合の故に
二、僧を受け入れる故に

三、悪人を調伏する故に
四、慚愧せる者を安樂にする故に
五、現世の煩悶を無くす故に
六、未來の煩悶を無くす故に
七、信ぜざる者を信ぜしむる故に
八、已に信ぜるものを進歩させる故に
九、法に久しく住まらせる故に
十、淸淨心に久しく住まらせる故に。』
そして佛陀は云つた。
『もし比丘で淫戒を犯したものは、波羅夷と云ふ罪になり皆と一緒にゐることは出來ない、僧團から出すことにする。』
比較的まだ若かつた佛陀はかう宣言した。
これが正法の内にとり入れられた戒の最初のあらはれだつた。
須提那は恥ぢながら家に歸つた。兩親達は喜んで迎へた。須提那の熱病的信仰はさめて、家庭

の人間に戻つた。

六三　達尼迦の破戒

また達尼迦と云ふ比丘があつた。佛陀が王舍城にゐた時の話だが、立派な家を建てることを考へた。

『今迄草庵をつくつたが樵人にこはされ、後に瓦の家をつくつたが、どうも面白くないので、今度はいゝ木材を得て大きな家をたてよう、そしたらながい間其處に安穩に住むことが出來るだらう。』

それ迄はよかつたが、その爲にとんでもないことを考へついた。

そして王舍城の王樣の材木をあづかつてゐる役人を知つてゐたので、其處に行つて、

『木材が入用なのだが、くれないか。』と云つた。

『私の自由にはならない。』と役人は云つた。

『それなら誰の許が必要なのです。』

『王樣のお許がなければ。』

『王様のお許は得てゐるのです。』
役人は信用してゐる僧侶の云ふことだから、
『それならお持ちになつてよろしい。』と云つた。
そこで達尼迦はよろこんで大きな城を防ぐ爲の材木を切つてもつて行かうとした。
亂暴な話である。しかし運わるく其處に雨舍大臣と云ふ男が登場して來て、坊主が城防の材木を取つて運ばうとしてゐるのを見つけた。役人に云つた。
『なぜお城の大事な材木をあの比丘に與へるのだ。』
『私が與へたのではありません。』
『それなら誰が與へたのだ。』
『王様御自身です。』
そこで大臣は王様の處へ行つて、
『なぜ城を防ぐ大事な材木を比丘にお與へになつたのですか。』とお聞きした。
王は、
『そんなことを云つた覺はない。』と云はれた。

そこでさきの役人は呼びつけられて、縛られてしまつた。

達尼迦は又やつてくると、材木の役人が縛られてゐるので、驚いてどうして縛られたのかと聞いた。

『あなたのおかげです。どうか助けて下さい。』と嘆願した。

『それなら私のことを云へば、私がいゝやうに云つて上げよう。』と達尼迦は云つた。達尼迦は別に驚いてもゐなかつた。

そこで役人は王の前に呼ばれてたづねられた時、達尼迦に瞞されたことを白状した。

そこで達尼迦は呼ばれた。

『いつ、お前に材木を與へると云つたか。』

王様は怒つてさうおつしやつた。

達尼迦は平氣で答へた。

『王様が御位におつきになつた時、一切境内の草木及び水を以て佛陀や婆羅門に施されたのをお忘れになつたのですか。』

王様は達尼迦の圖々しいのに驚いて云つた。

『私は主のあるものを施すとは云はなかつた。しかしこんな云ひがかりをして人の物を取るのは怪しからん。しかし私は佛陀から灌頂された王だ。沙門を囚へて殺すことは出來ない。だからすぐ歸らして佛陀の法でお前を罰していたゞくことにする。』
そして達尼迦を許した。
市民達はその話を聞いて驚いて云つた。
『達尼迦の罪は死に値する。それなのにすぐ放免された。そんなことをして許されるのなら誰だつて盜をするだらう。』
又或る人は云つた。
『王様からいろ／＼のものを戴いてゐる沙門や釋迦の弟子が、その上に王の材木を盜んでいゝのなら、我々は何を盜んだつていゝわけだ。一たい佛陀は常に不盜を賞め、人に敎へて布施させておきながら、自分は盜をするなぞとはおどろいた。』
それから佛陀の弟子の評判はすつかりわるくなり、この噂は益々誇張され、長者や居士、婆羅門の徒は佛弟子を見ると、泥棒々々と囁いた。
そこで比丘達はびつくりして、誰が王の材木を盜んだのかと調べた結果、

達尼迦と云ふことがわかつた。
それで達尼迦にきくと、彼は存外平氣で、
『さうだ私だ。』と云つた。
そこで皆が非難し、又佛陀に報告した。
そこで佛陀は皆を集めた前で達尼迦に聞いた。
『本當か。』
『はい。本當でございます。』
そこで佛陀は前に須提那を責めた時と同じやうに責めた。
そして、世間の法に委しい人がゐるので聞いた。
『王の法は、どの位盜むと死罪になるのか。』
『五錢以上は死罪になります。』
そこで佛陀は云つた。
『戒を守ることには十の利益がある、だから戒はまもらなければならない。今より五錢以上のものを盜んだものは、波羅夷の罪を得、皆の處に住ることは出來ない。』

達尼迦は破門されたが、殺されはしなかつた。

六四　優陀延王と賓頭盧

勿論、よくない弟子もあるが、すぐれた立派な弟子も少くなかつた。それ等の弟子の話の内に、佛陀の面目が躍如としてゐる話はいくらもある。その内の一つをこゝにかいておく。

佛陀の弟子に賓頭盧と云ふのがゐた。佛陀が成道後三、四年で佛陀の弟子になつたが、元々跋蹉國の倶睒彌城の國師の家に生れた男で、頭もよかつた。或る日佛陀の所に來て云つた。

『世尊よ。私の國の王の優陀延王は心が狂暴で、慈悲の心がなく、生きものを殺すのが好きで、女色にふけり、正法を知りません。そして自分が王だと云ふので、驕慢になつて、人民を人間のやうに思つてゐません。これで私は國へ歸つて出來るだけ、世尊の教を說いて見たいと思ひます。』

世尊はゆくことを許された。

それで賓頭盧は故鄕に歸つて、城のわきの林中にとゞまり、城內に乞食しては林に歸つて坐禪してゐた。

優陀延王は賓頭盧が歸つたと聞くと、大いに喜んで駕にのり林に行つて、尊者に云つた。

『尊者は、代々我が國師であり、私とも知りあひの仲だが、今度釋迦の處に行つて教を受けて來たと云ふ話だが、どんなことを教はつて來たのか。私が思つた所を云ふから、返辭をしてもらひたい。』

『どうぞ。』と尊者は云つた。

『世間の人は、一切の五欲を貪り、欲情を擅にして樂しんでゐるが、あなたは獨りでかうした淋しい處にゐて、世の愛着をすてて、いかにも悠然としてゐる。容貌も崇高に見え、膚の色まで鮮かなのはどう云ふわけです。食ひものもいゝとは思へないが。』

『私が世の中を見ますのに、世の中の人の求めてゐるものは皆、無常で空なものです。ですから私はその欲望をすてて、野鹿のやうに山林に入り、一心に道を修めて、煩惱の枝を斷つてゐるのです。おかげで迷の毒果はつき、生死流轉の流に入ることがなく、心が常に廣々してゐて、譬へば籠の鳥が、大空を翔るやうです。』

王はそこで云つた。

『尊者よ。それなら、正直に云つてもらひたいが、私はいま勢が盛んで、諸國を征服し、私の威德は天日のやうだと人に云はれてゐる。私は頭に天の冠を戴き、身に瓔珞を纏ひ、美人は左右

に侍つてゐる。あなたはそれを見ても羨ましいとは思はないか。』

『王よ。私は煩惱を斷つたものですから、天の女の美しささへ求めません。まして人界の汚れた人間の美を羨むことがありませう。道を修め、智慧の眼を得たものは、どうして王を羨ましがりませう。明らかな目を持つものはめくらを羨みません。健康な人間は病人を羨みません。無罪の人は凶人を羨みません。王は煩惱のために眼を眩まされて、苦しみの海に沈み、五欲を貪ることを立派な事と思つてゐられるが、五欲は苦の本で、苗を傷める雹のやうなものです。詐つて親しみ近づく敵のやうなものです。五欲は大きな網のやうに三界をつゝんで人々を閉ぢこめます。恐るべきものなのです。』

そして一つの偈を唱へた。

『尊き王位も、　電光のやうに消えむ。
位は高く、　譽は四方に響けども。
譬へば森に棲む鳥の如、　常に恐怖を抱いて親疎の中に住む。
王位は眠れる金蛇なれ、　愚人之を家に運べば、
禍は炎と燃えて、　その家を燒くべし。

四衢における肉を、　鳥獸が爭ふ如く、
王位もまた爭の的となる。』
そしてつゞけて云つた。
『王よ、この身は遂に壞れ、榮華は消え易く、財はやがて散り失せます。恩愛も一夜を契る巣鳥のやうに別れ〳〵となるのです。空ゆく雲も消え、咲く花も色が失せ、盛んだつた絃歌の調もやがて消えてしまつて、そのあとのはかなさは、五欲を懷く凡人の悲しみです。私達はそんなものを羨みはいたしません。』
さすがの王も傲を失ひ、賓頭盧の云ふことを本當だと思ひ、それから佛教に歸依するやうになつた。

六五　羅睺羅と毒蛇

或る日の夕ぐれ雨がひどく降つた。佛陀は坐禪してゐられたが、不意に羅睺羅のことが氣になられた。
羅睺羅は舍利弗に任されてゐた。そして舍利弗が彼の先生だつた。彼はまだ子供だつたので、

悟を得る迄にゆかなかつたが、新しい生活は樂しみではなかつた。しかし別に不平も云はず、尊敬する父の云ふ通りの生活をしてゐた。今日も室の掃除をして外出してゐたが、歸つて見ると自分の室には客の比丘がゐて、羅睺羅の衣鉢は外へ出されてゐた。

溫和な羅睺羅は、又『忍ぶべし、忍ぶべし。』と常に敎へられてゐる羅睺羅は、一人一室の規則があるので、自分の室に入ることが出來ないで、ぼんやりしてゐた。其處に大雨が降つて來たので、やむを得ずぬり立ての厠に入つて、臭い處に端坐してゐた。ところが穴のなかにゐた黑い毒蛇が水の爲に追ひ出されて厠にはひ上つて來た。羅睺羅はそれに氣がつかなかつた。

その時佛陀は急に羅睺羅のことを思はれ、羅睺羅の室に來て見られたら、羅睺羅はゐないで旅の比丘がすまして自分の室のつもりでゐた。さすがに佛陀も氣になつた。佛陀は厠に羅睺羅のゐることに氣がつかれ、厠のそばによつて咳拂をされた。すると內からも咳が聞えた。

『誰だ。』

『羅睺羅です。』

『早く出ておいで。』

羅睺羅は思ひもかけず父の聲が聞えたのであわてて出て來て、佛陀に思はずすがりついた。目

に涙が宿つてゐたが、それを雄々しくかくしてゐた。
佛陀は羅睺羅になぜこんな處にゐるのかと聞き、事實を知ると、自分の室に『おいで。』と云つてつれて歸られた。
羅睺羅は地獄で佛に逢つたやうに喜んだ。
それから沙彌（比丘になる準備時代のもの）は二晩だけ比丘と同じ室にゐてもいゝと云ふことになつた。

六六　羅睺羅なぐられる

また或る時羅睺羅は舍利弗に從つて祇園精舍を出て、王舍城に乞食して歩いた。
道に一人の惡漢がゐて、舍利弗の鉢のなかに砂を投げ入れ、後からくる羅睺羅の頭を撲つた。
舍利弗がふりかへつて見ると、羅睺羅の齒を喰ひしばつて忍へてゐる顏は血に汚れて、物凄かつた。舍利弗は云つた。
『羅睺羅よ。世尊の弟子である以上どんなことがあつても瞋の毒を腹に持つてはいけない。常に慈悲心をもつて衆生を愍れまなければならない。世尊はいつも忍辱ほど快いものはないとおつし

やつてゐる。私も御教に從つて忍辱を寶としてゐる。だから羅睺羅よ、心を押へて、忍辱を守りなさい。世にこれ程の勇氣はない。天上人間の如何なる大力もこの力には勝るものはないのです。』

羅睺羅は水邊にゆき、自分の血だらけの顏を見、默つて水を掬つてそれを洗つた。

見てゐる舍利弗の方がつらかつた。

羅睺羅はやつと耐へて云つた。

『私はいまの痛みを思つても、長く苦しむもののことが考へられます。實際この世には惡人がゐます。この世はいやなことが多い處ですね。しかし私は慍りはしません。たゞこんな無法人はどうしたらいゝのかと考へます。世尊は私に大慈悲をお教へになります。そして狂暴なものは殘虐なことを好みますが、沙門は忍を守り高德をつみます。しかし狂愚のものはそれを輕蔑して、反つて殘酷な人間を尊敬します。それで惡は輪廻して極まりません。いくら佛の教をといても、彼等は臭い死屍のやうに痛痒を感じません。天が甘露を豚に與へても豚は臭い虫の方がすきです。世尊が眞心こめて說法なさつても、凶愚の人はそれと同じで、何のきゝめもないと思ひます。』

舍利弗は、羅睺羅をつれて、精舍に歸ると早速、佛陀の前に出て、今日の話をした。

佛陀はそれを聞くと、羅睺羅のよく辛抱したことをほめ、なほくはしく忍について話をされた。

佛陀はかう云はれた。

『もし忍ぶことを知らない人があつたら、その人は佛に逢ふことも出來ず、法に背き、僧に遠ざかる。常に地獄に墮して輪廻して窮まりない。しかし惡行を忍ぶものは常に安らかで、いろ／＼の禍が消滅する。人々は和合し、歡びあふ。智者は深く因果を見るから、心を克服してよく忍ぶのだ。勿論、佛法のゆき方と、俗のゆき方とはちがふ。俗のものが珍とするものは道を修めるものが賤しむ所だ。忠と佞とは仲はよくない　邪は常に正を嫉む。故に貪欲なものは無欲の行を好まないのだ。しかしそんな時でも、我等は忍ばねばならない。正しいが故に、怒つてはいけない。忍は大舟だ、難を渡ることが出來る。忍は又良藥だ、能く多くの人の生命を救ふ。私が今、佛陀となることが出來、諸天に仰がれ、獨り三界を歩いて、心安穩でゐるのは、忍のおかげなのだ。よく忍德を知らなければいけない。』

王子としてどんな贅澤でも出來た羅睺羅は、涙ぐみながらかう云ふ心の喜を味へる今の境遇を、反つて喜ぶやうに見えた。

六七　毘舍佉の布施

或る日一人の女が祇園精舍に行つて佛陀にお目にかゝり、

『私は舍衛城にゐる毘舍佉と云ふものですが、よろしかつたら、お弟子の方達をおつれして食事に來て戴きたい。』と云つた。

佛陀は承知された。それで毘舍佉は大いに喜んで歸つた。

その日の晩から雨が降つて、翌日も雨だつた。世尊が呼ばれて食事をすました時、毘舍佉は佛陀のそばに來て坐つて云つた。

『世尊、お願ひしたいことが八つあるのです。聞いていたゞけますか。』

『毘舍佉よ。如來は、そのたのみ事がなんであるか知る迄は承知をしないものなのだ。』

『それでも私のお願ひしたいことは、悪いことではないのですから聞いて戴きたいのです。』

『悪くないことなら聞いてもいゝが、まづ話をしたらいゝだらう。』

『きつと聞いて戴けますね。』

『それはわからない。』

毘舍佉は相手が相手だから冗談は云へなかつた。

『それでは申しますが、私は、生涯、雨の時に比丘の方が着る衣を先づ施したいのです。それか

ら新しく入られる方に食を施したいのです。又旅に行かれる比丘の方にも食を施したいのです。又病氣の方と、看病なさる方に食を施し、病める方に藥を施し、僧院には不斷に粥を供養し、又比丘尼の方に浴衣を施したいと思ふのです。聞いていたゞけませんでせうか。』

『どう云ふ理由からそんな氣になつたのだ。』

『實は、私が今朝、食事の用意が出來たことを女中にお知らせしておいでと云つたのです。ところが女中が暫らくして歸つて來て、比丘の方にはお逢ひしなかつたと云ひました。私は不思議に思つて聞きましたら、比丘樣達は雨が降つてゐる中を着物をぬいで立つてゐらつしたので、きつと之は自ら雨にさらしてゐる裸體の行者達だと思つて、びつくりして歸つて來たのださうです。世尊よ。私はおかげで二度使をやらなければなりませんでしたが、恥しがつてやるのに困りました。裸體はあまり見よいものではないと思ひますので、雨の時に着る特別な着物を僧院に布施したいと思つたのです。それから第二の願は、新しく入つて來られた方は、どこを歩いていゝか、どこへ行つたら食物が得られるか御存知ありません。それでつかれていらつした所をなほおつかれになつて、途中でへたばつてしまふ方が多いと思ふのです。それで入つて來られた方に食物を布施したいと思つたのです。

第三は、世尊よ。出てゆかれる比丘は布施を求めるために餘計な時間をとつて、あまり遠く行かうと思ふ處におつきになることがあるだらうと思ひましたので。

第四は、世尊よ。病氣の方が適當な食物を得られなかつたら御身體の爲によくないと思ひますので。

第五は、世尊よ。病人を看病される方が自分で食を求めに出かけられるのは大變ですし、その爲に時間をとるのは御病人のためにもよくないと思ひますので。

第六は、世尊よ。若し病める比丘が藥を得られないために、病氣が重くなるやうなことがあつてはいけないと思ひますので。

第七は、世尊よ。私はいつか世尊が粥の功德をのべられ、粥は心をとゝのへ、飢と餓を癒し、滋養と健康の爲によく、病氣の時にもいゝとおつしやつたのを聞きましたから。

第八には、比丘尼樣方が又川の水で娼婦達と同じ處で裸體で水浴される癖がありますが、世尊よ、ある時娼婦達はこんなことを云つて嘲つたさうでございます。「比丘尼さん方、お若い内から淸淨をお守りになつても何の御利益もありませんよ。それより若い內はたのしんで、お年を召してから淸淨な生活をなさると、貴女方は二つの目的を達することが出來るでせう。」さうして

皆で笑つたさうでございます。それに世尊、女の方が天日のもとで、皆の見てゐる處で、娼婦達と裸體になると云ふことは、あまり見よいものではございませんから。それで私は浴衣を布施さして戴きたいと思つたのです。』

そこで佛陀はなほ云つた。

『毘舍佉、あなたの云ふことはよくわかつた。しかしあなた自身にとつて何の利益があつて、そんな望を起したのです。』

毘舍佉はすなほに答へた。

『私は、たゞある比丘が死なれでもした時、世尊が、その人に就て、いろ〳〵話をされ、その人が涅槃に入つたり、悟を得られて阿羅漢になつたりしたことを話されるでせう。その時、私は私かに、その兄弟は以前、舍衛城にゐらつしたかどうかを聞くでせう。そして舍衛城にゐらつしたと云ふことを聞く時、私はかう思ふでせう。

その方はきつと、私の捧げたものをとつて下さつたでせう。雨の時は私が布施した着物を着て下さつたでせうし、入つて來た時、又旅行に出かけられる時は私の捧げた飯をたべて下さつたでせう。又病氣の時は私の捧げた食物をたべて下さつたでせうし、又看病なさつた時も食べ

て戴けたでせうし、又病氣の時は藥をのんで下さつたでせうし、また粥をすゝつて下さつたでせう。さう云ふ風に考へることが出來た時、私はさぞ心の内で中々御役に立つことが出來てよかつたと思ふでせう。そしてその幸福によつて私の心は安らかになるでせう。世尊よ。これが私の八つの布施を私自身の爲にもお願ひしたいと思つた理由です。』

そこで佛陀はよろこんで云つた。

『あなたの望は正しい。私は喜んで八つの布施を戴きます。それはあなたの喜でもあるでせう。正しい婦人の施は、心の喜を得るために、惜しげもなく施さうとするのです。だからその贈物は、尊く、悲しみに打ちかち、幸福を生み出すのです。惜しいと云ふ氣が少しでもあつた施は、その人を幸福にはしないでせう。しかし喜んでする、慈悲に富んだ贈物こそ、彼女を幸福にし、布施されたものを同時に幸福にするものです。』

毘舍佉は、それを聞いて歡喜した。

この話で、比丘や比丘尼がどんな生活をしてゐたかが一面うかゞはれるやうに思ふ。

彼等はいかにも物質的には貧しい生活をしてゐた。しかし、それだけ心の内は喜に滿ちてゐた。佛陀の愛に彼等はふれることが出來たのだ。

六八　玉耶の改心　附けたり婦道

須達長者に息子があつた、齡頃になつたので、ある長者の娘の玉耶と云ふのを娶つた。ところがこの玉耶は、美人だつたが、自分の美に自惚れて、夫や舅、姑に仕へることを少しもしないで、侮る風があつた。

そこで須達長者夫婦は、『子の妻が法に從はない、しかし棒で打つわけにもゆかない。何とか敎へて、增上慢になつて、しめくゝりが出來ないやうなことにしたくない。』と思つた。

そして玉耶を敎化する力のあるものは佛陀より他にないことを知つた。

そこで佛陀に哀願した。

佛陀は承知して、諸〻の弟子をつれて須達長者の處に來た。家中でお出迎をしたが、玉耶だけは佛陀を虫がすかないやうに嫌つて逃げた。しかし夫や夫の兩親から、佛陀に逢ふやうに嘆願された時、逢ふだけは逢つてもいゝと云ふ氣になつた。逢つたつて自分は佛陀には瞞されはしないと思つた。

それで反感をもちながら佛陀の前に出た。ところが一目佛陀を見ると、今迄の反感はすつかり

なくなつて、誰にも打ちとけない玉耶も、佛陀には何となく感動した。そして反感のもちやうもなく、何となく溫い心に抱かれてゐるやうな氣になつた。反對がしたくも、全部つゝまれてしまつたやうに感じた。

そして心がうちとけた。佛陀は慈顏をもつて接した。

しかし佛陀は言葉に何の飾もつけず、平氣で云つた。

『女は、顏の美しいのをたのんで驕慢になつてはいけない。顏のいゝのは本當にいゝとは云へない。心や行がよくつて始めて人々に愛敬される。顏のいゝのは愚人を誘惑することは出來るが、誘惑の出來ない人を尊敬さすことは出來ない。それは天人の喜ぶところではない。他人の弄具になるには適してゐるが、立派な人間になるには適しない。女の身には三の障と十の惡がある。三つの障とは、一には子供の時は親に自由をさまたげられ、二には出て嫁いで夫に自由をさへぎられ、三に、老いては子供に自由をさまたげられるのを云ふ。十惡とは一に生れた時父母に喜ばれず、二に甘やかされた養育を受けない。三に父母に結婚のことで心配をかけ、四に心が常に人を畏れ、五に父母に別れ、六に身を他家によせ、七に懷姙の難あり、八に出産の難あり、九に常に夫を畏れ、十に恒に自在を得ないことを云ふのだ。』

玉耶はさう云はれると恐しくなつた。

『それでは一體女はどうすればいゝのですか。』

『妻たる道に五等ある。一は母婦である。二に臣婦であり、三は妹婦、四は婢婦、五を夫婦と云ふのだ。母婦と云ふのは夫を愛すること子を愛するやうにすることを云ひ、臣婦と云ふのは夫を君の如くするのを云ひ、妹婦と云ふのは夫を兄のやうにするを云ひ、婢婦と云ふのは夫を奉ずること妾の如くなるを云ふのだ。そして本當の夫婦と云ふのは、永く父母に離れ、親とは段々疎遠になり、恩愛の情、親愛の實、形は異なつても、心を同じくし、尊奉敬愼して、驕慢の情なく、よく內外を治めて、家を殷んにし、賓客をよく接待して、夫の名を揚げるのをいふのだ。また舅姑や夫に奉事するのに五善三惡がある。三惡は去つて五善につくことが必要だ。五善とは何かと云ふと、夜遲く寢ね、早朝に起き、髮を手入れし、服を整へ、顏を洗ひ、手を拭ひ、事があれば第一に夫に云ひ、常に恭順で、美味は先づ夫にすゝめるそれを第一の善とする。

夫に叱られてもよく忍び、口を愼しみて怒らないで、心に恨まないのを第二の善とする。

一心に夫を守り恒に及ばないのを恐れ、邪念のないのを第三の善とする。

常に夫の長壽を願ひ、夫の遠くにゆく時は、家中を整理して、二心なきを第四の善とする。

常に夫の悪を念はず、その善を念ひ、よく家名をあげ、親族歡喜して、人々に譽められるのを第五の善とする。

三惡と云ふのは、

一に暮れないのに早く寢ね、日が出ても起きず、夫に叱られると、反つて之を罵るのだ。

二は、美味があれば先づ自分が食ひ、夫に惡食を食はせ、夫に一心でなく、妖邪の念をはさむことだ。

三は、家政を治めず、遊興に耽けり、人の長短を捜し、他のよし惡を批評し、言語を謹しまず、爭を好み、親族に憎まれ、人に賤しまれることだ。

五善を行ふ婦は人に愛敬され、譽を受け、九族悉くその榮を蒙り、天神地祇に護られて禍を受けない。子孫にその德が及ぶものだ。

しかし三惡を行ふ婦は、常に人に憎まれ、現世の身は安穩でなく、種々の惡鬼衆毒に惱ませられ、願ふ所を得ないで、多くの災にあひ、遂におちつく所を得ないであらう。玉耶よ。お前は善き婦になることを望むか、それとも惡しき婦になることを望むか。』

玉耶は淚をながして云つた。

『私はまちがつてゐました。私は愚かでした。世尊の教化でやつと目がさめました。之から本當の夫婦の如くにつとめ、驕慢な心を起すことはいたしません。』

佛陀は云つた。

『人間は誰でも過があるのだ。よく改めることが出來たら、それより善いことはない。』

六九　佛陀と調馬師

佛陀は人に說くのにいつも至れりつくせりである。

或る日調馬師の親分が佛陀を訪ねて來た。その時佛陀は云つた。

『馬を調伏するにはいくつの法があるか。』

『三つの法がございます。一には柔軟、二には剛强、三には柔軟剛强です。』

『もし三つの法を以てしても調伏出來ない時はどうする。』

『殺します。』

調馬師の答は明瞭だつた。そこで調馬師が聞いた。

『世尊が、人を調御するにはどう云ふ法をとられますか。』

『私も三つの法を以てする。一には柔軟、二には剛強、三には柔軟剛強だ。』
中々佛陀もさばけてゐる。
『それでもだめでしたら、どうなさいます。』
『殺すね。』
調馬師はすつかりおどろいた。
『殺生はお禁じになつてゐるのではないのですか。』
『勿論如來の法には殺生は不淨だとしてある。そして殺生がいゝわけはない。しかし三種の法でなほ調伏することが出來ないものは、ともに語るに足りない。また教授もしないし教誡もしない。如來が、與に語らず、教授もせず、また教誡もしないのは殺すも同じことぢやないか。』
『本當にさうです。』
そこで調馬師の親分は佛陀の弟子になつて、殺生をやめた。

七〇　糞尿をあびた尼提の出家

或る日佛陀が舍衛城を阿難をつれて歩いてゐられると、尼提と云ふ非常に貧乏で、人に雇はれ

て、糞を器に入れてそれを城外にすてにゆく仕事でやつと飯を食ふ男が向ふから來た。尼提は心の内で佛陀を崇拜してゐただけ、自分が臭氣の强い不淨なものの滿ちてゐる入れものを背負つてゐるのを耻ぢて、佛陀を見ると心で祈りながらこそ〳〵とわきの道に逃げていつた。佛陀はそれを見ると、尼提の心を知つた。それで阿難と、尼提のさけていつた道を、さき廻りして、わざわざと尼提にお逢ひになつた。尼提はびつくりして佛陀を仰ぎ見ながら恐縮して道をよけた。

『自分は穢れてゐる。佛陀は淸淨だ。自分のやうなものが佛陀に近づいては、罪がます〳〵重くなる、これも前世の惡業の報だらう。』

そしてよけようとして、恐縮しすぎた結果瓶を道傍の壁にぶつけて瓶をこはしてしまつた。そして糞汁を全身にあび、往來をよごした。

尼提はどうしていゝかわからなくなつて、道に跪いて合掌して、

『すみません。』とあやまつた。

この時、前から尼提の人となりと、名を知つてゐた佛陀は、尼提の側に行つて、優しく、

『尼提！』と名をお呼びになつた。

尼提は自分の耳を疑つて默つてゐた。

『尼提、今、お前も出家したらどうだ。』

尼提は驚いて云つた。

『私のやうな卑しい穢れたものがどうして出家なぞ出來ませう。世尊は王樣の御子であり、他の方も御立派な方許りではありませんか。』

『そんなことはない。私の法は淨水があらゆる穢を洗ひ淸めるやうなものだ。又大きな火が、大小好惡の別ちなく皆燒くやうなものだ。我が法は大海のやうなものだ。あらゆるものを受け入れて皆、諸々の欲からのがれるのだ。富も貧も、貴賤もわが法では問題にはならないのだ。』

そして佛陀は偈をお說きになつた。

『わが法の益を得んとせば、唯とく出家すべきなれ。
甘露を得るは智慧による、いかで種姓に由るべしや。
貴き、また賤しきも、身はこれ共に四大空、
種姓は假の區別なり、智慧なき者のみ救はれず。』

尼提はすつかり嬉しくなつて云つた。

『私のやうなものでも御免し戴ければ。』

佛陀はそこでよろこんで阿難と糞だらけの尼提を城外の大河の邊につれて行き、身を潔め、心を潔めて、祇園精舍にともなつた。
尼提の心は歡喜した。

七一　大愚槃特の悟

或る時、佛陀は精舍の門を出ようとすると、門の外で大聲で泣いてゐる男がゐる。見ると、皆から馬鹿あつかひにされてゐる槃特が、わあ〳〵云つて泣いてゐる。あまり利口な男でないことは一見してわかる。だが佛陀は槃特の珍しく人がよく、正直者なのを知つて、私かに同情してゐた。それで槃特のそばによつて問かれた。

『何を泣いてゐるのだ。』

『世尊、私は性愚鈍で兄が教へてくれた一偈を滿足に覺えることが出來ないので、兄にお前のやうなものは望がないから、家に歸れ、こゝにゐてはいけないと、云つて逐ひ出されたのです。それで途方にくれて泣いてゐたのです。』

『さうか、それなら氣にすることはない、私の處にくるがいゝ、自分で自分の愚かなことを知る

のは智者だ。愚者は自分は智者だと自分で云ふ。さう云ふのが本當の愚癡だ。』
そこで佛陀はつれて歸つて、阿難に教へさしたが、阿難もどうにも手がつけられなかつた。
そこで佛陀は二つの句を教へた。それは、
『塵を拂ひ、垢を除かん。』と云ふ句だ。
しかしその句さへ覺えることが出來なかつた。皆驚いて望がないと話しあつた。
しかし世尊は望を捨てなかつた。そして槃特を呼んでおつしやつた。
『お前に比丘達の履物をふき掃除することは出來るか。』
『出來ます。』
『それならやつてごらん。』
そこで槃特はその仕事にとりかゝらうとしたが、比丘達は自分がすることを修行の一つにしてゐたので、槃特が履物掃除に行つたら斷つた。そこで佛陀は皆に槃特の爲に私がさすやうにしたのだから、斷らないでやらせる方がいゝと注意した。
そして槃特が皆の履物を拭きに行くと、皆も槃特に同情して、
『塵を拂ひ、垢を除かん。』と云ふ句を教へた。

槃特はそれから一心に履物掃除をつとめ、口の中で兩句を云つた。遂に覺えたのだ。

そしてその句の意味も終ひにわかつた。

『塵垢には二つの意味がある。一つは內で、二は外だ。外の垢とは灰土瓦石なぞ目に見えるごみだ。除くとは淸淨にすることだ。內の塵垢は、結縛だ。智慧はこれを除いて、內を淸淨にするのだ。』

さうわかると、心の內がはつきりして來て、今迄わからなかつたことがわかつて來た。そこで槃特は思つた。

『塵は欲だ。土や塵と云ふのは欲だ。智者はこの欲をのぞくのだ。之をのぞかないと恥知らずの放逸なものになり、いろ〳〵の厄介な因緣が生じて來て、人を束縛し、動けないやうにし、地獄に墮す。瞋も塵だ。智者はそれをのぞく、さもないと恥知らずの放逸なものになり、他人と自分を不幸に落し入れる。癡も塵だ。智者はよくこの癡をのぞく、さもないと恥知らずの放逸なものになり、停止する所を知らない。』

そこで槃特はこの三毒を除くことを心がけた。その方は元々人並以上に素質があつたので、わりに早くそれを除くことが出來、平等に心を動かし、愛憎なく、無明の殼をやぶつてすべてを見

通すことが出來るやうになり、心が濶然と開けた。
槃特、すつかり喜んで佛陀の前に出で、最敬禮をして云つた。
『やつとわかりました。心の内の塵を拂ひ、垢を除くことが出來ました。』
『どうわかつた。』
『除くとは悟です。垢とは結です。』
『さうだ。よくわかつた。除くは悟で、垢は結だ。』
比丘達は槃特がとう〳〵悟つたと云ふことを知つておどろいた。
佛陀は云つた。
『多くの經を誦しても本當のことが解らなければ何にもならない。一つの法句でもそれが本當にわかり、それを實行すれば道は得られるのだ。槃特をごらん。』
槃特は祇園精舍の名物男の一人になつて、人々から尊敬されるやうになつた。しかし槃特は相變らず、皆の履を拭ひながら小聲で云つた。
『塵を拂ひ、垢を除かん。』

七二　阿那律、肉眼を失つて天眼を得る

或る日佛陀が說教された。阿那律もその時祇園精舍に來てゐた。そして佛陀の說教を聞いてゐたが、その時、連日のつかれが出たか居眠りした。

佛陀は話が終つてから、阿那律に云つた。

『お前が道を行ふのは、王法を畏れ又は盜賊が怖いからか。』

『そんなことはありません。』

『それならなぜ出家し學道をするのだ。』

『老病死や、憂愁苦惱を厭ひそれを捨てる爲です。』

『お前は今までよく信心堅固に出家し學道した。ところが今私が說教してゐるのを聞きながら眠つたのはどう云ふわけだ。』

阿那律は跪き合掌して云つた。

『私は今日以後、たとへ形がとろけ、身體がたゞれても、如來の前では居眠をしません。』

それから阿那律は曉になるまで眠らない日がつゞいた。それで眼をわるくした。

佛陀は氣にして云つた。

『あまり過ぎるのはよくない、及ばないのもよくないが、その中を行ふがいゝ。』

『前に如來の前で私は誓ひました。それに違ふことは出來ません。』

『そんなことは氣にしすぎないで、目を大事にしなければいけない。』

しかし阿那律は聞かなかつた。それで佛陀は耆婆に云つて、見てもらつた。

耆婆は、

『眠ればなほります。』

そこで佛陀は阿那律に云つた。

『お前、寢なさい。一切衆生は食物によつて存する。食しなければ存在しない。眼にとつては睡が食だ。涅槃にも食がある。』

『涅槃は何を食にします。』

『無放逸だ。無放逸だと無爲に至ることが出來る。しかし先づお前は寢るがいゝ。』

『世尊、眼は睡を食物にするとおつしやいましたが、私は眠るのに堪へません。』

さう云つて阿那律は眠らなかつた。

そしてとう〳〵めくらになつた。

ある時、阿那律は衣を縫はうと思つて糸を針の孔に通すことが出來なかつた。誰かにそれをたのみたいと思つた。

佛陀はそれを知つて云つた。

『阿那律、針をもつておいで私が通して上げよう。』

阿那律は恐縮した。しかし佛陀はたつて阿那律から針をとつて糸を穴にさしてわたした。

阿那律の見えない目には涙が浮んだ。

或る日阿那律は、阿難に逢つた時云つた。

『三衣がやぶれた、どうか諸比丘と一緒に私のために衣をつくつて下さい。』

阿難はそのことを比丘達に云つた。それで比丘達は阿那律の處に出かけた。佛陀はそれを知つて阿難に云つた

『なぜ私にたのまないのだ。』

そこで阿難は謹しんで云つた。

『世尊どうぞ、阿那律の所に行つて、彼の爲に衣をつくつて下さい。』

そこで世尊も出かけられ、皆で割裁ち、皆で縫つて一日で三つの衣が出來た。
佛陀は自分の一言が阿那律の目を奪つたことを如何に心にかけられたかがわかる。同時に阿那律が如何に佛陀を尊敬してゐたかがわかる。かくて阿那律は佛弟子の內で天眼第一の名を得た。
佛陀は阿那律が肉眼を失つたかはりに、天眼を得たことをせめてもの慰にした。
佛陀の心中がよくわかるやうだ。
佛陀はある時阿那律に逢つた時、阿那律は、
『少欲で、足ることを知ることは大事と思ひます。私はそれを得たく思つて修行してをります。』
と云つた。
佛陀は喜んで云つた。
『それは本當にいゝことだ。お前が今念じてゐることは、大人も念じてゐることだ。お前はこの法は精進者の行ふところで、怠者の行ふところではないと思つて務めるがいゝ。私も精進で成佛したのだ。阿那律、諸々の佛は皆、同一類で、戒律も、解脫も、智慧も同じだがたゞ精進だけが佛によつてちがふ。過去現在未來の諸々の佛の內で精進の點では私が一番勝つてゐるのだ。八大人念法の內で、第八の精進が最上なのだ。尊く、貴いとしてある。それは乳から酪が出來、酪

から酥が出來、酥から醍醐が出來るやうなもので、醍醐が中で最上無比のやうなものだ。阿那律、お前も八大人念法を奉じ、この第八の精進をつとめてほしい。私の法は少欲者の行ふ所で、多欲者の行ふところではない。又精進する者の行ふところで、怠者の行ふ道ではないのだ。』

阿那律は涙ぐみながら師の云ふことをきき決心を新たにした。

佛陀の愛が阿那律の心の底にしみこんで來た。

七三　聞二百億の琴の譬

聞二百億(一名二十億耳とも云ふ)と云ふ非常な金持の家に生れた息子があつた。あまり大事に育てられたので、足で土を踏んだことがなく、足の裏に長い毛が生えてゐたとまで云はれてゐた男だが、或る日佛陀の說法を聞いてすつかり感動し、『よし出家して一日一食で樹の下に伏しても いゝから。』出家したいと云ふ氣になつた。兩親は元より反對したが、聞二百億があまり熱心なので承知した。

そこで彼は大喜びで祇園精舍にゆき、『出家した以上は悟を得なければ退かない。』と決心し、度はづれに熱心に修行した。元より樂をしすぎて身體が軟かなので、足や脛からは血がながれ、

見るも悲壯な修行の仕方をしたが、どうも悟を得なかつた。それに教團の人々が金がないので、衣食にも困るのを見たせゐもあつて、自分のやうな人間は、どうせ悟は得られないのだから、それより俗に還つて布施でもした方がいゝのではないかと思つた。

さう云ふ風に迷ひ出してゐることを知つた佛陀は聞二百億の處に行つて、

『お前は獨りで坐禪して諸々の福業を得たいと思つてゐるのか。』

『さうでございます。世尊。』

『お前は家にあつた時よく琴をひいたさうだが、本當か。』

佛陀に不意にさう云はれて聞二百億は驚いたが、正直に云ふより仕方がないので、云つた。

『はい。』

『それなら、琴を彈く時、絃が強くはりすぎたら、いゝ音が出るか。』

『出ません。』

『絃がゆるかつたらどうか。』

『矢張りいゝ音はいたしません。』

『修行の仕方もそれと同じだ。あまり緊張しすぎてもいけない。氣をゆるめてもいけない。ほど

よくしないといけないものだ。』

それを聞いた時、聞二百億は心に思ひあたることがあつた。琴をひく時は心をゆつたりもち、無心になり、絃を程よくしめて彈かなければならないことを知つてゐた。『あれだ。』と思つた。そこであせらず、あわてず、心を落ちつけて修行した。それから目に見えて、いろ〳〵のことがわかり、遂に悟を得ることが出來、阿羅漢になれた。

七四　阿難と若き旃陀利の女

ある時、阿難が城中に入つて食を乞うて歸つてくると、道に井戸があつて、旃陀利の若い女が水を汲んでゐた。阿難は喉が渇いてゐたので、つい水を一杯所望した。

若い女は自分の身が賤しいので遠慮して云つた。

『水をさし上げるのを少しも惜しむわけではありませんが、私は旃陀利の女ですから、水をさし上げるのは反つてよくないことになると思ひます。』

『そんなことはありません。私は沙門で誰でも平等に視るのです。貴いとか賤しいとかの區別はありません。どうか水をください。急いでゐますから。』

旃陀利の娘はそれを聞くとすつかり喜んで水を捧げた。阿難は謹しんでそれをうけとつてのんだ。少しも賤しむやうな所はなかつた。

娘に禮を云つて立ち去つた。しかしそれがいけなかつた。娘は阿難の後姿をぼんやり見てゐた。娘は阿難に感心しすぎた結果、遂に阿難が好きになつてしまつたのだ。

その娘の母は咒文の名人だつた。娘は母にさう云つて、自分の思を遂げさしてもらはうと思つた。

そこで母の處へ出かけて嘆願した。

『佛の弟子に阿難と云ふ人がゐますが、今日その人に逢うてから、どうしてもその人が忘れられないのです。どうぞお母さんの力で阿難をこゝによびよせて下さい。』

母は云つた。

『私の力ではどうすることも出來ない種類の人が二つある。一つは欲を斷じた人で、他は死んだ人だ。沙門喬答摩は徳の高い人で、その弟子達も欲を斷つてゐると聞いてゐるからうまくゆくかどうかわからない。それに王樣も喬答摩を信仰してゐられるから、うつかりしたことをするとどんな祟があるかも知れない、それはやめた方がいゝと思ふ。』

『お母さん、もし阿難さんをよんでくださらなければ、私は生きてはゐません。それに阿難さんの、私を見た樣子でも、阿難さんは欲を斷つてゐらつしやる方とは見えませんでした。』
『死んではいけない。それでは出來るだけ呼びよせるやうにして見よう。』
母は娘の愛にひかされて、呪文をとなへ、あらゆる力を盡して阿難を呼びよせた。
その魔法のきゝめがあつたのか、なかつたのか、それはわからないが、阿難も旃陀利の娘を忘れかねて、ついふら〳〵と旃陀利の家の方に引きよせられて來た。
母はそれに氣がついて娘に云つた。
『阿難比丘がいらつしやるから早くこの室をかたづけ、蓐を敷き、香を燒き、花を散らして、室を淨くしておき。』
娘はよろこんで母の云ふ通りにした。
阿難が來たので娘は喜んで阿難を家にあげた。阿難は上りはしたが、氣がとがめて、つい泣いてしまつた。そして心に云つた。
『私はとう〳〵誘惑されてこゝまで來てしまつた。私は一體どうしたらいゝのか。』
阿難は恐しくなつて、泣きやむと共にその家を出て逃げて歸つた。

旃陀利の娘はそんなことで引つこんではゐない。益々積極的に阿難を誘惑しようとした。そして出來るだけ美しく着飾つて、まだくらい内に家を出、舍衛國の門の處で阿難のくるのを待つてゐた。娘の執念は一通りではなかつた。

ところが其處に朝早く阿難がやつて來た、娘は大喜びで阿難のあとをつけた。阿難はどうかして娘と放れようとしたが、娘はどこまでも阿難のあとをつけて來た。阿難はすつかり耻しくなつて、祇園精舍に歸つて來て、佛陀の前に跪き、

『世尊、旃陀利の女が私をなやまします。何處までも私のあとをつけて、私から放れてくれません。どうか私を助けて下さい。』

世尊は微笑しながら云つた。

「困つた男だ。しかし心配することはない。この難を免れさしてやらう。しかし之からよくこりるがいゝ。』

世尊はさうおつしやつてから、女の處に出かけて云つた。

『阿難と結婚したいのか。』

『はい。』

『御両親に相談したのか。婚姻の法は親のゆるしがいるのだ。』
『もう両親は許して下さりました。』
『さうかそれなら御両親が自分でこゝに来られて、たのまれるのが順序と思ふ。』
娘はそこで家に歸り、父母をつれて佛陀の處に行つた。
『親が参りました。』
『あなたは娘を阿難に與へる氣ですか。』
『はい、おつしやる通りです。』
『それならもう家に歸つてもよろしい。』
そこで佛陀は云つた。
『もしおまへが阿難と結婚したいなら、出家をするがいゝ。』
『それでは出家いたします。』
そこで佛陀は娘の髪を剃らせ、法衣を着させた。そして親しく敎へられた。
娘は阿難の妻になりたい一心で、熱心に修行した。そして佛陀の云はれることを熱心に聞き、他の仲間と同じ生活をした。

その内に心が落ちついて來、今までの自分の執着が耻しくなり、熱病がなほつた。

佛陀はくはしく、欲は不淨なもので、いろ／＼の苦はそれから起ることを敎へられ、欲情に支配されて道をあやまるのは、蛾が愚癡の爲に猛火にとび込んで燒かれて死ぬやうなものだと云ふことを敎へられた。

生活がすつかりかはり、氣持もすつかりかはつた。心の內がいつのまにか淸淨になり、佛陀のありがたさがはつきりわかつて來た。

そこで娘は、自分が阿難にたいして、善くないことをしようと思つてゐたことがわかつて、後悔した。そして佛陀に謹しんで懺悔した。

そこで禍が變じて福になり、困つた話が、反つて美しい話にかはつた。

しかし世間ではさう思はなかつた。佛陀が賤しい旃陀利の娘を出家さして敎團に入れた、と云ふ噂を聞いて、すつかり不愉快を感じた。又それをいゝ幸として佛陀の攻擊の材料にした。そしてそんな女を入團させる佛陀に供養するのも不快だと思ふ人も少くなかつた。

今迄氣持よく布施してくれるものも、斷るやうになつた。敎團の內部でさへ惡評するものもあつた。阿難はそれを聞くと、心を痛めた。しかし佛陀は平氣だつた。

佛陀は正しいと思ふことを行つて誤解を恐れる男ではなかつた。眞理だけが彼を支配した。

彼は好んで皆にかう云つてゐた。

『お前達、私の弟子よ。大河には恒河があり、搖尤那があり、阿致羅婆底があり、サラプゥあり、マヒイがある。その他海に注ぐ川は何の位あるか知れない。しかし一度大海にそれが流れこめば、その昔の名や、系統はなくなつてしまひ、唯大海の名で呼ばれる。そのやうにお前達も以前、貴族であれ、婆羅門であれ、吠舍であれ、旃陀羅であれ、出家して、我が敎に從ひ一所不住の生活に入れば以前の名と、階級は失ひ、たゞ釋迦族の子を奉ずる沙門と云ふ名でひとしく呼ばれるのだ。』

かう云つてゐる佛陀が他の非難でこの大事な確信をゆるがすわけにはゆかない。

云ふ者には云はしておくだけだ。

しかしその非難はつひに波斯匿王にまで聞えた、王はおどろいて、ほつたらかしておくと、佛陀の名譽のためにも、敎のためにもよくないと思はれた。そして自ら臣下をつれて駕をよせられ、忠言されようとした。しかし說きふせられるのは佛陀ではなく、王だつた。王は今更に佛陀の心の大きいのに感心して、心を淸められて歸られるのだつた。

七五　鬼子母の改心

佛陀が大兜國にゆかれた時、一人の女がゐた。自分の子供は澤山ゐて、それを人並以上に可愛がつてゐるくせに、人の子は盜んでそれを殺して食ふことが好きだつた。

その爲に嘆き悲しむ親がどの位あつたか知れない。しかしその夫が勢力家だつたのでどうすることも出來なかつた。

佛陀の弟子達もその話を聞いた。阿難が佛陀に云つた。

『今、町へゆきましたら、泣いてゐる人があるので、聞きましたら、子をさらはれたので泣いてゐるのださうですが、さう云ふ家は一軒だけではないのです。』

佛陀は靜坐して默想してゐたが、目をひらいて云つた。

『それは普通の人間ではない。鬼子母の生れかはりで、喜んで人の子を盜むのだが、之を改心させることは普通では出來まい。』

『世尊にはお出來になりますか。』

『勿論出來る。』

『どうすればいゝのですか。』

『その女の一番末の嬪伽羅をそつとつれて來て精舍の内にかくすがいゝ。』

そこで弟子達は、母親の留守に行つて、子供をとつて歸つて來た。

その鬼子母は、他から子供をぬすんで歸つて見ると、自分の最愛の末つ兒が見えなくなつてゐた。そこで氣違のやうになつて、泣きながら、家をとび出した。

そして十日の間氣が狂つたやうにうは言を云つて飯も食はなかつた。

『なぜそんなに泣いてゐるのだ。』

佛陀は鬼子母に近づいて聞いた。

『私が留守のうちに子供を失つたので。』

『なぜ家を留守にしてゐたのだ。子供が盗まれた時、お前は何をしてゐたのだ。』

佛陀のこの一語は、さすがの鬼子母の心にひゞいた、なぜかと云へば、その時鬼子母は他人の子を盗んだのだから。自分のしたことの當然の報を得たにすぎなかつた。鬼子母は始めて自分のしたことがわるいことを知つた。そして思はず、地に平伏して佛陀を禮拜した。

佛陀は云つた。

『お前は自分の子を愛するのか。』
『はい、愛してをります。少しも自分のわきからはなしたくありません。』
『お前は我が子を愛しながら、なぜ他人の子を盗むのだ。他人もその子を愛してゐるから、子供をなくしたのをお前と同じやうに泣いてゐるだらう。それなのにお前は人の子を盗んで之を食ふ。その罪の報い、罪の恐しさをお前は知らないのか、今のまゝで行くとお前の子のこらずが、お前の手から失はれる時がくるだらう。』
『どうかお許し下さい。お助け下さい。』
鬼子母は恐怖した。
『お前のしたことが、どんなに恐しいことかわかつたか。』
『はい。わかりました。』
『お前の子が歸つてくるのを望むか。歸つて來たら喜ぶか。』
『はい、歸つて參りましたら、こんな嬉しいことはございません。』
『お前がもし、今迄行つたことを心から悔ゆるか。もし本當に悔いて、再びそんなことをしないと云ふなら、お前の子が歸れるやうにしてやる。』

『はい、後悔いたしてをります。』
『後悔してゐる誠意を何で見せるか。』
『返していたゞければ、これから佛陀の敎の通りに従ひます。』
『本當か。』
『はい。』
『それならば、今後、殺生してはいけない。盜んではいけない。淫欲にまけてはいけない。噓をついてはいけない。酒をのんではいけない。この五つを守らなければならない。そして今迄の罪亡しをしなければいけない。』
『はい。承知いたしました。』
そこで佛陀は嬪伽羅をつれて來させて、鬼子母に返した。
鬼子母の喜は言語に絕してゐた。そして自分のしたことを心から後悔した。
彼女はもう鬼子母ではなかつた。
町の人々はもう子供をとられる心配はなくなつた。明い氣持で生活が出來るやうになつた。佛陀は鬼子母のやうな惡人でも殺しはしなかつた。そして生かした。

鬼子母はそれから罪亡しとして子供の守神にならうと、骨折つた。かくて鬼子母は愛子母になり自分の子供のやうに他人の子供を愛するやうになつた。

七六　迦留陀夷よく叱られる

佛陀の弟子は多かつた。だからその内には勿論いろ／＼の人がゐた。

彼の佛陀を淨飯王の命でお迎へに行つた、優陀夷（本名は迦留陀夷と云つたが）なぞは佛陀の弟子としては變つた男だつた。この男は時々、女のことでしくじりをし、又非難もされた。しかし佛陀はその度、叱つたり、注意をしたりなさつたが、迦留陀夷はその度、あやまつて許してもらつてゐた。自分でも自分のさう云ふ傾向に閉口して、その誘惑に負けさうになると水風呂をつくつて、その内にとびこんで、心を入れかへたりした。滑稽な人物だし、それに才もあり、佛陀がまだ悉達多太子でゐた時分から、お傍に仕へてゐたことがあつたりして、佛陀は迦留陀夷の人となりは全部知つてゐた。だから人のいゝことを認めてゐて、しくじりをしても、叱るだけで許されてゐた。

弟子の内には少し佛陀が寛大すぎると思ふものさへあつたが、既に佛陀も若くはなかつた。始

めのやうに嚴格一方ではなかつた。懺悔する者、よくなる見込のあるものは、改心さへすれば許すやうにしてゐた。

提婆達多なぞはその點隨分不服だつたらしいが、しかしまだ仲間が出來るまで、陰で不平を云つて私かに同感な人を集めだしてゐるに過ぎなかつた。表面に出て佛陀のやり方に不服を云ふものはなかつた。

佛陀は人間の弱點を知ると共に、それが段々よくなり得ることを知つてゐた。迦留陀夷なぞはその代表的な男だつた。

彼は祇園精舍に烏が集つて來て、あまりがあがあ云つてやかましく、折角の默想をやぶられるのを怒つて、弓をつくつて烏を射殺して佛陀に叱られたり、波斯匿王の處に出かけた時、末利夫人が晝寢より目ざめてあわてて大衣をまとつて、迦留陀夷に逢はれた時、どうかした拍子に衣が肩からすべりおちて裸體になられ、びつくりしてうづくまつたのを見て、喜んで歸つて來て皆に、『今日は波斯匿王の第一の寶を見て來た。』と云つて吹聽して佛陀に叱られたりした。

また美しい人妻の處へよく出かけて叱られたり、少年比丘に自分の持ちものを皆持たして、いろ〱の人をからかつたりして叱られたりした。

いつも叱られて許りゐるやうな男だつた。
或る日彼は祇園精舍のそばで婆羅門の美しい娘に逢つた。彼は例によつてすつかりその美しさに誘惑された。娘の方も迦留陀夷を憎く思つてゐなかつた。それで二人は話をしながら人々に見えない處に入つた。そして迦留陀夷は女と接吻した。しかし迦留陀夷は急に氣になつたと見えて、女をすてて逃げ出した。女は反つて自分を侮辱されたやうにとつて、自分で自分の身體に傷をつけ、衣をさいて、迦留陀夷に暴力を用ひて弄ばれたと、父につげた。
そこでその娘の父はすつかり怒つて仲間を集め、迦留陀夷が來るのを待ち伏せして彼を棒でなぐつたり、蹴つたりして、正氣を失つた彼を宮殿のなかに投げ込んで逃げて行つた。
迦留陀夷は宮殿の見廻りの男に見つけられ、波斯匿王の前につれてゆかれた。
さすがの迦留陀夷も之にはすつかり弱つた。そして王に、もう之からそんな馬鹿なことはしないと誓つた。自分でも目がさめたやうな氣がした。
その後、佛陀のお供をして、鴦伽國の阿和那と云ふ所の犍若精舍に行つた時、佛陀の坐禪されてゐるわきで自分も坐禪した。
この時彼は生れて始めて、靜かないゝ氣持を味はふことが出來た。

そして日暮に、坐禪を終へると、佛陀の前に出てから云つた。

『私はやつと今目がさめたやうな氣がします。今日おそばで坐禪してをります時に、世尊が私達のために實に深い恵をたれて下さつてゐる事が感じられました。私達が安穩に生きられるやうに、私達の内の無限の苦のたねをなくなすことが出來るやうに、敎へて戴いたありがたさが、しみ〴〵わかりました。私のやうな澤山の惡の種をもつものをすつかり救つて善法を獲さして戴けたことは實にありがたいことだと思ひました。以前、世尊が私達の正午過ぎの食事を斷つやうにされた時、實は私達は耐へ難いことのやうに思ひました。信者の人が正午すぎに園に來ていろいろ御馳走を持つて來て下さるのは、私達の樂しみだつたので、それがなくなるのは困つたことと思ひましたが、私達は世尊のおつしやることだから深いお考があるのだと思つてやめました。又世尊は夜の食をお禁じになりました。その時も私達は困つたことだと思ひました。夜いろ〳〵の人が供養して下さる食事は殊に御馳走が多かつたからです。しかし私達は、それも世尊の深いお考からと思つてやめました。又世尊は時でない時乞食にゆくことをお禁じになりました。雷雨の夜、食を街に乞ひにいつた比丘を見て、姙婦が鬼とまちがへて墮胎したのは事實でした。私は今それ等のことを想つてをりましたら、急に嬉しくなつて來ました。世尊のおつしやる

ことは實に正しいと思ひました。そして正しい念や、正しい智慧が、いかに美しく、我々の心を喜ばし、樂しませるものだと云ふことを本當に知りました。嬉しくつて仕方がありません。人間にこんな正しい喜があることを本當に知りました。』

佛陀はそれを聞いて本當に喜ばれて云つた。

『わかつたか、出家して道をたのしむより以上のたのしみがないことを。』

『はい。』

『本當にたのしいものだ。このたのしみを本當に知るものだけが、涅槃がどんなものだかを本當に知るのだ。』

迦留陀夷はすつかり嬉しくなつた。

始めてほめられた。

七七　迦留陀夷、偸蘭難陀比丘尼をなぐる

比丘尼に偸蘭難陀と云ふのがゐた。この女は迦留陀夷を女にして、迦留陀夷の善良さをなくしたやうな女だつた。矢張りよく叱られたが、阿婆摺の性質はぬけなかつた。しかし佛陀は叱られ

ても、逐ひ出しはされなかつた。この女は、大迦葉の眞面目な態度が、氣に喰はなかつた。
佛陀にはさすがに頭がさがり、感心してはゐたが、大迦葉を見ると、聖者顏してゐるやうな風に思へて、腹の虫がをさまらなかつた。それである朝大迦葉が乞食に行つて、鉢をもつて歸つてくるのに出逢ふと、唾をはいて云つた。
『縁起でもない。朝早くからいけ好かない外道を見た。』
大迦葉はさすがにさう云はれても怒らなかつた。靜かに聞えないふりしてゆきすぎた。しかしその噂はその場にゐた他の者から迦留陀夷の耳に聞えた。迦留陀夷はすつかり怒つた。彼も大迦葉を好きではなかつたが、しかし長老とし、又秀れた人格者として尊敬してゐた。彼は偸蘭難陀比丘尼とは同じ穴の狸時代によく知つてゐた。
彼はわざと偸蘭難陀のくる所に出かけて行つた。そして偸蘭難陀が彼を認めて笑ひながらやつて來た時、
『この惡婆め、よくも大迦葉に唾をしたな。この俺にも唾をするつもりか。』
さう云つて偸蘭難陀をめちや〳〵になぐり倒した。
佛陀はそれを聞かれた時、『困つた奴だ。』とおつしやつたが、別に叱られはしなかつた。

七八　迦留陀夷の死

迦留陀夷は誰とでも氣輕に話が出來、誰とも親しくつきあふことが名人だつた。殊に女の人とは氣樂で、話がよくあつた。愉快にむづかしくなく女の人に道をといて佛敎に歸依させる點では迦留陀夷にかなふものはなかつた。

舍利弗でも、大目連でも、大迦葉でも、そんなことは不得手だつた。迦留陀夷はそれ等の長老には出來ないことを氣輕にやつてのけた。皆時々眉をひそめたり、困つた奴だと思ふが、しかし陽氣で、毒がなく、さつぱりして、高ぶらず、皆を笑はして、しかも尊敬すべきものは尊敬してゐた。敎團の人氣男だつた。

佛陀も迦留陀夷には氣樂で、好きだつた。いくら叱つても、少しも恨むやうなことがなかつた。しかし時々は困つた奴だと思はれた。

迦留陀夷は或る日町を歩いてゐると、餠を燒いてゐる女がゐた。夫が留守で退屈してゐた。迦留陀夷は其處に食を乞ひに行つて、

『いゝ香がしますな。』なぞと云つて女を笑はした。そして女が餠を四つ持つて來た時、

『之は私が一人で戴くのは惜しいから、皆の處へ持つていつてやつて下さい。』と云つた。
そしてうまく女を祇園精舍の佛陀の處につれて來て、とう〱それを緣にして佛道に歸依さした。夫は、妻にひかれて佛陀參をし、夫婦とも熱心な佛教信者になつた。この夫婦に一人の娘があつた。それに養子をもらつた。迦留陀夷はその後もよくその家に出かけた。しかしその夫婦はその後間もなく病氣で續いて死んだ。

娘夫婦も、迦留陀夷がゆくと喜んで、敎をうけた。しかし或る日迦留陀夷はその娘の處へ行つて、思はない光景を見た。それは、娘が一人の知らない人相のあまりよくない男と仲よくなつてゐたことだ。その男は盜賊の親分で、娘と姦通してゐたのだ。迦留陀夷は困つた處に來たと思つたが、今更どうすることも出來なかつた。

男は迦留陀夷が來たのでこそ〱と逃げて行つた。邪魔された女は耻ぢ入るかはりに、窮鼠反つて猫を嚙む態度に出て來た。迦留陀夷も見て見ないふりも出來なくなつて、今のうちに注意しないと恐しい結果になるから、早く男と別れるやうにした方がいゝことをすゝめた。

女は默つて聞いてゐたが、迦留陀夷の忠告を親切からとはとらなかつた。自分の秘密を夫に語るのを恐れた。女はその結果一番恐しいことを考へた。それは迦留陀夷を殺すことだ。迦留陀夷

を生かしておいては、お饒舌りの迦留陀夷だ、夫にいつ話さないとも限らない。話されたらどんな結果になるかわからない。それに泥棒の親分に迷ひぬいてゐる時なので、どうしても別れる氣にならなかつた。

かくて迦留陀夷が注意したよりももつと恐しいことがくはだてられた。

女は男が來た時云つた。

『あの迦留陀夷を生かしておいては爲によくありません。』

『だが迦留陀夷は尊者だし、王樣の信仰を得てゐる人だから、うつかり殺すと、どんな目にあふかわからない。』

しかし女は、

『見つからないやうに殺せばいゝぢやありませんか。その位のことをあなたに出來ないわけはないと思ひます。』

と云つた。

男は乘氣にならなかつたが、女はどうしても迦留陀夷を生かしておいては危險だと云つた。そして自分が病氣だと云つて、迦留陀夷を呼んだ。

迦留陀夷がくると女は喜んで、『よく來て下さいました。あれからいろ〳〵考へました結果、男とわかれることにしましたから、御安心下さい。』と云つた。

迦留陀夷は、

『よく思ひ切りました。』と感心した。

女はそれからいろ〳〵迦留陀夷に話をしかけ、又迦留陀夷にいろ〳〵聞いた。

迦留陀夷はすつかりいゝ氣になつて、女の處に夜おそくまで話し込んで、そして歸つた。途中で男は待つてゐた。女と迦留陀夷が仲よく話してゐたのを知つた男は、なほ迦留陀夷を殺す氣になつてゐた。

迦留陀夷をやり過して男は一刀に迦留陀夷を切り殺して、糞だめのなかにかくした。

祇園精舎では迦留陀夷が歸つて來ないでも、二、三日は問題にしなかつた。しかし二、三日たつても歸つて來ないのでさすがに氣にした。

或る日迦留陀夷の死骸が見つけ出され、それが報告された時は、さすがに皆おどろき、同情した。佛陀も若い時から迦留陀夷を知つてゐるのを思ひ出して、悲しまれた。

波斯匿王はすつかり腹を立てられ、どんなこととしても殺した奴を見つけ出せと命令を出された。

人々は迦留陀夷のことだから何か女のことでしくじつて、嫉妬から殺されたのかと思つたが、佛陀は昔の迦留陀夷ではないことを知つてゐたので、そんな理由ではないと思はれたが、しかしあまり在家の人の生活のなかに立ち入つたことがよくないことを思はれ、皆に、今後、あまり町の人達と馴れ〳〵しくしないやうに注意された。

迦留陀夷を殺したものはまもなく見つかつた。迦留陀夷が女によばれて行つたことを知つてゐるものがあつたから。そして盜賊の親分と女は死刑にされた。

迦留陀夷の云つてゐる通り恐しいことは行はれたのだ。しかし迦留陀夷は自分のことには氣がつかなかつた。しかし彼の死はいゝいましめになつた。

七九　優波先那の美しき死

迦留陀夷の死は悲慘であつた。尤も迦留陀夷は切られた時、平和に死んでいつたかも知れない。しかしそれは誰も知らない。しかし佛弟子の內で誰も知つてゐる、美しい死をとげたものがある。それは優波先那比丘であつた。

或る日優波先那は舍利弗達と王舍城の近くの、森林で坐禪をくみ、三昧に入ることにした。舍

利弗は木の下に座をつくり、其處に坐禪してゐたが、そのすぐわきに一つの巖窟があつた。優波先那はその巖窟で坐禪をしてゐた。
優波先那はすつかり三昧に入つてゐた時、何か自分の身體の上をはひ、喰ひつくものがあるのに氣がつき、正氣に歸つて見ると、それは一尺許りの猛毒を持つてゐることで有名な蛇だつた。それに噛まれたものは間もなく死ぬことにきまつてゐた。
優波先那はそれを知つたが、少しもあわてなかつた。彼はたゞ舍利弗をよんだ。
舍利弗は呼ばれて何事かと思つて來た。
『舍利弗さん。私は毒蛇に噛まれました。毒の廻らない内に、皆にさう云つてこゝから出して下さい。』
『そんなことはないでせう。あなたの顏色は少しも變つてゐない。毒蛇に噛まれたのなら、そんない ゝ顏色はしてゐられるはずはありませんから。』
『舍利弗さん。この人間の身體は四大の集で出來た塵芥にすぎないのではありませんか。私とか、私のものとか云ふ考からはなれてゐる私達は、本來空なのですから、空なものが毒蛇に噛まれたつて、顏色がかはるわけはないでせう。』

優波先那は落ちついて云つた。舍利弗は感心して云つた。

『あなたの云ふことは本當です。あなたはそれ程まで、肉身を解脱出來たのですか。私とか、私のものとかからあなたのやうに解脱した人は、多羅樹を截るやうに、未來永遠に、輪廻をうけることはないでせう。本當にあなたはよく私からはなれることが出來ました。それでは顔色のかはらないのはあたりまへです。』

舍利弗は皆をよんで來て、優波先那を巖窟からそとに出した。毒は次第に廻つて來たが、優波先那は三昧に入つてゐるやうに何にも云はなかつた。

人々は目のあたり涅槃に入つた、解脱した人を見て、感激し、讃嘆した。舍利弗も偈をつくつて讃嘆した。

『久しく道を修めて
よく身心を調へし
比丘や尊き。

毒鉢を毀つが如く

重病の癒たるものの如く
歡びて生命をすてし
比丘や尊き。

求めざる者には報はあらじ
かく死に臨みて悔なく
智慧の眼にて世相を觀じ
火の宅を出づるが如く
惡草を絕するが如く
喜びてこの世を去れる
比丘や尊き。』
誠に佛徒らしい死に方ではないか。
佛陀も舍利弗にこの話を聞かれた時に、感動された。

八〇　悪い牛乳と善き牛乳

或る日舍利弗が佛陀の話を聞いて感心し切つて歸つてくると、補縷低迦と云ふ放浪して歩く修行者に逢つた。

補縷低迦は舍利弗に、

『何處に行つて來たのだ。』

と聞いた。

『今、世尊の御說法を聞いて歸るところだ。』と云つた。

『さうか、まだ師匠のおつぱいを吸つてゐるのか。子供だね。』

とからかつた。

舍利弗はそんなことを云はれて閉口する男ではなかつた。

『補縷低迦、君の教はつた教は邪教だ。君は質の悪い牛の乳をのんだから、すぐあきたのだらう。しかし私の教はつてゐる教は味へば味ふ程、味が深くなり、味ひつくせないのだ。いゝ牛の乳はいくつになつてのんでもうまくつて、あきないやうなものだ。』

補縷低迦は一言もなく去つて行つた。

實際佛陀の敎の味を一番深く味へた男の一人は舍利弗であつた。

八一　舍利弗

佛陀も舍利弗を信用してゐた。

だから自分の子の羅睺羅に舍利弗の敎を受けさした。そして沙彌戒を授けよと、舍利弗におつしやつた。

舍利弗は、

『世尊は前に二人の沙彌を持つことをお禁じになりました。私は既に周那と云ふ沙彌を持つてをります。ですから羅睺羅の戒師になることは出來ません。』と辭退した。

しかし佛陀は云つた。

『それは私は知つてゐるが、お前のやうによく敎誡するものは二人沙彌を養つても少しも差支がない。』

佛陀は規則に捕はれてゐる男ではない。

實際舍利弗には二人の師になる力もあり、羅睺羅を任せるに足る人間だと思はれたからだ。
或る日、佛陀は舍利弗のくるのを見て云はれた。
『どんな三昧に入つてゐたのか。』
『世尊よ、私はいつも空三昧に遊びます。』
『さうか。お前の顔を見てきつとさうだらうと思つた。實際空三昧は、三昧の最上のものだ。私がまだ佛陀にならない前、菩提樹の下で思つた。一切の人は世間を貪る念を起すから、生死の巷を流浪するのだ。もし諸法皆空の念に住めば、何も願ひ求めることはない、この無願三昧を得れば、死を求めず、生を願はないから無相である。即ち無相三昧だ。一切の人はこの三昧を知らないから、生死を流浪するのだ。私はかく諸法を觀て空三昧を獲て正覺を開かなければならないと思ひ、七晝夜の間、菩提樹を凝視てゐた。
舍利弗、私はさうして空三昧で正覺を得たのだ。空三昧は、諸ゝの三昧の王だ。
佛陀と舍利弗は、かく心と心が融合してゐた。しかし舍利弗だつて人間にはちがひなかつた。
佛陀だつて人間以外ではない。
舍利弗はいつもほめられて許りもゐなかつた。

或る時、舍利弗が親玉になつて、他の弟弟子達をつれて信者の施食を受けに行つた。羅睺羅も沙彌としてついて行つた。

佛陀は彼等が歸つて來た時、羅睺羅に逢つて聞かれた。

『どうだつた、今日の施食には皆滿足したか。』

しかし少年の羅睺羅の答は意外だつた。

『滿足した人もありますし、滿足しなかつたものもございます。』

佛陀は我が子の顏を見て云はれた。

『それはどう云ふ意味か。』

『上座と中座の比丘は美味を施されましたが、下座と沙彌には米飯に胡麻滓と菜を煮合せた粗末なものが施されました。世尊、胡麻油を食べれば力を得、酥を食べればつやを増しますが、胡麻滓と野菜では、氣力を増すことは出來ません。ですから私は何だか今日は氣力がないのです。』

『そんなことを云ふものではない。私達の修行の時を考へれば、それでも贅澤すぎる位だ。』さう佛陀は羅睺羅に云つたが、

しかし佛陀の心は面白くなかつた。

そして不公平な食事を施されて、自分達は平氣で美食した舍利弗に云はれた。

『舍利弗、お前は、今日不淨食をとつたな。』

舍利弗はすつかり驚いて食べたものを吐き出して云つた。

『之から一生の間、決して招かれてゆく食事はいたしません。乞食の法だけで食事をとります。』

と云つた。

舍利弗はそれから何處から招待されても、出かけなかつた。舍利弗を招きたいと思ふものは佛陀のお許を請うた。

佛陀はさう云ふ時、中々おゆるしがなかつた。だが舍利弗は少しも不平には思はなかつた。自分が美食を好むやうに思はれるのは心外だつたので、佛陀が斷つて下さることを反つて喜んだ。食ひもので不平をもつものが、佛弟子に一人でもゐることを、彼は喜ばなかつた。それは先づ自分が粗食に平氣なことを示さなければならないことを深く感じたからである。

佛陀は益々舍利弗を愛した。

過を見てその人の仁を知ると云ふことは本當である。

舍利弗は尊敬されていゝ男であつた。

八二　舍利弗訴へらる

舍利弗が齡をとつてからの話であるが、祇園精舍の夏坐をへて、一體佛教徒は夏の三ケ月の雨期は一處にゐて修行をし、その他の時は方々歩いて、說法したり、食を乞うたりするのが規定だつた。舍利弗はその夏の三ケ月の修行をすませたので、鉢を持つて旅に出かける許を、佛陀の處に求めて來た。

佛陀は元より心よく御許しになつた。そこで老いたる舍利弗は丁寧に佛陀を拜して、旅に出かけた。ところがそれから間もなく、一人の比丘が來て云つた。

「世尊、舍利弗は私を侮辱して旅に出ました。」

そこで佛陀はすぐ一人の比丘に舍利弗を追はして、すぐ歸るやうに云はした。

そして阿難に方々の室に行つて、皆に集るやうに云はした。人々は何事かと集つて來た。舍利弗も、佛陀に呼び戾されたので、何の用かと思つて歸つて來た。そして人々が集つてゐるのを不思議に思つた。

佛陀は舍利弗が來ると、嚴かに云つた。

『舍利弗、お前が去つてまもなく、一人の比丘が來てお前が自分を侮辱して旅に立つたと云つた。それは本當か。』

舍利弗は謹しんで答へた。

『世尊、私は生れてから今年で八十年近くなりますが、殺生した覺もなく、妄語した例もありません。又他人と言葉爭をしたこともありません。ですから萬一そんなことをしたとすれば、それは私の心が必ず何かで亂されてゐる時でせう。ところが今日は安居を終へた懺悔の日ですから、私の心は澄み渡つてゐます。こんな時他の人を輕んじるやうなことはするわけはありません。

世尊。大地はよく忍んでどんな不淨なものでも受け入れます。糞尿、膿血、洟唾などさへすべて受け入れて逆ふことはありません。私の心も今日はこの大地のやうに、よく忍んで逆ふ思はありません。

世尊。水は好む物も、好まない物も、一樣に洗ひ淨めて、憎愛の念はありません。私の心は今日は又水のやうでした。

世尊よ。火は山野を燒くのに、好惡を擇びません。私の心も又火のやうでした。

世尊よ。箒の塵を掃くのに好惡を擇ばないやうに、又角を截つた牛が巷を歩いても、溫良で犯

すものがないやうに、私の今日の心も、淫良で犯す氣はしませんでした。
世尊。美しい少女が屍を頸飾にすることを嫌ふ程、私は不淨に滿ちたこの身を嫌うてゐます。
そのやうに正念に住してゐる私が、どうして他の比丘を輕んじるやうなことがありませう。もし私の申す通りでなかつたら、世尊も、自ら知つてゐられるでせうし、かの比丘も亦それを知つてゐるはずです、若し私に過があれば、私はこの比丘に懺悔いたします。』
八十近い舍利弗がから迄云つた。人々は感動しないわけにはゆかなかつた。
佛陀は舍利弗を誹つた比丘に云つた。
『お前は今、過を懺悔しなければならない。もし懺悔しないなら、お前の頭は七つに裂けるだらう。』
そこで誹つた比丘は立ち上つて佛陀の前に跪いて、
『世尊よ。我が懺悔を受け給へ。』と云つた。
『お前は舍利弗の前でも懺悔しなければならない。』
かの比丘は仕方がないので舍利弗の前にも跪き云つた。
『わが懺悔を受け給へ。』

舍利弗は手でかの比丘の頭を撫でながら云つた。

『比丘よ。懺悔は佛法の内で、その効の廣大なものだ。過ちを悔ゆることは大いなる善だ。私はお前の懺悔を快く受ける。再び罪を犯してはいけない。』

人々はその美しい光景に感動した。

其處には佛陀始め、舍利弗達がゐるのだ。大目連や、大迦葉もゐたらう。阿難も謹しんで見てゐた。その光景や美しである。

八三　蓮華色女、目犍連を誘惑せんとす

舍利弗と兄弟分の目犍連（大目連）が、城中の園の中を歩いてゐると、肉づき豐かな、中年の美人が、媚をふくんで近づいて來た。

『目犍連さん。』

目犍連は女の顏をじつと見てゐたが、女の心を見ぬいた。

その女は過去にいろ〳〵の恐しい經驗を持つてゐた。今賣笑婦の群に入つてはゐたが、その心の内には貴きものが、なくなつてはゐなかつた。しかしその女は自分ではそれに氣がつかなかつ

た。そして誰かにそゝのかされて目犍連を誘惑しようと思つてやつて來たのだ。たしかに珍しい程の美しい女だつた。普通の男だつたら、心を動かさないことは出來ない程、魅力を持つてゐた。迦留陀夷だつたらすつかり喜んだかも知れない。

しかし相手は目犍連だ。女の心をすつかり見ぬいてしまつた。

『憐れな女よ。お前は自分の身體がどんなに、醜く、穢れてゐるかを知らないのか。お前の身體の內には骨と骨がつらなり、筋や、脈は全身を蛇のやうにうねりまいてゐる。赤い血と黑い血がその內を流れ、お前の皮膚の內には洟と、唾と、淚と、糞尿がたまつてゐ、九つの孔からは穢い氣と液が流れ出てゐる。お前がもし自分の身の不淨に氣がついたら、得意になつて飾りたててゐる身體を、夏の厠のやうに厭はしく思ふであらう。それなのに愚かなお前は、愚癡に欺かれて、盲目のやうに厭ふことを知らず、自分の美に迷ひ、おぼれてゐる。まるで老いたる象が深みにおぼれてゐるやうなものだ。』

女は驚いて目犍連を見てゐたが、その見通すやうな眼光に打たれた時女は始めて、自分の正體を知つたやうに思つて、思はず泣いてしまつた。そして云つた。

『尊者よ。あなたのおつしやることは本當です。私はながい間、穢い身體を着飾つて自分をあざ

むき、他人をあざむいて來ました。實際私は、自分の身がいとはしくなつてゐるのです。私は救はれない、恐しい因果にからみつかれてゐるものです。』

『女よ。力をおとすことはない。どんな過去を持つてゐても、救はれない人はないのだ。』

『それは本當でございますか。』

『どんなきたない川が大海に流れこんでも、大海はその水を清めるやうに、わが師、佛陀の敎はどんなけがれた人の心でも淨めて、悟の道を得させられるのだ。』

『それは本當でございますか。』

『本當です。』

『私の過去をお聞きになつたら、あなたは顏をおそむけになるでせう。』

『決してそんなことはない。』

『それでは聞いて下さいますか。』

『喜んで。』

そこで女は自分の身の上を話した。

女は蓮華色女と云ふのだつた。德叉尸羅城の長者の娘だつた。彼女が齡頃になつた時夫を迎へ

たが、その後まもなく父を失つた。ところが、夫を失つた母は、彼女の夫と通じてしまつたのだ。彼女はそれを知つて、一人の娘の子をおいたまゝ家をとび出してしまつた。それから何年かたつて、又夫をもつて、幸福にくらしてゐたが、或る時、夫は商用で、德叉尸羅城に出かけた。夫は其處で淋しさのあまり、妻によく似た少女を數千金で贖つて妾としてつれて歸つて來た。

そして妻に祕密にその女に一軒家をもたせ、妻が金が不足してゐるのをあやしんだ時、泥棒にとられたのだと云つてごまかした。

そして或る日、泥棒を見つけて品物をとりもどさうと、出かけた留守に夫の友達が來た。

妻は夫が泥棒をさがしに出かけた話をした時、その友は笑つていつた。

『その泥棒は用心しないといけませんよ。若くつて美しい心臓泥棒ですから。』

妻はそれを聞いてびつくりしてくはしくその友から事實を聞いた。そして夫が歸つて來た時、

『その妾を、家につれていらつしやい。』と云つた。夫は心配してつれて來たが、蓮華色女は一目見るより、その女が好きになつた。

そしてその女にいろ／＼身上話を聞くと、その女は、自分の娘だつたのだ。

蓮華色女はそれを知つた時、すつかり驚いた。自分は何と云ふ罪深い女なのだらう。以前は母、

と夫をあらそひ、今度は娘と夫をあらそふ。彼女はとう〲その家をとび出したのだ。そして自棄半分に、賣笑婦に墮落して、罪の生活を送つてゐるのだつた。

目犍連はそれを聞いても、驚かなかつた。彼はむしろその女の心の美しさを其處に見た。

「恐しい因縁にはちがひないが、しかし佛陀の教は、そんな因縁に驚く程、弱少なものではないのです。本當に海のやうに大きく、又大地のやうに大きいのです。之を穢すことの出來るものは何にもありません。あなたが過去を懺悔し、佛道に精進することさへ出來れば、過去のことなぞは問題にはならないのです。今迄にも、あなたよりもつと恐しい罪のある女が救はれてゐるのです。』

蓮華色女はすつかり喜んで、佛陀の前に目犍連につれていつてもらつて、とう〲弟子にしてもらつた。

目犍連を誘惑さそうと思つた連中は、すつかり驚いてしまつた。悪口を云つたが、それは何にもならなかつた。

この女はつひに比丘尼になり、目犍連が男の方の神通第一と云はれたやうに、この比丘尼は女の方で神通第一と云はれた。

正覺を得たものにとつては、過去は問題ではないのだ。寧ろかゝる苦しい過去があつたからこそ、彼女は眞劍に道を求めることが出來たのだつた。

八四　鴦崛摩羅百人の人を殺さんとす

舍衞城のある婆羅門の弟子に鴦崛摩羅と云ふ男があつた。師を大事にして師の云ふことならんでも聞く男だつた。師も感心な男として大事にしてゐた。あまり師に愛されるので他の弟子達は嫉妬して師の妻とあやしいと云ふ噂をたてた。しかし師は鴦崛摩羅を信じてゐるので、別に問題にしなかつた。

ところが師の妻は本當に鴦崛摩羅の男らしい姿に心を動かされてしまつた。そして夫のゐない時、鴦崛摩羅を誘惑しようとした。しかし眞面目一方の鴦崛摩羅はその道ならぬことを知つて、反つてその師の妻を窘めた。妻は鴦崛摩羅が自分の云ふことに從はないので、鴦崛摩羅を憎んだ上に、夫に自分のことを告げられるのを恐れて、自分の着物をさき、髮を亂して、夫に鴦崛摩羅が私に不義をしかけて困つたと云ふことを話した。夫はすつかり怒つて、鴦崛摩羅を呼んで云つた。

『お前は、もう學ぶものは學んだが、あとは祕密の法がのこつてゐる。それを得るには、百人の人を殺して、その指を繋いで頸飾にしなければならない。さうすれば本當の悟が得られるだらう。』

鴦崛摩羅はそれを信じた。普通のことでは祕法は得られないものと思つた。それで彼は師の云ふ通り、百人の人の生命を斷ち、その指を頸飾にしようと決心した。

彼は血相をかへて刀を持つて往來へとび出して行つた。師はそれを見て、凄い笑をもらした。

鴦崛摩羅は人々のあつまる四辻にゆくと、猛虎が人間にとびかゝるやうに、刀をぬいて一人の男にとびかゝり、それを切り殺した。それからの彼は發狂したもののやうだつた。あたるに任せて人を切つた。人々は悲鳴をあげて逃げた。彼が返り血をあびて血だらけの着物を着、血のしたたる刀をもつて立つてゐる姿は惡鬼のやうに凄かつた。人々のさわぎは大變だつた。

比丘達もそれを見、おどろいて佛陀の處に知らせた。

佛陀はそれを聞かれると、

『憐れなものだ。之から出かけて救つてやらう。』

弟子達はおどろいたが、佛陀は平氣だつた。皆も佛陀を信じてゐるので、無理にとめはしなかつた。

佛陀は鴦崛摩羅のゐる處に近づいた時、道端で草をかつてゐた男が云つた。

『比丘、こゝを往つてはいけません。人殺が待つてゐます。』

『世界中が我が敵になつても、少しも怖るることはないのだ。まして一人の惡人なぞ恐れるに足りない。』

佛陀は平氣で進んでいつた。佛陀は生命を惜しまれないのではない。相手を濟度する自信が十分にあつたのだ。

鴦崛摩羅の母も自分の子が狂氣して人を切り殺してゐることを知り、狂氣のやうに現場にとんで行つた。鴦崛摩羅は切り殺した人の血だらけの指を切つてそれを師に云はれた通り首にかけ、全身血をあびて立つてゐる姿は凄いものだつた。しかし母は恐れずに我が子に近づいて行つた。

だが目のくらんだ鴦崛摩羅はそれを母と知ることは出來ず、母をも切らうと立ち向はうとした時、佛陀は姿を見せ、恐るることなく鴦崛摩羅の前に進んだ。鴦崛摩羅は母を切らうとした手をやめて、佛陀に向つて來た。

そして二人は向ひあつて立つて、お互に目と目と見あつた。

佛陀の精神力にはさすがの狂氣じみて、殺人鬼になつてゐた鴦崛摩羅も打たれて、默つて立つ

てゐた。逃げるものは切りいゝが、から平氣で立たれてゐると、何となく恐しかつた。しかもその威光のある坊主頭の顏と、面と向つたのだ。鴦崛摩羅も出家したものには、心の内にいくらか尊敬の念を持つてゐた。殊にその憐れむが如く、底知れぬ深さをもつ顏に出合つたのだ。彼がたじろぐのはあたりまへだ。

佛陀はすでに鴦崛摩羅を精神力で征服してしまつたのだ。

鴦崛摩羅は最後の勇氣をふるつて、かまはないやつけろと思つて切りつけようとしたが、手は云ふことをきかなかつた。

『沙門、待て。』

『私はこゝにじつとしてゐる。さわいでゐるのはお前の方だ。』

『お前は誰だ。不思議な男だな。』

『私は佛陀だ。お前が妄想にとりつかれて、みだりに人の生命をそこねるのを憐れんでこゝに來たのだ。』

『恐しいとは思はないか。』

『私は我執にはなれてゐる。心は限りなく安らかだ。こゝでも私の心は安らかだ。お前の心の亂

れてゐるのを憐れんで來たのだ。』

鴦崛摩羅はその靜かな心と、深い同情に心がゆるむと、急に恐しくなり、思はず佛陀の前に平伏して泣き出した。

『私のあとについておいで。』

鴦崛摩羅は夢みる心地でついて行つた。

『私の弟子になれ。』

『私のやうな恐しいものでも許して戴けますか。』

『懺悔して證を得たものは、過去の罪は消えることは大海にそゝいだ泥水が、淨くなるやうなものだ。大地に吸はれた糞尿が淸淨の水になるやうなものだ。』

かくて鴦崛摩羅は完全に佛陀の弟子になつた。

この時波斯匿王は、市民を殺戮する者があることを聞いて、兵を率ゐて自ら出かけて來られ、現場に見えたが、佛陀に從つて祇園精舍につれてゆかれたことを知り、祇園精舍に來て、佛陀にお逢ひになり、罪人を渡してくれとおつしやつた。

『もう私の弟子となり出家いたしましたから、お渡しは出來ません。』

『出家したのか。』
『はい、この男がそれでございます。』
其處には既に僧衣と着かへ、頭を剃つた新しい比丘が御辭儀してゐた。まるで別人のやうになつてゐた。
王は鴦崛摩羅に沙門に對する禮をされ、
『身終るまで供養するだらう。』とおつしやつた。
鴦崛摩羅はありがたく御禮をした。
『世尊、いつもながら、あなたの感化力の偉大さに驚きます。今後も、人々に憐れみを垂れて迷を除き、惡逆を伏していたゞきたい。』
王はさう云つて歸つてゆかれた。
鴦崛摩羅はその翌日から町へ行つて乞食をした。しかし鴦崛摩羅だと云ふことが知れると、人殺だと云つて、食を與へない許りか、瓦を投げたり石をぶつけたりした。さうされても鴦崛摩羅は怒らないので、彼等は安心して、彼を棒でなぐつたり、刀で傷つけたりした。鴦崛摩羅はそれを忍んで歸つて來て、佛陀に云つた。

『世尊。私は愚かで迷はされて、多くの人を殺しました、それなのに世尊は私を憐れみ、劍も杖も用ひずに私の心をなほし、よく調へて下さいました。それで私は、どんな目に逢ひましても、痛くも苦しくも思ひません。昨日まで雲におほはれた日光が、雲が消えてあかるくなつたやうに、いろ／＼のことがわかるやうになりました。私はもう生も望まず、死も望みません。ありがたうございました。』

彼はさう云つて、佛陀の前に平伏した。

佛陀は、それを聞いてよろこんで云つた。

『私の弟子の内で鴦崛摩羅のやうに早く悟つた者はない。』

實際、佛陀は大海のやうな、大地のやうな男である。

自分の處に誠をもつて入つたものは、皆清淨な人間にし、そして涅槃に入れるやうにする。

永遠の平和！

八五　大迦葉の修道

大迦葉は頭陀行第一と云はれてゐる。

頭陀行と云ふのは修道、修行と同一語ださうである。
第一は、空閑な處を撰び、第二は、乞食、第三は一處にゐること、第四は一日一食、正午に食べること、第五は食を乞ふのに貧富を撰ばぬこと、第六は三衣を守ること、第七は樹下に坐すこと、第八は露地に坐すこと、第九は糞掃衣を着ること、第十は塚の間にゐること、などである。
貧しい生活、清淨な生活。
その理想的實行者が大迦葉だつた。佛陀はよく云つた。
『お前達、道を修めるには大迦葉を學ばなければならない。彼はこの法を行つて少しも缺ける處がない。』
大迦葉が齢をとつた時の話だが、或る日佛陀がおつしやつた。
『大迦葉。お前も年をとつたから、糞掃衣は重くなつて、立居に不便であらう。今日から後はいろ〳〵の頭陀行はやめて、長者が供養してくれる輕い着物を着たらいゝだらう。そして身體を休め、つかれをなほし、靜かに老を養つたらいゝだらう。』
しかし大迦葉は云つた。
『世尊、いろ〳〵御心にかけて下さつたのはありがたうございますが、私には頭陀行を修める事

が楽しみなのでございます。この重い衣をつけ、一坐一食で、長夜に、露地や、塚の間で、寂靜を樂しむことが私の願なのです。世尊、私は道を修め、欲を少くし、足ることを知り、或は靜かに歩み、或は定に入り、思を凝らし、心を勵まし、無益の話をせず、獨り靜かに道を樂しむのは、實に私の喜なのでございます。世尊、私は年とりましても、かやうに道を修めますのは、私の樂しみでもありますし、後世の人にも、道を修めることの樂しみを知らしたいと思ふからでございます。』

佛陀は大層喜ばれて云つた。

『大迦葉。お前は後の世の人々の燈火である。多くの人はお前によつて、大安樂を得、大利益を得るだらう。それではお前の望む通り靜かに道を修めるがいゝ。』

八六　受けとられぬ罵詈

若い婆羅門に賓耆迦と云ふ男があつた。或る日佛陀の處に來て散々惡口を云つた。佛陀は默つて聞いてゐたが、賓耆迦が云ひたいだけのことを云つてしまふと、靜かに云つた。

『お前は、吉日に親族や親類の人と逢ふことがあるか。』

『あります。』
『その時、お前の親族の人がもし食事をしなかつたらどうするか。』
『食はない人があればその食事は殘るだけです。』
『如來の前で、惡口を云ひ、叱りつけても、私が、それを受けとらなければその罵詈雜言は誰のものになるのか。』
『いや、いくら受けとらないでも、與へた以上は與へたのです。』
『いや、さう云ふのは與へたとは云へない。』
『それなら、どう云ふのを與へたと云ひ、どう云ふのを與へないと云ふのですか。』
『罵られた時、罵り返し、怒には怒で報い、打てば卽ち打ちかへす、鬪をいどめば鬪ひかへす。それらは與へたものを受けとつたと云ふのだ。しかし罵られても、怒られても、打つても、鬪をいどんでも、何とも思はないものは與へたと云つても、受けとつたのではない。』
『それならいくら罵られても、あなたは腹は立たないのですか。』
佛陀は偈で答へて說得した。
『智慧なるものに怒なし、　怒なき者など怒るべき。

伏しがたきに伏すものは、寂靜の水平かに
よし吹く風荒くとも、心の中に波は立たず。
怒に怒をもつて報いるは、げに愚かものの仕業なり。』
少年賓耆迦、遂に降參して云つた。
『私は馬鹿でした。どうかお許し下さい。』

八七　羅睺羅、遂に悟る

羅睺羅は十六、七歳になつた。佛陀の子であると云ふことは、羅睺羅の心の內にも、又他の人人の心の內にもなくし切れない事實である。だから羅睺羅のいたづらは、皆、さう強く叱りつけることは出來なかつた。

羅睺羅はよき性質を持つてゐたが、何と云つても惡戯盛りだ。時々人をだまして喜んだ。それは罪のない嘘ではあつたが、しかし嘘にはちがひなかつた。

佛陀に歸依してゐる在俗な人が來て、羅睺羅に逢ふと、『お父さまは何處にゐられます。』なぞと禮儀半分に聞くものがある。すると、羅睺羅はよく嘘をついて、佛陀のゐない處にゐると云つ

て、皆がむだ足をすると喜んでゐた。佛陀はそれを聞いて、羅睺羅の處に出かけた。羅睺羅は大喜びで、父を迎へた。

佛陀は自分の足を羅睺羅に水をくまして來て洗はさした。洗つたあとで云つた。

『羅睺羅、この水はのめるかね。』

『のめません。』

『どうしてだ。』

『御足を洗つてよごれましたから。』

『お前も、この水のやうなものだ。水は元來美しい。人間もさうだ。お前は國王の孫に生れてゐたのに、世の榮華をすてて沙門になつたが、道も勵まず、心も淸めず、口も守らない。三毒の垢を胸に滿してゐるやうなものだ。だからこの水と同じやうに垢れてゐる。』

羅睺羅は、頭を垂れて默つてゐた。

『この水をおすて。』

『はい。』

羅睺羅は水をすてた。

『お前はこの盥に飲食を入れて食べる氣になるか。』

『なりません。』

『なぜならないのだ。』

『手足の汚を洗ふ水を入れますから。』

『お前も、その通りなのだ。沙門になりながら、口に誠なく、心に道を修める氣がないなら、不淨の水を入れた盥のやうなもので、人の心の糧になるものを入れるわけにはゆかない。』

さう云つて佛陀はその盥を蹴とばされた。盥は轉々ところがつた。羅睺羅は驚いて佛陀の顏を見た。彼は父の顏がこんなに嚴しいのを始めて見た氣がした。

『お前は盥がこはれたかと思つて氣にしたか。』

『いえ、粗末な安いものですから、あまり氣にいたしません。』

『お前は沙門でありながら、行を謹しまず、惡言を弄し、人を惱ます。その結果は誰にも愛されず、智者には惜しまられず、命を終るまで悟はひらけず、迷ひに迷ふこと、この盥のやうなものだ。よく注意すべきだ。』

羅睺羅は、全身汗をかいた。

心を入れかへようと思つた。
そして羅睺羅はそれから戒律を守り、道を勵んだが、どうしても悟を開くことは出來なかつた。
比丘達も不思議に思つて云つた。
『世尊よ。羅睺羅樣は、あんなに御熱心に修道なさつて、小罪すら犯されないのにどうして、煩悶から解脱されないのでせう。』
佛陀はそれを聞くと云はれた。
『戒を守り、
身ををさむれば
遂には道を獲て
すべての穢盡きん。』
しかし羅睺羅は中々悟れなかつた。しかし佛陀は別に心配されてもゐなかつた。
精進するものはいつか悟を開くことは佛陀はよく知つてゐたから。
羅睺羅が二十歳になつた或る日佛陀は羅睺羅と一緒に乞食に行かれた時、云はれた。
『萬物も、身體も心も、思も、皆無常だと思ふがいゝ。さうすればすべてから執着はなくなり、

悟はひらけるのだ。』

羅睺羅はそれを聞いた時、急に心がひらけたやうに思つた。佛陀にお別れして一人祇園精舍に歸つて坐禪をした。

佛陀は行乞をすませて歸つてくると羅睺羅の處へ行つて云はれた。

慈悲心で心を大きくもち、衆生を心のうちにとり入れて怒を滅し、息を數へて心を落ちつける法をお教へになり、心配やあせる心なくおちつくことをお教へになつた。

機は熟したのだ。さすがの羅睺羅も遂に悟を得られた。

佛陀も安心され、喜ばれ、自分の重荷がおりたことを感じられた。

自分が生れる因緣を與へたものが、遂に悟つたのだから。其處に佛陀の人間らしさを見るのはまちがひか。

佛陀はもつとも圓滿な人間である。人情を歪にされた方ではなかつた。思ひやりのゆきわたつた方だ。

八八　富樓那の決心

佛陀の弟子の內で一番說敎がうまいと云はれてゐる富樓那がある時佛陀の處へ來て云つた。
『西の輸盧那國に行つて道を傳へたいと思ひますが、許して戴きたく思ひます。』
佛陀は、輸盧那と云ふところが隨分人氣の荒い殺伐なところだと云ふことを知つてをられたので、云つた。
『富樓那、輸盧那の國の人は心あらく、兇惡の性がある、そして惡罵を好む。お前はもし彼等に罵り辱められたらどうするか。』
『世尊。彼の國の人は私を罵ることはあるかも知れませんが、彼等は賢く、情深い人達ですから、まさか拳で打つたり瓦石をぶつけたりはしますまい。』
『富樓那、もしそれでも瓦石をぶつけられたらどうする。』
『世尊。瓦石を投げつけることはあつても、賢く、情深い人達ですから、刀で切りつけるやうなことはしないでせう。』
『もし刀で切りつけて來たら。』
『世尊、刀で切りつけても、彼等は賢く、情深い人達ですから私を殺すやうなことはしないでせう。』

『もしお前を殺したらどうする。』

『世尊。もし彼等が私を殺さうとしたら、私はから思ふでせう。輸盧那の人は賢い。道を修める人々は、この五欲の身を厭うて、刀を以て自殺し、或は毒をのみ、繩で縊れ、或は深い坑に投じて身を殺すところを、彼等は賢く情深いために、この朽ち果てた身を殺してくれて、繋縛から免かれさしてくれる。』

そこで始めて安心し、感心しておつしやつた。

『富樓那、お前は能く道を修め、忍辱を學んだ。それでこそあの國へ行つて人々を教へ導くことが出來るだらう。お前は之から行つて、心の平安でないものを平安にし、救はれないものを救ひ、涅槃に入れないものを涅槃に入れるやうにするがいゝ。』

富樓那は今更に佛陀の思ひやりの至れり盡せりに感動し、不退轉の決心をして輸盧那に向つた。

八九　其の後の耶輸陀羅

耶輸陀羅は比丘尼になつてから摩訶波闍波提達と平和な淸い生活を送つてゐた。それは寂しい生活ではあつたが、心靜かな生活で、樂しみはその内にあつた。

羅睺羅はどうかすると母を訪ねて來た。それは耶輸陀羅にとつては大きな喜であつた。

ある時耶輸陀羅は病氣した。羅睺羅はそれを知らずに訪ねて來た。

そして耶輸陀羅の病氣を知ると、彼はおどろいて藥を買ひに行つた。

羅睺羅は佛陀の許を得て、母の病氣の間看病に出かけた。

二人は宮殿の生活では味へない。しんみりした淸い愛情を味ふことが出來た。

反つてそれを幸福に思つた。耶輸陀羅の病氣はまもなくなほつた。

その時分比丘尼達は、毘舍佉によつて寄進された祇園精舍から東北に一里許り離れた所にある、東園精舍に住んでゐた。この東園精舍は、祇園精舍が舍利弗が顧問になつてつくつたやうに、目犍連が顧問になつてつくつたもので、二層の大精舍で、一層に五百の室があつたと云はれてゐる。

耶輸陀羅も其處にゐて、靜かに道を修めてゐたのだ。

九〇　阿難、侍者となる

佛陀は王舍城にゐた時、弟子達に云つた。

『私も齡をとつた、そばにゐる人が一人ほしく思ふ。世話もやいてほしいし、この世で話してお

くことを覺えておいてほしく思ふから、それでお前達が適當と思ふ人があつたら、撰んでほしい。』

『世尊、私がお傍にゐて、御世話いたしませう。』最初の弟子の憍陳如が云つた。

『お前自身齢とつてゐるではないか。どつちがさきに死ぬかわからない。お前自身世話をしてもらはなければならない身體だ。』

その他、四、五人申し出たものがあるが、皆自分が年寄連なので斷られてしまつた。

この時目犍連は佛陀の心を察した。きつと佛陀にはこの人を侍者にしたいと思つてゐる方があるにちがひない。それは誰だらうと思つた。そして心を靜め定に入つて、佛陀の心の囁に耳をかたむけた。佛陀の心のひゞきは目犍連に通じて、阿難を佛陀が侍者にされたがつてゐることが感じられた。

阿難には佛陀は一番氣がおけなかつた上に、阿難は無比の記憶力をもつてゐる。之以上、佛陀の侍者として適當な人はないと、目犍連も同感した。

そこで目犍連は云つた。

『佛陀のおつしやることは何事でも記憶して後世に傳へたいと思ふ。それには阿難より適當な人を知らない。私は、阿難より適當な佛陀の侍者を求めることは出來ないと思ふが、皆さんはどう

思ふ。』
皆、それに賛成した。それで目犍連は佛陀に、
『阿難を侍者にしていたゞきたいと思ひますがいかゞでせう。』と云つた。
佛陀は我が意を得たと云ふやうに、
『阿難なら、私も適當と思ふ。しかし阿難が承知するかどうか。皆ですゝめて見てくれ。』
そこで目犍連を先登として大勢で阿難の處にたのみに行つた。
『阿難、佛陀は貴君が侍者になる事を望まれてゐられます。どうか佛陀の侍者になつて下さい。』
『それは許して下さい。』阿難は云つた。『佛陀のお傍にゐるのは樂なことではなく、私のやうな未熟者にはつとまりません。』
『しかしいくら考へて見ても、他にあなたより適當な人は見つからないのです。だから佛陀の侍者になつて下さい。佛陀のやうな方のお傍にゐて、いつもいろ／＼のことをお伺ひ出來ると云ふことは、中々望んでも得られないことと思ひます。』
阿難は暫らく考へてゐたが云つた。
『それなら三つのことを承知して戴ければ、おうけいたしませう。』

『三つのこととは。』

『一つは佛陀のお着になつた着物を新しいのも、舊いのも戴かないこと。二は佛陀が招かれて御馳走になられる時、一緒に御供しないこと、三はお目にかゝる時でない時は、お目にかゝらないこと。』

『それは立派な御希望ですから、佛陀もよろこんで御承諾なさるでせう。』

目犍連はさう云つた。他の人は何のことかわからなかつた。

目犍連は阿難の云つたことをそのまゝお傳へした。佛陀はよろこばれておつしやつた。

『阿難は賢い男だ。とやかく云はれることを、前から豫防してゐるのだ。多くの比丘の內には阿難は衣の爲に佛陀に奉事してゐるのだ。又食物の爲に奉事してゐるのだなぞと云ふものがあるのを知つてゐるので、それを豫防したのだ。又阿難はよく時を知つてゐる。今如來の處に逢ひに行つていゝか、わるいかを知つてゐるのだ。又信者の人達がいつ如來に逢つていゝかわるいか、異敎のものをいつ如來の處につれて行つていゝか、わるいか。又如來が食事をすませて、安穩にしてゐるか、ゐないかを知り、又如來が食事を終つてよく說法が出來る時か、出來ない時かを知つてゐる。阿難は賢い男だ。』

大へん御機嫌がよかつた。
又實際阿難は佛陀の氣持や、神經をよく知つて、謹しみを忘れない男だつた。
それから佛陀の肉體がこの世を去る迄、阿難は侍者としての役目を立派にはたした。

九一　提婆達多

佛陀は正覺を得られてから、何人の人を出家さし、お弟子にされたかわからない。そのお弟子にいろ／＼の人がゐたことは、云ふ迄もない。今迄かいた所でもそれはわかつてゐる。佛陀はどんな弟子でも、その人が涅槃を求めてゐる限りすてなかつた。
しかし佛陀の方では捨てないでも、途中でへたばつて自分の方から逃げ出したものは少くなかつたらう。勿論佛陀はそれを殘念には思はれたが、それも仕方がないと思はれ、憐れまれるだけで、別にそれでお困りにもならなかつたであらう。
又中にはお互に喧嘩し、その爲に一つの僧院がつぶれたやうなこともあつた。しかし、それはごく一部の話で、比丘全體の心を動搖させるやうなことはなかつた。
不平家もゐたが、それも大した力をあらはさずにすんだ。

しかしこゝに一人の男があつて、佛陀を征服し、逐ひ出し、佛陀の弟子達をのこらず奪ひ取らうと私かにくはだてた男があつた。

それは七人の王子の内の提婆達多だつた。この男は他の王子達が佛陀の寵愛を受けてゐるのに、自分だけはのけものにされてゐると思つた。自分だけが佛陀に嫌はれてゐると、ひがんでゐた。それは自分の内に不淨なものがあるのに氣がつかず、私かに佛陀を恨んだ。佛陀もそれを知つて、ある時、彼に、在家にもどつて、布施で佛教のために働くやうに婉曲にすゝめられたことがあつた。

だが提婆は元よりそれを斷つた。

彼は一心に修道をするのだが、いつも他人に優りたい氣が強く、自分の心を無心にしようとは思はなかつた。我執は益々強くなる一方だつた。それが爲に佛陀に信用されないことには氣がつかなかつた。

彼は精舍の內で眞黑な心を持つて時を待つてゐた。何か仕出かさないではおかない男だつた。

しかし勢力のない內はよかつた。

ところが彼はとう〳〵勢力を得る機會をつかんだのだ。

九二　提婆、佛陀を殺さんとす

それは頻毘娑羅王の太子の阿闍世の歸依を得たことだ。
そこで阿闍世は提婆のために王舍城の近くにすばらしい僧房をつくり、毎朝五百の車で種々の品物の供養をした。そしてまたゝく間に五百人の弟子が出來、彼の評判は大したものだつた。佛陀の弟子達も、彼の方へ逃げてゆくものもあつた。
彼は佛陀が耄碌したと云ひ、すべてがたがゆるんだ、風儀も亂れ、碌な奴はおちつけないと稱してゐる。根本から改良しなければ今につぶれてしまふと云つてゐた。
そして自分を以て佛陀の後繼者をもつて任じてゐた。
彼の心の内は野心で一ぱいになつてゐた。しかし彼の心を知らないものは、彼の外見と、口のうまさについだまされた。
しかし佛陀は彼の心を見ぬいてゐた。そして人々があまりに提婆の景氣のいゝのに心を動かされさうなのを注意して云つた。
「愚かなものには、あまりに布施が多いのは、惡をます原因になる。愚癡なものは、淸淨な行

をしないで、弟子をつくることを考へ、人の上に立つことを考へる。人がもし一方で多くの供養を求め、他方で涅槃を求めようとしても、それは無理である。涅槃を求める心はいつのまにか、貪欲な心となる。あまりに寄進を貪るものは自らを傷ね、他人を傷つける。だからお前達は提婆が多くの供養を受けるのを羨んではならない。』

少し心細い弟子達だが、しかし人情の弱點は中々まぬかれないものだ。

佛陀はなほかうおつしやつた。

『芭蕉や竹や蘆は實がなるとそのために死ぬ。驢馬も懷姙するとその身を喪ふ。提婆も供養を多くもらひすぎると同じ結果になる。』

提婆はそれを聞いて、身ぶるひして怒つた。今に復讐してやると思つた。

そして佛陀が王舍城の耆闍崛山上の、欽婆羅夜叉の石窟の中に入つて坐禪してゐるのを知つた提婆は、惡漢に金をやつて殺させようとした。しかしこの惡漢も佛陀を目のあたり見た時、殺意を失つた。迷信強い當時の人々は佛陀の姿を見ると、まづおびえ、その精神力に目のあたりふれることによつて征服されるのだつた。無頓着なものは別だが、目と目とあつて睨み合はなければならない時、佛陀の威光は相手を十分にやつつける力があつた。

それは長年の修行によるものだ。
殺しに行つた男は佛陀に聲をかけられると平伏してしまつて、刀をおとし、そして佛弟子になつてしまつた。
それからまもなくだつた、佛陀がある朝、起きて外に出ようとされると大勢の弟子達が棒や、杖をもつて集つてがや〳〵さわいでゐる。
佛陀は、
『お前達は何をしてゐるのだ。』と聞かれた。
『今、提婆が人をよこして世尊を害しにくると云ふ噂を聞いたので、世尊の御身體に萬一のことがあるといけないと思つて集つてゐるのです。』
『如來の死は人力で防護すべきものではない。それは異教徒のすることだ。如來はいつも云つてゐるではないか。鬪をいどまれる時、それと鬪ふものは、鬪を相受けるものだと。如來はまだ死ぬ時は來ない。安心して、自分の道を修め、自らの心を護れ、涅槃のさはりになることに心を奪はれてはならない。』
比丘達は耻おてその場を去つた。

誰も攻めては來なかつた。それは單なる噂にすぎなかつた。だが比丘や比丘尼達も、何となく不氣味な感じを受けた。

さすがに本當に悟を得たものは落ちついてゐたが、未熟のもの達は心に不安を感じて、おちついて道を修めることが出來なかつた。だが當人の佛陀は益ゝおちつき、平常と異なることなき行動をとられてゐた。

それは當然なことではあるが、心ある人は益ゝ感心し、心なき人々はあまりに呑氣なのに反つて不安をもつた。今に大騷動が起りはしないかと思つた。

ある時佛陀が耆闍崛山の麓を通られた時、山上から大きな石がころげおちて來た。佛陀はそれをあぶなくさけられたが、他の石が同時に落ちて來て足の指を一つ傷つけた。阿難はびつくりして逃げたが、佛陀は何事も起らなかつたやうに歩いて來られた。

『どうもありませんでしたか。』

『どうもない。』

『足がお痛みにはなりませんか。』

『痛みはするが、辛抱出來ない程な痛みはしない。』

佛陀は安全な處までゆかれて始めて足の指を療治された。
『誰かが世尊を殺さうとしてわざと大石をおとしたのでございませう。』
『さうかも知れない。しかしさうでないかも知れない。』
『あぶなうございました。』
『あぶないのは阿難、お前の方だよ。』
阿難は頭をかいて、笑つた。
『みつともない處をお目にかけました。』
この大石をおとしたのは提婆自身だと云ふ噂があつたが、元より佛陀は氣にかけられなかつた。
佛陀にとつて死は問題にするには、あまりに小さい出來事である。ゼロにひとしい。
しかし佛陀の弟子たちにとつては佛陀の死は大事件にちがひない。比丘達は、
『御用心なさつて下さい。』
と申し上げたが、佛陀は、
『大丈夫だ。』とおつしやつておとり上げにはならなかつた。

九三　提婆、阿闍世太子に父王を弑する事をすゝむ

或る日、佛陀は阿難をつれて町を歩いてゆかれると、提婆が弟子達をつれてやつてくるのに逢つた。佛陀はそれを見ると、すぐ道をかへて避けた。

阿難は云つた。

『なぜおさけになるのですか、提婆が怖しいのですか。』

『怖しくはないが、逢つてはならないからだ。』

『提婆を他に去らしたらいゝではありませんか。まだ提婆はあなたの弟子だと自分では稱してゐます。』

『提婆を去らせる必要はない。勝手にさしておく方がいゝ。しかし阿難よ。愚かなものには逢つてはいけない。一緒に仕事をしてはいけない。無用な論議もしてはならない。提婆は今、邪念が益々高まつてゐる。悪狗を打てば、ますます狂暴になるやうなものだ。さはらないがいゝ。』

阿難は佛陀の寛大すぎるのにはがゆく思つた程だ。しかし矢張りそれより他仕方がないことを知つた。

他人を暴力で罰するやり方をしだしたら切りがない。暴力を用ひないゆき方をする以上、佛陀のやりやうより他に道がないことを知つた。しかしそれにしても、野心で魂まで眞黒にしてゐる七十近い提婆の姿を頭に思ひ浮べると、阿難はすさまじい凄さを感じた。

何とかならないものか。

提婆の方では提婆の方で、もう一息で望を達するところだと思ふと、もう手段なぞを考へる餘裕はなくなつた。阿闍世太子は自分を信じ切つてはくれるが、頻毘娑羅王は依然として佛陀を信じ、提婆なぞは眼中になかつた。眼中にない許りでなく、佛陀の注意もあつて、阿闍世太子に提婆を遠ざけることを注意した。

『あれは恐しい男だ。だまされないがいゝ。』

かうなつては提婆は佛陀と同時に、頻毘娑羅王を倒さなければ自分がやつつけられることを知つた。

そこで佛陀を殺し損つてゐる彼は、先づ阿闍世太子にすゝめて王を倒すことを考へた。彼は腹黒き佛陀が自分を憎むと共に、王をして阿闍世を憎ませ、ぐづ〳〵してゐると太子の位からおとし、その結果、殺されるかも知れないことを香はせた。

そして思ひ切つて二人で天下をとり、摩竭陀國を自分達の理想の國にし、今迄にない立派な國にしようとすゝめた。

阿闍世もついその氣になり、腹心の臣を利を持つて集め、陰謀を重ねた。

若き阿闍世太子のわきにはいつも、提婆達多の七十の姿がくついてゐた。それはいゝとりあはせだつた。人々はこの二人から說き伏せられると、不思議に、自分達のする惡が、善事のやうに見え、勇しいことのやうに見えた。

とう〳〵古き王はとらへられ、新しい世界が開けることになつた。

王はわが子の爲に牢に入れられ、しかも食事すら運ぶことを禁じられた。

かくて阿闍世太子は王位にのぼり、提婆は國師のやうな位置に登つて、城中を我がもの顏に步いた。心ある人は提婆を心中憎んだが、それ以上恐れた。そしてその意力に尊敬さへした。

九四　獄中の頻毘娑羅王

頻毘娑羅王は最愛の我が子の爲に獄に入れられて、食事さへ運ばれなかつたが、しかし之も過去の因緣としてあきらめようとされた。

王は苦しめば苦しむ程、佛陀の言葉が思ひ浮んで來た。

『天地、日月、須彌、山海、いづれも變易せざるものあらん。成あれば敗れ、盛んなれば衰へ、會ふものは必ず離れ、生るるものは必ず死す。樂あれば苦あり、喜あれば憂あり、世に常樂なく苦獨り長し。』

それ等の言葉が今迄のやうにたゞの言葉ではなく眞實の言葉としてひゞいて來た。

『身體は四大の集りしもののみ、衆生の魂、その中に寄處すれども、死すれば本に還るのみ、我にとらはるるものなきもののみ、永遠に平和なれ。』

このまゝに涅槃に入れれば、それ程樂しいことはないのだ。

王はさうは思つても見たが、しかし肉體の苦しみと、死の恐怖から完全に逃れることは出來なかつた。

王は監守に云つて阿闍世に傳言をたのんだ。

『私はもう王位には望がない。阿闍世に喜んで位をゆづる。そして私は佛陀の處にゆき沙門とならうと思ふ。だから私を自由にしてくれ。』

しかし阿闍世は王を恐れなかつたが、王に對する人民の愛と信頼を恐れた。

提婆も、
『御用心なさいませ。人民は内心王に同情してをります。いざと云ふ時が來て、王が力を得られたら、今度まちがひなくやつつけられるのはあなたです。私達の求める新しい世界はその時、すつかりくつがへされてしまふでせう。』
阿闍世王は、
『提婆の云ふ通りだ。私は父を生かさうとは思はない。弦をはなれた矢は、あとには歸らない。』
『本當にさうでございます。』
提婆と阿闍世王とは、顔を見合はせて、凄い笑顔を見せた。
『獄には一さい食事を運んではいけない。命に背くものは死刑にする。』
阿闍世王はなほ念を抑した。
このことを傳へ聞いた母は泣きながら阿闍世王の處に來られて云はれた。
『そなたは何と云ふ恐しいことをしてくれたのだ。お父さまが、そなたを育てるためにどのくらゐ苦心をなさつたか、それを思ひ出して見るがいゝ。お父さんはお前を心から愛してゐらつして、お前が一日も早く大きくなることをどんなに望まれておいでになつたらう。それなのに……』

『母上、その話なら、もうよして下さい。そんなことは私は百も承知してゐます。お父さんの御政治が私には氣に入らないのです。私は小さい時からお父さんを殺して、王になつて自分の思ふ通り政治を行はうと思つてゐたのです。何にもおつしやつて下さいますな。』

『なんと云ふ恐しいことを云ふのです。』

『母上、私はもう國王でございます。母上であつても私の命令はお聞きにならないと、いけません。もう昔の私ではないのです。』

阿闍世王は驚く母を見すゑた、その目には殺氣がたゞよつてゐた。

『母上、父上の生命を殺すのも生かすのも、今は私の手にあります。あまり泣き言を云はれるやうでしたら、私は用捨はいたしません。事がこゝまで來た以上、あともどりは出來ません。』

『それなら、お父さまに私が逢ふのもいけないか。』

『逢ふだけなら許して上げませう。だが食事を運ぶやうなことをなさつてはいけませんよ。』

『餓死させようと思ふのか。』

『一刀で殺す方をのぞんでゐられるのですか。』

『何と云ふ恐しい子だらう。』

『私を育てた方が御存知でせう。』
阿闍世王はあざけるやうに云つた。
『さう云はれれば仕方がない、私はそなたも憎めない。憐れな母なのだ。』
母は泣きながら其處を立ち去られた。
そして母はどうしたら憐れな夫を餓から救へるだらうと考へた。そして考へた結果、湯に入られて身體を淨め、身體に麨と蜜とをまぜたものをぬつて獄屋へ夫に逢ひにゆかれた。
王はそれによつてやつと餓をしのがれた。后は泣きながら、夫を出來るだけいたはつた。しかし腹がはると、今度は王の方が元氣になられて、反つて后の方が慰められた。
『私はすべてが因縁だと思つてあきらめてゐる。そして佛陀の敎を今更に思ひ出し、感心し、どうかして私も悟を得たいと思つて、坐禪をくんで無念無想になることをつとめてゐる。我執がなくなれば、私は何にも恐れることはないのだ。私は過去にいろ〳〵と罪をかさね、よくないことをして來たことを感じる、私は殺されてもいゝ人間だと、この頃思ふやうになつた。私のことは心配しないがいゝ、人間は誰も死なければならないのだ。心たのしく死ねるものこそこの上なく幸なものと思つてゐる。阿闍世だつて今後どんな目に逢ふかわからない。私はあいつを憎ま

うとは思はないのだ。私はたゞ安らかに死にたいと思つてゐる。』

后はけなげな王の言葉をきくとなほ涙が出るのだつた。

『私達は幸福すぎました。今になつて私達は昔のことが夢のやうに思はれます。』

『だが今になつて、私達はいろ〳〵のことがわかつて來たのだ。私はそれを不幸と許りは思つてゐないのだ。毒蛇に嚙れて死んだ、優波先那比丘の話なぞも今になると他人事とは思へない。佛陀の教をうけてゐたので、私はどんなに助かつてゐるか知れない。かうやつてゐても私の心は佛陀の心とかよつてゐるやうな氣さへするのだ。』

『それにしてもあの提婆は恐しい男ですね。』

『それも仕方がない。すべてなるやうになるだらう。私はたゞ心うれしくこゝで修行をして見たいと思つてゐる。』

二人はそんな話をした。

だが阿闍世王は益々父を恐れた。そして父が餓死しない理由を知ると、とう〳〵殺させた。

王はその時、ごく靜かに死なれていつた。

それは悟を得たもののやうな死であつた。

九五　提婆、佛陀を僧團から退けんとす

王が病死なされたと世間には發表されたが、しかし本當のことは何處からかもれるものだ。しかし阿闍世王を恐れて誰も、それを公然と非難するものはなかつた。

王が死んだときまると、今度は私の番だと云つて立ち上つたのは、提婆だつた。彼は弟子達をつれて、公然と佛陀のゐる處にのりこんで來て、佛陀にお目にかゝりたいと云つた。

弟子達は拒絶することを主張したが、佛陀は逢はうとおつしやつた。弟子達は佛陀の身の上を心配して皆集つて來た。其處へ提婆は意氣揚々とのりこんで來た。

一方には佛陀を中心として多くの弟子達が集り、それに向つて提婆達多が之も多くの弟子をつれてひかへてゐた。この對面は異樣なものであつた。提婆の方は殺氣だつてゐた。佛陀の弟子の一部が同じく殺氣だつてゐたが、さすがに佛陀と、そのそばにひかへてゐる大弟子は落ちついてゐた。

中には少々あぶないものもゐたが。

『何か用か。』

佛陀は靜かに云はれた。

『用があればこそ、わざ〳〵參つたのです。』

『何の用か。遠慮せずに云つたらいゝであらう。』

『それでは遠慮せずに申しますが、世尊も近頃お齡をおとりになりました。御身體を大事になされ隱退なされた方が、御爲によくはないかと思ひます。あとのことは私が引きうけますから、御安心下さいまし。』

佛陀の弟子達は提婆の圖々しい申し出におどろいた。そして佛陀が何とお答へになるかと、全身の神經を耳にあつめた。

佛陀は平氣な顏しておつしやつた。

『私はお前に云はれなくとも、隱退する方がいゝ時がくれば隱退する。しかし舍利弗や目犍連ですら私のあとをついで、私の弟子を一人のこらず取り入れてゆくことはむづかしいのだ。ましてお前なぞには出來るわけはない。』

佛陀の弟子達はすつかり喜んだが、提婆の顏は憎惡に燃えた。

『私は世尊の御身體を思つて申し上げたのです。私の親切をそのやうにとつて戴くのは殘念で

ございます。』

提婆はさう云つて席を蹴つて立つて、怒つて歸つていつた。

『何か復讐するにちがひない。』

弟子達はさう思つて、一種の恐怖を受けたが、佛陀は何事もないやうに默つて立つて自分の室に歸られた。

佛陀の心は平靜であつたが、提婆の心はさうはゆかなかつた。

九六　提婆、佛陀の勢力を奪はんとす

彼は佛陀が大勢の前で、舍利弗や目犍連をほめて自分を侮辱したと思つた。そして自分には佛陀の弟子をさめることが出來ないと云つた。しかし自分の味方には阿闍世王がゐる。必ず、佛弟子を殘らず奪つて見せる。

彼はその作戰計畫に全力を盡した。そして自分の腹心の弟子倶迦利、迦留羅提舍、乾陀驃、三聞達多、を集めて、相談することにした。

この五人は一室に集つた。そして腹黑き相談をした。

提婆は云つた。

『私は死すとも、佛陀の弟子を一人のこらず奪ふことに決心して歸つて來た。皆の前で侮辱されたのだ。この復讐はどんなことがあつてもしなければならない。』

『御尤です。』と倶迦利は云つた。

『それで私は思つたのだが、佛陀の弱點は何處にあるかと云ふことを第一に知ることが必要だ。そして私の教の方が佛陀の教より正しいことを人々に知らすことが必要だ。それで私は第一に氣がついたのは、佛陀が魚の肉を食ふことだ。それについてはかげで惡口を云つてゐるものがあることを知つてゐる。身體の弱い時とか、病氣のあとに魚の肉を食つてもいゝと云ふのは云ひわけで、身體の丈夫なものまでこの頃は平氣で魚を食つてゐる。これはたしかにいゝ攻撃材料だと思ふが、どうだ。』

『それはたしかにいゝ材料だと思ひますが、世尊(提婆のこと)はさう云ふことになると御自分もおたべにはなれませんが、その點はようございますか。』

『魚なぞはたべたいとは思はない。お前達はどうだ。少くも我々の世界を來させるには、その位のことには勝たなければならない。』

『御尤でございます。』

『一體摩竭陀、鴦伽の二國の國民は皆苦行を尊敬してゐる。魚を食ふものより、食はないものを尊敬するにちがひない。』

『無論ですとも。』

『名案だらう。』

『さすがに、世尊の御考だけあります。』

『次は、佛陀の着物だ。佛陀の着物は贅澤だと內心思つてゐるものがある。私もその一人だつたが、私たちは糞掃衣以外はつけないことにしよう。』

『それは結構です。それから一食にしてはどうでございませう。』

『それもいゝだらう。』

さう云ふ風に相談が進んで、とう／＼彼等は次のやうな宣言をすることに決定した。

『一、衲衣（糞掃衣のこと）を着ける事

二、一食の事

三、魚の肉を食はない事、それを食へば善法は生じない事

四、食は乞ふ事、他の招待は受けない事

五、春夏の八ケ月は露坐し、冬の四ケ月は草庵に住する事。人の屋舍を受ければ、善法は生じない。』

五人はそれがきまつた時、勝利は自分達のものと思つた。佛陀の弟子達より、自分達の方が嚴格であり、眞面目であり、眞劍であることは之で皆にわかる。皆の信用は自分達の方に歸する。又佛陀の弟子達も、眞面目なものは、我等の方に同感するであらう。

そして本當に道を修めてゐる長老や、上座の比丘には『佛陀は既に老耄し、閑靜に呑氣にくらして、着物も輕いものをつけ、方々から御馳走をうけて、もう昔の氣力はなくなり、僧團も內からくさりかけてゐる。こゝで再びひきしめて我等が立ち上らなければならないと思ふ。』と云ひ、又『我等には阿闍世王達がついてゐるのだから、心配なことはない、位置や待遇も今迄よりよくしても、わるくはしない。』と云つて、心を動かすことにしよう。

作戰はなつたのだ。皆喜んで、既に勝利を得た氣になつた。

彼等は時機の到るのを待つてゐた。

提婆はその時何と云はうかと考へ、一擧に佛陀をやつつけてやらうと思つた。

彼はとう〳〵その時を得た。佛陀が王舍城で食を乞つて歩かれたあと、講堂に皆集つて、休んでゐた。其處に提婆も迦留羅提舍等をつれて食を乞つて歩いて、佛陀達のゐる講堂に來た。

そして佛陀の前に來て、皆に聞えるやうに云つた。

『世尊、私は、この頃つら〳〵考へて見ましたが、沙門は矢張り、一生糞掃衣をつけて過すべきだと思ひます。又食事も一日一食にし、乞食法で得たものだけを食べ、他人の家に食事に呼ばれて御馳走になるのは墮落の始と思ひます。それから夏は露地に住み、冬は草庵に住むべきで、立派な家に泊るのはよくないと思ひます。殊に魚を食ふなぞは殺生戒を重く見る我々には見逃すとの出來ない惡事ですから、魚の肉は食はないやうにすべきだと思ひます。この五つの法を守れば、少欲知足の善法を守ることが出來、精進、持戒、清淨の諸德を自ら具へ、涅槃に早く入れるやうになると思ひます。この五法は皆に守らせるやうにしなければならないと思ひますが、世尊はどう御考へになりますか。』

『お前はなぜ五法がいゝと思ふなら、自分一人で行はないのか。私はそれを決して禁じてはゐない。むしろ私はそれをほめてゐる。だが、それは誰にも強制すべきではない。身體の弱いものもあるし、人の親切を無にしてはならない時もある。自分が行ふならいゝが、それを誰にも行へと

云ふのは、事を好むものである。思ふに、お前は、諸ゝの比丘の和合してゐるのを、方便をもつて破らうとして、わざとことを大げさに云ひ、非常行法を、常行法としてとくのであらう。』

提婆は抗議をしようとしたが、佛陀に心の底まで見通されたやうな氣がして、すぐには答へられなかつた。

迦留羅提舍はそれをはがゆく思つて云つた。

『世尊は提婆尊者の云はれることが本當だと云ふことを御存知なのに、和合を害する爲だと故意におつしやるのは、妬心があるからではないのですか。』

佛陀は迦留羅提舍に向つて云つた。

『愚か者よ。私に何の妬心があらう。過去の諸佛は糞掃衣をおほめになり、それを着るのをお許しになつてゐる。私もそれをほめ、それを着ることを許してゐる。私は同時に居士の供養する衣も着ることを許してゐる。

過去の諸佛は乞食をおほめになり、お許しになつてゐる。私もそれをほめ、それを許してゐる。同時に又居士の請に應じて食することも許してゐる。

過去の諸佛は一食をほめ、それを許してゐる。私もそれをほめ、それを許すが、二食するもの

を許す。
過去の諸佛は露地に住むことを賞め、それを許してゐる。私もそれをほめ、それを許してゐるが、又家に住むことも許してゐる。
私は殺すところを見たり、聞いたり、又私のために殺した疑のある三つの不淨の肉を食ふことは許さないが、私の知らない處で、既に殺されてしまつた、三つの淨肉はゆるしてゐるのだ。それ等はお前達が思つてゐる程、涅槃に入るにはさまたげにならないのだ。かうしなければならないとあまりにはつきりきめる方が反つてさまたげになる。そのことを私は知つてゐるのだ。』
佛陀はさう云つて、誰もゐない室に入られ坐禪をされた。
あとに殘つた提婆は大得意になつて云つた。
『五法を守る事の出來るものは起ち上れ。』
提婆の弟子達は立ち上つた。
『どうだ。皆、五法を守る勇氣がないのか。樂がしたいのか。うまいものが食ひたいのか。それで沙門になれると思つてゐるのか。世尊も五法を守る方がいゝことは知つてゐられる。どうだ。立ち上る勇氣はないか。』

二、三人立ち上ると、ぞろ〳〵皆立ち上つた。最後まで立ち上らなかつたのは、その場にゐた比丘では、たつた阿難と、一人の須陀洹比丘だけだつた。

提婆はすつかりよろこんで云つた。

『阿難、お前は五法を守れないのか。さあ、皆私のあとに從つて來い。』

皆も魅せられたやうに、あとをついて行つた。舍利弗や大目連がゐたらこんなことにはならないだらうにと、阿難は悔しがつた。

提婆は自分のゐる處に歸ると、すぐ規則をきめ、自分の左右には倶迦利、迦留羅提舍をおいて、自分は佛陀を氣どり、二人は舍利弗、大目連を氣どつた。

九七　阿闍世王、佛陀に懺悔す　提婆の滅亡

だが提婆の勢力はながくはつゞかなかつた。鍍金は遂には剝げる。はげたらもう始末はつかない。しかも提婆が鍍金だと云ふことに最初に氣がつかれたのは阿闍世王なのは皮肉だつた。王は父を殺してから、氣持がすつかり滅入つてしまつた。父の愛を思ひ出し、又夢にうなされては、してはならないことをしたことを後悔した。

或る日、彼は母と食事をしてゐた。
彼の子供の優陀耶が見えなかつたので彼は侍者に聞いた。
『優陀耶は何處へ行つた。』
『そとで犬と遊んでゐらつしやいます。』
『呼んでこい。一緒に食べるから。』
優陀耶は犬を抱いて入つて來た。
『御飯をたべないか。』
『犬と一緒でよければたべます。』
『すきなやうにしたらいゝだらう。』
王子は犬に自分の食べるものを食はせながら食事をした。
阿闍世王は母に云つた。
『私は王なのに、子供を愛する許りに犬と一緒に飯を食はされる。大變な目にあつたものだ。』
『別に大へんなことはありません。狗の肉さへ食ふものがあるのです。犬と一緒に食べたと云つて別に驚くことはありません。しかしそなたの父上はもつと大へんなことをされたことがあるの

を、御存知か。』
『知りません。』
『そなたの小さい時、手の指に癰が出來て、苦痛がはげしく、そなたは晝夜寢ることが出來なかつたので、父上はそなたを抱いて、膝の上にのせ、癰の出來た指をくはへて、そなたを可愛がられた、さうするとそなたは指の痛みを忘れて、いゝ氣持になつて眠つてしまつた。その時口中の暖みで、癰が熟してつぶれて膿が出た。しかし父上はその膿をはくために、そなたの指を口から出して、折角痛みがなほつて心地よく眠つてゐるのをおこすと惡いと思つて、その膿をおのみになつたのだ。父上は子供のそなたのためにはそんな誰にも出來ないやうな事もなされたのだ。』
阿闍世王は默つてその話を聞くと、隣の室へ立つてゆかれた。
それからまもなく阿闍世王は樂しまなくなり、提婆が來ても、逢ふのをさけられた。
そしてわけのわからない氣鬱病にかゝられた。或る夜、阿闍世王は群臣に向つて云はれた。
『誰か、私のこの心の淋しさをいやしてくれるものはないか。』
或る者は、快樂が、王の淋しさをのぞくだらうと云ひ、或る者は、よき音樂や舞踊がその淋しさから逃れさしてくれると云ひ、他の者は、勇猛な兵士をつれて獵にゆくことをすゝめ、又他の

人は佛陀以外の六人の異教の師に逢つて教をうけるのがいゝと云つた。
しかし阿闍世王はそれ等の申し出を聞いても心が動かなかつた。
名醫の耆婆も其處にゐたが、默つてゐた。
王は聞かれた。
『お前はどう考へる。』
『今の世に大王をお救ひ出來る人は佛陀より他にはないと思ひます。』
から耆婆が思ひ切つて云つた時、皆の顏色が變つた。阿闍世王はしかし怒らなかつた。默つて下を向かれた。
耆婆は王の心を察した。
『佛陀は必ず大王を喜んでお迎へになるでせう。あの方は大海のやうな方です。どんな人がゆきましても、あの方は必ずよろこんでお逢ひになります。大王のお心のなかのお苦しみを根本からなほすことの出來るのは、あの方だけです。肉體の病でしたら私がおなほしいたしますが、御心の上の病はあの方以上の名醫は、今は勿論、過去、未來においてあらはれることはないと思ひます』

『お前の云ふことは本當である。私もこの頃佛陀にお逢ひしたくつて仕方がなくなつてゐる。あの御慈顏を私は拜したくつて仕方がないのだ。しかし私の罪はそれを拒んでゐる。』

『あなたの罪は、先王は死ぬ時に既に許されてゐらつしやつたと聞きます。先王に靈があれば大王も佛陀の處にお導きになつてゐらつしやるにちがひありません。正直に申し上げれば今佛陀は大勢の弟子と一緒に私の梨園に來てゐられるのでございます。申すも畏れ多いことかも知れませんが、佛陀は鬼子母や鴦崛摩羅をさへよろこんでお迎へになり、正覺を得さしてゐらつしやる方です。お恐れになることはございません。實際すべて佛陀と云はれる方は、昔より、いろ〳〵の因果を除き、平等で二心のないものでございます。栴檀香を以て右手に塗るものにも、刀を執つて左の手を切るものにたいしても、同じ心をもつてお對しになります。佛陀は一切に對して一子羅睺羅を愍れますやうに、愍れまれます。唯、大王は思ひ切つて駕を抂げられ、お逢ひなされば、御心は雲がはれた靑空のやうにはれ渡るでございませう。』

阿闍世王はそれを聞くとすつかり氣持がよくなられ、

『それなら之からすぐ行つてもいゝであらうか。』

『勿論、よろしうございます。』

そこで阿闍世王はすぐに出かける用意を命じられ、五百の燈に火をつけ、多くの人に身を守らせながら、自分は耆婆と象の上の駕にのられ、佛陀のゐる梨園に向けて出かけられた。
途中でも王は何度も恐を抱き、引き上げようとされたが、名醫耆婆は、うまくそれをなだめて、自分の梨園に導いた。
園の前までくると、大王は象から御降りになり、耆婆をつれて御入りになつた。
大王の御出でのことを知つてゐたのか、どうかはわからないが、佛陀はこの時、講堂にゐて、南面して師子座の上に、靜かに腰かけられ、その前の燈火に火がつけられてゐた。弟子達も坐禪を組み默然としてゐた。
王は講堂にゆかれ、足を洗はれ、堂に入られた。そして靜かにしてゐる人々の間を耆婆に案内されて佛陀の前に立ち、手を胸の上に重ねて、おつしやつた。
『世尊、私の心をお察し下さい。』
『よく來られた。大王、あなたの來るのを待つてゐた。』
王は思はず前に跪いた。
『世尊、私は恐しいことをいたしました。罪のない父を殺しました。後悔いたしてをります。お

救ひ願ひます。』
佛陀は云つた。
『今、大王の過を悔いるのに機が熟したのです。過は人の世では誰も犯しやすいのです。過のないことは人間にはむづかしいものです。だから本當に自ら改め得たものが上人と云ふのです。我が法は極めて廣大です。たゞ時々懺悔をおしなさい。』
阿闍世王は温い、大きい懷に抱かれたやうな氣がした。しかし自分の罪がさうたやすく許されるものとは思へなかつた。それで重ねて云つた。
『世尊、身命をもつて歸依いたします。どうぞ御願ですから、我が罪が許され、長夜の無爲を得させるやうに、妙法をのべていたゞけたらいたゞきたいと思ひます。實際私は何一ついゝことはせず、罪は限りないものですから。』
佛陀はそこでおつしやつた。
『世の中には二種の人があります。共に天上に生れることが出來ます。一は罪本を造らずに善を修するものです。他は罪を造つても改心し、懺悔するものです。』
さうおつしやつて偈を說かれた。

『極悪をなすとも、悔ゆるまゝにうたゝ薄らぎ
日に悔いて息むことなくば、罪の根とはに拔くべし。
大王よ。法を以て民を化し、非法のことを行つてはいけません。法をもつて民を治め、德化してゆけば、善き名はあまねく四方に聞え、人々はその人を愛し、したはないことはむづかしいものです。心は安らかに、たのしいものです。非法を行はないものも、同じく人々の喜となり、その喜はまた大王に戻るでせう。しかる時、自づと長夜の無爲は得られ、心は安らかになるものです。』

王は佛陀の前に跪いた。
心は大きな愛に温められた。王はすつかり心がおちついて、希望をとりもどして、宮殿に歸られた。

かく一度佛陀の心にふれた王が、どうして提婆を信じることが出來よう。一度本當の金剛石の光を知つたものは、ガラスの光にはおどろかない。
王は提婆に愛想をつかされたのは當然だ。
提婆は王の心をかくの如く淸淨な喜に滿したことは一度もなかつた。

王は益々佛陀に歸依された。
しかし提婆に愛想をつかしたのは王許りではなかつた。一時勝利を得たことが同時に提婆の致命傷になつた。人々は提婆の言葉と行爲の矛盾を知つた。自分の心を黑く出來ないものはつひに提婆をすてて又佛陀のもとに歸るより仕方がなかつた。提婆の評判は急におちて、つひには何處へ行つても排斥せられ、遂には利害關係で集つてゐたものも提婆を捨て去つた。
或る日提婆はどうしても阿闍世王に逢ひたいと思つて宮殿にいつたが、矢張り斷られた。無理にも入らうとして門衛におし出された。彼は無念の思をして宮殿の方を睨んだ。其處に偶然、宮殿から蓮華色女が出て來た。門衛と微笑をうかべて挨拶して機嫌のいゝ顏をして出て來た。そして提婆を見ると、何氣なく挨拶してゆきすぎようとした。
提婆は、
『まて。』と云つた。
『何か御用ですか。』
『なんのうらみがあつてわしの宮廷に入るのを邪魔するのか。』
『邪魔なんかいたしません。』

蓮華色女は靜かに云つた。

『馬鹿。』

提婆は力一杯蓮華色女の頭を撲つた。蓮華色女は目まひがして倒れたが、やつと立ち上つて東園精舍にたどりついたが、其處で倒れて死んでしまつた。提婆はその後ゆくへ不明になつてしまつた。

九八　琉璃太子、王位を僭し釋迦族を恨む

佛陀は隨分齡をとられた。しかし益々深みを増し、落ちつきを得られ、同時に何となく靜寂な氣が加はり、沈默されることが多くなつた。提婆の自滅したことなぞ問題ではなかつた。しかし世の中は決してよくはならなかつた。彼の舊い弟子達も皆齡をとつた。曾ては皆若かつたが、今は皆、七十以上、八十近くなつた。そして次第に死んでいつた。若い新しい弟子もつぎ／＼と增してはいつたが、靜寂な氣分はます／＼僧團をつゝんだ。

佛陀の生活は益々簡素になり、人ごみに出ることを喜ばれなくなつた。しかし佛陀の歩く所は、多くの人が出て來て、拜んだ。佛陀はそれ等に慈悲の光を浴びさした。

人々は益々佛陀を尊敬したが、佛陀の心は益々澄み渡り、透明になつたが、何となく悲哀を帶び、慈悲心がました。

何か恐しいことが近づきつゝあつた。それは佛陀の上にではなかつた。彼の故郷の上にだつた。彼も人間ではある。不幸な人にたいして慈悲心のない人間ではなかつた。たゞ眞理を知るが故にあわてず、惡の本を生み出さず、惡に報ゆるに惡をもつてしないだけだ。波斯匿王も齡をとられた。そして太子の琉璃が段々成人された。

印度は廣くもあるが、多くの王が、並び存してゐた。支那の戰國時代に似てゐた。たゞあれ程、のべつ戰爭はしなかつたが、しかし平和をたのしんで許りはゐなかつた。お互に隣國を占領したいと云ふ氣はなくなつてはゐない。

波斯匿王はともかく佛陀に歸依され、別に恐しいくはだてはなさらなかつたが、太子の琉璃は佛陀を深く憎んでゐた。

それにはこみ入つた事情がある。

始め波斯匿王が王になられた時、釋迦族の女と結婚したいと思はれた。

そしてその由を釋迦族の人に申し込んだ。ところが釋迦族の人は自分の先祖に自信をもち、自

分の種族を他の種族より優つてゐるものと思つてゐる人々なので、隣國の大王の申し込みにかゝはらず、それを喜ばなかつた。

その時釋迦種の王の位置にゐた摩訶男は、皆に云つた。

『怒るのはやめて、萬事私に任せてほしい。波斯匿王は怒らせると恐しい人だ。どんなことをするかわからない。兵力では殘念ながら我が國は勝つ見込はないのだから、何とかしなければならない。私にいゝ考があるから、萬事私に任せてほしい。』

摩訶男はさう云つて、自分の家の女中の內に、末利と云ふ非常に美しい女がゐたので、それを自分の娘として波斯匿王に送つた。

王はすつかりよろこんでその女を第一夫人とした。迦留陀夷がその美しさにおどろいたのはこの夫人である。

このことを知つた釋迦族の者は愉快がつたが、佛陀はその話を聞いた時から、何か恐しいことが起ることを想像した。

この二人の間に生れたのが琉璃太子だつた。しかしそれだけなら、まだよかつたかも知れないが、第二の災の種がついでまかれた。

それは琉璃太子の八歳の時の話だつた。

八歳の琉璃太子は射術を教はるために、迦毘羅城に來た。釋迦族は弓術が進んでゐるので有名だつた。摩訶男は五百の童兒を集めてその相手をさした。

ところが、その時迦毘羅城では佛陀を迎へるために一講堂をつくり、それを神聖なものとして種々の坐具を敷いたり、絹の幡蓋をかけたり、香汁を地に灑いだり、名香をたいたりしてゐた處へ、琉璃太子は他の子供達をつれて講堂にのぼつて遊んだ。

釋迦族のものは、女中の子が神聖な講堂に登つたのを怒り、琉璃太子が自分の國に歸るとすぐその踏んだ、階段をかへ、足跡をけづり、殿中の土を七尺もほりすてて、淨土をもつて來てうめ、すつかり講堂をあらひきよめた。このことが、琉璃太子に聞えたので、太子はすつかり怒つて云つた。

『吾王となるを待つて、釋種を滅ぼすべし。』

佛陀はこれ等を聞いた時、今更に釋迦族の自惚心を嘆じ、他日恐しいことが起ることを心配された。

今やその恐しい日が、せまつて來た。

或る日波斯匿王と末利夫人とが祇園精舍に佛陀を訪はれ、說法を聞かれてゐる時、琉璃太子は不意に兵を集めて、精舍にゆき、供待ちしてゐた家來達を殺し、王冠、劍なぞを奪つて引き上げて行つた。

王や后は、佛陀の話を聞いて歸つてくるとそのありさまで、家來たちが殺されてゐるのを見られた、二人は茫然として立つて見てゐた。その時、やつと逃げかくれでゐた二人の家來が來てことの樣子をくはしく話した。

王は驚いて末利夫人に云つた。

『あゝ、こんなことになることを知つてゐたら、早く位をゆづればよかつた。』

王が茫然としてゐるので末利夫人は仕方がないので、王を慰め、そして迦毘羅城にのがれることをすゝめた。二人はやつと粗末な車を見つけ、それにのつて七日七夜かゝつて迦毘羅城についたが、夜なので門がしまつてゐた。王はそれを見て、がつかりされ、張りつめた氣がゆるむと同時に、俄かに病んで死なれた。釋迦族のものは翌朝それを知つておどろき、さわいだが、もうどうすることも出來なかつた。厚く葬るより仕方がなかつた。

琉璃王はそのことを知ると共に、自分の世界が來たことを知り、よろこんで王位についた。

恐しいことが起るのは、さけられない運命に見えた。

九九　琉璃王、釋迦族を亡ぼす

琉璃王は或る日、臣下達をあつめて云つた。

『國王を不淨とし惡むものあらば、その罪をどう罰すればいゝのか。』

『その罪は死です。』

『さうだ。釋迦族は我を不淨なものとして惡んでゐる、その罪は死だ。』

琉璃王は、遂に釋迦族を討つことにきめた。

この評判はいたる所に傳はつた。釋迦族の人達の驚は云ふ迄もない。しかし佛陀の弟子達も無關心ではゐられなかつた。

佛陀はそれを聞かれると、一人皆の處からはなれて、琉璃王が軍勢をつれてくる道ばたの枯樹の下に坐禪を組んで琉璃王のくるのを待ちうけた。

佛陀は私情から云へば、むしろ殺されることを望まれたのであらう。

琉璃王もさすがに佛陀を見ると、車からおりないわけにはゆかなかつた。

『世尊はなぜ，枝葉の繁茂した樹の下で坐らずに、こんな處に坐つてゐらつしやるのですか。』
『親族のもののために。』
琉璃王は云つた。
『昔から兵を用ひて出征する時、沙門に遇はば軍をかへして還れと云はれてゐる。まして佛陀に遇つたのだ、進むわけにはゆかない。』
さう云つて軍をかへされた。
佛陀も皆の處へ歸られたが、へんに元氣がなかつた。さすがの佛陀も、顏に光がなかつた。
阿難は心配して云つた。
『私は世尊のおそばにゐて數十年になりますが、こんなに御元氣のないのを始めて見ます。』
『あと七日で釋迦族のものは皆、傷つき倒れるだらう。如來の顏の變をあらはすのは、家中の爲に喪に服するのだ。』
大目連は進んで云つた。
『迦毘羅城を救ふために働きたうございます。』
『釋迦族には宿世の罪の報を受けなければならない因緣があるのだ。代つて之をうけることは誰

も出來ない。』
阿難は云つた。
『この國を守ることは誰にも出來ないのですか。』
『もし釋種の人が心を一つにし、外敵にくみするものがなければ國は亡びない。』
『敵にくみするものがあるのですか。』
佛陀は默つてゐた。
琉璃王は三たび軍を進めたが、三度世尊はそれを知つて枯樹の下に坐して、その軍を退かされたが、四度は、世尊も、自分にとめる力がないことを御知りになつた。
琉璃王は四度目は、佛陀に逢ふとも歸らない決心をし、又道をかへて進んだ。
そして軍を進めた。釋迦族のものたちも始めは矢を射つてよく戰つたが、多勢に無勢で、遂に城中に逐ひこめられた。七日の間門を閉ぢて防いだ。
琉璃王は云つた。
『城門を開ければ生命は助けてやる。さもなければ皆殺しにする。』
城中のものは相談をしたが、議論はまち／＼だつた。あけろと云ふもの、どこまでも戰はうと

云ふもの、密かに逃げようと云ふもの、なぞがあつて、皆、相手の云ふことを聞かずに、わめいた。誰も、それ等をおさへつける力のあるものがなかつた。

この時十五になる男で、奢摩と云ふものがあり、琉璃王が門外にゐるのを聞いて、城門に登つて、王と戰はうと叫んで、弓をとつて矢つぎばやに射つたが、その弓勢のするどさは鬼神のやうで、敵は右往左往に逃げ廻り、琉璃王は地の孔に入つて之をさけた。

しかし釋種の人々はこの奢摩を暴勇だと云つて非難し、とう／＼童子を怒らした。奢摩は城を出て、何處かへ行つてしまつた。

あとに殘つたものは、勇氣のない連中が多かつた。

そこで城門を開くべきか、戰をつゞくべきかの會議がひらかれた。そして開けろと云ふ方が多數だつた。それで城門は開かれて、血に渇く虎狼の群を自ら招き入れた。

琉璃王は入つてしまふと門衞の五百の人を殺し、三萬人の主だつた人々を生けどりにした。

琉璃王はこの人々を切るのは大へんだから、足を土中にうめて象にふみ殺させようなぞと云つてゐた。

その時、摩訶男は云つた。

『私に一つの御願があります。』

『なんの願だ。』

『私が今、この庭の池の水底に潜つてゐる間、皆を逃して下さい。私が水を出るのを合圖に皆をお殺しになつて下さい。』

『それは面白い、承知した。』

摩訶男はさう云つて水中にとび込んだ。皆はゆるされて、われ勝ちと逃げた。そしてお互にぶつかりあつて、ころげたり、その上をふんで逃げたりした。人々はてんでにわめいてゐた。その様は見てゐられないものだが、琉璃王達は微笑しながら、その様を見、今にも摩訶男が出てくるのを待つた。

しかし摩訶男は遂に出て來なかつた。

人々は逃げてしまつた。いら／＼してゐた琉璃王はつひに辛抱が出來ずに人をして、潜らして調べさした。

潜つた男は出て來て感動して云つた。

『お出にならないはずです。髪の毛を樹の根にゆはいつけ、木の根にしつかりかじりついて死ん

でゐられました。』

『さうか。』さすがの琉璃王も暗澹とした。『私の祖父が死んだのは、他の人々の生命を助けるためだつた。惜しいことをした。殺すのではなかつた。』

かくて釋迦族の國は亡びたのだつた。

一〇〇　佛教の隆盛を憎むもの、大目連を殺す

佛陀はその後も同じやうな生活をつゞけてゐた。しかし佛陀の歸依者は益々ふえた。佛陀の心が澄み切り、娑婆氣がなくなるに從つて神々しさは增して來、人々の信賴はますのだつた。そして佛陀の心は益々衆生を愛するのだつた。

しかし佛陀の全盛を喜ばないものは、提婆だけではなかつた。異教徒と云はれる人々の內にも、佛陀の隆盛を喜ばないものが少くなかつた。殊に阿闍世王は、すつかり佛陀に歸依し、他の宗派に厚意を持たれなくなつたので、さう云ふ人々は益々佛教の盛んになるのを憎んだ。

しかし彼等は佛陀をやつけるのは恐しかつた。王の怒も恐しければ、釋迦がもし本當の佛陀だつたら、その罪も恐しいと考へた。それで彼等は先づ佛陀の兩腕をもぎ取らうと思つた。それで

第一にねらはれたのは大目連だつた。
舍利弗と大目連はたしかに佛陀の兩腕であり、そして佛陀に特別に信賴されてゐた。實際、佛陀は自分で說法する事が何かの理由で出來ない時、二人に說法させ、二人が說法すれば、安心してゐた。

しかし舍利弗の方はとかく病身だつた。この頃よく病氣した。

ある時は醫者に、乳の中に蒜を入れて煮たものをのむといゝと云はれて、佛陀にそのことを申し上げると、お許しになつたが、同時にそれを用ゐたら、佛陀や上座の僧には近づかないで、講堂にも入らず、自分の室にとぢこもり、大小便は大地を掘つてするやうに、そして病がなほつたら室や床をよくあらふやうにと云ふ注意があつた。

舍利弗は佛陀の云はれる通りにして、牛乳で蒜を煮てたべて治つた。又、他の時には大目連が見舞つて醫者に聞いたら、醋と鹽をのめと云はれたので、大目連がやつと醋は得たが、鹽は中中得られないで困つたが、やつと畢鄰陀婆蹉比丘と云ふのが持つてゐたので、それを佛陀の許を得て、大目連がのましたこともある。

しかし大目連の方は丈夫だつた。

そして伊私耆梨山に道を修めてゐた。
それでなほねらはれた。
彼をねらつた異教者は、裸形外道と佛徒の方でよんでゐる仲間だつた。
彼等は多くの浮浪人に金を與へて、大目連を殺させた。浮浪人達は、大目連が坐禪してゐる處に出かけて、四方八方からとりかこんで、石をなげつけた。
大目連は靜かに坐してゐるまゝとう／＼石につぶされた。浮浪人達は大目連の神通力を恐れて死んでゐても近づかずに、ます／＼大石をなげつけて、つひに大目連が形を失ふまでにつぶしてしまつた。
大目連はかくて一つのやぶれた衣を着た血だらけの肉のかたまりとなつた。
浮浪人達は凱歌をあげて、その肉塊を林のうちに捨てて逃げ出した。
比丘達がそれを知つたのはそれから暫らくたつたあとだつた。
比丘達はさすがにがつかりした。腹も立てた。
弟子の一人は佛陀に云つた。
『大目連尊者のやうな方でも、こんな最期をおとげにならなければならないのですか。』

『さうだ。肉體は無常なものだ。たゞ大目連のやうな者は、死ぬ時も、迷はずおちついて涅槃に入れるのだ。生死の問題は、悟れる者にとつては大した問題ではないのだ。大目連の死は限りなく美しい死だ。』

大目連が殺されたことを知つて怒られたのは阿闍世王だつた。彼は大目連を殺した人々をまもなく捕へた。それ等の人の言葉で、大目連を殺さした張本人が、裸形外道だと云ふことを知り、王は激怒してその人をつかまへさし、火の坑に投じて殺さした。

一〇　舍利弗、涅槃に入るために佛陀に別をつげる

大目連が死んでまもなくだつた。佛陀は巴連弗城にゆかれ、恒河を渡つて毘舍離城にゆかれ、その近くの竹芳村の林で佛成道後第四十五回の雨期の安居を過された。そして其處で重い病氣になられ、自分の涅槃に入るのもまもないことだらうとおつしやつて、人々を驚かし、悲しませた。しかし病氣はよくなつて來たので、祇園精舍に引きあげられ、それから又王舍城の竹林精舍にゆかれた。

涅槃に入られる前に、逢ふべき人に逢ひ、話すべきことを話しておきたいと、思はれたらしか

つた。
舍利弗はこの時、自分が涅槃に入らうと思ひたつた。
彼はある日、坐禪をくみ、禪定に入つてゐたが、それがすんだ時に、ふと思つた。
『昔から諸々の佛陀の、上足の弟子は、いつも佛陀よりさきに涅槃に入つてゐるのが、常だ。今佛陀は近い内に涅槃に入られることになつた。私が涅槃に入るべき時は今である。』
そこで舍利弗は立つて佛陀の處にゆき、跪いて云つた。
『世尊、私は之から涅槃に入らうと思ひます。どうか、お許し下さい。』
佛陀は云つた。
『どうしてそんなに涅槃を急ぐのか。』
『世尊、私は世尊が近い内に涅槃に入られることを聞きました。私は世尊が涅槃に入られるのを見るに耐へません。それに、世尊も兼々おつしやつてゐらつしやるやうに、過去の佛陀の上足の弟子は、必ず佛陀にさきだつて涅槃に入つたさうでございますから、私も涅槃に入る時が來たと思ひます。どうぞお許し下さい。』
『舍利弗、お前はよく涅槃の時を知つた。しかし何處で涅槃に入るつもりだ。』

『故郷の迦羅臂拏迦の村に、まだ母が生きてをりますから、母を尋ねて、私の生れた室で涅槃に入らうと思ひます。』

『それではとめることはよさう。しかしお前は私の弟子の内で無比の弟子だから、皆に最後の説教をしてやるがいゝ。』

そこで佛陀は阿難にさう云つて、皆を集めさした。皆は舍利弗の最後の別の辭を聞くために集つて來た。

舍利弗はそこで云つた。

『世尊よ。私は昔から佛陀の世の中に出られるのにどうかしてお逢ひしたいと思ひましたが、その念願が達して生きてゐる内に佛陀にお逢ひすることが出來てこんな嬉しいことはありませんでした。その上にいろ〳〵のことを敎へて戴き、愚かな私もおかげで悟を得ることが出來ました。このことは感謝し切れない喜でした。今、時が來まして、私がこの世を去る時が近づきました。私はもうぢきこの世の束縛からはなれ、自在の境地に入ることが出來るでせう。そして私は遠からず、重荷を下した人のやうに、五體の束縛から脫することが出來ます。人天の內で最も尊い世尊、之が世尊に捧げ奉る最後の御挨拶でございます。』

舍利弗は合掌して佛陀に挨拶をした。
誰も默つてゐた。嚴かな光景だつた。
舍利弗は挨拶がすむと、靜かに立ち上り、歩き去つた。佛陀の姿が見えなくなる迄、舍利弗はあとじさりした。
他の弟子達はてんでに香華を捧げて舍利弗を送つた。それは靜寂な、壯嚴な行列であつた。すすり泣くものもあつた。
舍利弗は竹林精舍の入口の處に立ちどまり、皆に云つた。
『皆さんはもうこゝでとゞまつて、送るには及びません。沙彌の均頭だけついて來てくれればそれでよろしい。皆さんは、歸つて、自分の修行をつみ、憂苦の境を脱するやうにお骨折りなさい。佛陀のこの世に出現されることは實に珍しいことです。まるで優曇華の花が咲くやうなものです。人と生れて信を得、出家出來、如來の法を聞くことが出來るのは、なほ稀有なことです。皆さんは一層精進されることをのぞんでゐます。諸行は無常です。苦にうちかち、無我になることが大事です。そして涅槃こそ、我等が永遠に歸りたく思ふ、靜寂の世界です。』
舍利弗がかう云つた時、人々は舍利弗と之が最後の別だと思ふと、涙がうかんで來、耐へられ

なく淋しくなつて云つた。
『どうしてこんなに早くあわてて涅槃に入られるのですか。』
舍利弗は人々の心を察して云つた。
『皆さん、心をいためてはいけない。この世は無常であることは皆さんのよく知りすぎてゐることではありませんか。須彌山もいつかは崩れます。まして芥子にひとしい、舍利弗の身が亡びるのはあたりまへのことです。皆さんは一心に道を修めて、苦境を脱しなければいけません。』
さう云つて舍利弗は均頭一人をつれて母の家に向つた。母の家は王舍城から二里程はなれた處にあつた。
彼と別れればもうこの世で逢へないことを知つてゐるので、彼が斷つても、少數のものは彼をしたつてあとをつけた。
舍利弗はその未練を喜ばないではつきり斷つた。人々は仕方なしに別をつけ、老いたる舍利弗と、均頭の後姿をいつ迄も見送つてゐた。見えなくなつても、彼等はすぐ歸らうとはしなかつた。もう貴き舍利弗には逢へないのだ。さすがに悟つてゐても人情に變はなく、涙が中々とまらなかつた。

佛陀も室にとぢこもつて坐禪をくまれてゐたが、益〻精神力を發揮して、淋しさと戰はれた。靜寂の氣は凄い程、室の內に籠つた。

一〇二　舍利弗の死

舍利弗も感慨無量ではあつた。だがさすがに心の內は亂れてはゐなかつた。益〻心の內は透き通つた。それは寂しくはあるが、氣持の惡いものではなかつた。雪山の頂にでも立つやうな氣持だ。

しかし彼は疲れてゐた、とぼ〳〵と歩いてゐた。均頭は默つてあとをつけて歩いてゐた。故鄕の村についた時、彼は村はづれで休んでゐた。其處に一人の若い男がやつて來て、彼に氣がつくと丁寧にお辭儀した。それは彼の甥の優婆離婆多だつた。

舍利弗は云つた。

『祖母さんはおうちか。』

『はい、うちにゐらつしやいます。』

『私が歸つて來たとさう申し上げてくれ。』

『はい。』
『そして私の生れた室を淸めて戴きたいとさう申し上げてくれ。』
『はい。』
優婆離婆多は貴き伯父が歸つて來たので、大喜びで祖母の處に知らせに行つた。
舍利弗が何しに歸つて來たかは若い甥には氣がつかなかつた。
母も子供が久しぶりに歸つて來るのを聞くとさすがによろこんだ。八十近くなつてゐても我が子は我が子にちがひない。百に近い母にとつて舍利弗は子供としか思へない。
しかし生れた室を淸めておいてくれと云ふ傳言を聞いた時、母は少しへんな氣がした。しかし彼女は嬉しさのために深くその理由も考へず、老いたる身で、自分で室を掃除しようとした。
『祖母さん、私達がいたしますから。』
と皆が手つだつて、室はすぐかたづいた。日はかたむき出した。
そこに舍利弗はやつて來た。
『よく歸つて來た。』
母はもう泣聲になつてゐた。

『とう〳〵歸つて來ました。』

舍利弗はさう云つた。

舍利弗はやつと我が家にたどりついたと思つた。彼は甥達に足を洗つてもらつて家に上り、自分の室に入つた。

室に入つて安心すると共に、今迄こらへにこらへてゐた、咳を遠慮なくした。彼は急に苦しんだと思ふと、夥しい血を吐いた。

人々はおどろいてさわいだ。どうしていゝかわからないやうだつた。

均頭はあわてずに介抱した。母もやつと氣をとりなほして、やつて來て、貴き手で彼の背中をさすつた。

『苦しいだらう。』

『いゝえ、もう大丈夫です。』舍利弗はさう云つてから、改まつて母に云つた。

『お母さん。私の心はおちついてをります。私の師は佛陀でゐられます。その教をうけた私は生死の迷の海から解脫してをります。何も恐しいことはありません。私は靜かに涅槃に入りたいために歸つて參りました。すべて佛陀の上位の弟子は佛陀の涅槃に入られる前に涅槃に入るのが

きまりなのです。今その時が來たのです。それで私は涅槃に入るためにこゝに歸つて參つたのです。御心配下さいますな。人間は誰でも死ぬものです。あらゆる苦に解脱して涅槃に入れるもの程仕合せなものはございません。』

さすがにいろ〳〵經を讀み、その頭のよさを、舍利弗に傳へた母は、舍利弗の云ふことがよくわかつた。

『本當にお前の云ふ通りだ。迷なく涅槃に入れる者は仕合せだ。それなら靜かにしておいで。』

『はい。』舍利弗はさう云つた。

母は自分の室に歸ると忍び泣きした。

舍利弗は均頭に云つた。

『一人になりたいから、隣の室に行つておいで。』

舍利弗が病氣で歸つて來たことを知ると、夜中なのに、近所の佛陀に歸依してゐる人々が集つて來た。

均頭はその人々を舍利弗のゐる室から離れた室にゐてもらつた。そして御機嫌のいゝ時を見て、皆樣に何か話をして戴くことにしませうと云つた。

人々は舍利弗の病氣を氣にしたが、それで靜かにひかへてゐた。
夜はふけていつたが、舍利弗の室からは何の音もしなかつた。
明け方近く、舍利弗は、均頭の名を呼んだ。均頭がゆくと、
『誰か來てゐるやうだな。』と舍利弗は云つた。
『皆、尊者の涅槃に入られることを聞いて參つてをります。』
『それなら、逢ふから呼んで來たらいゝだらう。』
『逢つていたゞけますか。』
『私も逢ひたく思つてゐる。』
『畏りました。皆もさぞ喜ぶことでせう。』
均頭は皆に、舍利弗が逢ひたいとおつしやつたとつげた。
もう舍利弗に逢へないかと思つてゐた人々は、急に興奮した。そして靜かに神聖なものに逢ふやうな氣持で、足音さへ謹しんで、舍利弗が生れた室に集つて來た。
『よく集つて來て下さつた。私は四十四年の間、佛陀の敎を受け、それを說いて步いた。その間に、私の罪過が萬一あつたら、恕してもらひたい。私は師のわきに四十四年ゐて、いろ〳〵敎へ

て戴いた、その間に一度も恩師に對して不快の念も不滿な念も持つたことがなく、ます／＼深い教と、慈悲の心に滿ちてゐられるのに感心してゐる。私はその間に恩師にたいして自分の至らぬ所を深くお詫したいと思つてゐる。皆さんは之から益々佛陀を尊敬し、その教をうけて、正覺を得られるやう、精進して戴きたい。私はまもなく涅槃に入れると思ふが、これも恩師のおかげと深く喜んでゐる。實際我執のないものにとつて涅槃にまさつて靜寂な、おちついた世界はないのだ。』

人々は崇高な感じを受けた。之が死にゆく人かと思つた。

人々は禮拜して室を出た。それから舍利弗は隨分病苦に苦しんだ。しかしその苦しみがすぎると彼は右下に臥して、禪定に入り、そのまゝ遂に涅槃に入つた。

さすがに母はなげき悲しんだが、その美しい死に方に感心し、自分の近づきつゝある死を喜んで迎へられる氣がした。

死んで七日たつて、舍利弗の遺骸は荼毘にし、その遺骨を捧げて均頭は竹林精舍に歸つて來た。そして阿難の處に行つてすべてを報告した。阿難は涙ぐみながら、事の仔細を佛陀に申し上げた。佛陀は默つて聞いてをられた。

しかし阿難が前に大目連が死に、今舍利弗が死んだので、何となく心細い氣がしてゐるのを佛

陀は察して云つた。

『阿難、何を心配してゐるのか。舍利弗は、私の教をもつて涅槃したのか。』

『さうではありません。』

『舍利弗はあらゆる我が教の眞理を身につけて、あとに何ものこさずに死んだのか。』

『さうではありません。しかし尊者舍利弗は持戒をよく守り、その智ははかり知れず、よく多くのことを知つてゐました。そして少欲で知足な方で、實によく精進され、實によく見、よく教へ、よく照し、よく喜び、讃嘆して衆生の爲に說法なさいました。その舍利弗が今や、旣にをられないのです。私は法の爲に、又法を受ける人達のことを思つて心配してゐるのです。』

『そんなことは心配しないがいゝ。舍利弗がゐなくなつても其の法は失ひはしない。すべてのものは常ないものだ。いつかは崩れるべきだ、大樹が倒れる前に大枝が折れ、寶山の崩るる前に大巖が先づ崩れるやうなものだ。諸〻の比丘の內で先づ大弟子が涅槃に入るのは順序なのだ。如來も久しからずして過ぎ去るであらう。だがそれで力をおとしてはならない。教は人と共に亡びるものではない、だから、法に歸依して、他のものに歸依してはいけないのだ。私の說いた眞理に歸依して、涅槃に入る工夫が第一である。』

かくおつしやつたあとで、佛陀は比丘を皆集めて、均頭から舍利弗の遺骨を右手に受けとつて云つた。
『比丘よ、この遺骨は、數日前まで、衆生の爲に法をとき、教を施した大智舍利弗の遺骨である。彼は實際、如來のやうに法を宣べ、衆を導いた。彼の智慧は廣大無邊で、如來の他にくらぶべきものはないのだ。彼は深く法を悟り、少欲で、足ることを知り、靜寂を好んで、よく精進をした。彼は勇猛心をもち、怠惰なところがなかつた。爭を喜ばず、よく惡を避け、常に禪定を修めて解脫を得た。彼のゐる所はいつも福祉に滿されてゐ、よく外道の邪氣をはらひ、正法を教へた。汝等比丘、この貴き、我が兒の遺身を見るがいゝ。』
人々は思はず、舍利弗の遺骨を禮拜した。

× × ×

しかし日がたつに從つてさすがに佛陀も舍利弗と大目連のゐないことに何となく物足りなさを感じられた。
そして一日から云つて嘆じられた。
『私は皆を見渡しても其處に舍利弗と大目連がゐないのは何と云つても淋しい。私の弟子の內で

はこの二人だけが、よく說法し、よく教授し、辯說して人々を滿足させたが、今やその人はゐない。この世には二つの財がある。それは錢財と、法財とだ。錢財は世人から得たが、法財は私は舍利弗と大目連から得てゐたのだが。』

一〇三　佛陀、戰爭を未然にふせぎ、比丘に不退法を說く

しかし佛陀は精進力を失はれはしなかつた。寧ろ二人を失つた佛陀は勇猛心を起す必要があつた。それに自分の涅槃も近づきつゝある佛陀はあとのことを考へておく必要がある。いろ〳〵の意味で、佛陀はこの世にまたなすべきことがあつた。

佛陀が王舍城の耆闍崛山にをられた時、阿闍世王は隣國の越祇國と面白くないことがあつて、一氣に戰をし、勝負を決したくなつた。しかし戰つて負ければこのくらゐ馬鹿氣たことはない。戰はする以上勝たねばならない。それで廣く臣下に越祇國の樣子をお聞きになつたが、誰もはつきり確答をするものはなかつた。

佛陀にお聞きしたら越祇國の樣子がわかりはしないか、から誰かが云つた。阿闍世王もそれはいゝ考だと思はれた。

それで婆羅門の大臣の禹舍を呼んで、
『これから佛陀の處におうかゞひして、越祇國を討たうと思ふが、それについて越祇國の樣子がわからないので困つてゐる由を申して、お教を乞うて來い。』
と云つた。
禹舍は承知して、すぐ佛陀の處へ出かけた。
戰爭の相談を佛陀に申し込むのは變だと思つた禹舍は佛陀にお逢ひしても、戰爭のことは云はずに、何ごともないやうに、越祇國の樣子をおききした。
佛陀は何の爲に禹舍が來たか、おわかりにならないやうな方ではない。
禹舍に向はずに、阿難に向つてかうおつしやつた。その時阿難は長い棕櫚の葉の扇で佛陀を煽いでゐた。
『阿難、お前は越祇國の人が度々集合して、正事について話しあつてゐるのを聞いたか。』
『はい聞きました。』
『さう云ふ國の人は老いたるも若きもよく和合し、國は榮え、國家安泰で、外國から侵略されるやうなことはないだらう。阿難、又お前はかう云ふことを聞かなかつたか。越祇國の人は教をよ

く守り、不法なことをさけ、禮度にかなつてゐることを。』

『はい、聞きました。』

『その通りならば、老いたるも若きもよく和合し、國は榮え、國家安泰で、他國の侵略を受けるやうなことはないだらう。阿難、お前は又かう云ふことを聞かなかつたか、越祇國の人は、父母に孝行で、先輩や師を敬ふことを。』

『はい、聞いてをります。』

『もしさうとすると、老いたるも若いものもよく和合し、國は榮え、國家安泰で、他國の侵略をうけるやうなことはないだらう。阿難、お前は又かう云ふことは聞かなかつたか。かの國の人は、宗廟を恭ひ、鬼神を敬ふことを。』

『はい聞いてをります。』阿難は佛陀の意志がよくわかつたので、調子よく答へる。

『もしさうなら、さう云ふ國は老いたるも若きも和合し、國は榮え、國家安泰で、他國の侵略を受けるやうな事はないだらう。阿難、お前はかう云ふことを聞いてゐないか。かの國の人は家庭圓滿で、清淨無缺で、冗談を云つても、邪語は云はないことを。』

『はい、聞いてをります。』

『もしさうなら、さう云ふ國は老いたる者も、若き者も和合し、國は榮え、國家安泰で、侵略は受けないだらう。阿難、お前は又かう云ふことを聞いてゐるか。かの國の人は、戒を敬ひ守る沙門を大事にし、布施供養して懈怠しないことを。』

『はい、聞いてをります。』

『もしさうなら、さう云ふ國は老いたる者も、若き者もよく和合し、國は榮え、國家安泰で、他國の侵略をうけることはないだらう。』

大臣禹舍も、かうまで云はれれば、感じないわけにはゆかない。實際佛陀は嚙んでふくめるやうにものを云ふ質だ。

この答へ方は實際釋迦らしい。

そこで禹舍は云つた。

『よくわかりました。かの國の人民がその一つだけを行つてゐてもとても征め亡ぼすことは出來ないのに、七つも條件をそなへてゐたのでしたら、どうにもならないでせう。ありがたうございました、忙しうございますから之で失禮いたします。』

禹舍は歸つた。

佛陀は戰爭を未然にふせげたことを知つて嬉しく思つた。
そしてその餘力で、彼は自分の弟子をもはつきり教化しておきたいと思つた。
調子が高まつて來たのだ。何か生み出さないではやまないのだ。
そこで阿難に云つた、
『皆に講堂に集るやうに。』
『はい。』阿難も興奮してゐた。喜んですぐ皆に講堂に集るやうに云つた。
講堂に皆あつまつた。
『皆あつまりました。』
阿難は佛陀に報告した。
『さうか。』佛陀は講堂にゆかれ、皆におつしやつた。
『私は、皆に、七不退の法を說かうと思ふ。よく聞いて、よく考へて、記憶しておくがいゝ。七不退法と云ふのは、
一は、屢ゝあつまつて正義について話し合ふことだ。
二は、上下和同して、敬ひ服し、違はないことだ。

三は、法を奉じ、忌むべき事を知り、制度に違はないことだ。
四は、多くの諸知識を守る力をもつ比丘を敬ふことだ。
五は、心意は固く守り、孝敬を主とすることだ。
六は、涅槃に行く道をよく守り、欲情に隨はないことだ。
七は、人を先にし、己を後にして名利を貪らないことだ。
これ等七事は、いづれも老いたる者、若き者を和合させ、法をして壞れないやうにするものだ。
また、もう一つの七法がある。之もよく覺えて、つとめるがいゝ。その法は法を增長し、損耗をさせない法だ。それは、
一は、事少きを樂しんで、爲すこと多きを好まないことだ。
二は、靜默を樂しんで、多言を好まないことだ。
三は、睡眠を少くして、暗迷でないこと。
四は、群黨のために、無益のことを云はないこと。
五は、無德な故に、自分を譽めないこと。
六は、惡人と共にならないこと。

七は、閑静なる山林を楽しみて獨處すること。

又六不退法と云ふのがある。

一には、身常に慈を行じて、衆生を害しないこと。

二には、口に仁慈をのべ、惡言をのべないこと。

三には、意に慈心を念じて、他を損害しないこと。

四には、淨き利養を得て衆と之を共にすること。

五には、聖賢の戒を持して、煩惱なく、垢穢なく、必定不動なこと。

六には、聖賢の道を見て、解脫すること。』

佛陀は懇々と說かれた。彼は死後のことを思つてゐた。弟子達も、師の師子吼を聞いて、心が淸淨になり、勇猛心が起り、歡喜した。

一〇四　佛陀、涅槃の近きを知つていろ〳〵說法される

佛陀は旣に自分の死の近きを知つた。生きてゐる內に敎へられるだけ敎へておきたいと思はれた。そこで王舍城に適當な間ゐて、竹林精舍にゆかれ、そこで又諸比丘のために、戒律や、禪定

や、智慧について話をされた。

『戒をよく守り、修行をして禪定を獲るものは大果報がある。禪定を修めて智慧を得たものは大果報がある。智慧を修めて心淨きを得れば解脱することを得、欲や、肉體、愚癡の三つの煩悶を無くなすことが出來る。既に解脱を得、解脱智を生じたら、生死は既に盡きて涅槃を得、何をなすべきかをはつきり知つて、大願成就しあます處がない。』

竹林精舍にゐて敎化すべきものを敎化された佛陀は今度は巴連弗城に行かれた。

そして一つの木の下で坐禪された。

佛陀が來られたと云ふことを聞いた信者達は、お目にかゝりたいと思つてやつて來た。そして佛陀の坐してゐるのを見て、その圓滿さに心をうたれた。

實際八十の佛陀が、樹下で坐禪してゐる姿を見たら、感じを受けるにちがひない。

皆は佛陀の前に行つて最敬禮をした。

そして明日、法座をつくりますから、來て說法して戴きたいと云つた、釋迦は喜んで承知した。信者の人々は喜んで歸つて、大きな假の講堂をつくり、それを掃除し、淸め、法座をつくつて佛陀を御招待した。

佛陀は其處へゆき、手をそゝぎ、足を洗つて講堂に入つて、設けの座につかれて、云つた。

『人が戒を犯すと、五つの損があり、戒を守ると、五つの功德がある。

五つの損とは、

一には、財を求めても思ふ通りには入らない。二、もし得ることがあつても、毎日損をする。三には何處に行つても、皆に尊敬されない。四には醜名惡聲を天下に流す。五には身くづれ、命が終つた時、地獄に落ち入る。これを五つの損と云ふのだ。五功德は一には願ふ所が求められる。二、有する所の淨財は益々增して、へらない。三、いづこにゆくも衆人に敬愛される。四、名譽を得る。五、死んだあと天上に生れる。』

佛陀は相手が相手だけに方便的に云はれた。

人々は感心して聞いた。

云ふものが八十の老佛陀だから、聞くものは、その溫い大きな心にふれて感動した。

佛陀はそれからまだいろ〳〵話された。佛陀にこゝを去られると、恐らくもう生きてゐる佛陀にはお逢ひ出來ないと思つた信者達は中々歸らうとしなかつた。

夜は更けて來た。佛陀は皆を歸らしてから靜かな處に行つて、坐禪をくみ、禪定に入られた。

夜あけに講堂に歸つてこられて、阿難に云はれた。
『この巴連弗城は誰がつくつたのだ。』
阿難は、
『この城はかの禹舍大臣が越祇が攻めてくるのを恐れてつくつた城です。』
と答へた。
『さうか、この城が出來たことは天意に叶つてゐる。この城は賢人のゐる所で、商賣の繁昌する所だ。國法が眞實に行はれて、嘘、僞がない。どこから敵が來てもやぶれることはない。しかし將來この城が壞れる時があれば、それは三つの事のどれかが行はれた時だ。一には大水だ。二には大火だ。三には城中の者が外部の人と共謀することだ。それより他にこの城は永遠に破られることはないであらう。』
と佛陀は豫言された。
佛陀は巴連弗城を出て恒河を渡られた。禹舍は深く佛陀を尊敬したので、佛陀が城を出て又歸つて來られなかつた門を喬答摩の門と云ひ、佛陀の河を渡られた河岸を喬答摩の津と名づけた。

一〇五　越祇國から毘舍離國に入る

佛陀は恒河を渡つて越祇國に入り、いつものやうに托鉢を行ひつゝ旅をつゞけられ、拘利村に行かれ、ある林のなかで又比丘達に一場の訓話をされた。

『四つの深い法があるのを、お前達は知つてゐるか。よく覺えておくがいゝ。一つは聖戒である。二は聖定である。三は聖なる智慧である。四は聖なる解脱である。この法は微妙で、これを本當に知ることは難しい。これをすべての人が知ることが出來たら、我が法は成就したのだ。しかし私やお前達が生死の間にあつて、いろ〳〵の目にあつて來て、まだ涅槃に達しないのは、これを本當に理解しないからだ。お前達は益々精進して、この微妙な四法を知り、そして衆人にこのことを知らすやうにしなければならない。』

佛陀は思ひつくまゝに弟子達に生きてゐる内に教ふべきことを教へつゝ進んだ。

又信者たちがくると、くはしく彼等にわかる言葉で、親切に說かれた。

佛陀はなほいろ〳〵の村々を通り、今度は毘舍離國へ入られた。

一〇六　菴婆婆利と離車族

毘舍離國には菴婆婆利と云ふ美しい女が居た。佛陀が多くの弟子をつれて見えたと聞くと、多くの侍女をつれ寶車にのつてお出迎へに行つた。

佛陀は前から菴婆婆利のことは知つてゐたので、菴婆婆利が大勢の侍女をつれて、立派な馬車にのつてやつてくるのを見て弟子達に注意した。

『あすこからくる菴婆婆利は天女のやうに美しい女で、誰でも魅惑されるが、お前達は心を正しく持して心を奪はれてはいけない。』

弟子達は佛陀に特にさう注意されたので、興味を持つて見てゐると、車はとまつて、聞きしに優る菴婆婆利が靜かにあらはれて來たので、感心した。菴婆婆利は侍女達をつれて佛陀の前に來て佛陀を禮拜した。

老いたる佛陀と、その弟子達の頭をまるめ、粗末な衣をまとうてゐる連中と、美しく着飾つた美しい女達の一行とはいゝ對照であつた。

佛陀は女達を坐らせ、自分達も坐つて、話をされた。

『お前の心の美しさは顔や姿にもあらはれてゐる。齢は若く、財はあり、德は具へ、その上に美しく、しかも正しい法を信仰すると云ふことは、難しいことだ。男は智慧がある。法を樂しむものがあつても別に稀しいとは云へない。しかし女は意志は弱く、智慧は淺く、愛欲は深いものだ。その女が正しい法を樂しむと云ふことは甚だ困難なことだ。

しかしこの世に生れたものは、法をのみ娯しむやうにすべきだ。財や色は永遠に變らない寶ではない。正しい法のみが、永遠に變らない寶だ。いくら丈夫なものでも病にはかゝり、いくら若いものでもやがて老いる。生命は必ず死に苦しめられる。法を行ふもののみ、他から侵すものがない。

愛するものとは離れなければならない。そして愛しないものが隣にゐてはなれない。萬事思ふやうに中々ゆかないものだが、法のみ心の云ふことをきくものだ。他の力にたよることは大なる苦しみであるが、自在力は歡ぶべきことだ。女はすべて他人にたよるものだ。だから他人から苦を受ける。だから女の人はなほ強く、精進して、女の弱點にまけないことが必要である。』

菴婆婆利はすつかり喜んで、深く佛陀に歸依し、五戒を受けた。

そして歸る時佛陀とその弟子が自分の家に來て留ることをおたのみした。

佛陀は喜んでそれを承知された。

そこで菴婆婆利は大喜びで、佛陀に挨拶して、一先づ別れて、自分の家に車を急がせた。彼女の心は嬉しさで一杯だつた。

ところが彼女の一行が途中までゆくと大變だ。向ふから五色の車馬に五色の服を着た五百人の一行が來た。往來の眞中で菴婆婆利の行列と衝突をした。しかし菴婆婆利はかまはず行列をさけずに、行列の中を走らせて、相手の車の旗や車をこはした。

その五百人の一行は離車族の連中で、自分達も佛陀をお迎へしようと思つてやつて來たのだ。白い着物を着たものは、白い馬をつけた白い車にのり、青い着物を着たものは、馬も車も青く飾りたてゝゐた。そのやうに赤、黄、黑の着物を着てゐるものは、馬も車も、赤、黄、黑で裝飾した。お祭さわぎだ。

そして勢よくやつて來た所で、菴婆婆利の一行と衝突したのだ。

『何と云ふ亂暴な女だ。いつたい貴樣は何の勢をたのんで、そんな無茶なことをして、私達の車を傷つけたのか。』

『どうもすみませんでした。』菴婆婆利は落ちついて云つた。『今晩佛陀をお迎へすることになつてゐるので、氣がせいて、つい失禮しました。』

之を聞いた離車族の連中はおどろいた。

『なんですつて、佛陀は今晩あなたの所におとまりになるのですか。』

『えゝ。』

『それを私達の方にゆづつて下さい。そしたら十萬圓上げます。』

しかし女は勿論承知しなかつた。

『だめです。もう御約束をしてしまつたのですから。』

『それではその十六倍出しますから。』

『だめです。國中の寶を全部下さつてもだめです。もう佛陀は承知して下さつたのですから、もうどうにもなりません。お氣の毒ですが。』

少しも氣の毒さうな顔はしてゐない。

離車族の連中惜しがつたが、仕方がなかつた。

『ぢかに佛陀におたのみして見よう。』

さう云つて彼等は彼女と別れて進んでいつた。

佛陀は彼等が近づくのを見て、又云はれた。

『忉利天の天人達が遊戯する時の有様を知りたければあれを見れば解る。しかしお前達はその外見におどろいてはいけない。比丘達は自分の心を正しく持することが一番大事である。心を正しく持し、精勤懈らず、貪る心や、煩惱心に打ちかつことが出來れば、何處へいつても引け目を感じることはない。諸〻の威儀を具備すると云ふのは、行くべき時に行き、とゞまるべき時にとゞまり、行爲、行動の宜しきを得ることだ。そして行住坐臥、覺悟が出來、言葉少なに、心を治めて亂れないことだ。見かけで得られるものではない。』

あまりに彼と我との服裝の差がはげしいので、弟子達が引け目を感じないやうに注意された。

そこで弟子達も少しも引け目を感じないで彼等を迎へることが出來た。

離車族の連中は佛陀の一行を見つけると急いで近づき、車から降りて、佛陀の前に進みよつて、佛陀に禮拜して、何か教を受けたいと云つた。佛陀は承知されて、云つた。

『この世には五つの寶がある。それを得ることは非常に難しいことになつてゐる。一は如來が世に出現して說法することは稀有なことで、さう云ふ時に逢ふことは甚だ難しい。二は如來の正法

を信仰し、修學し、それを覺えることは甚だ難しい。三には如來の說法を聞き、それをよく考へ、明らかな智慧を得ることは甚だ難しい。四には、如來の敎を畏み、愛敬し、三惡道から脫出することは甚だ難しい。五には、佛道を聞いて、本生や死の因緣を知つて、情を斷ち、欲を絕つて、涅槃に入るのは甚だ難しい。今、君達は如來の出現に逢ひ、如來の法を聞くことが出來たのだ。あとは自分達でつとめて、彼岸に到達出來るやう精進すべきだ。一番大事なのは到彼岸だ、涅槃だ、よくそのことを知るべきである。』

五百の離車族の連中は謹しんで聞いてゐたが、聞き終つて云つた。

『どうか私達の處に來ていたゞきたい。』

しかし佛陀は菴婆婆利が約束をしたことを話してお斷りになつた。

しかし離車族の人々は佛陀に逢へ、親しくお話が伺へたので、よろこんで歸つていつた。

佛陀はその晩、弟子の比丘をつれて菴婆婆利の處に出かけられた。

翌日、菴婆婆利は佛徒が御馳走し、それが終ると金の瓶をとつて佛陀の手に水をかけた、そして佛陀が手を洗はれた時、菴婆婆利は、

『この毘舍離城の園の中で自分の園が最も優つてゐます。今これを以て如來に奉ります。どうか

私をあはれんで、私の願をお聞き下さい。』
佛陀はよろこんでその願を入れた。

一〇七 佛陀疾む

佛陀は毘舍離を去つて、竹芳村に行かれたが、その地方は饑饉でとても多くの弟子達と一緒に托鉢して歩くことは出來なかつた。
そこで佛陀は阿難に弟子達を集めさして云つた。
『饑饉で皆一緒にゐるわけにはゆかないから、お前達は部を分つて、毘舍離や、越祇國の方々の村にゐて安居するがいゝ。そして善いことに出逢つても喜ばず、惡いことに出逢つても心配してはいけない。身體をたもつために食事をするので、美食を求めてはいけない。欲望に打ちまけるが故に生死の境に煩惱することになるのだ。』
弟子達は佛陀に別れるのを悲しんだが、しかしやむを得ないことなので、皆、思ひ〳〵に仲間をつくり、皆で相談してゆく處をきめて心を殘しながら、佛陀にお別の挨拶をして出かけて行つた。

佛陀は阿難と二人だけ、竹芳村で安居をされることになつた。
しかしこの安居の内に、佛陀は重い疾にかゝつた。
身體中が痛んだ。佛陀は死にさうに苦しんだが、しかし心に決心して云つた。
『私は苦しくつて死にさうだ。身體中が痛む。しかし私は今弟子達とはなれてゐる。弟子達に逢はずにこのまゝ涅槃に入るのはよくない。苦しくも耐へて、精進し、もう少し生きてゐなければならない。』
そして佛陀は靜かな室から出て、清涼な處に坐つた。
阿難ははなれた木の下で坐禪をしてゐたが、佛陀の顏色のあまりに惡いのにおどろいて、急いで佛陀の御側に來た。そして云つた。
『お顏色が大變お惡いやうです。何處かお惡いのではないのですか。私は本當に心配になります。どうか、息のたえ給はない内に、弟子たちに教を垂れて戴きたうございます。』
『比丘達は私に何か聞きたいと云つてゐたか。私がもし比丘達は自分のものだ、私は比丘達を支配してゐる者だとでも云ふなら、死ぬ時に特に人々に命令もしなければならないだらう。しかし私は比丘を自分のものだとは云はない。私はいつも大勢のものと一緒にゐて、云ふべきことはそ

の度云つて、とくに祕密にしてゐることもない。私は人々を私に從へさゝうとは思つてゐない。だから死ぬからと云つて特に云ふべきことはない。阿難よ、だからお前達はいつも私から聞いてゐることを精進して行へばいゝのだ、佛法は長へに存してゐるから、私のこの身體は用はないのだ。我は年老いてまさに八十にならうとしてゐる。舊い車がこはれかけて、やつと修繕されて保つてゐるやうに、私の身體も、方便力でやつと保つてゐるにすぎないのだ。自力精進、この苦痛を忍んでゐるのも一時のことだ。やがて無想定に入る時、私の身は安穩で惱はないのだ。だから阿難よ。お前はお前自身の信仰に從ひ、法に歸依して、他に歸依してはいけない。他に歸依してはいけないと云ふのは、身體や、感覺、意志、諸法についてよく考へ、怠らず、常に想念して忘れないで、世の貪欲、煩惱を除くことを云ふのだ。

阿難よ、我が死後、よくこの法を修行する者があらば、その人は眞にわが弟子である。』

阿難は畏つて聞いた。佛陀はその後も可なり長い間、病氣のために苦しまれたが、病氣にまけはしなかつた。

病がいく分よくなつたので、佛陀は阿難をつれて遮婆羅塔に行き、そこの一樹の下に座を敷かして云つた。

『背の痛みがはげしい。こゝで少し休まう。』
佛陀は其處で木によつて坐つた。
阿難はすぐわきの一樹の下で靜坐した。
この時、佛陀は苦痛がはげしく耐へがたく、息もとまりさうに覺えた。その時魔羅(惡魔)が、彼の心にさゝやいた。
『涅槃にお入りになつたらいゝでせう。』
佛陀はその誘惑が惡魔から來たことを知つて、心で云つた。
『やめよ、やめよ。いくらすゝめても、駄目だ。私は自分で知つてゐる。三月後に、本生處の、拘尸那揭羅の娑羅雙樹の間で涅槃に入ることを。』
佛陀はこの時始めてはつきり自分の涅槃に入る時を知つた。
弟子達はその內に安居をすませて歸つて來た。彼等の中には佛陀の大病を傳へ聞いて歸つて來て思つたより佛陀の御元氣なのを喜んだものもあれば、何にも知らずに歸つて來て、その話を聞いて驚いたものもあつた。しかし皆佛陀に再會出來たことを喜んだ。佛陀もよろこばれた。
佛陀は早速弟子達を、遮婆羅塔に集めて、自分は一樹の下に坐して、說法され、今迄敎へた、

自分の正覺を得た道を、すべての比丘がまもり、それを精進して怠らず、人々を教化し、祝福し、歡喜を與へ、慈悲を垂れ、人天共に救ふことをお勸めになつた。

そして佛陀はかう云はれた。

『地上のものはすべて無常である。懈怠なく勤めなければならない。かくくりかへし〳〵私が云ふのは、私が近い内に涅槃に入るからだ。あと三月たつと如來は涅槃に入るのだ。』

弟子達にそれを聞いてびつくりし、悲しんだ。

そこで佛陀は重ねて云つた。

『悲しむのはやめるがいゝ。天地人物、生あらば必ず終はある。それはどんなことをしてもまぬかれない處だ。私は前から說いてゐるではないか。愛するものとは必ずわかれなければならない。人間の身體は無常であり、我が思ふ通りにはならないものだ。人の生命は久しくは存しない。私はこのことを說かなかつたか。

お前達は法の中にあつて、調和し敬順して、爭ふことなく、同一の師から敎をうけた、同一の水や牛乳のやうなものだ。我が法のうちで勤めて、學び、樂しむべきだ。』

さう云つて佛陀は偈を說いた。

『我が生命は熟して去らんとす。
我が生命の目的は達したり、
我は去り、　汝等は留る、
されど歸する處は我既に汝等に教へたり。
怠らずに、　常に心して聖道を歩め、
常に汝等の心を決し、　常に煩惱を解脱せよ、
心動亂することなく、　正法の言葉を守り、
不斷に修行するものよ。
そのものは自ら生死をしりぞけ、
一切の苦の終局をのりこえん。』

一〇八　淳陀と旃檀茸

これより又佛陀は苦しい疲れた身體を運びながら、涅槃の地と心に定められた、拘尸那揭羅に向つて徐々と足を進められ、道中でも道を聞くものがあれば丁寧に話された。

そして波婆城の闍頭園につかれた。
其處で鍛冶屋の息子の淳陀によばれて食事を受けられた。
その時、佛陀だけ特に珍しいとされてゐる旃檀茸を煮たものを御馳走になつた。
淳陀はその時、佛陀に、世の中にいく種類の沙門がゐるのか聞いた。
佛陀はそれに、靜かに答へられた。
『沙門に四つの種類がある。一つは行道殊勝な沙門だ。二は善く道義を說くことの出來る沙門だ。三は道によつて生活してゐる沙門だ。四は道を穢す沙門だ。
行道殊勝の沙門と云ふのは、我執をはなれ、天人の道を超越する眞に解脫してゐる沙門だ。
善く道義を說くと云ふのは、一番大事なことを知り、道のけがれのないことを知り、衆人の疑をとくことが出來る者だ。
道に依つて生活すると云ふのは　法句を說明したり、布衍して話して、生活する術を心得てゐるが、無垢の域にはまだ遠いものだ。
道を穢すと云ふのは外は淸白を裝ふが、內は穢れてゐて欲望に燃え、虛僞で、誠實な處のないものだ。

同じく沙門と云つても、眞あり、僞あり、善あり、惡ありで、同一とは云へない。不善なるものは賢なる者をそしりもする。苗中に生ずる草のやうなものである。世には外が美しく内の穢れてゐるものが少くない。しかし内の淸く、善を知るものは己を修めて、惡に遠ざかり、欲、怒、癡を除くから、道を得ることが早い。』

から話をされてゐる内から佛陀は何となく背中が又痛み出すのを覺えた。

彼は淳陀の處を出て暫らくゆくと益〻背が痛み出した。

阿難にさう云つて、座を敷かして木の下に休息された。阿難は佛陀の顏色が異樣に惡いのに氣がついた。

『淳陀の處でお食べになつたものがわるかつたのではないでせうか。』

『そんなことはない。』

『きつとさうです。淳陀の供養は福利がないでせう。世尊がそれをおあがりになつて、こんなにお苦しみになるのですから。』

『そんなことを云ふものではない。』

苦しくもさすがに佛陀だ。嚴しくさう注意されつゞけて云はれた。

『淳陀は今や、大福利を得るであらう。壽命を得、力を得、善名譽を得、多くの財寶を得、死して天に生れ、自然に欲する所を得る。如來、始めて成道した時、食を施したものと、佛陀の涅槃に臨む時に食を施すものとはその二人の功德は異なることはない。お前は之から淳陀の所に行つて彼に告げて來い。「淳陀よ、私は親しく佛陀より聞き、佛陀の敎を受けたが、お前の供養は大福利を獲、大果報をうるであらう。」』

この佛陀の言葉を聞いた人々は今更に佛陀の思ひやりの廣大なのに驚き、涙ぐんだ。

佛陀は身苦しみながら、淳陀に反つて同情されてゐるのだ。そして弟子達が怒らないやうに、巧みに用心された。

阿難は畏んで、すぐそのことを淳陀に知らせた。淳陀は恐畏すると同時に、佛陀の無限な思ひやりに感動して泣き出した。そして夢中で阿難のあとに從つて佛陀の處に來、佛陀の前に泣きくづれた。

一〇九　佛陀、涅槃の地へと苦しい旅をつゞける

佛陀は又立ち上つて前進された。

人々は默つて從つた。淳陀も泣きながらあとに從つた。
少し進むと、一本の樹があつた、佛陀は又阿難に囁かれた。
『背の痛みがひどい、座を敷いてくれ。』
阿難はあわてて樹下に座をつくつた。佛陀はその上に坐つて又休まれた。
弟子達は默つてゐた。その時、他宗の弟子の福貴と云ふのが偶然、拘尸那揭羅城から波婆城に向つて歩いてゐたが、途中で佛陀の休まれてるのを見て、立ちどまつた。彼は佛陀の容貌のあまりに崇高なのに感動すると共に、その病氣で苦しまれてゐるのに同情し、自分のかぶつてゐた二つの黄毛氈を奉つた。佛陀はそれをうけとつて、一つ阿難にやつた。佛陀は福貴の爲に苦しみも忘れて說法されたので、福貴はすつかりよろこんで、佛法に歸依した。そして云つた。
『世尊、もし波婆城においでになりましたら、どうぞ意を屈して、貧しき我等の處に來ていたゞきたうございます。さうすれば貧しくはありますが、家中の飲食、牀臥、衣服、湯藥なぞ、すべて世尊にさしあげます。世尊が之を受けて下されば、家內は安らかな福利を得るでございませうから。』
『ありがたう。いゝことを云つてくれた。』

福貴か去ると、阿難は遠慮しながら自分のもらつた黄毛氈を佛陀に奉つた。佛陀も阿難の氣持がわかつたので、すなほに受けとられ、身體の上にかけた。
この時、不思議に佛陀の顏は、輝いて來た。いつもよりもなほ、圓滿に、淸淨に、澄み切つた。
阿難はおどろいて云つた。
『私は佛陀のおそばにゐることになつて二十五年になりますが、世尊の御顏の光澤がこんなに輝き渡つたことはまだ拜見しませんでした。』
『さうだらう。如來の光色は二つの因緣から變る。一つは初めて道を得て、無上正覺を得た時だ。二つは性命をすてて涅槃に入らうとする時だ、この二つの時に如來の顏の光澤は變るのだ。』
阿難の一時の喜は又くらくなつた。
佛陀はそれから又立ち上り少し前進され、ある川岸に出た。
佛陀は阿難に云つた。
『水がのみたい。水をもつて來てほしい。』
『今さつきに澤山の車がすぐ上流を渡りましたので水が濁つて、まだ澄みません。足をあらふことは出來ますが、お飮みになることは出來ません。』

『それでいゝからもつておいで。』

『拘孫河はこゝからぢきです。其處へゆけば水をのめますし、御身體をお洗ひになれます。』

『水を持つて來い。』

そこで阿難は仕方なしに水をもつて來た。

佛陀はそれを顔と足にそゝがれた。

氣分が少しよくなつたので又歩き出された。

そして拘孫河にやつと到着した。其處で佛陀は水をのまれた。

清く澄んだ川は靜かに流れてゐた。

つかれ果てた佛陀は其處で着物をぬがれ、水を浴び、身體を清められた。そして岸にやつとあがられ、着物を着られ、そして川のそばのマンゴの林に入られた。

その時佛陀は淳陀の一人ぼつちで元氣のない姿に氣がつかれ、憐れみを催して、したしく呼ばれた。

『淳陀。』

淳陀は喜んで、

『はい。』と返辭して、佛陀のおそばに畏る／＼近づいた。

『私は坐るから、毛氈を四つに折つてくれ。』

『はい。』

淳陀はさう云つて、ふるへる手で毛氈を四つに折つた。そしてそれを敷いた。

佛陀は其處で又休んだ。

阿難は佛陀の前に行つて謹しんで云つた。

『世尊が涅槃に入られたあと、どう云ふ風に葬へばいゝのですか。』

『それは歸依者達がいゝやうにしてくれるだらう。お前はだまつて、自分のすべきことをすればいゝ。』

『しかし參考のために御考をお聞きしておきたく思ひます。皆も、お聞きしてくれと申してをります。』

『歸依者達は知つてゐるであらう。』

『しかし大勢の人の内には異論が出ないとも限りません。是非聞かして戴きたいのです。』

『それなら云はう。轉輪聖王のやうに葬るがいゝ。』

『轉輪聖王のやうに葬るとは、どうするのでございますか。』

『先づ香湯で體を洗ひ。』佛陀はおちついて話された。『そして新しい淨い綿で身をくるみ、その上を五百の毛氈で包み、それを金棺に入れ、その內に、麻の油をそゝぎ、その金棺を第二の鐵槨の中に納め、それを又旃檀の香槨の中に入れるのだ。そしてその上にあらゆる名香を積み上げ、これを荼毘にするのだ。そしてその舍利を收めて四辻に塔廟をつくり、道を步く人に之を仰いで思慕させるのだ。天下に塔廟をつくつてその舍利を納める資格のあるものは四種の人だ。一は如來、二は獨覺者、三は佛陀の大弟子、四は轉輪王である。』

佛陀の自信と自覺が覗へる。彼は自分の爲に塔廟を求める男ではない。衆生の爲に塔廟を求める男なのだ。

二〇　力士達、佛陀に詣づ

老いたる病める佛陀とそれをいたはつて側によりそつてゐる阿難を先登に、沈默せる行列はつづく、それは感慨無量の行列だ。

すべての人は氣が沈み、やゝもすると淚が出てくる。もし一番元氣な男がゐるとすれば、それ

は病める佛陀その人である。

彼は苦しいにはちがひない。疲れ切り、背が絶え間なく病んではゐた。しかし涅槃に入ることを少しも恐れてはゐなかつた。寧ろそれは法悦でさへあつた。そして頭の內は充實してゐた。最後に地上にのこしておきたい言葉で頭が滿ちてゐたから。

一行は遲くはあるが次第に佛陀の涅槃の地拘尸那揭羅城に向つた。

途中で一人の男に逢つた、その男は佛陀に逢つたことをすつかりよろこんで、自分の家に來て泊つてくれと云つた。

しかし佛陀は、

『それはやめてほしい。もうその志だけで十分供養をうけたことになる。』

しかしその男は承知しなかつた。

是非來ていたゞきたいと云つて聞かなかつた。佛陀は三度自分でお斷りになつたあとで阿難に斷るやうに云つた。

その男は阿難にも是非佛陀に來ていたゞけるやうに骨折つてほしいと云つた。

阿難はそれで、

『この暑さで、道が遠いので、世尊は大へんお疲れですから、折角ですが、上るわけにはゆきません。』と斷つた。

その男は佛陀がそんなにひどい病氣とはしらなかつたので、それを知るとおどろいて、

『どうか、御大事に。』と云つて、あきらめて、歸つていつた。

佛陀の一行はそれからなほ、休み〳〵歩いた。泣きたいやうな道中だつたが、やつと拘尸那掲羅城に入ることが出來た。

拘尸那掲羅城に入つて少しゆくと佛陀は阿難に云つた。

『阿難、如來のために娑羅雙樹の間に床を設けて、頭を北にして西に向いて寢られるやうにしておいてくれ。私の教は北に弘まるだらう。』

からおつしやつて右脇を下にして師子王のやうに足を重ねて寢られた。

この時、時ならずに咲いてゐた、娑羅雙樹の花が散つて來て、佛陀の上にふりかゝつて來た。

調子が高くなつてゐる佛陀は云つた。

『娑羅雙樹の靈よ、時ならぬ花で我を供養すれども、それは眞の供養ではない。よく法を受け、よく法を行ふことこそ、如來を供養するのだ。』

阿難はこの時、佛陀に云つた。

『世尊、この片田舍の小さい町で、荒れた土地で涅槃に入られないで、毘舍離や、王舍や、舍衛のやうな大國で、人も多く、歸依者も多い處で涅槃に入られた方がいゝと思ひますが。』

『そんなことを思ふものではない。』

さうして暫らく沈默されてゐた佛陀はあらためて阿難に云つた。

『汝、城の多くの力士に告げて來い。如來は夜半、娑羅雙樹の間で、涅槃に入られる、お前達は佛陀の處に行つて、疑ふ處があれば聞き、又教誡を親しくお聞きするがいゝ。後に悔が殘らないやうに。』

阿難は一人の比丘と一緒に涙をながしながら五百の力士が集つてゐる處に行つた。

力士達は夕方に阿難がわざ〳〵訪ねて行つたのを不思議に思つた。

『何しにいらしつたのです。』

『お前さん方に利益を與へるために來たのだ。如來は今夜涅槃に入られる。お前さん達は出かけていつて、疑はしい處を質問して、教をうけ、あとで後悔をしないやうにするがいゝ。』

力士達はおどろき、悲しんで喚いた。

『佛陀が涅槃に入られるのはいかにも早すぎる。そんなことがあつたら、衆人は永遠に衰へ、この世の日がなくなつたやうなものだ。』

『そんなことを云ふのはおよしなさい。』こゝでは阿難は佛陀の眞似をしてゐる。『天地萬物は生れた以上死ななければならない。生きてゐるものを永住させようと思つても、それは無理です。佛陀はいつもかうおつしやつてゐらつしやるぢやありませんか。會ふ者は必ず離れる。生は必ず盡くるものなりと。』

阿難はさう云つて急いで引きあげた。

力士達は皆家に歸り、家族をつれ、白い毛氈をもつて雙樹の間の佛陀を見舞ひにやつて來た。阿難は皆がやつてくるのを見て思つた。一人々々佛陀に御挨拶を申し上げたら大變だ。その間に佛陀は涅槃にお入りになつてしまふ。皆一時に、御挨拶をするやうにしないといけない。

そこで阿難は皆の處に急いでやつて來て、主だつた人に逢ひ、一時に皆が佛陀を禮拜し誰か代表を出して御挨拶申し上げた方がいゝだらうと云つた。力士達も、元より同感だ。そこで、皆一時に佛陀の前に順序に竝んで禮拜し、代表のものが云つた。

『世尊、どうぞいつまでもこの世におとゞまりになつて、諸天や人民を利益していたゞきたうご

ざいます。』

『お前達の云ふ通りを行ふわけにはゆかない。一切諸行は皆、無常なものだ。會ふものは必ず別れる。私の説いた法を覺え、それを口ずさんだり、思ひ出したりするものは私と一緒にゐるのと同じことなのだ。』

力士達は返す言葉もなく、謹しんでひかへてゐた。

二一　最後の弟子

この時、有名な一人の外道がゐた、須跋陀羅と云ふ男だ。年は百を越えてゐ、皆に尊敬され、學問もあり、頭もいゝ老人だが、佛陀が涅槃に入ると聞くと、ともかく一度生きてゐる内に逢つて、本物か、噓物かを知りたいと思つた。萬一本當の佛陀だつたら、教をうけたいし、噓物なら默つて見物して歸ればいゝと思つたのだ。

そして老齢なのにかゝはらず杖をついて、元氣にやつて來た。阿難はそれを見ると、

『何しにいらつしたのです。』と云つた。

『一度お目にかゝつて、お聞きしたいことがあるのです。』

『それは殘念なことですが、今、御身體がわるく、涅槃に入られる時ですから、それのさまたげになるとわるいので、お斷りします。』
『そんなことを云はずに、一寸でよろしいからお逢はし願ひます。』
『お斷りします。』
『今生の思ひ出に、ぜひおたのみします。』
『いけません。』
この時、佛陀は云つた。
『阿難。』
『はい。』
『私の最後の弟子がくるのを邪魔してはいけない。須跋陀羅が私の處にくることは私が許す。私も逢ひたいのだ。あの人が私に逢ひたいのは、疑をはらしたい爲で、論を戰はす爲にくるのではない。』
他人の心の內をぢかに感じることの出來る佛陀には、有名な須跋陀羅の心は鏡にうつすがやうにわかつてゐるのだ。

『はい。』

阿難は畏つてお辭儀した。

須跋陀羅はこのことを聞いてすつかり喜んだ。そして佛陀の前に出て禮拜して、謹しんで云つた。

『喬答摩、私のお問ひしたいのは、今世間の沙門や、婆羅門や、外道六師の人々は、皆、自分だけが一切智を持つてゐると云つて、他の宗派のものは、邪見だときめて、自分の行つてゐるのが解脱の道で、他の人の道は迷の道だと云つて、お互に非難しあつてゐます。どうすればその是非正邪がわかるのですか。どんな人が本當の沙門と云へるのですか。どんな行をすれば、本當に解脱出來るのですか。』

佛陀はそれを聞くと喜んでおつしやつた。

『いゝことを聞いてくれた。よく聞いて下さつた。それでは説明しますから、よくお聞きなさい。諸法の内に八正道法がないものは沙門とは云へないのです。つまり正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定、の八正道を行はないでは善法を勤修し、惡業を滅したとは云へないのです。だから八正道なくして沙門を得られず、沙門なくして解脱は得られないのです。

解脱のない處に一切智はないのです。

須跋陀羅よ。だからもし諸法の中に八正道があれば沙門と名づけられるのです。沙門と名づけられる處には、解脱があるわけで、解脱があれば一切智があるのです。

須跋陀羅よ。唯我が法の中にだけ八正道がある。だから沙門の名がある。解脱の道である。これが一切智である。諸々の外道には八正道がない。だから沙門の實もなく、解脱の道でもない。だから一切智もないのだ。もしあると云へば虚僞である。

須跋陀羅よ。一切衆生、わが説く所を聞いて、信仰し、思惟すれば、その人は必ず無意味には聞かず、必ず解脱するであらう。

須跋陀羅、私が王宮にゐた頃、世は一切、六師に迷はされてゐた。まだ沙門の實はなかつた。私が二十九の時、出家し、修行し、三十六で菩提樹の下で八正道を思ひ、その根底を極め、成道し、一切智を得、そして波羅奈國の鹿野苑で始めて憍陳如等五人のために四諦の法をといて、彼等が悟を得た時始めて、この世に沙門が生れ、衆生を福利したのだ。

須跋陀羅、私の云ふことがわかつたか。私の法のよく解脱を得、如來は一切智の源であることがわかつたか。』

消める佛陀は、さう云つて、心を射ぬくやうな目をして須跋陀羅の顔をじつと見た。

須跋陀羅は思はず、平伏して云つた。

『はい。よくわかりました。心の内の迷が始めてひらけました。こんなありがたいことはございません。』

佛陀は微笑された。

『私は今、出家して、世尊のお弟子になりたうございます。』

佛陀は阿難に云はれた。

『阿難よ。須跋陀羅は外道だが、善根の熟した時を唯如來だけがよくそれを知つて改宗させることが出來た。しかし私が涅槃に入つた後、外道があつて我が法で出家したいと云つてもお前達はそれをすぐ許してはいけない。先づ四ケ月の間經典をよまして、その人の本心が本當か、虚僞かを見、眞實に我が法のうちに深く樂しんでゐるかどうかを見てから、出家を許すやうにしないといけない。なぜかと云ふと、お前達の智慧では中々衆生の本心を見ぬくことは難しいから。よくわかつたか。』

『はい。よくわかりました。』

この時、須跋陀羅は佛陀に云つた。
『私は、どうも、世尊の涅槃に入られるのを見るのが苦しいので、世尊よりさきに涅槃に入りたいと思ひますが、許していたゞけますか。』
『無論、よろしい。』
須跋陀羅は佛陀を禮拜し、そして佛陀の前で、涅槃に入つた。
人々は驚嘆してこの出來事を見た。

二三　佛陀、阿難を慰む

阿難はこの時、佛陀の後にゐて、佛陀の床を手で撫でてゐたが、ます／＼悲しくなつて來て、どうすることも出來なくなり、とう／＼すゝり泣いてしまつた。
『佛陀はどうしてから早くこの世を去られなければならないのだらう。私は佛陀に實に深く御恩を受け、敎を受けてゐるのに、今だに悟を得られないのは、何とも云へない悲しいことだ。』
阿難は私かにさう思ふと、なほ殘念で、泣きやむことが出來なかつた。
『阿難、心配するものではない。まだ泣き悲しんだりはしてはいけない。お前は私に侍してから

この方、お前は實によく慈悲を行ひ、口にも意にも慈悲を行つたことは他の人と比較にならない程だ。又私に供養してくれた功德は實に大きい、誰もお前に及ぶものはない。お前はたゞ精進するがいゝ。さうすればやがて成道するだらう。心配することはない。』

さう云つてから佛陀は皆に云はれた。

『過去の諸佛の給侍の弟子も、阿難のやうだつた。未來諸佛の給侍の弟子も、亦阿難のやうである。しかし過去の佛の給侍の弟子は、言葉を聞いたあとでわかつたが、阿難は私が目を擧げさへすれば、如來はどうするかをちやんと知つてゐた。之は阿難の未曾有な手柄だ。皆もそれを覺えておくがいゝ。』

二三　佛陀、後のことを心配し給ふ

やがて夜が來た。だが丁度滿月の夜なので、月はくまなく、あたりを照し出した。多くの人は佛陀の涅槃に入られることを聞いて集つて來た。しかし誰も聲をたてるものはなかつた。娑羅の木の影は黑く地に印してゐた。人々は木の間を通り月光を受けて、いやが上にも、靜寂な感じを受けた。すゝり泣く聲がいたる處から起つた。凄い程の靜かさの內には、そのすゝり泣きと、佛

陀の苦しさうな息とが、ひゞいた。

阿難もすゝり泣いてゐたが、不意に立ち上つて佛陀の前にすゝんだ。

右の肩を露し、右の膝をついて謹しんで云つた。

『世尊、今は世尊がゐらつしやいますし、方々から沙門や長老がお見えになり、いろ／＼敎をうけることが出來ますが、世尊が涅槃にお入りになつてしまふと、皆は來なくなりませう。敎を請ひたくも請へないことになるだらうと思ひます。その時はどういたしたらようございますか。』

あたりの靜かさを破つて、阿難の泣きさうな聲がひゞいた。人々は謹しんで耳をかたむける。すると今迄苦しさうな息をしてゐた佛陀は急にしつかりした。そして嚴かに靜かに語り出した。皆はいつもよりも、なほありがたい氣持になり、畏つて一語ももらすまいと聞いてゐる。

『心配することはない。その時は皆、いつも四つのことを思ふであらう。四つのことと云ふのは、一は如來の生れた處、二は如來の悟つた所、三は法を說いた處、四は涅槃に入つた所、この四つのことを思ふことで、戀慕の心が生ずるであらう。

阿難よ。人々は其處に集つてくるであらう。そして諸々の塔を禮拜するであらう。

私が涅槃に入つたあと、いろ／＼の釋迦族の人が來て、道を求めるだらう。その時は、出家を

ゆるし、具足戒（比丘は二百五十戒、比丘尼は三百四十八戒ある、それを守ると無量の戒徳を具足するのださうだ）を授けるがいゝ。決して拒んではいけない。又異宗のものが來て道を求める時も、出家を許し、具足戒を授けるがいゝ。なぜと云ふと異論あるものも、暫らく皆と一緒にをれば、本當のことがわかつてくるから。』

阿難は頭をさげた。そして手を胸で交叉させて、なほつゞけて聞いた。

阿難と、横たはつてゐる佛陀と話をしてゐる姿は、へんに感じがあり、神々しいものだつた。阿難は畏りきつてゐたし、八十の佛陀は親切に、噛んでふくめるやうに、病苦をこらへて話される、拜するものは皆、ありがたく思はないわけにはゆかない。

この時、阿難は昔佛陀が太子であつた時御者だつた車匿のことを思つた。車匿は口がわるく、皆に持てあまされてゐた。佛陀にだけは絶對に服從してゐたが。

『車匿比丘のことはどういたしませう。』

『どうしても云ふことを聞かなければ、お前達は、罰を行つて、誰も車匿比丘と話をしないやうに、又ゆききをしないやうにすべての比丘に命令するがいゝ。』

『世尊が涅槃に入られたあと、まだ誨を受けなかつた女人に對してどういたしませう。』

『見ないがいゝ。』
『もし見ましたら。』
『話をしないがいゝ。』
『もし話をしましたら。』
『自分の心を反省すべきだ。』
佛陀はさう云つて、なほつゞけて云はれた。
『阿難、私が涅槃に入つたのを見て、正法が永く絶えたと云つてはいけない。なぜと云ふと私は諸比丘の爲に、今迄、戒をつくり、妙法をといた。それがお前達の大きな先生だ。佛陀だ。私がゐるのと同じことだ。
だが阿難よ。今日から私は、ごくささいの戒を捨てるものがあつても、それは許す。私が涅槃に入つた後は、諸々の比丘が相敬ひ、姓をよばないで、名をよび、お互に察しあつて、よく思ひやりをし、大戒を犯すことがないやうに注意することは必要だが、小さいことにこだはつたりやかましくは云はないがいゝ。人は過を犯さないことは難しいから、それは懺悔すれば許しゐはなければならない。』

さうおつしやつて、佛陀は又沈默の内に入られた。息は苦しさうだつた。

一一四　羅睺羅來たる

羅睺羅はこの時、佛陀の涅槃に入られるのは見るのはつらすぎるので、逃げてゐたが、しかし矢張り逃げてもゐられないので、最後にお目にかゝりたいと思つて、夜になつてから驅けつけて來た。父、佛陀の前に來て、跪いた。皆はそれを見ると、又泣き出した。

羅睺羅は泣き出した。ものが云へなかつた。佛陀は羅睺羅を見ると優しくおつしやつた。

「羅睺羅よ。悲しむものではない。お前は父に子としてなすべきことをした。私も父としてお前に教へるべきことを教へた。羅睺羅よ。一切諸法は無常である。この無常を離れて、解脱を求めるのが、私の教だ。」

人々はいつも云はれてゐる言葉ではあつたが、この言葉を、このさい、この光景で聞くと、無上にありがたい言葉を聞かされたやうに思つた。そして羅睺羅と一緒に頭をさげた。

一一五　最後の說法

佛陀は沈默された。しかし人々は佛陀の苦しさうな息が聞えるので、まだ生きてゐられることはわかつてゐたが、いつ涅槃に入られるかわからないので、皆、默つて、畏つてゐた。夜はふけて來た。悲しみは、いくら佛陀にさとされても、人々の心をひたした。すゝり泣く者はますます多くなつた。

不氣味な沈默が不意にあたりを領した。いよ〳〵涅槃に入られるのではないかと思つた。だがこの時、不意に佛陀は半身を起さうとされた。阿難と羅睺羅はおどろいて、御身體を後からさゝへた。

人々は驚いた。いよ〳〵涅槃に入られるのかと思つた。だが見よ、

佛陀の口からは人々が豫期しない莊重の言葉があふれて來た。

『お前達、比丘よ。私が涅槃に入つたあとは、淨戒を尊重すること、暗の中で光にあひ、貧しき者が寶を得たやうにすべきだ。なぜと云へば淨戒はお前達の大師である。私が生きてゐるのと同じことだ。

淨戒をたもつものは、身を節約し、正しい時に食事をし、淸淨に自活せよ。世事に參與したり、呪術をつかつたり、仙藥をつくつたり、好みを貴人に結んだり、貧富によつて態度をかへて

はいけない。心正しくもち、思を正し、適度を求め、そして異をあらはしたり、衆を惑はしてはいけない。供養をうける時は適度を知り畜積してはいけない。
この淨戒は解脫の本である。又この淨戒から諸々の禪定を生じ、苦を滅する智慧を生じるのだ。
だから比丘よ、淨戒を保つてこれを犯さないやうにしなければいけない。もし能く淨戒を持することが出來れば、善法が生じるのだ。しかし淨戒を持することが出來なければ、諸善の功德は生じることは出來ない。だから、戒は第一安穩功德の住する處だと云ふことを知るべきである。』
月夜の靜寂な空氣の內を、死にゆく老人の佛陀が、何處からこんな聲が出るかと思ふ程力のこもつた、平常と變らない、調子で說法されるのだ。聞く人はいやが上にも感動しないわけにはゆかない。
佛陀は最後の息までも、弟子達のためにこの地上に今はき出さうと思はれてゐる。
自分の內にある人類の寶を、最後の一粒まで地上にはき出さないではをさまらない力を感じてゐられる。
言葉はつゞいて出てくる。
『お前達、比丘よ。お前達は皆よく戒に住してゐる、だからます／＼五根を制して、放逸にして

五欲を生じさしてはいけない。たとへば牧人が、杖をとつて牛を監視し、田畑に入らさないやうに注意するやうなものだ。又五根を縦にするのは、悪馬を轡で制しないのと同じで、きつとその悪馬は人を引いて穴におとし入れるであらう。悪馬の害は一世でとまるが、五根の害は、後世にまで及ぶものだ。愼しまなければいけない。だから智者は五根を持すること賊のやうにして放縱にさせない。よし放縱にさせる時があつても、やがてそれを制して磨滅させる。

この五根と云ふものは心が主である。だから、お前達は心をよく制しなければいけない。心の畏るべきことは、毒蛇、悪獣、怨賊にもまさる。たとへば人が手に蜜をもつて、蜜許りに氣をとられて深い坑を見ないやうなものだ。この心を縦にすれば、善事を喪ひ、之を謹しめば、萬事よくゆかないことはない。そのゆゑに比丘よ、精進して自分の心を折伏すべきだ。』

夜はふけてゆく、聞えるものは佛陀の聲だけである。月の光は益々明らかに、樹の影は益々黒くなつたやうだ。人々は佛陀の涅槃に入ることも、佛陀の病氣のことを忘れてゐる。たゞ佛陀ののべる眞理と、佛陀の心の強い力が人々の心を占領した。

『お前達、比丘よ。飲食を受けることは、藥を服するやうにすべきだ。甘いものを食べる時も、まづいものを食べる時も、量をちがへてはいけない。身を支へることが出來ればいゝのだ。人の

供養を受けて僅かに自らの惱を除け、多くを求めてその善心をやぶつてはいけない。
お前達比丘、もし人が來てお前達を傷つけても、忍耐して怒つたり、恨んだりしてはいけない。口を守つて惡言を出してはいけない。怒を縱にすれば道の妨になり、功德の利を失する。忍の德は大で、持戒苦行も及ばない程だ。よく忍を行ふものは有力の大人と名づけることが出來る。惡罵の毒を歡喜して忍受すること甘露をのむやうに出來ないものは、入道智慧の人とは云へない。
怒の害は諸々の善法を破る。猛火よりもその害は甚しいものだ。功德を劫かす賊は怒より劇しいのはない。在家の人ですら、怒は抑へなければならない。まして出家行道、無欲の人が怒を心にいだくなぞは、甚だよくないことだ。
お前達比丘よ。驕慢起らば疾く之を滅しなければいけない。驕慢を增長させるのは在家の人でさへよろしくないのだ。まして出家、入道の人は、解脫のために、自らその身を下し、乞食して歩くものが、驕慢になるなぞは論外のことである。
お前達比丘、媚び諂ふことは道と相違してゐる。だから心は質實にしなければいけない。
お前達比丘、多欲の人は、利を求めることが多いから苦惱も多い。少欲の人は求めることもな

く、欲もない、だから患がないのだ。心はおちついて、憂ひ恐れることはない。だから少欲のものは涅槃に入れるのだ。

お前達比丘、いろ／＼の苦惱を脱しようと思へば、足ることを知るやうに心がけよ。足ることを知るものは地上に臥す事があつても安樂に思ふ。だが足ることを知らないものは天堂にゐても滿足はしない。だから足ることを知らないものは富んでゐても、貧しい、足ることを知るものは貧しくとも富んでゐるのだ。

お前達比丘、靜寂、無爲、安樂をもとめようと思へば、人の多い所から離れて、獨處閑居するがいゝ、靜處の人は諸天と共に交通することが出來る。

お前達比丘、勤めて精進すれば、難しいことはない。だから、お前達は勤めて精進すべきである。たとへば少しの水でも常に流れるときはよく石をも穿つものだ。……』

死にゆく佛陀は說いて倦まないのだ。

『お前達比丘、常に一心に諸ゝの放逸を捨てること、諸ゝの怨賊と離れるやうにすべし、わが說く處は、良醫が病を知つて藥を說くがやうなものだ。服すと、服さないとは醫者の咎ではないのだ。またよく人を導くものが、人をよく導くやうなものだ。之を聞いてついてゆかないものがあ

つても、それを導くものの過ではないのだ。お前達、もし私の云つたことで疑ふ所があれば、はやくきくがいゝ。私はまもなく涅槃に入るだらう。』

皆感動し切つてゐた。質問するものはなかつた。

だが人々はあたりが靜寂になり、なんの音も聞えないほど、沈默があたりを領すると、あつちこつちからすゝり泣きの聲が聞え、今や、大海の小波の音のやうに、すゝり泣く聲が、滿ちて來た。

一一六　佛陀、涅槃に入り給ふ

そこで佛陀は又おつしやつた。

『お前達、比丘よ、悲しむものではない。何度も云ふが、私がこの世に何千年と生きたとしても、それでもやがて死ぬことは同じことなのだ。異體があつまる處、遂に離れるのはあたりまへのことなのだ。自利、利他の法は既に皆、この世に具はつたのだ。そしてあます所はないのだ。之以上生きても、私は何にも益する所はない。私はすでに濟度すべきものは濟度した、そしてまた濟

度しないものにも、濟度される因緣を與へた。もう私はするだけのことはしたのだ。そしてわが弟子がわが敎に從つて生きる限り、如來の法身は常にあつて滅しないのだ。
世に牢固なるものあるなし、この身は苦を盛るの器だ。老病生死の大海の中に沒すべきものだ。まさに捨てるべき罪惡のものだ。これをすてることが出來て、喜ばないものがあらうか。』
權威ある言葉は響いた。
あたりは靜まりかへつた。皆大鐵槌を受けたやうな氣がした。
やゝ沈默がつゞいたあとで、佛陀は今度は靜かに懺悔されるやうに云はれた。
『お前達がもし、私の身や口や心に過を犯したことに氣がついた事があつたら云つてくれ。』
『そんなことは少しもございません。』
又沈默はつゞいた。佛陀は靜かに云はれた。
『お前達は放逸であつてはならない。私は放逸でなかつたから正覺を得たのだ。お前達はよく勤め、よく精進して、速く生死の火坑からはなれるがいゝ。これが私の最後の言葉だ。涅槃に入るべき時が來た。』
終は獨語のやうでもあつた。

「諸行は無常、
是れ生滅の法なり、
生滅し、滅し已り、
寂滅を樂しむ也。』
不氣味な、限りなく莊嚴な沈默がしばしつゞいたと思ふと、
阿難は涙をながして、云つた。
『世尊は今涅槃に入られました。』
しかしこの時、盲目で、天眼第一の阿那律は云つた。
『まだです。最も深い無心の狀態にゐられるのです。』
それから暫らくして、阿那律は云つた。
『とう／＼佛陀は涅槃に入られました。』
人々は耐へに耐へて來た悲しみの堤はやぶれた。一度に泣き出した。
かくて、佛陀は涅槃に入られたのだ。
その時、滿月は西山に沒しようとして更に美しく大きくその姿を見せた。さうしてあたりは既

に白み出して來た。しかし誰もそれには氣がつかなかつた。

佛陀がこの世を去られてから、弟子達は力を失つたか。否である。

二七　最後に

弟子達は貴き佛陀のなき後、なほ決心を新にした。そして先づ第一に貴き師の教を、餘す事なく、地上に殘すことに骨折ることにした。

佛滅後九十日、六月十七日に結集の第一の日がきめられた。その日五百の撰ばれた弟子達は竹林精舍から西南一里許り離れた竹林の内の大きな石室に集つた。

大迦葉が上首となり、盲目の阿那律はそのそばに坐つてゐた。優婆離が戒律の誦出者になり、阿難が御經の方の誦出者になつた。

そして他の人が、それをおぎなつた。

阿難は、佛陀の言葉をよく覺えてゐた。鹿野苑で佛陀が說かれた轉法輪經を阿難が誦出した

時、佛陀の最初の弟子憍陳如は感動して云つた。

『尊者、大迦葉よ。私は昔この說法を聞きました、この敎は實に私の爲に說かれたものです。夫は私の迷の血を乾し、私の淚の海を盡しました。それで私は生死の山を越えることが出來ました。私と多くの弟子達はこの尊い法寳を說かれた時、法眼淨を得、惡業を解脫することが出來ました。』

老いたる憍陳如はさう云つて淚をこぼしたが、感極まつて氣絕した。

憍陳如はやがて元氣をとり戻したが、人々は皆佛陀の言葉を聞いて今更に感動し、佛陀を思ひ出して、悲しみを新にした。

だが參つて許りはゐなかつた。その眞理のます／＼輝くのを知り、同時に彼等は自分達が立ち上らなければならないことを知つた。人々にのべ傳へる責任を感じた。

かくて佛陀去つて、二千何百年、その眞理は今だに生き、人々の心にしみこみ、佛陀は生きてゐる如く我等の心にふれることが出來るのだ。

今後も人間の心のある處、佛陀の限りない美しく大きい心は生きつゞけて、我等を導いてくれるであらう。

圓滿な海、解脫の海、完成の海、
涅槃に。
かくて我等は滿足して其處に橫たはり得るであらう。
いさゝかの不平なく、心殘りなく、全部が其處にとけこんで佛陀の心と一つになるであらう。
すべての人が涅槃に入り得る時、佛陀の敎が完成した時であり、同時に人類が完成した時であらう。
滿足した、圓滿な姿、心のこりなく、思ひのこすことなき姿こそ、
我等の理想の姿であらう。
佛陀は、實に人類の導師である！

――〔終〕――

後　書

無事に書き上げられたことを感謝する。
常盤大定編『佛傳集成』に一番御世話になり、次に、
山邊習學著『佛弟子傳』に御世話になつた。深く感謝する。
その他、
吉田龍英著『新傳釋迦』
赤沼智善著『釋尊』
木村泰賢、景山哲雄共譯、オルデンベルグ著『佛陀』
八幡關太郎譯、ポール・ケラス著『佛陀の福音』
などから教はつた。深く感謝する。
この本が人々の喜になることを望んでゐる。

耶輸陀羅妃は、七十八で佛陀のなくならるる二年前に死なれたことになつてゐる。

少くも佛陀の死なれる前に死なれてゐることは事實と思ふ。

この本はなるべく不自然と思はれることはかゝなかつた。しかし釋尊のやうな人なら、讀心術や、千里眼風のことや、ある種の豫言のやうなことは出來るのが當然のやうに思つてゐる。しかしその程度については僕にはまだはつきりしない。

僕はこの本をかきながら佛陀の同情心が深くゆきわたつてゐる處にふれると、今更に涙ぐんだ。實際さういふ點で佛陀は無類な人と思ふ。この世に生きるにはあまりに同情心が強すぎることを感じる。それからこそ佛陀のあらゆる行爲、思想が說明出來ると思ふし、そこに限りない美を自分は感じるものだ。

なぜこの本をかいたか。この本の價値については他の人に任せる。

僕は別に新しい解釋はしようとしなかつた。たゞ釋尊を人間として何處までもあつかつただけだ。

たゞ人間だが、佛陀になつた人間だと思つてゐる。佛陀は阿那律にかうおつしやつてゐる。

『阿那律、諸佛世尊は皆同一類なり、戒律を同じくし、解脫、智慧を同じくするも、たゞ精進のみ同じからず、過去當來の諸佛世尊中精進に至りては、我を以て最も勝れたりと爲す。』

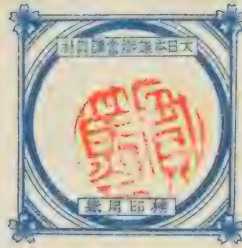
この言葉は意味深長と思ふ。

こゝに佛陀の佛陀たる處があるやうに思ふ。あとは本文に任せたい。

自分は學者ではない。しかし赤兒の心を持つて佛陀を見得る一人だと思つてゐる。そこにこの書の特色があればあり得るやうに思つてゐる。(十月十五日)

昭和九年十月二十八日印刷
昭和九年十一月六日發行
昭和十年三月十日六十八版發行

定價壹圓五拾錢

（釋迦 奥付）

著者 武者小路實篤

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地
發行者 野間清治

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者 奈良直一

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所 常磐印刷所

發行所 東京市小石川區音羽町三丁目一九
大日本雄辯會講談社
（振替口座東京三九三〇）
電話牛込(34)代表 五三〇〇、六一〇〇 六二〇五（長）

志村製本

本書は實によく讀まれた、そして喜ばれた。某實業家の如きは讃嘆措く能はず遂に數千部を購ひ求めて多くの人々に分かたれた。是非諸賢も一本を座右にお備へあれ

二宮尊德

小說の如く面白く立志傳の如く感激深き大名著!!
人生の實相を示して眞の處世道を語る不朽の名篇

武者小路實篤著

四六判 布裝函入美本

定價一圓三十錢 送料十錢

著者曰く

二宮尊德とはどんな人か、尊德のことをまるで知らない人が日本人にあつたら、日本人の恥だと思ふ。それ以上、世界の人が二宮尊德の名をまだ十分に知らないのは、我等の恥だと思ふ。幕末の人間のうち、僕は二宮尊德が一番大人物だと思つてゐる。彼の實行しようと思つたことが實行されてゐたら、日本は世界で一番立派な安穩な國になつてゐたであらう。

西鄕隆盛が二宮尊德の敎をきいて實に感心したさうだが、その話をきいた時、隆盛は矢張りいゝ處があると思つた。二宮尊德から生きた敎訓をうけて立派な人間になつた人は日本に存外多いのだ。しかし多くの人は尊德のことを餘りに知らなすぎる。それは實に惜しいことだと思ふ。自分はさう云ふ人達のために、この本は面白く讀ませたいと思つて書いたのではあるが、それより尊德の人となりや、精神を、一人でも多くの人に知らせたくつて書いた。自分はどこかでこの本を讀む若い人々のことを考へる。そしてそれ等の人々が決心を新たにして、第二、第三の二宮尊德になつてやらうと覺悟をきめることを想像する。それは自分にとつて最もうれしい想像である。

子爵三島章道閣下曰く

二宮尊德こそは、土の上の努力の合理化を躬で實行し得た世界的の偉人といつてよからう。武者小路さんは「新しき村」の第一線に立つて道を切り開いた努力的實行家であり、文學者としては、また底力ある偉大な作家である。本書を讀みかけたら終りまでは本を一寸も手離せられないほど惹きつけられる。近來珍らしい好著である。

大日本雄辯會講談社發行圖書

大番頭小番頭
佐々木邦著

大學出の原野君が下駄問屋の番頭となり、新しがりやの若主人と古い支配人とヒステリックの若奥樣の三つ巴の中に腹の捩れる樣な滑稽を演ずるといふ快讀物。

四六判 布装 函入 一・三〇 ・一四

脱線息子
佐々木邦著

大家の一人息子新太郎君と近代的令孃秀子さんとの嬉しい恥かしい戀と縁談の一喜一憂……明るくて上品で、をかしくて痛快な場面が續出！ 讀み始めたが最後抱腹絶倒。

四六判 布装 函入 二・〇〇 ・一二

新家庭双六
佐々木邦著

美男で無邪氣で、そのくせ妻君に頭の上らない里見君と、美人で馬鹿に頭が働いて中々の氣儘者徳子さんとの、トテモ甘辛な新婚風景を描いて、皮肉と諷刺の萬華鏡。

四六判 布装 函入 一・七〇 ・一二

世間相人間相
佐々木邦著

ユーモアとウイットから眺めた世間相や人間相はどんなものだらうか？ それを斯界の第一人者たる著者がその一流の妙筆で親切に教へてくれたのが本書である。

四六判 布装 函入 二・三〇 ・一四

地に爪跡を殘すもの
佐々木邦著

純眞無垢の二青年に明朗の麗人を配してその戀愛競爭と多感多難の人生行路を輕妙洒脱な中に遺憾なく描寫した全篇朗かな笑に滿ち滿ちた大力作

四六判 洋装 函入 一・八〇 ・一四

戀ぐるま
吉川英治著

大阪落城の夜、ひそかに南國薩摩に遁走した秀頼淀君母子が、各地に潜む遺臣と呼應して江戸に迫るや、幕府組織の討滅隊と變轉數奇な大復讐を展開する史外秘譚。

四六判 洋装 函入 一・五〇 ・一四

劍難女難
吉川英治著

一藩の名譽を賭けた大試合で敗北した兄の爲に、奮起した美男新九郎が、絶え間なく降りそゝぐ女難や劍難の中に、見事將軍家御前で兄の怨を晴らす血涙の物語。

四六判 洋装 函入 二・五〇 ・一四

旅順攻圍軍
木村毅著

日露戰爭攻略の大激戰を、上は軍司令官乃木將軍より、下は敵壘下に戰ふ一無名戰士、銃後の一國民にいたるまでを、目に見る如く活寫す。

四六判 布装 函入 一・三〇 ・一〇

浪六名作選集
村上浪六著

史實小説界の權威浪六先生の作品の中から選びに選び拔いて眞に浪六式を發揮した傑作十有八篇、何れも著者一流の妙筆に描かれて面目躍如。

四六判 クロース 函入 二・三〇 ・一二

大日本雄辯會講談社發行圖書

野間清治著　野間清治短話集

家庭教育の重任を負ふ主婦、並に子女の方々に對し、誰にも解るやう面白く、家庭の向上發展について著者の抱負を述べられたもので、萬人必讀の家庭讀本である。

四六判　携帶至便　・二〇　・〇四

野間清治著　體驗を語る

著者二十年間の血と汗の滲む眞劍な體驗を述べられたもので、未だ嘗てどこの學校でも敎へられず、どんな書物にも書かれたことがない活きた世間の學問である。

四六判　携帶至便　・二〇　・〇四

野間清治著　處世の道

世渡りの呼吸を平易に說く。一字一句胸に響き成程と頷かれる。單なる理窟ではない。これこそ難關突破の尊い體驗から生れた處世の活指針。

四六判　携帶至便　・二〇　・〇四

野間清治著　出世の礎

著者が實際の體驗に基いて『斯うすれば必ず成功する、必ず出世する』と信ずる點を眞實に示されたもの。活きた世間學、直ぐ役に立つ處世修養の秘訣！

四六判　携帶至便　・二〇　・〇四

野間清治著　修養雜話

雜話といつても一時的の偶感ではない。全篇悉く愛と淚とを以て說いた、尊い體驗より出た實際談である。昭和の心學道話であり、正に人物練磨の指針書である。

四六判　携帶至便　・二〇　・〇四

野間清治著　榮えゆく道

野間社長が血涙努力した事業經營の體驗と研究を披瀝して、一意世のため人のためにと、あらゆる方面から繁榮の道を說き事業道德の根本を明らかにした名著。

四六判　携帶至便　・五〇　・〇八

武藤山治著　武藤山治百話

裸一貫から大事業家となつた苦勞人の著者が、胸襟を開いて事業のこつ、成功の道、社會と人生を語つたもの、引例豐富で解り易く、誰が讀んでも面白い萬人必讀の名著

四六判　布裝　カバー付　一・二〇　・一二

安藤愛山著　教育道話

「馬鹿に效かせる薬」「親の賣りもの」「殿より下のない人」等面白い例を引いて敎へてゐる。よくもこんな面白い話を集めたものだ、現代の[illegible]道話、演說文章の好資料。

四六判　クロース　函入　二・五〇　・一四

大日本雄辯會講談社編　滿洲事變・上海事變　新滿洲國寫眞大觀

事變發生以來苦心蒐集した、數千の寫眞中より嚴選せる數百枚、これに一々平易な解說を附し、血湧き肉躍る皇軍の活躍情況及び新滿洲國の風物資源を併載したもの。

四六倍判　クロース　函入　一・五〇　・二〇

4/1.76 再読 3/1.78 三読